
(仮題) 格闘少女『佐天』

砂夢猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(仮題) 格闘少女『佐天』

【Nコード】

N3835S

【作者名】

砂夢猫

【あらすじ】

とある科学の超電磁砲の佐天さんをチートにしてみる
注意…他作品ネタが入る事があります。(技名、人名、セリフ等)
解らない人はスルー。解る人は、ほくそ笑んで下さい。

基本的にアニメ版『超電磁砲、禁書目録』を中心に進めていきます。
作者の文章能力的に、上記2つを見てないと解らないところが出てくると思われます。

遅刻の佐天さん

走る。走る。走る。

跳ぶ。跳ぶ。跳ぶ。

道を屋根を。そして、空を。

学園都市。

外部と、科学力で20年先を行くと言われるその世界を、1人の少女がひた走る。

駆け抜ける彼女は幾人かの人の視線に触れ……

彼（彼女）を驚かせる。

何故なら、彼女は今、車道を走っており……

次々とバイクや車を追い抜いているのだから。

「寝坊した……！！！」

そんな声だけ残して。

柵川中学。『学園都市』に存在するだけあって、その生徒数だけはい多いものの、在籍する生徒は、皆、能力レベル0～2と……つまり、『学園都市』的な意味で言えば、下位位置に所属する学校である。

さて、そんな柵川中学校の朝一番のチャイムが鳴るまで後10分。そのチャイムが鳴るまでに校門をくぐれなかった者には、生活指導観点から、教師からのありがたいお話を頂くことになる。

故に、この時間帯、柵川中学の正門前は、多くの生徒で賑わう事になるのだ。

彼女。初春飾利も、そんな生徒達の中にいた。

「はぁ……結局、佐天さんは来ませんでしたね」

おそらく、いや、間違いなく、昨日、彼女に届いた手紙が原因だろう。

彼女の『知り合い』からの手紙。

それを読み終わった時、彼女は明らかに燃えていた。背景と瞳の中に炎が見えるほどに。

恐らくは夜遅くまで、ナニかしていたのだらう。

ナニかが何なのかは知らないし知りたくも無いが。

はあ、
とため息をひとつ。

「学校……くるんでしょ？……あれ？？」

気がつくともう周りの人の気配がない。

チャイムが鳴った？

違ふ。それに、人の気配が無くなったのは、初春の周りだけだ。

見渡すと……生徒達は、道路の端に寄り道路の中心を大きく開けていた。

まさか？

恐る恐る後ろを振り替える。

遠くに、小さく見える砂埃。

だが、それは凄まじい速さで近づき大きく見え始めた。

同時に聞こえる音。

「い い い い い い い ……」

はあ！……今度はハッキリと大きく溜め息を吐き、半歩ほど後ろに下がる。

「はああああああるううう！おはよ！！！」

キキイイイイ！と明らかに人が止まる時とは、違う音を立てながら1人の少女が初春の前で急停止する。

長く美しい黒髪を無造作に束ね、白い花を模した髪止めがアクセント。

初春と同じ服装は、彼女もまた、柵川中学の生徒であることを示し

ていた。

「あはようございます。佐天さん。今日は、やっぱり寝坊ですか？
あんまりにも、あんまりな登場をしたというのに、初春に動じた様
子はない。

それどころか、近くにいた他の生徒達すら、普通に校門をくぐり始
めた。

何故なら、ここ、柵川中学では、それは、日常の風景で、柵川中学
の生徒達にとって『佐天涙子』とは、そういう存在なのだから。

佐天さんと銀行強盗

「はぁ……………今日も疲れた……………」

「あはは……………佐天さん、ずーと眠そうでしたもんね」

放課後。グツタリとした様子の佐天に、初春は思わず乾いた笑い声をあげた。

「ほんとだよ。せめて、普通の授業だったら寝てられたのにな……………」

「あっ！そうだ。佐天さんはどうでした？」

「ぼやく佐天の言葉尻を捉え、初春が問う。

「なにが？」

「結果ですよ！能力測定の一！！」

「ああ！！！」

首を傾げていた佐天は、ポンと手を叩き、

「ダメダメ。相変わらずの能力0！！やっぱり才能ないんだろーねー」

「はぁ……………」

どこか、楽しそうに結果を口にする佐天に、初春は生返事を返すしかできない。

「あれだけの事が出来るのに、測定結果が0って方が私には納得いかないですけど……………」

「ん？測定するのはあくまで、『能力で何が出来るか？』だからね。

私のは、純粋な身体能力だし」

事も無げに言う佐天に、小さく溜め息をひとつ。

「測定に来てた学者さん。目を見開いて固まってましたよ」

「あはは〜♪」

そんな事を話ながら歩く。

繁華街まで後少しと言うところで、佐天が口を開いた。

「そう言えば私はCDを買いに行くつもりなんだけど、初春は？」

「あ！私は、白井さんと約束が……」

「白井さん？って、ジャッジメントの白井黒子？」

少し考えて、前に初春に聞いた名前を思い出す。

問われた初春の瞳はキラキラと輝いていた。

「念願叶い、御坂さんに合わせて貰える事になったんです！！」

学園都市でも、7人しかいない『超能力者（レベル5）』。常盤台のエース。御坂美琴さん……に……」

言い終わる直前。『しまった！！』と思った初春だが、もう遅い。

視線の先にある、佐天の顔は満面の笑みだった。

「御坂美琴……確か、学園都市第3位の『超電磁砲^{レールガン}』よね？それなら……」

ブツブツとナニかを呟き続ける、佐天からジリジリと離れ、数メートル離れた所で、一気に駆け出しながら、言葉を投げる

「じゃあ！白井さんをあんまり、待たせてもいけないんで、私はこの辺で！！」

ガシ！！

「ハウ！！？」

ナニかに、肩を掴まれ、恐る恐る振り替える。

そこには、置き去りにしたはずの、佐天が全く同じように居た。

「う〜い〜は〜る〜さん！お願いがあるんだけど〜」

その表情は変わらず満面の笑み。けれど、瞳は全く笑っていない。

「なんででしょう？」

返す初春の表情も笑み。けれど、顔色は青く、ひきつっていた。

「絶対の絶対！絶対の約束ですよ！！！」

白井黒子との待ち合わせ場所。そこに向かう道中で、初春は、もう何度目になるか解らない念押しをしていた。

「解ってるって。今日は会うだけ。大人しくしてるって」

手をひらひらとさせながら、佐天も何度目になるか解らない了承を返した。

「む」

「も……信用無いな。私が初春との約束破ったことある？」

「それはそうですけど……」

確かに、佐天は普段約束を守る。

今までに破られた事もない。

けれど、初春の知る佐天の性格……癖と言っても良いだろう。が、初春を不安にさせるのだ。

チラリと横目で見る佐天は、遠足を翌日に控えた子供の様で……

「絶対の絶対ですからね！！」

初春としては、涙目になりながら念押しすることしか出来ないのだ

った。

「んで？待ち合わせ場所って、まだ遠いの？」

繁華街に入ってから10分程歩いただろうか？

待ち合わせ場所を聞いて無かった事に気がついた佐天が口を開いた。

「いえ。あそこのファミリーレストランです」

初春が指差したのは、佐天自身も友人達とたまに使う場所だった。

「ふーん……………!!?」

何気無く、レストランの中を見ながら歩いていた足が突如止まる。

「佐天さん?……………!!?」

その様子を疑問に思った初春もまた、佐天の視線の先を追って、硬直した。

2人の視線の先には

激しく抱き合う女性達がいた。

「え〜〜〜と……………ういはる?もしかして?..?」

「……………残念ですけど、片方は、良く知ってる顔ですね……………」

恐る恐る指差す佐天と大きく溜め息を吐く初春であった。

数分後、店舗の外で4人は対面していた。

店内で無いのは、店内にいた2人が追い出された為。

天外にいた2人が入って行けなかった為である。

「…………と言う訳で取り敢えずご紹介しますわ。こちら柵川中学1年の、初春飾利さんですの」

4人の中で1番背の低い、ツインテールの女の子が、自身の頭を撫でながら、紹介を始める。

双方を知っている彼女が、ジャツジメント風紀委員白井黒子である。

「は初めまして！初春飾利で……す………」

紹介された初春は、緊張と恥ずかしさで、頬を朱に染めながら自己紹介をする。

お嬢様で超能力者。御坂美琴は、初春にとって憧れの人物なのである。

「それから………」

白井は、もう1人を紹介しようとして戸惑う。

佐天と白井は、初春を通して顔こそ合わせた事があるが、名前を知り合う程の仲では無かったのである。

察して、佐天は助け船をだした。

「どうも。初春のクラスメートの佐天涙子です。

有名人の御坂美琴さんに会えるって聞いて無理矢理着いてきちゃいました！」

「有名人って……………」

御坂としても、自身が学園都市に置いて、それなりに有名なのは知っているが、まるで芸能人の様な佐天の言い様は流石に照れる。

「……………で、ですネ」

そこで、佐天の雰囲気が変わる。

まるで、真剣を前にしたような、気配に御坂の背中に冷たい汗が流れた。

「……………佐天さん!？」

初春が慌てて、佐天の前に周り込んだ瞬間、続きが告げられた。

「お二人は百合百合な関係だったりするんですか？」

「へ？」

「」

「あらあら？」

佐天のあまりな発言に、他の3人の時が止まる。

いや。1人は嬉しそうに笑っているが。

「佐天さん! 佐天さん! ? いきなり何をいいんだすんですか! ! ? 」

最初に再起動したのは初春だ。

両手で佐天の肩を掴むと、その身体を素早く揺らす。

「えゝ? だって、あんなシーン見たら気になるじゃん?

今日、1日一緒なわけだし。もし、そうなら気を使わなきゃ……とか思わない？」

佐天は気にした様子もなく、あっけらかんとそんな事をのたまう。

対して初春は、もうパニックだ。

「そうですけど！？そうですけど！！？

それで、御坂さんと、白井さんが『YES』なんて言ったら、私どーしたらいいんですか？

私は、明日からも毎日、白井さんと会うんですよ！！？

物凄く気まずいし、もしかしたら、私も危険じゃないですか！！？」

「あら？失礼な？私は、お姉様一筋なのですわよ……」

等と白井が的を外れた答えを出した頃、ようやく美琴が、現実に戻ってきた。

「ちがー！ーう！！……」

美琴の切実な叫びが、青空に木霊した。

美琴の必死の説明により、佐天のとても勘違いはようやく解消された。

まあ、佐天自身は半ば解っていて聞いたのだが。聞かれた方の美琴はたまったものでは無かった。

所変わってとあるクレープ屋前。

ようやく移動を開始した4人に渡されたチラシを元にやってきたのだ。

主に美琴の為に。

理由は、オマケ。

先着100名様に貰えるゲコ太と言う、微妙なキャラクターのストラップに美琴が食いついたのである。

美琴は必死に否定していたが。

長蛇の列が出来ていた、お店に並び、何とかクレープ（美琴的にはゲコ太も）をゲットし、食べていると、初春は妙な違和感に気づいた。

「ん？」

初春の様子に気づいた佐天が、視線で問いかける。

「いえ。あそこの銀行どうして、昼間からシャッター下ろしてるんでしょうか？」

言われてみれば……

その言葉に、美琴や白井も気がつき銀行に目を向けた瞬間。

『ガシャ……………ドーン！！！！』

銀行のシャッターが吹き飛び大爆発を起こした。

即座に佐天は辺りに視線を走らせる。

『大きな破片は無し！シャッター付近にも爆発寸前は人は居なかった。……問題があるとしたら中！！』

即座に跳び出し、駆ける。

「佐天さん！！」

後ろから、初春の声が聞こえたが、止まらない。

事件か事故か。

何れにせよ、怪我人がいるとしたら、一刻も早い救出が必要なのだから。

『ボン！！』

続いて、小さな爆発が入口付近で起こる。

同時に、煙の中から、『いかにも』な格好をした男、3人が現れた。

「おら！グズグズすんな！さっさとシネーと…………ぐえ！！？」

『有罪…………でいいわよね？』

状況とセリフから、この3人が犯人だろう。

判断と1人目の腹部に肘撃ちを決めるは同時だった。

下がった側頭部に廻し蹴り。

桐揉みうって飛んで行く男と、呆気にとられる残された2人。

「戦場で我を失うと……死にますよ？」

「は!!!?!」

突如かけられた声に、我に帰った男が、手に火の玉を作り出すが、もう遅い。

前蹴りで体制を崩されると、未だに呆然としたままだった仲間とぶつかる。

「通 背 拳!!」

「「が!!!?!?!」」

大地を大きく踏み込み、その力を、そのまま利用した掌打の衝撃が2人の身体を突き抜ける。

次の瞬間には崩れ落ちる男達と、銀行の中に駆け込む佐天の姿があった。

「「……………な! な! な!」」

「はい。そうです。第7学区ふれ合い広場前の銀行で強盗事件発生。アンチスキルの出動を要請します」

対してクレープ屋前に残された、3人の内、2人は混乱の最中にある。

った。

1人は至極冷静に通報なんぞしているが。

「白井さん。アンチスキルの出動と、ジャッジメントの増援要請終了しました。

後は、あの人達を拘束して……行員の方々に怪我が無いといいんですけど……白井さん？」

そこで、ようやく2人のようやく気づいたらしい。

「ううう初春!!? どういうことですか!??? 佐天さんは無能力者ではなかったんですの!!??」

あまりの事に、かなり動揺しまくっているのだが初春には届かない。

「へ? そうですよ。今日の能力測定でも0だったって、本人が言っていましたし」

「そんな訳無いじゃない!

だって、今、レポートしてたし!

人が飛んでたし!

2人同時に倒れたし!!

あれ!?! 多重能力!?!」

ここで、他人から見た、佐天を説明すると。

気がついたら銀行の前について、男を1人5メートル程蹴り飛ばし、残った2人を同時に1撃で倒した。

と、ここまで言われて初春にも2人が何に驚いてるのか理解が出来た。

「あゝ……………やっぱり初めて見ると驚きますよね」
しみじみと思う。

最初は自分もそうだったと。
最近、慣れすぎて、佐天の非常識が常識になっているのだ。

「えーと……………後でちゃんと説明しますんで、まずはここでの仕事を終わらせましょう!!」

『ギイイイ……………ボタン』

「はあ……………やっと解放された……………」 風紀委員第177支部。
その入口に半死半生の様な状態の佐天がいた。

「大丈夫ですか？佐天さん？」

「大丈夫じゃないよ。事件の説明から始まって、お説教まで、アンチスキルと風紀委員で2回やらされるんだもん。
もう、ヘトヘトだよ」

佐天が事情聴取を受ける間待っていた、初春、白井、美琴が駆け寄る。

「まあ、当然ですわね。一般人の、しかも無能力者が銀行強盗に手を染める様な能力者相手に立ち回るなんて、普通は危険極まりありませんもの」

「そりゃ、そうかもしれませんが……………」

澄まし顔で告げる、白井に項垂れる佐天。

「でも、ホントにあれどうやってたの？」

テレポートして、人を数メートル飛ばして……………」

「へ？テレポート？？」

美琴の疑問に疑問を返す佐天。

何を言ってるか解らないと言った様子だ。

「えーと……………佐天さんが犯人グループを倒した時、どうやったのか教えて欲しいって事です」

1人だけ理解の出来てる初春が間に立って説明する。

「何って……………爆発した後、銀行に走ってたら『明らかに』って人達がいたから、ブツ飛ばしたただけだけど？」

「「は？」」

「え？」

場が沈黙する。

初春だけは楽しそうに笑っているが。

「そんな訳ありませんでしょ！！」

「いやいやいや！！！！」

「へ？」

『パンパン！！』

再び場が混乱しそうになるのを初春が手を叩いて止める。

皆の視線が集まるのを確認して切り出した。

「要するにですね。御坂さんと白井さんが見たテレポーは、佐天さん全力で動いただけなんです。速すぎてそう見えただけで。

男の人が飛んだのも普通に蹴っただけで、2人同時に倒したのはそういう技なんですよね？」

「うん。そうそう。『通背拳』って言うんだ」

「「……………」」

この日、2人の少女が非常識の塊、『佐天涙子』と関わりを持った。

佐天さんと百合の花

降りしきる雨の中、一台のバスが走っている。

「楽しみですねー。学舎の園!!」

その車内、瞳をキラキラさせながら、初春は隣に座る少女、佐天に話かける。

「うんうん! 楽しみだよね♪ チーズケーキ」

「え?」

「え?」

どうやら行き先は同じでも、目的には大分差があるようで。

「はあ………なんて可愛い町並みなんでしょう!!」

「ホントにヨーロッパの国みたいだね。」

まあ、現物はこんなに綺麗じゃないけど」

ゲートをくぐった先。

通称『学舎の園』は、その外とは別世界。まるで、異国の様な町並みだった。

「あ! 佐天さんはヨーロッパの方も行ったことあるんですっけ?」

「ん? っと言うか、世界中、ほとんどの国には一回行ってるんじ

やないかな？

仮面に鉄爪の人とか、闘牛士の格好した人が強くてね」

「何しに行ってたんですか……」

遠い目をして昔を懐かしむ佐天に呆れ顔で突っ込む。

「ん？ 勿論、ストーリー」「わあ！ 早く行かないと時間になっちゃいますよ！！」「へ？」

嬉々として語ろうとした佐天の言葉に、慌てて被せて遮る。

初春としては、これ以上、自分の常識を壊したくないのだ。

「ってホントだ！」

誤魔化しの為に言った事だったが、確かに、白井、美琴との待ち合わせの時間は、迫っていた。

「初春！ ナビお願いね！！」

「ふえ！？」

気がつくのと、初春は佐天の脇に抱えられていた。

『この体勢はまずい』

そう思う間も無く。

『ダン！！』

と言う音と共に、地面と数十メートル離れていた。

「ひゃあああああ!!」

目的地に着くまで、初春はヒモ無しバンジーと逆バンジーを繰り返す事になったのだった。

「2人共、遅いわね」

「まったく。お姉様をお待たせするなんて……」

「ひゃあああああ……」

と、遠くから聞こえる悲鳴。

「?」

2人が顔を見合わせて、上空を見上げると、良く知った顔が、降ってきた。

「到着。御坂さん! 白井さんお待たせしました!!」

「……………」

華麗に着地を決め、挨拶を始める佐天と、硬直する2人。

「つて、初春く？こんなところで寝てたら風邪ひくよく？？」

初春はグツタリとしていたが、佐天に揺すられ目を開く。

「空が……空が堕ちて来る………」

随分と混乱しているのか、おかしい事をいつている。

「おーい！初春く！！かえってこーい！！」

「……佐天さん？」

「へ？はい？」

白井は、まだ遠い世界に行ったままの初春を置いておいて、話を進める事にする。

……前回で、多少、佐天の事を知った2人だが、まだまだ『対佐天さん』ではビギナー。

普通の常識人なのである。

そんな2人には、見逃せない、現象が先程起きていたのである。

「今、飛んで来なかった？」

継いだのは美琴だ。

自分の目で見えたものだったが、出来れば否定してほしい。

どこの世界に、空飛ぶ無能力者がいると言うのか。

「あ……はい。飛行の方の『飛ぶ』じゃなくて、ジャンプの方の『跳ぶ』ですけど。」

遅くなっちゃったんで、文字通り『跳んで』来ました！！」

「それだと、字が違いますわ………」

「そうそう……って違う!!!」

黒子！突っ込むのはそこじゃない!!!」

「お姉様。私、悟りましたの。いいじゃありませんか。無能力者が明らかに世界新なジャンプをしようと。」

『そう言う事もある』と思ってしまうばそれまでですわ」

「あんたが、そうすると『常識側』の人間、私だけになっちゃうでしょ!!!」

お願いだから帰ってきて!!」

佐天が初春を、美琴が白井を起こそうと、もう大騒ぎである。

そんな中、ようやく初春が『現実世界』に帰って来た。

「は!?! おばーちゃん?」

「おー!! 初春。おかえり……って、こんな若い娘捕まえて、おばーちゃんは無いいんじゃないかな?」

「いえ。さっきお花畑の向こうに、おばーちゃんが……」

「「「……………」」」

どうやら、ホントに違う世界に逝きかけてたらしい。

帰って来た、白井と美琴が佐天をジト目で見て、佐天は、『ハハハ……』と乾いた笑みを浮かべた。

「つて、初春？ 顔色悪くない??」

ふと見ると、初春の顔色は青を通り越して、白に近くなっている。
佐天が心配して覗きこんだ瞬間。

「オエエエ……………」

描写出来ない様な事が起きたのだった。

常盤台中学の中。

その一角にあるシャワー室に、一行は来ていた。

理由は……………

「急に着替えを……………と言われましても、それくらいしか用意出来
ませんでしたわ」

「いえ。十分です」

佐天の着替えの為である。

着替える羽目になった理由は省くが、初春が1人、非常に申し訳無
さそうにしているのを、記しておこう。

しばらくして、常盤台の制服に身を包んだ佐天が姿を表す。

「サイズはどう?」

「えっと……………胸が少しきついかも……………」

「!???」

貸して貰っておいてあんまりな発言である。

誰の制服だったのか?

美琴が物凄く凹んでいる。とだけ。

「え………予定通りケーキを食べに行きませんか?」

そんな中で空気を読める娘、白井黒子は偉大であった。

予定通り、ケーキ屋に着いた4人は、注文をすませて席につく。

テーブルには、1人1品ずつケーキが……

初春だけは、散々悩んだ挙げ句、2品頼んでいたが。

「ん………懐かしいな!この味!」

注文したチーズケーキを一口。佐天はそんな事を言い出した。

「へ?佐天さんここ来た事あるの?」

学舎の園は基本、関係者以外立ち入り禁止だ。

今回の様に内部の人間に招待されれば別だが。

である以上、佐天がこのケーキを食べれたとは思えないのだが。

「ああ。此処じゃなくて本店の方で。」

ホントにまったく同じ味なんですね」

「佐天さんは、イタリアに行った事がございますの？」

この店の本店は確かそうだった筈だ。

以前、知人に聞いた話を思い出しながら、白井が尋ねる。

「はい。昔、父親の旅について行った事があって。

ダルトンさん元気かなあ？」

「旅？旅行じゃなくて？」

言葉の中にあつた些細な違和感。

それを美琴が指摘する。

「ん？旅行でもいいんですけどね？？」

特に目的地も無く『俺より強い奴に会いに行く』的なノリだったんで、旅の方がしっくりくるかな」と

「「「……………」」」

「え？」

なるほど。流石、この娘の父親だ。普通じゃない。

いや。父親がそうだから、この娘がこうなったのだろうか？

言葉をかわす事も無く、3人の中によぎった思いは一緒だった。

「それって、会いに行つてどうするんですか？やっぱり試合とか？」

聞きたく無いような。聞きたい様な。

怖い物見たさの様な感覚で初春が問いかける。

「試合……ってより、喧嘩かなあ？」

場所もルールも適当だったし。

高層ビルの屋上で闘った時なんて、ホントに落ちるかと思ったよ」

「ちょ！喧嘩！？ってどこで、やり合って………」

「それ以前に、途中から佐天さん自身が闘ってる風に聞こえますの」

予想はしていた。

とんでも無いんだろうと。

けれど、やっぱり予想以上……斜め上に行くといってもいい。
に、混乱する美琴と呆れる白井。

いい加減慣れてる初春だけが、美味しそうにケーキを食べていた。

「途中からは、私も参加しましたよ？」

最初の内は負けてばかりでしたけど。

……で、負けた後に、相手に稽古つけて貰ったりして。
いや……皆、いい人達だったな………」

遠い目をして昔を懐かしむ佐天。

「小学生の娘、相手に喧嘩してる地点で………」

「お姉様突っ込んだら負けですよ………」

まだ常識人の美琴と、徐々に染まりつつある白井。

「美味しいですね」

染まってしまった初春と、3者3様の反応を示すのであった。

『ガタッ!』

「すみません。私、少しお手洗いに……………」

そんな風に、ケーキを肴に喋る事、暫く。

佐天のとんでも話に、皆が呆れていたとも言うが。

佐天が席を立つと同時に、初春の携帯がなった。

「はい!……………はい?……………はい。解りました!」

「呼び出しですの?」

応答から大体のあたりをつけた白井に、力無く初春が頷く。

その手元には、追加注文した手付かずのケーキが2つ。

「タイミング悪いことこの上『ガシャン!!』なんですの!」

突然の呼び出しに、風紀委員2人が愚痴をこぼしていると、突然、激しい音が辺りに響いた。

「今の音!」

「トイレからでしたわね!!」

トイレ。となると、今、この場にいない1人が。

「佐天さん!!」

慌てて駆けつけた3人が目にしたのは、倒れた女性徒を介抱する佐天の姿。

「えーと……………」

「これはいったい……………」

「どういう事ですか？」

さすがに、そんな事が起きては風紀委員が、その場を離れる訳も行かず……………」

支部に連絡を入れ、この件について対応する事になった。

倒れた女性徒を病院に搬送。

その後、佐天からの聞き取りである。

「トイレに行って手を洗ってたら、後ろから襲われた？」

「そうなんですよ。で、咄嗟に投げちゃって……………」

危機に対して身体が勝手に反応したのだと言う。

「それで大丈夫なんですか？」

心底心配そうに初春。

「ん。かすり傷ひとつ無いよ！」

「いえ。相手の方がです」

「「おい!!」」

突っ込んだのは、美琴と佐天。

白井は初春と同じく、佐天（この娘）は心配するだけ無駄と判断したらしい。

「はぁ………そっちも心配無いよ。叩き着ける時に手加減したから、今頃目を冷ましてる筈だよ」

初春に心配してもらうのを諦めて佐天が告げるのと同時に、病院関係者が呼びに来た。

曰く、被害者………加害者でもあるが。が目を覚ましたらしい。

「なんで貴女は反応できたんですか？」

事情聴取に訪れた面々（2人程おまけだが）に、彼女が最初に口にしたのは、そんな言葉。

聞けば、その時彼女は、自身の能力で他人から見えない様になっていたらしい。

「なんでって………あんだだけ、殺気満々で来てたら見えなくても解るよ」

「え?。」

「「……………」」

苦笑気味に答える佐天に、驚くのは目の前の彼女だけ。

他の面々は、『佐天（彼女）なら、そう言う事も出来るだろう』と言う認識だ。

ここにきて、美琴も染まり始めたらしい。

「で？なんであんなことを？」

「それは……………」

彼女は語る。

それは、1つの恋の始まりと終わりの物語。

「えーと……………要するに、常盤台の娘に好きな人をとられたから、八つ当たりに、常盤台の娘を襲ったって事でOK？」

「佐天さん……………」

「さすがにそれは……………」

「ぶっちゃけ過ぎですの」

なんと言うか。台無しだった。

「貴女に何が解るの！？私は本当にあの人の事が！！」

「んー？いや。だってさ？」

女の子を外見で判断して、しかも二股から振るような男なんでしょ??

私なら、確実に個人的私刑だよ？

……まあ、そうじゃないにしてもさ、そんな男、その常盤台の娘にくれてやってさ、自分磨きでもしてた方がいいよ」

さっぱり、ザックリ言う佐天に彼女も呆氣にとられる。

でも、問題はそこだけじゃないのだ。彼女には、

「でも……でも、私の眉毛は………」

「変じゃないよ」

「へ？」

佐天が振り向くと3人も各々頷いた。

「変じゃない。そのくらい、個性的なチャームポイントだよ」

「……………」

その後、彼女はアンチスキルに連れて行かれ。

その際に佐天に手紙を書く事を約束していった。

「しかしまあ……………」

「うふふ……………」

「ですわよねえ……………」

残された面々。佐天を除く3人は、それぞれ何やらボソボソと言い

合ってる。

「え？なんですか？」

佐天が問いかけると、3人は目を合わせて、代表して美琴が切り出した。

「いや。あの娘見事に百合の花を咲かせてたな〜って！！！！」

「？」

美琴の言ってる事を呑み込めず、考える。

そして、理解したとき。

「ええええええええええ！！！！」

この日、佐天に学園都市で苦手なモノが1つ増えました。

佐天さんと都市伝説

暗闇の中少女は語る。

その日の出来事を。

「油断してた訳じゃない。

相手は老人の姿をしてたけど、そんなのが『強さ』には関係無いって、それまでの経験で知ってたし。

何よりも、目の前の相手が私の友達と、友達のお姉ちゃんを苦しめて来た相手だって知ってたから。

『油断も慢心もせず、一撃で決める』

そう決心して、一気に相手の懐に入って渾身の一撃を放った。

それは、相手の胸に突き刺さって…………

『殺った!!』

私はそう確信した」

『ゴクリ』暗闇の中、誰かが唾を飲み込むのが解った。

「瞬間！老人だったモノが幾千幾万の蟲の大群に!!!!
突き刺さった、私の腕は次々と蟲の牙に曝され!!!!」

「「きゃあああああ!!!!」」

「……………」

ファミレスの中、暗幕を持ち込んで開かれていた怪談は、佐天の番で2人がギブアップの為、終了となった。

ちなみにギブアップしたのは、初春と美琴だ。

顔を真っ青にしたまま震える初春。

「ムシコワイムシコワイムシコワイムシコワイ」

うつ向きながら何かを呟き続ける美琴と、対応はそれぞれだったが。

「全く大げさですわ。2人とも。こんな作り話で」

白井だけは、あっさりとしたもので、平然としていたが。

「ふえ？作り話？」

「ですよ。実際にそんな化け物がいる訳が……………」

白井の言葉にようやく、美琴と初春が落ち着く。

「大体、今のお話が本当なら、佐天さんの腕に傷痕1つ無いのはおかしいじゃありませんか？」

白井の言葉に、2人は頷き合い、佐天の腕を覗きこむ。

そこには、染みひとつない、白い綺麗な腕があった。

「あははは……………そりゃそうよねー」

「そうですよ。いくら佐天さんが非常識だからって……………」

ようやく納得いったのか、2人は顔を見合せ笑い合う。

それほどまでに、佐天の語った怪談は現実感があり、何より『佐天さんなら』と言う気持ちだが、恐怖感をましていたのだ。

……………

「ああ！これ？その時、治療が得意な人が居てね？

パツと見には傷が解らないようにしてくれたんだ。

未だに、血行が良くなると痕が少し浮き出ちゃうんだけどね？」

「「「きやああああああ！！！！」」」

「えっと、次は何にしようかな？

『一夜にして、ゾンビだらけになってしまった街』から脱出する話とか、『自動人形』と闘う話とか、『吸血鬼の城』に乗り込む話とがありますけど？」

ちなみに、この段階で佐天は、先程の話とは別に、『雪山のペンションで起きた殺人事件』を話しており、他の3人＋話が聞こえていた他人のお客様は、顔を真っ青にしている。

「ち……………ちなみに」

「その話も」

「実話ですよ？」

3人の願いはただ1つ。

『嘘であって欲しい』だ。

だが、佐天は満面の笑みで、

「もちろん!!!」

と頷くのであった。

「はぁ……………酷い目に逢いましたわ……………」

佐天が次の話を語るのを、3人がかりで、全力阻止し、今は落ち着く為に一息入れている所だ。

佐天以外は全員、ホットを飲んでる。

寒すぎるくらいに震えがくる。とは、学園都市第3位の方の意見である。

「それじゃあ!落ち着いたところで、次の話を……………」

「初春さん!学園都市の都市伝説とかそういうの無い!?」

「はい!確かネット上に!!!」

繰り返しになるが、佐天の怖い話は全力阻止なのである。初春が慌てて取り出したノートパソコン。

そこには、いくつもの都市伝説。そのタイトルが並んでいる。

どこにでも有りそうな物から、学園都市ならではのものまでいくつもあり、それでも共通しているのは『胡散臭い』と言う事だろうか。

まあ、それでも……恐怖のドン底に戻されるよりはマシだろう。

冷やかしながら、それらを読み上げていく。

「えーと……何々。」

『風力発電のプロペラが逆回転する時街に異変が訪れる』

『すれ違い様に突然脱ぎ出す脱ぎ女!!』

『4時44分に学区を跨ぐとたどり着いてしまう虚数学区』

……自分で振っというてなんだけど……」

「どれもこれも下らないですわね……」

まあ、佐天の話が凄すぎて余計に陳腐に感じてしまうのかもしれないが。

「あ……これなんかどうですか？」

『朝、遅刻寸前に学校に向かうと見てしまう少女の霊』

「朝に幽霊って……」

「いいんじゃないんですか？有り得なさが、余計、胡散臭くて」

どうやら、怖い話を探すのを諦めて、下らない話を探す事になったらしい。

話題に上がった都市伝説をクリックして初春が読み始める。

「『朝の登校ラッシュも過ぎた時間帯。

その人は遅刻を防ぐ為に、校則で禁止されたバイクに乗って学校に向かった。

間に合うか？

そんな気持ちが運転にも出て法廷速度を遥かに上回る速度で走っていた。

ふとミラーを見ると……………

制服姿で走る女の子が凄まじい速度で自分に迫ってくる。

そして、追い抜く瞬間……………

何かを叫んでいた。

後で聞いた話によると、そこは昔、遅刻しそうになった女の子がバイクに轢かれなくなった場所で……………

今も犯人は捕まっていないらしい。

彼女は今も犯人を探しているのかもしれない』……………だそうです」

「なんと言うかこれは……………」

「意外とまともな怪談でしたわね」

「あ！細かい遭遇場所までかいてありますよ！」

ページの最後にはご丁寧にも、その場所の住所。地図まで書いてある。

新たな心霊スポットにでもするつもりなのだろうか？

「えー……やだなあー。」

「ここ、私の通学路ですよ」

さすがの佐天も、毎日使う通学路が心霊スポットというのは気持ちのいいものじゃ無いらしい。

苦い顔をしている。

「まあ！所詮、下らない噂話ですわ。気にされない事ですよ」

「そうですよ！大体、佐天さんの足の速さなら、この幽霊が追いかけて来ても追い付けないですよ！！！」

「そうよねー。何て言っても車よりも………」

『『『あれ？？？』』』

『噂の発生源が佐天さんの通学路で』

『目撃されたのが、車より速く走る少女』

『しかも、時間帯が遅刻寸前の時間』

佐天に全員の視線が集まる。

『『佐天さん（こいつ）だー！！！！』』』

「？」

思わぬ所で、都市伝説の真相に辿り着いた3人。

だが、言えない。

言えるわけがない。

「まあ。でも確かに、所詮は噂話ですもんね。気にする事無いですよね」

知らぬは本人だけ。
気楽なものである。

「えーと……どうなんでしょうね？御坂さん？」

「え？私！？？ほら！その！？私は、そういう噂話とか詳しく無いから！！！？ね！？黒子！！！！」

「ぶほお！！！？私ですの！！！？？？」

対して真相に至ってしまった者達は大混乱。

『知らない方が幸せな事もある』とは良く言ったもので。

『言え』

『言って下さい！白井さん！！』

目線だけで交わされる会話。

その圧力に負け、白井が渋々口を開く。

「えーと……………その……………確かに、下らない噂話なんですけど……………この手の噂話は、本当にあった話をモデルにしてる場合がありますてですね？」

「またまた…。さっきの怪談の仕返しですか？
それとも、白井さん何か心辺りが？」

食いついた。

言うならここしかない。

チラリと他の2人を見れば、その瞳は明らかに

『GO！！』

の指示。ならば……………

「いえ……………そう言う事もある。ってだけの話ですの」

それでも言えない事もある。

友人であるが故に。

結局、佐天が真相を知る事は無かった。

あの後、美琴、初春の2人も結局切り出せなかったのだ。

こうして、

『遅刻寸前の時間帯に現れる少女の霊』

の都市伝説は、末長くかたり継がれて行くことになれたのであった。

佐天さんと上条さん

夕暮れに染まる街。

その中に、軽やかなメロディーが響き渡っていた。

「たまご♪たまご♪た・ま・ご♪

たまご♪たまご♪た・ま・ご♪」

佐天はご機嫌だった。

ここ数日の中、いや、数ヶ月振りの上機嫌だと言ってもいい。

理由は至って明確明瞭。

スーパーの特売品。

玉子10個入り65円を見事、2パック手中に納めたからである。

佐天は、その生活費の殆どを、学園都市からの支援金で賄っている。

……が、学園都市の風は無能力者には冷たい。

まあ、平たく言ってしまえば、金額が少ないのだ。

そんな訳で、スーパーの特売品は、貧乏学生をしている佐天にとって、天からの恵み。

絶対に逃せない代物なのである。

しかし、ここに大問題が発生する。

遠いのである。

佐天の通う、柵川中学からスーパーまでが。

また、学園都市の名が示す通り、ここに住む者は大半が学生。

必然的に、特売品を狙う、ライバル貧乏学生も多い。

そんな、厳しい現状を打ち破って手に入れた一品。

これは、戦利品と言って過言で無い。

佐天の頭の中では、オムレツや、茶碗蒸しと品々が次々と浮かんで
は消え、浮かんでは消え……

軽やかな足取りで、家路を急いでいた。

「あああああ！！！！」

そんな中に響き渡る絶叫。

『何事？』

厄介事は、ごめん被りたい。

普段ならいざ知らず、今はとてもデリケートな宝物（65円×2）
を所持しているのだ。

とはいえ、気になるのも事実。

『ん。厄介事ばかったら全力逃走するって事で……』

そんな思いを胸に秘め、佐天は、絶叫の聞こえた路地を覗き込んだ。

上条 当麻は絶望の最中にあった。

2時間も並んで手に入れた宝物が、ほんの一瞬の不注意。

ほんの僅かな油断で、たった今、ただの生ゴミと化したのである。

しかも…………

「あゝゝ！アンタ！！」

厄介事が、もう1つやって来た。

知れず、小さく溜め息をついてしまっていた。

『ありゃ？御坂さん？』

佐天がやって来た路地。

その先では、美琴とツンツン頭の少年が何やらい争っていた。

近づくに連れて、その内容が鮮明になっていく。

「……………という、自分はお買い物かぁ！！？」

「貧乏学生にとって特売品を手に入れられるかどうかは、死活問題なんだぁ！

常磐台のお嬢様には解るまい！！」

言いながら『元』宝物を振り出す。

流れ出す中身は、上条の血涙のようである。

対して美琴も納得いかない。

今日1日、上条のせいで酷い目にあつたのだ。

「こっちだって大変だったんだ………から？」

が、その勢いは最後まで続かない。

上条の肩に手を乗せ、うんうんと、深く頷く知り合いの顔を見つけたからだ。

「えーと………あのー………」

上条はどうしていいのか解らず。

「………佐天さん？何してんの？」

美琴は突然の友人の奇行に呆氣にとられ、完全に勢いを失うであつた。

そんな、2人を余所に、佐天が喋り始める。

「そうなんですよ！そうなんですよ！！無能力者で、親の支援も録に受けて無いような、人間にとっては死活問題なのに多くの人は解ってくれないんですよ！！！」

今日の特売に間に合うように、急いでた私に、友達が何て言ったと思います？

『数十円の為にそこまでしなくても………』
とか

『涙子く……いくらなんでもオバさん臭いよく?』
ですよ!!!!

私は、あんたらブルジョワとは違うだよ!!!!」

「ふえ？」

認識が追いつかない美琴。

だが。上条は理解した。

『この娘は俺と同類だ』と

「そうなんだよ! 昨日、俺の部屋にダチが遊びに来てたんだけどさ、
何て言っただと思う？」

『大根の葉っぱって食べれるぜよか?』だぜ?

煮て善し。和え物にして善しの万能食材だったのに!」

「ですよねく!! なのに、それが解らない娘達は、それを見て

『貧乏臭い』

とか、言うんですよ!!」

盛り上がる、盛り上がる。

上条と佐天は、まるで旧知の友の様に、場所も気にせず（ここは、
人通りは少ないけど道路のど真ん中）に話続ける。

『あれえく? なんで、2人の知り合いの私がおいてけぼりで、初対
面（の筈）の2人があんなに盛り上がってるの?』

と、美琴は自分が主宰した合コンに全く参加出来ない人の様な気持ちを抱きながら、その様子を眺め続けるのだった。

1時間後!!

「はぁ……いやぁ、今日は有意義な話が出来た!!」

ようやく話も一段落し、上条はまるで、一仕事終えた様な満足感を得ていた。

「まったくです。今日、ここで上条さんに会えて良かったです」

それは、佐天も同様で、他の友人には理解して貰えない事をたっぷり話せた事に満足していた。

「ああ! そうだ! 上条さん、玉子割れちゃったんですね? 良かったらこれ……」

佐天が差し出したのは、今日の戦利品の片割れ。

「こ! これは! いや! かし!! ただ貰うわけには……」

「いえいえ。いいんです。今日のお礼と、これから共に、特売の戦場で戦う戦友へのプレゼントです」

上条は震える手で、それを受け取り……
最大の謝意を持って頭を下げた。

「かたじけない。なんとお礼を言えば……」

「いいですって！
その代わり大切に使って下さいね？」

「必ず！！」

そうして、2人は戦場（特売）での再開を約束し別れた。

佐天を見送った上条は、家路に帰るべく荷物を持って……

「えーと………終わった？」

声をかけられた。

「………ビリビリ………まだ居たのか………」

「居たわよ！悪かったわね！！！」

「いや。悪くは無いが、律儀と言うか、何と言うか………」

上条自身は正確な時間は把握してないが、それでも、結構な時間、佐天と話していた自覚はある。

その間、ずっと黙って待っていたのである。

流石の上条も不憫に感じてしまう。

「あ~~~~！！！！もう！！いいから！！勝負………」

つとここで、美琴の声が止まる。

上条としては、今日は付き合ってやろうと思っただけに意外な反応である。

「それ………大事なんでしょ？」

待っててやるから、置いてきなさいよ」

美琴が指差したのは、上条の無事だった戦利品と、佐天から譲り受けた、宝物。

美琴には、佐天と上条の話の内容は半分もわからなかったが………

それでも、特売品^{それ}が2人にとって大切な物なんだと言うこと位は解った。

だったら、それを置いてくる間くらいは。

「ありがとな」

「うっさい！早くしろ！！」

上条が荷物を置きに戻って、その場には美琴だけが残される。

もう殆ど沈んだ夕陽が、辺りを真っ赤に染めて………

美琴の顔が紅く見えるのが、それせいだけなのかは、まだ本人も知らない事。

今日、佐天さんと上条さんとの間に奇妙な絆ができました。

佐天さんと爆弾魔さん

走る走る走る。

日が暮れ、公共機関の止まった闇の中をひたすら疾走する。

跳ぶ跳ぶ跳ぶ。

ビルを、橋を、街灯を。

あらゆる物を足場に変えて、街中を滑空する。

やがて、影は学園都市外れの、河川敷へと辿り着く。

「はあ！」

短く鋭く吐き出された息。

途端に周囲の空気が張り詰めた物へと変わり……………

同時に……

『ビリ!!!』

つと、何か**が**破けた音が響いた。

[.....]

ゴソ
ゴソ
ゴソ
……

影は自信の身体を一通り調べ……………

「ああああ！！！！！！？？」

大絶叫が辺りを包んだ。

トボトボ………

そんな擬音が似合うような姿で歩く佐天。

周囲を歩く生徒達は、そんな佐天を小首を傾げて見送る。

朝の柵川中学。

遅刻寸前に爆走してくる彼女は、ある意味、朝の名物になっていたし、そうでなくても、『元気一杯』がトレードマークの彼女のそんな姿は、かなりレアな物だと言えた。

「あれ？佐天さん？おはようございます。今朝は早いですね」

そんな彼女に声をかけたのは、初春飾利。
彼女の親友である。

親友の声に彼女は振り返り………

「ういはるゝゝゝ！！！」

号泣していた。

デフォルメしたら滝の様な涙を流してる状態で。

「ええ！！？ちょっと佐天さん！？」

泣きつかれた初春は、突然の事態に困惑しながら………

『どうでしょう？この状態………』

途方にくれた。

朝の登校路で泣いてる女の子。

更に柵川において、佐天はかなりの有名人だ。

なにが言いたいかと言うと……目立っているのだ。

そりゃもう、完全に周囲から孤立する程に。

「佐天さん！と、とりあえず教室に行きましょう！！」

結果、初春がとったのは、逃げるという極めて現実的な手段であった。

「えっと、つまり永いこと大切に使っていた胴着が、破れてしまった……と？」

教室について、ようやく落ち着いた佐天から聞いた話を要約して、初春は聞き返す。

その際に聞いた、完全下校時間の後に、どう考えても車で数十分かかるような場所に佐天が居たことはスルーだ。

気づいてはいけない事があるのだ。

彼女の友人として。

風紀委員として。

「うん……まあ、古い物だったからさ、何時そうなくても、おか

しかなかったんだけどさ。

母さんに貰った物だったし、KOFで優勝した時の物だったから、大切にしていたからやっぱりショックで……………」

ここで迂闊に、

『KOFって?』

なんて聞いてはいけない。

今、それは本題では無いし、聞いた瞬間に自身の常識が破壊される事を初春は知っているのだ。

「それじゃあ明日、私、風紀委員の仕事休みですし、一緒に新しい胴着、買いに行きましょうよ!!」

御坂さんや、白井さんも誘って!!」

佐天はしばらく『うゝん』と考えて……
やがて、頷いた。

どちらにせよ、新しい胴着はいるし、何時までも落ち込んでいる訳にもいかない。

気持ちを入れ替える為にも初春の誘いに乗ったのだ。

「そう……………だね。買いに行こっか!」

その笑顔は、やはりどこか寂しげではあったが……………

放課後。

何時ものコンビニで立ち読みを終えた美琴は、その帰り道、対面の歩道によく見知った顔を見つけた。

常磐台と柵川。

地理的にも、環境的にも全く違う学校に通う2人が、偶然遭遇するのは珍しい。

嬉しくなった美琴は、思わず周りの目も気にせず大声で佐天に声をかけた。

「おおーい！佐天さーん！！！」

それに気がついて振り返り、弱々しく笑みを浮かべるだけの佐天に小首を傾げる事になったが。

美琴は困っていた。

何時もなら、ほっておいても、向こうから会話を始め、盛り上げてくれる佐天が今日は大人しい。

なんと言うか元気が無いのである。

「そうだ。黒子と一緒に、初春さんも大変でしょ？」

何となく会話に困って共通の知人の話題を出してみる。

「みたいです。今日も風紀委員の仕事で缶詰めだそうです」

「まあ、例の爆弾魔が捕まるまでは、しょうがないよ」

ようやく、まともな反応示してくれた相手に安堵の溜め息をつく。

それでも、相変わらず相手の憂いを帯びた表情は変わらず。

それを、踏み込んで聞いていいものかどうか、判断に悩む。

こと、自分の事に関しては思いきりのいい美琴だが、対人関係に関しては途端に臆病になってしまう。

超能力者。学園都市第3位。

そう言われる様になってから、美琴の周りの人達は本人の思いと関係無く、常に一線置いて、扱われる様になっていた。

故に、白井や初春、佐天といった、隔たり無く自分と接してくれる人物は貴重で……

だからこそ、こういった時、どういう行動をとればいいのか解らないのである。

「何か……なんだかなあ………て感じなんですよ」

美琴が思考していると佐天が先に口を開いた。

友人が（少なくとも美琴はそう思っている）、自分に打ち明けてくれる事を嬉しく思いながら、黙って先を促す。

「白井さんや初春は風紀委員で、御坂さんは、学園都市第3位の超能力者（レベル5）。

皆、それぞれに、学園都市での生活を頑張ってるんですよ。

それに比べて、私は、何にも無いなあ……………て」

「佐天さんも、毎日……………修行だっけ？頑張ってるんじゃないの？初春さん、言ってたわよ？」

白井や初春の事はともかく、美琴。

彼女自身の事となると、美琴には特に頑張っていると意識は無い。

確かに、超能力者になるまでには……………

そうなるために、幾つもの努力を積み重ねてきたが、ここ最近は何つかの実験に協力しているだけで、努力と言える様な事はしていない。

それに比べれば、佐天の方がと思うのだが。

「うーん。修行に関しては、もう何年もしてる事ですから。

それに、正直、それなら、学園都市の外の方が効率がいいんです。

師事を受けれる方達もいますし、強敵ライバルって言える人達もいますから。

だから、『なんで、私はここにいるんだろう？』ってそんな風に思っちゃうんですね」

「!?!?」

佐天にも、学園都市に来た当時には目的があった。

新しい『強さ』を手に入れる事。

それは、『能力』とかそういう事では無く。

佐天の友人達が持っていた『強さ』

ある少年は『正義の味方』なんて言う途方も無い夢を見ていた。

ある少女は、『自分と同じ想いを他の誰にもさせない』為の道を歩み始めてた。

別の少年は、『親子3代に渡る決着』をつける為に旅に出た。

幼少の頃から、ただ、ひたすらに『強さ』を追い求めた、佐天（少女）は、そういった強さが未だに持てずにいたのだ。

対して美琴にも言いたい事があった。

佐天が学園都市こくえんにいる意味。

美琴に言わせればあるのだ。

佐天が学園都市に来て、自分と出会ってくれた。

それだけで、美琴にとっては十二分に意味があるのだ。

隔たり無く、自分と接してくれる存在。

友人と言える、その在り方が、美琴にとってどれだけ救いだろう。

けれど、美琴はそれを口にしない。

出来ない。

もし、それを言って、否定されたなら……

美琴にとって、それは、何よりも恐怖だった。

結果、

「えっと！すいません！！」

そんな重い意味じゃ無いんです。

ただ、私も何か頑張らなきゃな〜って、そんな感じで！！

あ！そうだ！！明日、初春が珍しく休みらしくて、一緒に服を買いに行く予定なんですけど、良かったら御坂さんも一緒にどうですか？」

そんな風にお茶を濁す佐天の言葉に頷く事しか出来なかったのである。

Serenth Mist

学園都市内に出版している洋服店としては、最大規模を誇る、店舗である。

豊富な品揃えと、手頃な価格。

同時に流行の最先端を押さえと、学園都市内の学生（特に女子）に熱烈に支持されている。

そんな場所に、佐天、初春、美琴の3人は来ていた。

美琴を通じて、白井も誘ったのだが、件の爆弾魔の事を詳しく調べたいとの事で断られたらしい。

「何かお土産でも買っていきましようか？」

「いいね〜！」

そんな会話をしながら店舗に向かう。

そんな中

「？」

佐天は突如、足を止め辺りをキョロキョロと見回した。

「どうしました？佐天さん？」

「ん〜？何か今、悪意が？？」

周りを見回すが、それらしき存在は見当たらない。

『気のせい？』

そう思い、初春、美琴に続き、店舗へと足を向ける。

もし、この時、佐天がもう少し辺りを観察していたのなら、気づいただろう。

あるいは、風紀委員の腕章を佐天がしていたのなら。

それに向けられた強烈な悪意を発する存在に。

だが、己が為に武を磨いて来た佐天は、自己に向けられる、悪意や殺気には敏感でも、他者に向けられるそれらには、そこまで鋭く無いのだ。

その事が、事件を未然に防ぐ事を妨げた。

初春に向けられた、悪意はそのままに。

3人は店舗へと足を踏み入れてしまったのである。

「さあ!!!!探しますよ!!!!」

「おお!!初春さん、気合い入ってるね……………」

「あはは……………」

店舗の中、妙に気合いの入った初春に、美琴は驚き、佐天は乾いた笑みを浮かべる。

「そりゃそうですよ!なんて言っただって、今日は、佐天さんのバトルコスチュームを選ぶんですから!!」

「ん?」

「あははは………」

続く言葉に、美琴は小首を傾げ、佐天を見るがやはり返ってくるのは、乾いた笑いだけである。

「って、佐天さん？もしかして、御坂さんには、まだ話して無いんですか？」

ようやく2人との温度差に気づいた初春が佐天に問いかける。

佐天は苦笑を浮かべるだけだ。

「え？なにになに？どう言うこと？」

と、そこに美琴も食い付き、佐天は諦めた様に口を開いた。

「…………その。この間、私が今まで使ってた胴着が破れちゃいました。

今日はその代わりを買いに来たんですけど……………」

昨日の夜、今までどんなのを着てたのか？って聞かれて、写真を送ったら……………」

そこまで言って視線を初春に向ける。

テレパシーなど使えない美琴だったが、佐天の言いたい事は解った。

『あの通りです』

と、雄弁に視線が語っているのだから。

「あゝ…………初春さん。その、胴着なんだしそんなに張り切らなくても……………」

佐天の意図を汲み、初春を諷めようとする美琴だが、それは、初春を憤慨させるだけだった。

「何を言ってるんですか！御坂さん！！

見てください！これ！！

これが、今まで佐天さんが使ってたバトルコスチュームですよ！！

私達には、これを越える一品を探す事が求められてるんですよ！！」

「っ！！？」

初春が差し出した、携帯端末には、今より少し幼い佐天が写し出されている。

その背景が、落書きが大量にされた、ボロボロの壁で、

『何処で撮ったの！！？』

と思わなくも無いが問題はそこでは無い。

写し出されている、佐天が着ている衣装だ。

絹で出来た蒼い衣服。

チャイナドレスと言っていていいそれは、幼さの残る佐天の魅力を余す事無く、発揮する最強の兵器だった。

ギギギ…………

油が切れた機械の様な動きで、美琴の視線が佐天に向く。

「あ…………私って、特にどこの流派って訳じゃ無いから。

だから、『胴着』って言っても、動き易ければ特に問題無いんですよ。

言ってしまうえば、意識を戦闘に切り替える為のアイテムみたいな感じだ」

極論。

佐天が『胴着』だと認識してしまえば、制服だろうが、ジャージだろうが、それは『胴着』なのだ。

まあ、佐天にとって日常の象徴たる『制服』を『胴着』として認識するのは難しいだろうが。

「実際、今まで着てたそれも、正確には胴着って訳じゃなくて、憧れてた、女性格闘家の方の衣装を真似て母親に作って貰った物なんです」

だから、その意味で初春の言う所の『バトルコスチューム』と言う表現は正しい。

佐天は絶対認めないが。

佐天の言葉を聞き終えた美琴は、凄まじい勢いで初春の手を取り頭を下げた。

「ごめん！初春さん！！

私が間違ってたわ！！！！

今日は皆で、佐天さんに似合う最高の『バトルコスチューム』を探
しましょう！！」

「解ってくれたんですね！！御坂さん！！」

手と手を取り合い見つめ合う2人。

それを目にした佐天は、背中に冷たい汗が流れるのを感じた。
何故か、自分が猛烈な勢いで墓穴を掘った気がしてならなかったの
である。

「佐天さん！こんなのですか！？」

初春が持ってきたのは、男物のスーツ。

「いやぁ……………流石に窮屈じゃないかな？」

「佐天さんこんなはどう？」

美琴が持ってきたのは、赤いフリフリがついた……
所謂、ゴスロリと言われるようなドレス。

「さ……………流石に無理があるんじゃないですかね？」

「あ……………2人とも？」

「はい？」

「なに？？」

ちなみに、佐天に呼び止められたこの瞬間も、2人の衣装を探す手は止まっていけない。

執念っと言ったところか？

「胴着くらいでそんなムキにならなくても……………」

「「胴着ぐらい！！！！？」」

「（ぐ）…………ごめんなさい」

とても、怖い目で睨まれて思わず謝ってしまう。

『あれ？私の胴着選んでるんだよね？？』

かくして、主の意見を無視した、胴着探しは続行される。

次から次へと持ってこられる、とんでも『胴着候補』達に辟易した佐天が、お手洗いに立った時に、彼と遭遇した。

「あれ？上条さん？」

「つと佐天さん」

ツンツンとした髪型と何時もと同じ制服姿。

佐天の戦友『上条当麻』だ。

「お買い物ですか？」

「ああ……………いや」

セブンスミストは、先程述べた通りのお店だ。

特に『安い』の一点は、佐天と同じく貧乏学生の上条にも魅力的な所である。

てっきり洋服を買いに来たとおもったのだが。

「お兄ちゃん！」

そういつて、上条の手に絡み付く小さな影。

可愛い。

そう表現するのがぴったりくる、幼女の姿がそこにあった。

「俺はこの娘を……………」

「上条さん！私も他人の趣味、嗜好に色々言うつもりはありませんが、流石にそれはどうかと……………」

「へ？」

間の抜けた声をあげながら佐天の瞳を見れば、それは、確実に退いている。

いや。軽蔑されているが正しいだろうか？

ここで上条は気づく。

もしかして、自分は彼女に凄まじい誤解をされているのではないか？

「違う！違うよ？違います！！」

俺はただ此処に、この娘を案内してきただけで……………」

知り合いの、しかも、戦友とも思ってる娘に、ロ○コンと思われるのは辛い。

上条は必死に説明し、

「お兄ちゃんに連れてきて貰ったの」

小さくても強力な援軍のお陰で、どうにか誤解は解けたのだった。

「すみません。早とちりして」

「いや。いいよ。確かに考えて見れば誤解を招く状態だったかもしれないし……………」

といっても、普通は『妹？』って方の誤解だと思うが。

「それで、佐天さんの方こそ、買い物？」

その上条の問いに、佐天は暫く悩んだ後。

「着せ替え人形やってます」

と、この数時間で、随分と煤けた背中越しに答えるのだった。

上条と別れた後、更に数着の着せ替えをこなし、いい加減、佐天がげんなりした頃。

初春の携帯が鳴った。

初春が電話にでると、その向こうからは白井の声。

かなりの量が漏れ出て聞こえる辺り、焦りが感じられる。

その端々にある

『グラヴィトン』 『続報』

と言った単語に、美琴、佐天にも緊張が走った。

電話を切った、初春が静かに、だが、真剣な眼差しで2人に告げる。

「グラヴィトン事件の続報です。犯人の次の目的が解りました。

……この店です」

「なんですって!!」

その一言で場が一気に緊張した。

こんな人が多い所で万が一爆発等起きたら……

「御坂さん、佐天さん。すいませんが避難誘導の手伝いをお願いします」

「解った!」

「……………」

初春の言葉に御坂は即答。

佐天も無言で頷く。

初春としては、一般人の2人を巻き込むのは心苦しいが、一刻も早い避難が必要な現状。

使える手札をケチッてる余裕は無い。

初春から現場の責任者に情報が伝達。

即座に、避難誘導が始まった。

混乱を避ける為、その名目は『電気系統の故障』とされていたが。

避難は恙無く進む。

全員の避難が終わり、佐天も胸を撫で下ろしていた。

「佐天さん！」

そんな時だ。緊迫した顔で上条が近づいてきたのは。

「あの娘！見なかったか！？」

上条の言葉に心拍数が上がる。

「一緒じゃなかったんですか！？」

つい、批難めいた言い方になってしまったが、それを気にする余裕は佐天にも無い。

上条がこう言うことはつまり。

「外に居ないんだ。もしかして、まだ中に……………」

最後まで聞かず佐天は駆け出す。

背後で、上条に詰め寄る美琴の声が聞こえたが、それを気にする余裕も無い。

『どこ!?!どこ!?!?』

店内を駆け、その娘の姿を探す。

普段は気にならない、マネキンやオブジェが、障害物の様で、今は酷く邪魔だった。

初春が風紀委員から連絡を受けて数分。

もう時間が無い!!

走って走って走って…………

店舗の中央付近で、初春の姿を見つけ…………

そこに駆け寄る、少女の姿を見たとき、思わず膝から崩れ落ちそうだった。

少女から渡される人形を投げ捨てる初春。

「逃げてください！あれが爆弾です！！」

瞬間。佐天の世界から色が抜け落ちた。

全てがスローに動くモノクロの世界を佐天は駆ける。

大気が粘液の様に身体にまとわりつき、一步一步の歩みが酷く重く負担が大きい。

だが、それを無視して無理矢理かける。

視線の端には、少女を庇うように、覆いかぶさる初春と、遅れて来た、上条と美琴。

人形は形を歪に変え、更に収束していく。

『やらせない！私の友達は……………』

私を守るんだ！！！！』

佐天は限界を越える。

スローなその世界の中で、更に加速する。

爆弾まで後1歩！！

『新・虎・蹴り！！』

佐天の全力で蹴り出された爆弾は、窓を突き破り、周りに何も無い大気の中で、爆発した。

「……………いいぞお。段々使いこなせる様になってきた。後、数回こなせば……………」

セブンスミスト近くの路地裏。

そこを歩く眼鏡をかけた、細身な男の狂気は、最高潮に達していた。

武術家で無くても感じられる。

例えば近づきたくない。

そんな風に。

それは、つまり武術家相手には、自信の場所を教える事になる。

『トントン』

「え？ぶべら！！？」

肩を叩かれ振り向いた、男の顔面を拳が突き刺さった。

『ガシャン！ガラン！！ドサッ！』

吹っ飛ばされた際にぶつかった物が倒れ、激しい音をたてる。

「いったい……なにが？」

なにが起きたか解らず、立ち上がった男の先には、

「みくつくけくたく!!！」

夜叉がたっていた。

「ひい！一体なにを！なんで僕を!!！」

解る。男の生存本能が告げるのだ。

アレは見た目通りの、ただの少女じゃない。
逃げろと。

だが、それはもう遅い。

彼は、彼女を攻撃し、あろうことか、彼女の逆鱗に触れたのだ。

「あゝ………そういうのいいや。貴方をブツ飛ばして、寮とか調べれば、証拠とか出てくるでしょ？
それとも、そのバックの中に入ってる？」

「っ!!!!？」

事実、男のバックの中には大量のアルミで出来たスプーンが入っている。

この状況で改められれば、言い逃れはできない。

ざく！ざく！

「ひい!!！」

少女が一步一步、男へと近づく。

男は尻餅をついたまま、後ろへズリズリと下がるダケだ。

「もし……仮に証拠なんて無くても……私はアンタを許さない。
楽に死ねるとは思わない事ね……」

「くるなあ！くるなあ！！」

男は咄嗟にバックからスプーンを取り出し爆発させようとして……
…スプーンが消えた。

目の前に迫っていた少女が蹴り上げたのだと理解した瞬間。
その足が、脳天へと落ちてきた。

「ぐがあ！！何なんだよ！！！！何なんだよ！！！！お前は！！！！！！！！」

地面を這いずりまわり、無様な姿を晒しても男は諦めない。

こんなことで、諦めれる程、彼の執念は易く無かった。

「私？私は佐天涙子。あんたが狙った、風紀委員の友達よ」

淡々と語る佐天の言葉に、男の目が見開かれる。

「そうか。今度は、柵川の……『最強の無能力者（レベル0）』
か。」

いつもそうだ。何をやっても力でねじ伏せられる」

「ふざ………けるな！
ふざけるな！！！！」

佐天に顔面を蹴られ男は地を転がる。

立ち上がろうとする前に、襟首を捕まれ、持ち上げられた。

整った端整な、けれど怒り染まった顔がそこにあった。

「あんたに何があったのか知らない。

興味も無い。

けど………自分より力の無い者を利用したあんたが！
力を言い訳にするな！！！！」

「！！！！??」

浮かぶのは、『風紀委員』を狙うのに利用した少女の顔。
ああ………そうだ。僕は彼女を利用した地点で………

「歯あ！食い縛れえ！！」

言葉と同時に来る衝撃。

その瞬間彼の意識は闇に落ちた。

彼は間違っていた。

彼が風紀委員を狙ったのはただの八つ当たりだ。

復讐の善悪は別として、力を手に入れた彼が立ち向かうべきは、そ
いつらだろう。

けれど、彼は間違った上で決して犯してはならないルールを破った

のだ。

自分より力の無い者を利用する。

それは、彼を攻撃していた者達と、なんら変わらない行為なのだから。

「佐天さん!!!!」

連絡を受けた、初春が現場に駆けつけた時。

そこに居たのは、倒れ伏した犯人と、それを虚ろな目で見つめ続ける佐天の姿だった。

その姿に何を言うべきか初春は少し悩みやがて、決心して、口を開く。

「佐天さん! 大丈夫ですか!?!」

初春に身体を揺すられて正気に戻った佐天は、

「うん! 大丈夫! 大丈夫!! 私があんなのに負けるわけないでしょ!!」

それは傍目にも空元気と解るもので……
だから、初春は続ける。

「いえ! 犯人が! です!!」

「酷っ! 初春!?! ちょっとは私の心配もしようよ!!」

「えー……だって佐天さんが、負けるとこなんて想像出来ませんでしたし」

「ちよつとー!？」

路地の入り口から、その様子を覗いていた面々。

上条、美琴、そして、先程到着した白井は小さく笑みを浮かべていた。

「全く。あの娘達は。人がどれだけ心配したと思ってますの」

文句をいいながら、それでも白井の顔には安堵の笑み。

初春がセブンスミストに居ると聞いた時は本当に肝を冷したのだ。

「まあー。いいんじゃない？皆、無事だったんだし」

あの局面、自身が間に合わなかった事に悔いの残る美琴だが、それでも、全員無事。

その事に胸を撫で下ろしていた。

「だな。全員無事なら誰が助けたかなんて関係ねーよ」

実際、上条としては一番危険な所に、女の子の佐天を行かしてしまった事に悔いはある。

それでも……

もう一度、路地裏を覗き込む。

何時ものように満面の笑みを浮かべる少女。

彼女が笑ってるならそれでいい。

皆。皆、笑っていた。
だから。

「私、何も出来ませんでした」

初春の溢した小さな眩きを誰も気付け無かったのだ。

今日、佐天さんが少しだけ『強さ』の意味を知ったようです。

佐天さんと風邪

私の友達は本当に凄い人ばかりで……………

怪我だらけになりながら、それでも、私を逃がして、その上で、郵便局強盗を捕まえて見せた、強能力者の白井さん。

低能力者から不屈の意思と、決死の努力で皆が認める学園都市第3位までになった御坂さん。

そして……………

『こんな路地裏に無理矢理女の子連れ込んでるんだもん？
有罪確定でいいよね？』

初めて会ったあの日から、私が困ってたなら、必ず助けに来てくれる。

無能力者なのに、下手な強能力者より強くて。

イタズラ好きで、常識知らずで、困った所も沢山ある。

だけど、一番頼りになる佐天さん。

私は……………

何もできない私は、貴女達の側に居てもいいですか？

p i p i p i ……

『あれ？電話？』

朝。

登校時間も近づき、学校に行こうと玄関を開けようとしていた、初春はバックの中の携帯が鳴っている事に気付き、その足を止めた。取り出した携帯のディスプレイには、『佐天さん』の文字。

こんな時間に電話をかけてくる事に、小首を傾げながら、通話ボタンを押した。

「もしもし？佐天さん？」

さすがに時間が惜しい。

佐天と違って、人並みの速さでしか走れない初春は、登校時間前に走りたく無いのだ。

玄関を閉める作業と平行しながら応答する。

『ああ………ういはるう………』

「はい？どうしました？」

気のせいか、電話越しの佐天の声が間延びして聞こえる。

………が、気にせず会話を続ける。

『朝起きたらあー、身体が動かないんだけどおー、どうしたらいいかなー？』

「はい？」

何を言っているのだろうか？この人は。

朝から冗談に付き合ってる時間は無いのだけど。

「えっと……………佐天さん？」

『いや……………身体がうごかないの。ピクリとも。』

後、なんか二日酔いみたいに、気持ち悪くて、頭がボーとする』

「……………」

何故、中学生の佐天に二日酔いが解るのかは突っ込まない。

ただ、その症状は……………

「風邪じゃないですか？」

それも重度の。

『おお！これが風邪かあ！！私、初めてなったよ！！
これで、私もバカじゃないって証明され……………』

「バカじゃないんですか！佐天さん！！すぐ行きますから、寝てて下さい」

『ちょ！？初春酷っ！！』

p i

佐天の答えを待たず、初春は走り出す。

行き先は、学校では無く、佐天の寮。

本当に佐天は時々、常識知らずなのだ。

ちなみに、佐天の部屋に着いた初春は、佐天の体温を計って即座に、119番通報した事を追記しておく。

「いやあ……風邪ひいたの初めてで、救急車乗ったのも初めてで、入院するのも初めてだよ。

今日は初めて尽くしだね！

初春！お赤飯炊いて！！」

「もう！バカじゃないんですか！！」

「うう……初春。バカバカ言い過ぎだよ？

私、そんなにバカじゃないよ？」

病院について直ぐに処方された点滴のおかげか、今の佐天の顔色は随分とよくなっている。

だが、佐天の発言に初春の顔色が変わった。

「へえ……佐天さんはバカじゃないんですね？それじゃあ、昨日使った技の威力が納得いかないって、学園都市抜け出してまで海に行って、波に向かってボール蹴って、びしょ濡れになって帰ってきて、そのまま力尽きて、風邪ひいたのを『バカ』以外の言葉で教えて下さい」

初春は笑っていた。それはもう、男なら誰もが魅了されそうな笑顔

で。

だが佐天には解る。

ああ、これは死亡フラグだ。

ここで、回答を間違えると、確実に初春の雷が落ちる。

「うっかり？」

「バカじゃないんですか!!！」

「ごめんなさい」

回答を間違えたらしい。

でも、即座に謝った佐天が見たのは、困った様に笑う初春の顔だった。

「もう！バカな事言っていないで、早く上着を脱いじゃって下さい。お湯温くなっちゃいますよ？」

初春に促され、病院着の紐を解き、上着を脱ぐ。

「わぁ……………」

きめ細かい白い肌が露になり、初春は思わず感嘆の声をあげた。

無駄な肉の無い、鍛えあげられた背中だった。

「あの？初春？あんまり見られると恥ずかしいんですけど……………」

「あ！ごめんなさい！！」

温かい温もりが背中に当たり、優しく身体をふかれる。

「でも、本当に綺麗な背中ですね……
思わず見とれちゃいました！」

「うーん……『背中への傷は拳士の恥』って言ってね、背中に傷をつけられるのって、基本的に逃げてる時だから、武術家としては絶対に避けたい事なんだよ。」

『生涯1つの逃げ傷無し』が私の目標だからね！！」

『そう言った意味じゃ無かったんですけど……』

だが、あまりに佐天らしい勘違いに思わず笑ってしまう。

「はぁ……極楽♪極楽♪初春に面倒見て貰えるだったら、もうしばらく、風邪ひいててもいいかな？なんてね！」

「もう！バカな事言ってるで、もう終わりましたから上着来てください！」

風邪悪化しても知らないんですから！！」

「はーい……今日の初春先生は怖いなあ……」

「佐天さん！？」

「はいはい……」

「ハイは一回でいいです！」

「はい！」

そんなやり取りをしながら、上着に手をかけた時。

廊下に聞こえる、激しい足音。

そして……

『ボタン』

勢いよく開かれるドア。

「佐天さんが入院したって聞いたけど、大丈夫………夫………」

瞬間、世界の時間が止まった。

上着を着ようとしていた佐天と、それを手伝っていた初春。

そして、今、ドアを開いた上条。

全員が固まったまま数秒。

最初に復帰したのは上条。

「ごめんなさい！！」

凄まじい勢いでドアを閉め部屋から出る。

同時に、復帰する、佐天と初春。

佐天が真っ先にしたのは………
大きく息を吸い。

「きゃあああああ！！！」

叫ぶ事だった。

「申し訳ございませんでした！！！」

佐天が上着を着た後、再びやって来た、上条が真っ先にしたのは、
床に正座をし両手について頭を下げる………所謂、『土下座』だっ
た。

あまりに綺麗な土下座だったので、

『上条さん。土下座しなれてませんか？』

と思ったのは佐天の心に秘められる。

さて、そんな上条だが、2度目に入室して来た際には、既にボロボ
ロだった。

理由は、

「たく！あんたはホント！ロクな事しないんだから！！」

「まったくですわ！」

一緒に入室してきたのが、この2人と言う事で解って頂けると思う。

まあ…………上条も、わざわざ、美琴にボコられる為に一度外に出て
いった辺り、反省しているのだろう。（美琴の攻撃は院内では非常に危険な為）

「あ…………御坂さんに、白井さん。後、上条さんも。
もう、いいですよ。」

別にわざとって訳じゃ無いんですし」

佐天としても、不幸な事故である以上、これ以上、上条を咎めるの
は気が退ける。

と言うか、凄く恥ずかしいので、出来ることなら、可急的速やかに
忘れたいのだ。

「でも…………その……………」

チラッと上目遣いで佐天を見る。

負い目があるだけに、あまり早々に許されるのも、心苦しいのだろ
う。

「いいんです。ただ恥ずかしいのは本当なので、可能な限り速やかに
忘れてください！」

「わ……………解りました」

でも、流石に被害者の女性が、顔を赤く染めてこう言えば引き下がらざるえない。

まあ、約束の内容に関しては、上条君も男の子なので、守れるかどうか、怪しいものなのだけど。

「…………改めまして、今日は態々ありがとうございます」

佐天が見舞いの札に頭を下げると、白井、美琴の2人は小さく苦笑する。

「全く、初春から佐天さんが入院したって聞いた時は、昨日事件で怪我をしていたのかと思って焦りましたわ。

理由を聞いて呆れ返ってしまいましたけど」

「佐天さんらしいと言えば、佐天らしいけどね！」

「お姉様！笑い事では…………ぷぷ…………くくく……………」

「もう！存分に笑って下さい！！自分でも我ながら間抜けだと思っ
てますから！」

佐天の言葉を合図に、上条を除いた3人が一斉に笑い出す。

「なあ？何がそんなに可笑しいんだ？」

一人状況に置き去りに去れた上条が疑問を口にする。

そう。この中で、上条だけは、佐天の風邪をひいた理由を知らないのだ。

経緯としては、初春が佐天の入院の面倒を見るのを決めた際、風紀委員を休むことを白井に連絡。

その際に愚痴混じりに、白井にその内容を漏らしたのだ。

当然、その話は美琴に伝わる訳で……

初春↓白井↓美琴

の順で真実は伝わっているのだ。

だが、上条は違う。

あの日以来、上条と佐天は、

『死んでもスーパーの特売品を手に入れる戦線』（略称SSS）を結成しており、より広範囲の特売品を効率よく手に入れる同盟を組んでいたのである。

そして、今日は佐天の担当範囲のスーパーの特売日であり、それに行くことが出来ない事を気に病んだ佐天が、初春に伝言を頼んだのである。

当然、さして親しくも無い相手に初春が、詳しい話をする筈も無く。

上条には

『佐天さんは酷い風邪をひいて入院したので、スーパーの特売品を買いにはいきません』

と、ショッキングなのか、シュールなのか判断に悩む様な伝言だけが伝えられる結果になったのだ。

「え〜……………なに？あんだ。佐天さんが風邪ひいた理由知らないの？」

「ああ……………でも、いくらなんでも、人が入院までしてるのに、その理由を笑うなんて失礼じゃないか？」

まあ……………なんと言うか。

上条君は基本的にいい人なのだ。

理由を知った上でもフォロー出来るかは謎だが。

「そんな事……………貴方に言われるまでもありませんわ！！でも……………プフ！」

「おまえらなあ……………」

上条は頭の毛をボリボリと掻き、文句のひとつでも言おうとして

「ええと……………ですね」

の前に初春が切り出した。

「初春〜！言わなくていいよ〜！！」

流石に佐天も自分の恥が目前で抔げられのは嫌なのか何とか止めようとするのだが。

「ちょっとは、恥ずかしい目にあって、自分のバカさ加減を反省して下さい!!」

とりつく島も無い。

カクカクシカジカシカクイムーブ

「はぁ!?!海まで行ってびしょ濡れになって、そのまま寝てたぁ!!」

「あう……………」

上条の叫び佐天はガツクリと項垂れる。

「……………て、いくらなんでも無理があるだろう?学園都市から、海まで何キロあると思って……………」

『ああ!そう言えばこいつ』

『佐天さんの非常識ぶりを』

『まだ知らないんですのね』

そう。上条と佐天はあくまで、特売品をやり取りする仲であって、特別親しい訳では無い。

昨日の技も佐天の能力だと思ってしまえば、学園都市では不思議な事では無いのだ。

つまり、上条は未だに、佐天の異常さを知らないのだ。

「え? え?」

他の3人から向けられる生温かい視線に戸惑う上条。

「まさか……まぢ?」

小さく頷く佐天を見て、上条もホンの少しだけ、佐天の異常さを知るのがだった。

佐天さんと冥土返し

上条が、佐天的常識（＝非常識）に少し触れた頃、佐天の病室のドアがノックされた。

「あ！はーい！どうぞー！！」

佐天の返事から、ゆっくり2つ数える程の時間を空けて、病室のドアが開いた。

入って来たのは、白衣を纏った白髪……少し本数が寂しい気がしないではないが。の老人である。

『キュピーン！！』

美琴の目が一瞬、光った事からも解る通り、その顔がカエルに似ている事も追記しておく。

「容態はどうかね？」

彼は佐天が救急車で運ばれた際、その処置を担当した医師である。

いくら騒がしい面々でも、時と場合ぐらいは、弁えてる。

静まり返った、部屋の中で、医師という存在にあまり縁の無かった佐天は若干緊張しながら、返事を返す。

「おかで！…………お陰様で大分良くなりました。

明日には退院できそうなくらいです!!」

「佐天さんはまたそんな……」

「いくら何でも無茶だろ？」

「と言うか、それを判断するのは、佐天さんじゃ無くて先生です」

佐天の返事に、半ば呆れ気味に、突っ込みを入れる面々。

美琴のセリフが無いのは、あるモノを見るのに夢中だからだ。
敢えて何かは言わないが……

「まあ、確かに判断するのは私なんだがね？
結論から言えば、明日には退院できるんだね」

『『『できるんかい!!!!』』』

「本当ですか!!」

佐天の返事と、他の3名の心の突っ込みは、ほぼ同時。
美琴のセリフが無いのは（以下略）

驚くべきは、佐天の回復力である。
朝の地点では身体も動かせなかったのに、この状態である。

「本当は、今の地点で退院しても問題無いくらいなんだね。大事をとってと、言うところだね」「本当ですか！じゃあ！」

「佐天さん!!」

『今すぐ退院』と続けようとした所で、初春に遮られる。視線をそっと、そちらに向ければ、そこには……鬼がいた。

それも、赤だとか青だとか、そんなチャチなモノでは無く……

そう。例えば、佐天は、今の初春を相手にするくらいなら、12回殺さないと死なない狂戦士を相手にする方を選ぶだろう。それも、なんの躊躇も無く。あっさりと。

何を言いたいかと言えば、初春がそれくらい怖かったんです。佐天さんのには。

「今日1日、病院でゆっくり療養させて頂きます」

だから、佐天はそう続ける。

勿論、最初は真反対の事を言おうとしていたのだが。チラリと覗き見た先で初春が、大きく頷くのを見て、ようやく、ホッと胸を撫で降ろすのだった。

「そうして貰えると助かるんだね。もつとも、今すぐ君が退院すると言っても、医者立場としては、許可出来ないんだがね？」

のうのうと続けるカエル顔の医者には、

『なら先に言ってよ!』

と内心毒づく佐天だが、

「そりゃ、いくら何でもそうだな」

と納得する、上条を見て、そういうモノのだと理解する。

佐天だって少しは、自分が『普通』と違う事を知っているのだ。
まあ、本当に少しだけなのだが。

「それに、君には少し聞きたい事があってね？」

カエル顔の医者が仕切り直したのが解った。

その表情から真面目な話。

今までも、真面目な話だったのだが、わざわざ仕切り直したのだ。

むしろ、ここからが本題と言う事なのだろう。

「その……それは、佐天さんの身体に、異変があったとか、そう言う事ですか？」

青ざめた表情で黒子が問う。

確かに、医者がわざわざ改まって、言う話だ。

そういう話だと言うのが一番自然である。

「ふむ……………」

小さく頷き、僅かに考える素振りをするカエル顔の医者、その場にいる全員が固唾を飲んで見守る。

「異常と言えば異常と言えるね？」

ようやく切り出された言葉に、全員の顔が強張る。

初春など今にも、卒倒しそうなくらい真っ青だ。

「どうということ？」

何時の間にか突入していた、シリアスタイルにキッチリ対応していた美琴が問う。

その美琴の表情にも厳しいものがあつた。

……………が対した、カエル顔の医者顔は柔らかいモノだった。

「誤解を招く言い方をしてしまったね？」

異常があると言っても、命に別状があるとか、手術の必要があるとか言う話では無いんだね？

安心してほしい」

途端に全員から力が抜けた。

初春はその場に座り込み、美琴と黒子は顔を合わせて微笑み合い、上条は

「なんだよ……………」

と小さく呟き、大きく息を吐いた。

当事者でありながら、一番冷静に聞いていた、佐天も自分が何時の間にか、手に汗を握っていた事に今更になって気付き苦笑を浮かべたのだった。

「そうだね…………彼女本人には、問題無いが、日本の…………いや、世界の医師にとっては大問題と言うのが正しいんだね」

「どういう事だ？」

カエル顔の医者を持って回った言い方が理解出来なかった上条がポカンと呟き、美琴が答えた。

「多分、世界中の医者が驚く様な事が、佐天さんの身体にあったって事じゃない？」

「そうだね。それが、一番正解に近いだろう」

美琴の言葉に頷いた、カエル顔の医者はカルテに目を落とす。

「詳しい数字を言っても、理解出来ないだろうからね？
解りやすく言うのだね？」

例えば、彼女の筋肉は、その細身でありながら、常人の数倍の筋肉を持っている。

それらが、見事に密集しているんだ。

しかも、その全てが、持続力に富んだ筋肉と、瞬発力に富んだ筋肉を絶妙に混ぜ合わせた物だ」

そこまで言って一度、全員の顔を見渡し、

「それだけでも驚きなのに、あくまで、それは一例に過ぎず、骨格、血液、どれをとっても、驚愕の一言だったよ……………つまり……………」

佐天を指差し、悪戯ぽく笑った。

「彼女は現代医学にとって悪夢の塊って事なんだね」

カエル顔の医者長の長い説明が終わった時、全員が驚……………

「ええ!!」

「なんだそんな事でしたの」

「なんか今更そんな事言われてもね……………」

「正直、そうでしょうね。と言う感じしか」

訂正。驚いているのは上条だけだった。

ちなみに、当の佐天はキョトンとしている。

上条としては驚いているのが、自分だけなのが更に驚きだ。

「いや！驚かねーのかよ！！」

そう言われも、他の面々には微妙だ。

上条と違って、初春を筆頭に、白井、美琴もそれなりに、佐天と深い付き合いをしてきたのである。

はっきり言って、この3人は、佐天がアンドロイドだとしても、はたまた、宇宙人、未来人、超能力者……は、美琴か。

とにかく、そういった存在だとしても、全く驚かない。むしろ、納得する。

3人にとって、佐天涙子とはそういう存在で、何よりも。

「じゃあ聞くけどさ？」

切り返したのは美琴。

「なんだよ？」

「あんた、佐天さんがそういう凄い存在だったとして、何か変わるの？」

「……………え？」

上条には解らない。

美琴が何が言いたいのかを。

美琴も、上条が解っていない事が解った。

だから、続ける。とびきりの笑顔で。

「私は……私達は変わらない。

佐天さんが何者で、どんな凄い人でも、佐天さんは、私の友達。
それで充分!」

「!?!?」

雷に撃たれた気がした。

美琴の攻撃を常に無効化し続けて来た上条だったが、今の口撃は直撃だったようだ。

「そっか……そうだな」

そう呟いてパイプ椅子に腰を降ろした

そう。佐天がどれだけ凄かったとしても何も変わらない。

きつと、上条と佐天は、数日後には何時ものように、笑顔で戦利品
(特売品)を交換し合う。

だったらそれでいいでわないか。

「ふむ。君はいい友達を持ったようだね?」

「………みたいです」

呟く様に告げた言葉に、毛布で赤くなった顔を隠しながら答えた。

「先に言っておくとだね？」

私は、彼女のデータを発表する気は無いんだね？」

「よろしいんですの？」

佐天のデータの価値。

正確に解る訳では無いが、先程の話からするに、かなりのものだろう。

少なくとも、発表すれば、彼の医師としてのステータスにプラスになる事は間違い無い。

「私は医者だよ。患者を守り、治すのが仕事だ。

見世物を作るのは他の誰かがやればいい」

成る程。彼は、医師でも学者でも無く、1人の医者である事を選んだ者らしい。

「けれど、医者として気になる事はあるんだね？」

一体どういう鍛え方をすれば、そんな、身体を創れるんだね？」

そう言われてみても、佐天には解らない。

「特に変わった事はしてないと思うんですけど………」

「してるわね」

「してますわ」

「してるだろ？」

「と言うか何で入院してるのか、もう忘れちゃったんですか？」

「皆！酷い！！って上条さんまで！！！」

即答だった。

正確には、上記3人は、佐天が、『変わった事は』を言った時には、被せるように発言している。

が、皆が勘違いしている事を述べておこう。

確かに佐天は、常識的には、かなり変わった訓練をしている。

だが、その訓練をするためには、『出来る』土台が必要なのだ。

そう。つまり、佐天の土台を作った者は存在する。

「あ！そうだ！！！武術を始めた時、一番最初に肉体改造ってのをやったから、そのせいかも知れませんか」

散々、考えて考えて、辿り着いたのは、佐天の始まりの場所。

「どんな肉体改造をしたら、そうなりますの？」

呆れ顔で白井が突っ込む。

「かなり、エグかったとだけ。詳しく話した方がいいですか？」

対して佐天はひきつった笑顔で答えた。

「遠慮しておきますわ」

佐天をもってして『エグい』と言わせてみせる内容に興味が無いではないが、絶対に聞いてはいけない気がした。

「うん。興味深いね。それは誰が？」

が、医者 of 彼は別のようだ。

佐天の話を促す。

「えーと……誰がって特定するのは、難しいんですけど。

私の父も武術家で、その影響で私も武術を始めたいと思ったんですが、その、私の父。基礎とか教えるのが下手な人で。

それで『梁山泊』って所に弟子に出されたんです」

「なるほど。彼らか……」

その名が出た瞬間、カエル顔の医者は納得した様に頷いた。

「1つ聞いていいかね？」

「はい？」

「岬越寺君は元気かい？」

「はい！と言うかどうかやったら、あの人達が弱るのか知りたいくらいです！」

「……っってお知り合いなんですか？」

「そうだね。君たち風に言うなら強敵ともと言うやつだね。
そうか。彼は元気か！
僕も負けていけないんだね！」

「なんだったんだ？」

「さあ？」

急にテンションを上げて出ていってしまった彼を、部屋に残された面々は、呆然と見送った。

今日、佐天さんが学園都市で、『知り合い』の知り合いに会ったようです。

初春さんと幻想御手

『ギイイイ…………ガチャン』

「はぁ……………」

騒がしい病室…………病室のあり方としては、間違ってる気もするが、
を後にし、初春が部屋に戻ってきたのは、完全下校時間を既に過ぎ、
辺りが真っ暗になってからだった。

皆が帰ってから、佐天が病院を脱け出して、トレーニングに行ったりしないよう、念入りにいい含めておいたのである。

帰り際、2人きりの病室で佐天が言った言葉が甦る。

「ありがとうね。初春。初春が居てくれて助かったよ!」

違う。

違う!!

「助けられたのは、私の方なんです。佐天さん……………」

あの時、佐天が、もし他の人に助けを求めていたなら。

例えば、美琴に。

白井に。
今日会った、上条に。

きつと。

誰に助けを求めているも、誰もが佐天のもとに向かっていた。

そして、自分と同じ事をしていたに違いないのだ。

そう考えて背筋が寒くなる。

その時、自分は、自分の事を、彼女の友人であると思っただろうか？

PCを立ち上げ先日資料を、改めて読み直す。

特に犯人逮捕に至る過程を。

虚空爆破事件は無差別爆破を装った、風紀委員を狙った物であった。

逮捕当日、狙われた風紀委員は初春飾理。

洋服販売店『セブンスミスト』内部にて虚空爆破攻撃を受けるも、事前に察知していた事もあり、避難誘導は完了済み。

また、爆破時、付近にいた風紀委員も、迅速な判断で爆弾を処理。

後に、一般生徒数名の協力を得て犯人を発見。無力化し逮捕。

爆破の規模こそ大きいものの、被害は、セブンスミストを含めた周辺店舗の窓ガラス数枚と、虚空爆破事件において小規模ですんでいる。

以上が、報告上の虚空爆破事件の真相になっている。

爆弾を処理したのが、初春になっており、犯人を見つけ無力化したことも、あくまで、『一般生徒』が『協力』した事になっている。

これは、『銀行強盗』の時の、アンチスキルと風紀委員の事情聴取に辟易した佐天が、

「お願いだから早く済むようにして」

と、言い出したからであり、さすがに無力化したこと事態は誤魔化せないものの、すぐ側に超能力（美琴）が、隠れていたことにしてお茶を濁した為である。

ただ、結果として、虚空爆破事件の解決は初春の活躍が、大きいと言う事になってしまった。

その事がまた、初春を傷つけるのである。

「そんな訳ないじゃないですか」

実際あの日、私がやったことと言えば、爆弾魔を態々人の多い所へ誘き寄せ、

白井さんの忠告も聞こうとせず、他の風紀委員か、お店に任せれば良かった避難誘導にしゃしゃりでて、挙げ句、犯人の罠にあっさり嵌まって、あの娘と佐天さん達を危険にさらした。

「そんな私が解決の立役者だなんて、お笑い草ですよね」

もし、この話を白井か、固法にしたのなら、怒りながら

「違う！」

と否定してくれただろう。

初春のした避難誘導は的確であり、他の者が行っていた場合、間に合ったかどうか解らない。

増して、犯人が風紀委員を狙っていると言う情報は、その本当に直前に判明したものであり、知らなかった初春に否はないのだ。

だが、そんな事に初春は気づかない。気づけない。

本当に怖かったのだ。

あの時。

自分のせいで、腕の中にあった小さな命を奪ってしまうところだった。

なんの躊躇も無く、爆弾に向かっていった親友を殺してしまうところだった。

無力でバカな自分のせいで。

「バカじゃないんですか？……私の事ですネ」

小さく呟いて自嘲した。

ふと……

資料の一部が目に入る。

介旅 初矢 能力名『量子変速』 レベル2

「…………あれ？」

レベル2？

初春の目前で起きた爆発。

あれは、そんなレベルでは無かった。

爆発まで時間がかかる事。

使用者本人も、巻き込まれてしまう為、直接戦闘には向かないが、あれだけの威力があれば、どう考えてもレベル4はある。

改めて、『虚空爆破事件』の資料を読み直す。

今度は最初からキツチリと。

「短期間で飛躍的に能力が上がってる？」

最初の悪戯程度だと思われた事件から、最後のセブンスミストに到るまで。

その威力は、徐々に増していた。

追いかけていた当時は、犯人がエスカレートしていると思っていたのだが……

最初の悪戯程度にしか見えない爆破なら……確かにレベル2だろう。

犯人はエスカレートしていった。間違いではない。

けれど、最初の段階ではそもそも、風紀委員を狙うだけの能力が無く。

この事件の最中に、強くなっていたのでは無いか？

考えてみれば、ここ最近、事件と犯人の能力レベルが一致しない事件が多発している。

だが、定期的に更新されるバンクのデータが間違っていた………と言うのは考えて難い。

犯人達のレベルが飛躍的に上がった。

そう考える方がしっくりくるのだ。

「…………でも、どうやって？」

能力開発はカリキュラムによって計画的に行われる。

幾つか、特定の生徒や、希望者を対象に組まれる、集中開発もあるが、それにしただって、そこまでの効果は期待出来ない。せいぜい、やらないよりはいい程度の物で…………

結局の所、能力開発は長い時間をかけて、育てるしか無いのである。

レベルアップ……
「幻想御手」

思い出したのは、聞いた当初、下らないと掃き捨てた噂話。

短期間でレベルが上がる魔法のアイテムがあると言うもの。

低レベル能力者の願望が産んだ、幻のアイテムだと思っていたが……

『この手の噂は、実際に起きた事をモデルにしてる事がありますの』

その事例を初春は既に知っている。

なら、幻想御手も無いとは言い切れないのでは無いのだろうか？

初春は自分でも気づかないうちに、幻想御手を強烈に追い求めている。

幾つか不幸な事がある。

もし、幻想御手に気付き、探したのが、白井や佐天だったのなら、ネット上に巧妙に隠されたそれを見つける事は出来なかっただろう。

美琴であったなら、見つけた瞬間に、白井に連絡、ともに調査していただろう。

そして……それは、初春でも、それは変わらない。
見つけた瞬間に報告。

調査に乗り出しただろう。

普段であれば。

「幻想御手………本当にあった………」

ネット上に隠された、それを初春はあっさりと探し当てた。

元より、偶然が味方すれば素人でも辿り着ける程の、隠蔽など、本
気を出した初春には大した意味を持たない。

彼女は、その能力を買われ、風紀委員になったのだから。

けれど、今の彼女は普通では無い。

自身の能力と存在を否定され、傷つき、何よりも『力』を、求める。

「これが、あれば私も………」

佐天さんと！皆と！！肩を並べて歩いて行ける！！」

この日………事件は加速する。

佐天さんと初春さん？

夢

夢を見ている

数ヶ月前の……………

学園都市に来たときの夢だ。

「ん……………やっとなつた！！

ここが学園都市かぁ！！」

バスから降り立ち、大きく伸びをする少女。

ここに向かう為に、現在の家を出てから既に1週間がたった。

「いや……………思いの外、スムーズに着いたのは行幸だったね」

大きな砂嵐もなく、戦闘にも巻き込まれず。

最悪、間に合いそうに無ければ、『テッサ』に泣きついて、ヘリを手配して貰おうと思ってただけに、幸いである。

「さてと！まずは……………服を買いに行くか！！」

向こうの民族衣装は、こちらでは目立つらしい。

先程から道行く人達の視線が痛いのだ。

勿論、日本の常識は知っているのだが、永いこと離れていた為、随分と薄れてしまっていたらしい。

「日本の物価は高すぎると思うんだよね……」

探し回った、洋服店で一番安かったと言う理由で購入した、服に早速着替えた（無地のロングTシャツにジーパン＋スニーカー）佐天が呟く。

これだけの買い物で、既に、佐天の財布は既に随分と軽くなっていた。

「まあ、住むとこと、学費が無料なんだから、文句言っちゃダメなんだろうけど……」

それでも、佐天の感覚的には、無茶苦茶に高かった、洋服に納得いかないのである。

お店の為にあんな大きな建物を作るお金があるなら、その分、服を安くして欲しいと言うのが本音だ。

愚痴ってても、しょうがない。

薄暗くなってきた風景に寮への地図に目を落とし、歩き出す。

と…………

「……………のは！アンタだー！！！」

聞こえてきた声。

見上げるとその先には…………

『電撃！？』

その攻撃を受けたのだろう。数名の男達が次々と倒れる。

『ブランカさんのとも、フェイトちゃんのとも違う感じ……………』

なる程。あれが能力か。

「うん！この街での生活も楽しくなりそうだ！！」

実に楽しそうに頷き、軽やかな足取りで、寮を目指すのだった。

「迷った……………」

30分後。佐天は途方にくれていた。

おかしい。確かに地図の通りに歩いていた筈なのに。

こんな事では、某黒豚さんや、某有名歌手さんを笑えない。

道を聞こうにも、周辺に人影なんて居やしない。

『絶望した！自分の方向感覚の無さに絶望した！！』

しかし、神は佐天を見捨てない。

ふと、気配を感じて振り替えれば、路地裏へと入っていく人の気配。

『良かった！今の人に道を聞こう』

微かな希望を見つけ佐天は路地へと足を進めるのだった。

「おいおい……女捕まえたって言うから来てみりゃ……まだガキじゃねーかよ……」

路地の先、廃ビルの中には、4名の男達の姿があった。

今、やって来た男で5人目だ。

その中に、ロープで拘束され、猿轡を噛まされた少女の姿。

初春飾理がいた。

「まあ！そう言うなって！見てみろよ！！これ！！」

男が初春のバックから取り出したのは、先日、配布されたばかりの、風紀委員の腕章。

「なんだあ！？この女風紀委員か！！」

「そう言う事。奴らにゃ、散々、煮え湯を吞まされてるんだ。たまにゃ、俺らが楽しませて貰っても良いと思わねーか？」

「なる程な。なら俺も参加しねー訳にはいかねーな！

こんな小便くせえガキは、本来、趣味じゃねーんだが……
風紀委員を汚せるとあっちゃ、それだけで、ギンギンに勃ちまう
ぜ!！」

「むゝ!! んゝ……!!!?」

男達が、下品びた笑みを浮かべて、初春に迫る。

拘束された初春に出来る事は、僅かに身を振る事だけ。

『怖い! 怖い!! 助けて! 誰か!!!』

郵便局の時の犯人も怖かった。

けれど、あのときの犯人の悪意は、周囲に撒き散らされていただけ。
その後は、白井が一手に引き受けていた。

だが、今は違う。

今、男達の悪意は全て、初春に向けられているのだから。

そして、初春とて無知ではない。

今、自分が何をされようとしているのか理解でき……その嫌悪感
が恐怖を増大させていた。

1人の男の手が、初春に伸び……

その手が、まだ慎ましい脹らみに触れようとして……

「るいこう!!?」

奇妙な叫び声と共に、吹き飛んでいった。

そして…………

「やれやれ。何時かの名探偵のお孫さんには、お祓い行った方がいいって、言っちゃったけど。」

私の厄介事巻き込まれ率も結構なものよねえ……………」

そんな言葉と共に、初春の隣には少女の姿。

まるで、女神みたいだったとは、後の初春の言である。

「とりあえずさあ…………こんな路地裏に、女の子を無理矢理連れ込んでるだから、有罪でいいよね？」

そんな風に話ながら初春に近づくと

『ブチブチ!!』

と言う音と共に、初春の拘束と、猿轡が解かれた。

「あれ？それとも、そーゆープレイ？」

だとしたら、申し訳無いと思わないでも無いけど……………」

「違います!!」

少女のあんまりな発言に、拘束を解かれた初春は思わず突っ込んでしまう。

少女は安心したように笑い

「ああ！良かった!! 日本は性の低年齢化が進んでるって聞いてた

から。

プレイだったら、気まずい事この上無かったよ!!」

更にとんでも発言を繰り返すのだった。

「よう……嬢ちゃん。随分と派手な乱入だが、嬢ちゃんも仲間に入れて欲しかったのか？」

初春と佐天の漫才を呆氣にとられて、見ていた男達だったが、ようやく我に返った男が、口を挟む。

対して佐天は見下した態度で返す。

「まさか。私の『はじめて』は、素敵な旦那様と結婚式の夜について決めてるの。」

あんた達みたい男にくれてやる程、安くはないわ」

「そりゃ残念だ!けどな、嬢ちゃん!!最初^{はな}から嬢ちゃんに選択肢なんて無いんだよ!!!」

『ぼちん!!』

男の合図と共に、男達が佐天達を取り囲む様に動く。

それを見た佐天は、少女を背に庇い一歩前に出た。

端から見たならば、小鹿を取り囲む、野獣の群れと言った所か。だが、男達は知らない。

小鹿のつもりで取り囲んだ相手が、とんでもない魔獣であることを。

「かれ！」

佐天と話していた男……

恐らくはリーダー格なのだろう。の声に、男達が一斉に動く。

同時に、佐天の姿が初春の前から陽炎の様に消えた。

「気品、鍛練、連携、戦術……何もかも足りてないですけど、何よりも速さが足りない……ってとこだね!!」

次の瞬間には、また同じ位置に立って笑っている佐天と、倒れ伏している男達。

全員がピクリとも動かない所から、恐らく気を失っているのだろう。

「てめえ……何者だ？」

唯一残された、リーダー格の男が忌々しげに佐天を睨み付ける。

「ん？……通りすがりの迷子の武術家？」

「ざけんなあ!!」

同時に撃ち出される、バレーボール大の炎の玉。

『発火能力者!!?』

「危ない!!」

思いと叫びは同時。

次の瞬間、初春の目の前には……………

目を見開く男と、笑顔のまま、炎の玉を片手で防ぐ少女がいた。

「悪くない攻撃だけど、威力も足りないし、目立ち過ぎる上に直線的すぎるかな？」

取り敢えず……………」

「ひ……………ひい!？」

恐怖に顔をひきつらせ、外へと駆け出す男。
だが……………」

「檻の中で、少し頭冷やそうか？」

いつの間にか、回り込んだ少女に行く手を妨げる。

懷に隠し持ったナイフで斬りかかり……………」

「があ!!?」

顎に鋭い衝撃を感じ崩れ落ちた。

失われていく意識の中で、彼が目にしたのは、片足を振り上げた少女の姿だった。

『やれやれ……………』

倒れ動かなくなった相手を確認して、溜め息混じりに残心を解く。

どこに行ってもトラブルに巻き込まれるのは、父親のせいだけでは無いらしい。

案外、佐天家にかけられた呪いなのだろうか？

そんな、実に『ありそう』で怖い予想を首を振って否定し、捕らえられていた少女を見る。

少女は呆気にとられた表情でこちらを見ていた。

「大丈夫？ ええ……と………」

名前を聞いて無かった事を失念し、淀んでいると我に帰った少女が答える。

「あ……はい！ わたし、飾利です。初春飾利！！」

男達が撃退された事で、安心したのだろう。

元気な声だった。

「そう………初春さん？ 警察………ここだと、アンチスキルだっけ？
への連絡って頼める？」

私、ここに来たばかりでそう言うの疎いんだよね」

「はい！ 任せて下さい！！」

バックから携帯を取りだし連絡をし始める、初春を横目に、佐天は気絶している男達に手をかける。

「アンチスキルへの通報終わりました！……って何をされてるんですか？」

「ん？起きて抵抗とか、逃亡されても面倒だからさ……拘束しとこうと思って。出来た！！」

初春の視線の先。そこには輪になるように並べられた男達の姿があった。

初春には解らないが、器用に、互いが互いの間接を極める様に本人達では、絶対に外せない様に作られている。

「さてと……じゃあ、アンチスキルが来る前に私は行くわ！」

「え！？」

父親の影響か佐天は警察とか、そう言った組織が苦手なのだ。

駆け出そうとした所で……

「あの……！！」

呼び止められた。

「お名前は！？」

傍から見たなら時代劇の様なシーン。

なら、そのように振る舞うべきだろう。

「名乗るほどの者ではござらん……って言うのが、日本的には格好いいんだよね？」

「え？」

思ったより恥ずかしかった。
オマケに思いっきり外した様である。

居たたまれなくなった佐天が逃げるように駆け出し、現場には混乱した初春が残されるのだった。

数分後。

「ごめん。ここってどう行ったらいい？」

地図を出す佐天と、漫画の様な汗をかく初春が居たりする。

佐天さんが少し前の夢を見てる様です。

佐天さんと白井さん

朝。

窓から差し込む陽光に瞼を刺激され、佐天はパチリと目を開いた。

「夢？」

ボンヤリと思い出すのは、初めて、この街に来て初春と出会った頃の出来事。

「なんで、あの日の夢なんか……………」

夢は未来を予知するもの。

「まさかね……………予知能力者や『魔法使い』じゃあるまいし」

そうやって、夢の内容を切り捨てる。

「さて！軽く身体を解すか！！」

そういつて、初春に持ってきて貰った着替えの中から、ジャージを取り出す。

初春に禁止されたのは、夜に病院を抜け出しての、トレーニング。

朝に病院内でする分には問題無い。

筈だ。多分。きっと。おそらく。

内心

『バレたら怒られるんだろうなあ』

と、冷や汗をかきながら、

『いやいや、約束は破ってないよ？朝の事を言っていない初春が悪いんだよ？』

と、自分の正当性を自己弁護。納得させて、病院の中庭に立つ。

何よりも、昨日の午前中はともかく、午後から身体が回復してから、寝ている事を強要されたのだ。

少しでも身体を動かしたくてしょうが無かった。

「よつと………」

まずは、軽いストレッチから。

昨日1日、動かさなかった事で固くなってしまった身体をゆっくりと解していく。

『中庭を走り廻る訳にもいかないし、型と軽い筋トレかなあ？』

そんなメニューを考えながら。

たっぷり、2時間かけて朝のトレーニングを終え病室に戻ると、朝

食が運ばれて来た。

……と同時にジト目の白井もやって来た。

「どこに行っていましたの？」

ひくーい声で問われる。

佐天は……

「おはようございます！白井さん！！今日もいい天気ですねえ！！」

全力で逃げる事を選択した。

「どこにいましたの？」

だが周り込まれた。

やむおえず、誤魔化す事にする

「えーと……お手洗いに？」

「私、1時間程前から来てましたのですけど……そんなに長い間？」

「お腹の調子が悪くて……」

白井のジト目を直視出来ず、視線を泳がしながらの回答だった。
白井は1度大きく溜め息をつき、

「私、佐天さんがいらっしやらなかったなので、談話室の方で時間を潰していたんですけど………」

「へえ？どうでした？」

誤魔化せた？ホッと佐天は胸を撫で卸し、

「ええ。良いところでしたわ。知ってました？中庭全体が、良く見渡せるのでしてよ？」

止めを刺された。

「あ………う………」

「安心なさいな。私としては、文句を言う気はございませんの。むしろ、良くなっている事を確認出来て、安心しましたわ」

白井が買ってきていた、紅茶に口をつけながら告げる。

「ありがとうございます」

そんな友人に嘘をついてしまった事に、罪悪感を感じながら、佐天は頭を下げるのだった。

「ただ………初春には、事細かに報告させて頂きますが」

「ごめんなさい！本当に勘弁してください！！」

最後にやって来た、白井の攻撃に、佐天はベットの所で土下座する事になるのだった。

「まったく。そんなに、初春に心配かけたく無いのでしたら、大人しくしていらっしゃればいいのに……………」

「いや…………それは、武術家の性と言いますか、習性と言いますか」
何とか、白井の口を封じる事に成功し（クレープ2回で手をうった）
当の白井に呆れられる。

まあ、佐天としては、心配させたくないのが半分。
本当に怖いのが半分なのだが。
世の中には、いくら強くなっても勝てない相手って言うのが存在するのだ。

「それで、白井さんはどうしてこちらに？」

話を反らす為に水を向ける。

自分に会いに…………ではあるまい。
だとすれば、あまりに早すぎるし、初春や美琴がいつしよじゃ無いのが気にかかる。

「……………」

白井は少し考え、小さく頷いた。

「貴女になら話してもいいでしょう。
確認したい事もありますし……………」

「はい？」

何から話したのか？

白井は頭の中で整理してから切り出した。

「昨夜、『介旅 初矢』が取り調べの最中に倒れ、意識不明になっていますの」

「介旅……ああ！虚空爆破事件の！！」

「私がここにいるのは、その確認に来たからですの。」

佐天さんに会いに来たのはそのついで………と言っては失礼ですね」

自分の失言に顔をしかめる白井を佐天は笑って許す。

「いいですよ。ついででも、来てくれたんですし！

それで、私に聞きたい事って？」

佐天の質問。それに、白井は再度時間をとる。

それは、そんなことを一々確認するのが馬鹿らしいと感じるからだ。証拠は揃っているし、何より、意識があつた地点の介旅が自身で認めている。

だが………それでも、腑に落ちないのだ。

「佐天さん。虚空爆破事件の犯人………介旅 初矢で間違いありませんの？」

「？」

佐天は意外過ぎる質問に意味が掴めない。

「可笑しな事を聞いているのは解っていますの。」

けれど、介旅初矢のレベルは書庫のデータで2となっていますの」

「2!?!? そんな!?!? あの爆発はどう見ても!?!」

「4相当はありましたわね。だからこそ、確認ですわ。」

証拠、証言。どちらも、揃っていますから、まず、間違い無く介旅初矢が犯人。

けれど能力レベルが合わない。

だから、貴女に確認したいのです。

佐天さん。貴女はどうやって、介旅初矢を犯人と断定しましたの?」

白井の言葉に今度は佐天が考える。

が、素直に答えるしかない。

「正直あまり参考になるとは思えませんよ?」

「構いませんわ。元々、私が納得出来る理由が欲しいだけですから」

白井の言葉に頷く。つまり有っても無くてもいい、あれば判断の材料にするくらいのものだと考えたからだ。

「殺気……あの場合は、狂気って言った方がいいかな？
で、断定しました」

「は？」

呆気にとられる白井を佐天は『だから言ったのに』と言う目で見ていた。

「いえ。すいません。あまりに予想外の答えでしたから……」

「いえ。いいんです。言い方を変えましょう。」

人には気……って、長くなっちゃうな。

そうですね。解りやすく言うと、武術をやってる人間は、敵意とか殺意と言う感情に敏感なんです。

そういう能力だと思ってください。

科学的な説明はできませんけど」

それは、証明は不可能と言うこと。

だが、白井は頷き。

「それで、佐天さん。犯人は介旅初矢で間違い……」

「ありません」

その言葉で納得したようだ。

そう。元より、介旅初矢が犯人なのは、確定していたこと。

ただ、白井の中でそれでは納得いかない事があっただけ。

だが、彼女がそういうなら、おそらくそうなのだろう。

不可解で、常識はずれな所も多い娘だが、それでも信用できる位には、白井は友情を感じているのだ。

「…………となると、書庫のデータ間違いか、介旅初矢が、この短期間でレベルが上がったか……………」

が、普通に考えれば両方無い。

結局、ここで行き詰まるのだ。

「レベルアップ幻想御手……………」

「え？」

その言葉に視線を上げれば、佐天は何やら難しい顔で考えこんでいる。

やがて…………

「白井さん。非常識な話なんですけど聞いて貰っていいですか？」

その言葉に、白井は肩を竦め鼻で笑った。

「何を今更。存在事態が非常識な人が……………」

「酷っ!!?…」

「ですが、正直今は少しでも情報が欲しいですわ。」

眉唾ものでも構いません。

何か心辺りが辺りがあるなら話して貰いたいんですの」

そこは風紀委員。

真剣な表情だった。

「正直、かなり怪しい話なんですけど。

前にクラスの娘達が話してたんです。

幻想御手って……都市伝説になるのかな？

色々な説があるんですけど、共通してるのは、

『ネットのどこかで手に入って』

『使えば、能力のレベルが上がる』

って事です。

私もただの噂だと思ってたんで詳しくは知らないんですけど……」

今度は白井が難しい顔をする番だ。

考えてみれば、書庫のデータと実際の事件で差があるのは、今回が始めてではない。

介旅初矢が顕著だった為に目立った格好になった訳だが……ここ最近、そういう例が多かった筈だ。

そして、この噂話。

もしかすると、もしかするかも知れない。

「解りましたわ。案外、いい線をついてるかも知れません。

詳しく調べてみますわ」

結局、白井には退院の準備まで手伝って貰った。

帰り際、来ていた研究者に聞きたい事があるとかで、その場で別れたのだが。

『なんだろう？あの感じ？』

病院を出る際に感じた奇妙な違和感。

例えるなら人では無い者と対峙した時に感じる気配。

けれど、いくら探っても、その場に居たものは確かに人だったのだ。

結局、しばらく探っても何も見つからず、騒ぎも起きなかったので病院を後にしたのだった。

『まあ、何かあっても白井さんもいるし………』

そう考えても、どうしても感じる胸騒ぎを止める事は出来ないのだった。

佐天さんと初春さん？

佐天が寮に帰り着いたのはお昼を少し過ぎてからだった。

とりあえず、お昼ご飯を……そんな気持ちで開けた冷蔵庫は悲しい位に、空だった。

『ああ……そうだ。昨日の特売で買うつもりだったんだっけ？』

そう。昨日の特売には、佐天のもっとも得意とする所の、一袋詰め放題で100円が、3つあった。

そう、武術で鍛練された指先で、破れそうで破れない限界まで伸ばしたビニール袋に、計算しつくした方法できっちり野菜をいれる。

その方法で大量獲得して、上条と折り半。
当面を乗り切る予定だったのだ。

しかし、無いものは無い。

となると、次の策が必要となる。

ポジティブ佐天は言う

「いいじゃない！たまには外食しようよ！！」

ものぐさ佐天が言う

「ええ。出掛けるのめんど臭いじゃない。コンビニで良くない？」

主婦佐天が言う

「バカ言わないの！幾らかかると思ってるの！！今からでも、スーパーに行くわよ！！」

「「ええ。！！」」

「何！？お母さんのご飯に文句あるの！！？」

「「はい」」

数秒の脳内会議が終了し、再度、出掛ける準備を始める佐天。

ちなみに、この脳内会議、過去に数度行われているが、主婦佐天の全白星である。

再度、出掛けようと靴をはいているところで、チャイムがなった。

「はい？」

「佐天さくん？玄関開けて貰っていいですか？両手が塞がって……」

ドアの向こうからは初春の声。

疑問を感じつつ、ドアを開けると、その向こうには大きな買い物袋を両手に下げた、初春の姿があった。

「あゝ！良かった！！ここに来ながら、まだ佐天さんが帰って無かったらどうしようかと……………」

荷物を起きながら、安心したように溜め息をつく初春に佐天は疑問を口にする。

「初春？この荷物は？」

「佐天さん、昨日買い物に行けなかったでしょ？
何も部屋に無いんじゃないかと思って、色々買って来ました。
退院祝いだと思ってください！」

言われて袋の中を覗けば、中には、肉、魚、野菜が、山の様に詰められていた。

「……………初春？」

「え？やっぱり流石に多すぎましたか……………ってええ！！？」

その時、初春が見たものは、自分に飛びかかって来る佐天の姿。

「は……………はわわ！？さ佐天さん！！急に何を！！？」

「もうう！！初春大好き！！私、今なら初春に抱かれてもいい！！」

「なななな何を!! バババカじゃないんですか!!? いいから! 離れて!! 離れてくださーい!!」

と、しばらく初春に抱きつく佐天と、顔を真っ赤にして、それを振りほどこうとする初春のコントが行われるのであった。

「うう……………酷いですよ……………」

数分後、佐天の部屋でぼろぼろになった初春と、

「あはは。ごめんてば。嬉しくて調子に乗りすぎた」

台所で調理を始める佐天の姿。

「佐天さんが調子に乗っちゃうと、誰も止められないんですから、自重してください!!!」

「はーい……………初春も食べてくでしょ?」

「またそうやって誤魔化して!……………食べますけど」

実は、学園都市に来てから、初春には好きな食べ物が増えた。

その1つが、佐天の作る料理だったりする。

普通に和食、洋食、中華、とこなし、更に、初春には何処の料理か解らないモノも出てくる。

その全てが、決まって美味しいのだ。

始めて食べた時は、口の中から光線が出るんじゃないかと言うほどの衝撃だった。

以来、初春はすっかり佐天の料理のファンなのである。

「…………でわざわざ、来て貰って、退院祝いまで貰っておいてなんなんだけどさ、初春こんなとこ来ていいいの？」

白井さん、物凄く忙しそうだったけど？」

佐天の言葉に初春は、ビクッ！と身体を震わせ、おもいつきり目を逸らした。

「もしもし？初春さん？もしかして…………？」

「…………サボっちゃいました！」

『てへ♪』とか、そんな擬音が聞こえてきそうな態度である。

白井の様子を見てるだけに、初春の行動に思う所が無いではないが、何しろ昨日、散々迷惑をかけ、心配させた張本人だ。

あまり、厳しい事は言えない。

結局、小さく溜め息をつき、

「程々にしときなよ？初春は真面目だから、今日は見逃すけど、あんまりそういう事すると、白井さん達が困るんだからさ」

そう言うに留めた。

「……………せんよ」

「え？」

うつむき何かを呟く、初春。

だが、その声は佐天には届かない。

「あ！そうだ！！佐天さん！！私、佐天さんに見て貰いたいモノがあるんです！！」

「え……………うん。なに？」

顔を上げたかと思えば今度はまくし立てるかの様に話し始めた。
浮き沈みの激しい初春の態度。

それに、引っ掛かりを感じながら先を促した。

「えっと……………ですね。」

さっき、料理に使ってたお鍋借りても良いですか？」

「別にいいけど……………」

佐天の返事を待って台所に行った初春は、鍋に水を半分程入れて、戻ってきた。

怪訝な顔をする佐天。

構わずテーブルの上に鍋を置くと、その鍋に手を添えた。

「この種も仕掛けも無い、佐天さんが普段使ってるお鍋……！
ところが、一度、私が手を触れると……！」

手品師かあるいは、怪しげな叩き売りの様な口上で、鍋に触れる手
に能力を込めた。
ちから

「……？」

佐天は目を疑った。

初春の持った鍋。

その中に入った水は、直ぐに気泡を放ち始め、数秒後には沸騰し始
めたのだ。

「どうですか！？佐天さん……！今はまだ、これが精一杯ですけど、
この能力が強くなっていけば、私も……佐天さん？」

得意気に語っていた初春は、しかし、途中で言葉を止める事になっ
た。

こちらを見つめる佐天の顔が、怖かったのだ。

この数ヶ月共にいた友人のこんな顔を、初春は知らなかった。

「初春……貴女、何をしたの？」

「なに……って能力で………」

絞り出すような佐天の声。

それに戸惑いながら答えようとして、

「違う!!!」

佐天の悲鳴の様な叫びに封殺された。

「違うの。初春。私が聞いているのは、『どうやって、その能力を手にいれたのか?』って事なの」

「!?!? どうやってってその……………」

『気づかれてる?』

予想以上の佐天の鋭さ。

何より、その態度に動揺する。

「能力開発は年単位で行われる。

そして、どんなに伸びる人でも、半年でレベルが1つ上がる程度。初春…………前の能力測定1だったよね?」

『隠せない……………』

そう悟った初春は、

「実は……………」

レベルアップーの存在。

そして、それを自身が使用したことを話すのだった。

『パン!!』

「……………え?」

乾いた音と、遅れて来た痛みと熱。

そして、振り抜かれた佐天の手。

そこまで見て、ようやく初春は、自分が打たれたのだ気づいた。

「な……………なんで……………」

声が震える。

「初春……………あんた自分が何したか解ってんの!!」

目の前には、本当に……………

本当に、怒ってるのだと解る佐天の顔。

解っている。自分がした事はズルい事だ。

本来、何年もかけて辿り着くべき事を、数日で成し遂げる。

けど、けれど。

それは、そんなに批難されるべき事だろうか?

なにより……………初春は佐天にだけは、解って欲しかったのだ。

何故、自分がそこまでして力を求めたのかを。

「佐天さんには解りませんよ!!!!」

気づけば叫んでいた。

「強くて綺麗で！1人で何でも出来て!!」

「初春……………なにを？」

呆然としている佐天の姿が目に入った。

『違う。こんな事が言いたかったんじゃない。私はただ……………』

けれど、溜め込まれた思いは。

一度、噴出しまった以上、止められ無かった。

「佐天さんが事件に飛び込んで行くとき、それを見送る私が、どれだけ惨めだったか解りますか!!」

佐天さんの背中に守られて、その背中越しにしか犯人と対峙出来ない私が、どれだけ無力感を感じたか解りますか!!!!

……………爆弾に走っていく佐天さんを見て、私がどれだけ怖かったか解りますか!!!!!!?」

初春の荒い呼吸だけが、部屋に響く。

「私は！！！！」

私は！！佐天さんの横に立ちたかった！！！！
守られるだけじゃ無くて、一緒に戦いたかった！！！！

それを望む事が！

その為にズルをした事が…………

そんなに…………悪い事ですか？」

叫び、力尽きた様に呟いた後、初春はドアへと駆け出した。

「ういは」

「来ないで下さい！！！！」

呼び止めようと。

追おうとして浮きかけた腰は、その一言で制された。

『ボタン！』

と、音をたてドアが閉まった後は静寂の世界。

時計が刻む音だけが響いていた。

部屋の中で1人力無く座り込む。

『気づけなかったなあ』

友達だと。

親友なんだと思っていた。

相手が解ってくれている様に、自分も相手の事を解っているのだと思ひ込んでいた。

だから、自分の存在が相手を傷つけていたなんて思ひもしなかった。

『やっぱり、学園都市に、私なんか居ちゃいけないのかな？』

それは、かつて一度は抱いた思ひ。

それを、初春が、白井が、美琴が埋めてくれた。

学園都市に居てもいいのだと思わせてくれた。

けれど……今は空っぽだった。

窓の外から違和感。

同時に少し離れた寮から火の手が上がるのが見えた。

『結局、戦場が私の居場所って事か………』

力無く立ち上がると、靴を履き部屋をでる。

その瞳は、とても空虚なものだった。

佐天さんと炎の魔術師

上条当麻は、戸惑っていた。

シスター服姿の女の子がベランダに干されていると言う、普通では考えられない朝を迎え…………

それでも、いつも通りの『不幸』な日常を過ごし、部屋へ帰ってきた。

そして…………

今、目の前には刃物で背中を切り裂かれたであろう、インデックスを名乗った少女と、魔術師を名乗る男。

そして、炎の魔神が聳えていた。

どれもこれもバカげた、少なくとも上条の常識には無い事ばかり。

だが、問題なのはそんな事では無い。

例え、常識の外の存在であれ、上条の右手は通用し、炎の魔人として、一度は消滅した。

だが、それが即座に復活し今、それが炎の十字架とも言わべき物を手に…………

振り下ろした。

「く……!!」

咄嗟に、右手を出し受け止める。だが…………

「消えない!!? 何で!!!!?」

炎の魔人は先程の様に消えてはくれない。

『こいつ!? 消滅した先から再生してるのか!!!!?』

状況は力比べの様相になっていた。

上条の右目が魔人を喰らい尽くさんとし、それを上回る速度で魔人が回復する。

千日手の様な状態。

戦っているのが、上条と炎の魔人だけであつたなら。

だが、この場にはもう1人、戦闘者がいた。

上条の背後を取った形になっている彼が、上条と魔人の力比べを黙って見ている道理は無いのだ。

「吸血殺しの……………紅十字!!」

『まず!!!!?』

魔術師の言葉と共に放たれた、紅い十字架。

炎の魔人に右手を捕られている上条には対処する術がない。
迫り来る十字架を、なんとかやり過ごそうと、身を振った。

瞬間力強く、後ろから襟首を引っ張られる。

「な!!!!?」

僅かな浮遊感を感じ、次の瞬間には腰から地面へと激突していた。

「つて………」

腰を擦りながら見上げると、良く知る少女の後ろ姿。

先程までの自分の代わりと言わんばかりに、炎の魔人と対峙していた。

「未知の相手とやり合う時は、予想外の事が起きたくらいで動揺しちゃダメです。

死にますよ」

上条の良く知る娘の………

全く知らない声だった。

何処までも冷静で冷静で。

温かく明るい………その娘とは正反対の声。

「おやおや！これは、可愛いらしい乱入者だね！！

お嬢さん。これは、忠告なんだけど………

今すぐ何も見なかった事にして、この場を去るといい。

そうすれば、危害を加えない事を約束しよう！」

まるで、劇を演じるように宣言する魔術師。

佐天はまるでそれを気にするでも無く、視線だけで辺りを見渡し、小声で上条に尋ねた。

「上条さん。あの娘は？」

あの娘………

そう表現されるのは、この場において、佐天を除けば1人しかいない。

だが、上条も、彼女……インデックスとの関係をどう説明したらいいか解らない。

今朝、すこし、いや、かなり変わった出会い方をした少女。

だが……

「助けたいの？」

佐天から助け舟の様に言葉が続けられる。

その言葉に、上条は

「ああ!!」

と、大きく頷いた。

「そう……」

それだけ返し、魔術師に向き直る。

炎の魔人に背を向ける形になるが、気にした様子も無い。

事実、佐天が現れてから、炎の魔人は動いていない。

「残念だけど、お断りするわ。」

知り合いが巻き込まれている様だし……

ケガしてる女の子をほっとけないし……

何より逃げる必要を感じない。

けど……そうね。代わりに1つ聞かせて貰って良いかしら？」

それは、完全に相手を見下した態度。舐めきっていると断言してもいい。

そね態度にイラつきを覚える物の、ステイルは努めて冷静に対応する。

「なんだい？ 君がこの世で聞く最期の言葉になるかも知れないからね。

答えられる範囲なら答えてあげよう！」

ここは、科学の街。

騒動も被害も最小限に治めたかった。

が、多少挑発的になるのは、プライド高い、ステイルとしてはやむを得なかった。

「何故、魔術師がこの街に？」

学園都市は魔術不可侵の場所だった筈だけど？」

「な！？」

ステイルの身体に衝撃が走る。

ステイルは、目の前の少女が表れてから、自身の事を『魔術師』とは、名乗っていない。

何よりも、彼女の口にした事には、裏側に居なければ知り様の無い

事が含まれている。

「…………君は何者だい？」

「学園都市に通う、ただの学生で、あの人の友…………ううん。知り合いよ」

妙な言い回しだが、正体を晒す気は無いらしい。

…………が、それならそれで好都合。

何か不都合があっても、それは事故だ。

ステイルは何も知らないのだから。

「何事にも例外はあると答えさせて貰おうか。

それで、やはり退いては貰えないのかい？」

僕としては、彼女が手に入ればそれで充分なのだがね？」

最後の確認をとる。必要ならば躊躇する気はないが、無駄な被害は増やしたく無い。

「言ったでしょ？ 必要を感じないって」

だが、その返事はどこまでも素っ気なく、ステイルの神経を逆撫でするものだった。

「そうかい！ 自分の選択を地獄で悔いるといい！！ 魔女狩りの王！
」

魔術師の声に炎の魔人が答え、その手の十字架を振り上げた。

「私からも1つ忠告なのだけど……………」

声は……魔術師の下から聞こえた。

「な!!?」

何時の間に!!?

が、魔術師の反応は、もう遅い。

彼女に、ここまでの接近を許した。

その地点で手遅れなのだ。

「未知の相手と対峙する時は、相手の容姿に騙されない事ね。足下を掬われるわよ……虎砲!!」

「ぐあ!!」

魔術師の腹部に添えられた、少女の手が深くめり込む。

その細腕からは予想出来ない、威力だった。

魔術師を見下ろし、同時に炎の魔人への警戒も怠らない。

その様は、まさしく戦闘者だった。

「退きなさい。魔術師。貴方クラスが相手だと、そうは、手加減出来ないわ。」

まだやるなら……

次は、その命、貰い受けます」

静かな。静かな宣言。

だが、それがハツタリや脅しの類いでは無い事を、ステイルは感じとっていた。

この少女はやる。

今、もし、僅かでもこちらが反撃の素振りを見せたなら、その瞬間に自分の命は断たれる。

戦闘者として前線に立ち続けた、ステイルの勘が止めどなく流れる冷や汗となって告げていた。

横目でインデックスを見る。

彼女の為に残りの生涯全てを捧げると決めた。

だが。だからこそ。挽回の目がある内は、無駄に命を散らせる訳にはいかなかった。

「解った。退こう………」

宣言と同時に『魔女狩りの王』を解除する。

瞬間、そこには何も無かった様に、炎の魔人は消え去った。

ステイルは、断腸の思いでその場を後にする。

重症の彼女を他の誰かに任せる事になるなど、こんな屈辱は無かった。

だが、冷静に考えて、この場に残った所で勝ち目は無い。

今回は油断を突かれた形になったが、おそらく万全の状態で望んで

も、自分が彼女に勝つのは厳しい。

しかも、相手側には一度とはいえ『魔女狩りの王』を退けた、あの男もいる。

手も足も出ない。

やり合うには、どうしても相棒との合流が必須だった。

上条当麻は、目の前の光景が信じられ無かった。

彼女がやって来てから、ほんの数分。

その間に、状況はひっくり返り、魔術師を名乗った男は撤退していた。

「上条さん。とりあえず彼女を……」

病院は………まずいか。

ウチまで運びましょう。

急いで治療しないと………」

「え？　なんで病院じゃ………？」

呆けてる間にも、彼女は迅速だったらしい。

既にその腕の中には、傷ついたインデックスが抱えられていた。

「病院を戦場にはしたくないですから……………」

「え？」

「あの魔術師。多分、単独犯じゃ無いです。

この娘の怪我……………刃物で切り付けられたものです。

けど、あの魔術師は、そんな物持ってなかったし。

何より、去り際のあの目は諦めて無かった。

最低、後1人。

最悪、複数人仲間がいます」

つらつらと述べる佐天に驚愕する。

あの状態で、そこまで見ていた。

「けど。いくらなんでも、病院でなんて……………」

「来ます。私が知っている魔術師って人種はそう言う人達です」

言葉も無かった。

昨日の病院で、この娘が、かなり普通とは違うのは知っていたつもりだったが。

それでも、上条の中では、美琴や白井と同じ、『凄い人達』位のモノだったのだ。

けれど、今、思い知らされた。

彼女は元々住んでいる場所が違ったのだと。

「けど！それだと！インデックスの怪我はどうする！？
このまま、見捨てろって言うのか！？」

理屈は解った。

このまま、インデックスを病院に連れて行けば、無関係の人を戦闘に巻き込む恐れがある。

だから、インデックスを病院に連れて行けない。

けれど、彼女を。

怪我をした女の子をこのまま放置するなんて、上条には出来なかった。

「私が治療します。急ぎましょう。魔術師が去った以上、彼が張っていた、人払いの結果もじき解かれます。

そうなれば、この惨状………

アンチスキルか風紀委員。

どちらか直ぐにやって来ます」

そう言ってインデックスを抱いたまま駆け出す彼女に、上条は黙ってついて行く事しか出来なかった。

佐天さんとお説教

「上条さん！お湯を、そのバケツに入れて持って来てください！」

佐天の部屋にやって来た上条だが、『女の子の部屋』を満喫する余裕は無い。

部屋に着くと同時に、佐天から矢のような指示を受けていた。

無論、佐天もただ指示出すだけでは無い。

修道服姿の少女を、自身のベットに運ぶと、そっと、うつ伏せに寝かせる。

そして、何故か大量の安全ピンで止められている修道服に手をかけた。

「佐天さん。お湯………わぁ!!?」

お湯が入ったバケツを持った上条が、部屋に入って来るなり首を90度回し、明後日の方向を見ている。

どうやら、肌を露にしている彼女を見ない様になっている様だ。

一乙女としては好感を持てるが、今は非常事態であり、そんな事に構っている余裕は無い。

ベットに眠る少女には悪いが、既に一度見られたのだ。

不運だと思って諦めて貰おう。

「お湯は、そこに置いて下さい。」

後、上から2番目の引き出しに、タオルが入ってるんで何枚か……」

「あの！治療の手伝いをするのは、上条さんとしてもやぶさかでは無いのですが、この状況は不味いんじゃないかと！？」

上条は相変わらず、明後日の方向を向いたままだ。

佐天は、その手を止める事無く治療の用意をしながら、大きく溜め息をついた。

「上条さん……この娘、助けたいんですよね？」

「そりゃ！もちろん！！」

突然、冷たくなった佐天の声。

その事に動揺しながらも、上条は即座に答えた。

「じゃあ！今はモラルとか倫理とかは後回しです！！この娘を助ける為に、必要な行動をとって下さい！！」

「はい！！！！」

随分と年下の娘に怒鳴られ、上条は即座に動く。

確かにその通りだ。

見てしまう事に罪悪感はあるが、その事は後で謝ろう。

今は、インデックスに謝れる明日を作る事が最優先なのだ。

そして、上条はタオルを取り出す為に、一番上の引き出しを開けた。

「い！！？」

引き出しの中に入っていたのは、色とりどりのショーツやブラ。
言うまでも無く全て、佐天の物だ。

「上条さん……わざと、やってませんよね？」

「滅相もございません！！」

即座に引出しを締める。

チラリと後ろを見れば、変わらず、手際よく治療の準備を続ける佐天の姿。

「今は何も言いません。タオルは2番目の引出しです」

「はい！！！」

タオルを取りだし、向かう佐天の元。

武術家で無い、上条にだって解る程、佐天の身体から黒いナニかが漏れ出ていた。

傷口をお湯で濡らしたタオルで綺麗に拭き、そこに佐天は両手をかざす。

「……………」

上条には聞き取れない、どこか、異国の言葉。或いは呪文か。それと同時に佐天の両手が、ボンヤリと光を放ち始めた。

『何を？』

上条には佐天が何をしているのか解らなかった。

だが、佐天のあまりに真剣な様子に邪魔をしてはいけなないと、じつと、その様子を見守っていた。

「……………」

数分後。

佐天は変わらず呪文を唱えている。

だが、インデックスの身体に、上条でも解る程の明確な変化がおきていた。

『傷口が治っていった？』

それは、悪い冗談の様な場面だった。

傷口がふさがっていく様子を早送りにした様に…………

徐々に徐々に、傷口は小さく、浅くなっていく。

同時にインデックスの顔色も良くなり、呼吸も安定して来ているようだった。

「ふう！！！！！」

インデックスの傷口が完全に消えた時、佐天が大きく息を吐くと同

時に、その身体がブレる様にして倒れる。

「佐天さん!!」

上条が慌てて、身体を支える。

その身体は、ビッシリと汗をかき、顔色も随分と悪かった。

「大丈夫なのか!？」

心配せずにはいられない。そんな状態だった。

「……………大丈夫ですよ。」

内養功っていう、使い慣れない上に、苦手な技を長時間使っちゃったから、ちよつと、疲れちゃっただけです……………」

上条の手で、ゆっくりとその場に、寝かせられ目を閉じたまま、佐天は返事をした。

その力無い姿に、上条は自分の力の無さを痛感せずにはいられなかった。

あの時、この娘が来てくれなかったら、自分はこの魔術師を撃退できただろうか？

もし、この娘が居なかったら、自分はインデックスをこうして助ける事が出来ただろうか？

自分の前に横たわる小さな身体。

この娘に、自分が背負うべき物を全て任せてしまった。
その自身の不甲斐なさが、あまりに情け無かった。

「佐天さんは凄いな……………」

思わずついて出たのは、そんな言葉だった。

「なにがですか？」

答えた佐天は、力無く寂しげに微笑んでいた。

「俺だけじゃきつと、あの魔術師に勝つことも、インデックスを救う事も出来なかった。

佐天さんが居たからこそ、俺もインデックスも、今、こうやって生きてる」

上条の称賛と自嘲の言葉。

けれど、佐天はそれに小さく首を振った。

「私は、常に戦いがある場所で、戦う為に生きて来た人間ですから。きつと、上条さんが普通で、私が異常なんです」

「なにを……………」

自分達を救って見せた少女の自嘲の言葉に上条は凍りついた。

「私のこの手は簡単に人を殺せます。

物心ついた時から、ひたすらにそれだけを磨き続けてきましたから。

誰かと対峙したら、『どう倒すか?』を自然に考えちゃうような、
そういう人間なんです」

上条は気づく。佐天の様子がおかしい事に。

いや。本当は気づいていた。

魔術師と対峙した時から、佐天の様子はおかしかった。

ただ、それを指摘するのは、状況が許さなかった。

だからこそ、上条はそれらの違和感を、

『戦闘中だからだ』

『重傷人がいるからだ』

だと誤魔化し、気づかない振りをした。

けれど、結果、上条の前にいるのは、疲れはてた、傷ついた女の子
だった。

「上条さん。気付いてましたよね？」

私、あの時あの魔術師が、少しでも反撃の素振りを見せたなら、即
座に命を奪うつもりでした」

それは解る。あの時、佐天が発した言葉が、脅しやハッタリの類い
で無いことは、上条でも解る程の言葉の重圧で伝わっていたから。

「それが出来てしまう異端が。
人の命を容易く奪える化物が、人並みの生活を送ろうって。

そんな事を考える事、自体が間違えだって、どうして気づかなかったんだろう……………」

「佐天さん……………何があったんだ？」

「!!？」

佐天の身体が脅える様に震えたのが解った。

そして、恐らくは、この質問自体が、佐天の心を傷つける。

それこそ、傷口を抉る様なものなだと、上条には解っていた。

解っていて聞かない訳にはいかなかった。

出来る事なら、今すぐ抱き締めて慰めたい。

そんな事はないのだと言ってあげたい。

けれど、もしそうしてしまったなら、今、目の前にいる少女は。

今にも壊れてしまいそうなこの娘は、きっと居なくなってしまう。

そんな確信が上条にはあった。

だからこそ聞くのだ。

例え、今、彼女を傷つけても、この事で彼女に嫌われてしまっても。

学園都市から、彼女が居なくなる。

そんな現実には、上条にとって決して受け入れられないモノなのだから。

沈黙が部屋に訪れた。

上条は、ジッと佐天を見つめ、佐天は目を固く閉じ、沈黙を保つ。部屋に響くのは時を刻む音と、インデックスの穏やかな寝息だけ。

それでも上条は急かさない。

今は、彼女が口を開くのを待つだけ。

それだけしか、自分に出来る事などないのだから。

やがて、佐天は諦めたように深い溜め息をつき、口を開いた。

「なんだかなあ………上条さんも、私の事なんかほっておいてくれたらいいのに………」

「そうもいかないだろう？」

佐天さんは、俺にとっては玉子の恩人で、共に戦場^{スーパー}を駆ける戦友で、今日からは、命の恩人なんだからさ」

「お節介な男はモテませんよ？」

「ですから、上条さんの周りには女っ気が全然ありませんことよ？」

少しの冗談と、少しの本音を混ぜて、そんな軽口を叩き合う。

それでも、その間、佐天を見つめる上条の視線は真剣で、それは、佐天に逃げる事を許さない。

佐天は困った様に笑い

「初春に言われたんです。

私は何も解ってないって」

ようやく、それを口にした。

「初春は、学園都市で出来た、最初の友達で……………」
一番の親友です。

少なくとも、私はそう思っていました。

でも……………ダメですね？私。

戦う事。それだけしかやって来なかったから、気づけ無かったんです。

私は、初春という楽しかったから。

初春は、何時だって私の事解ってくれて、私の事を受け入れてくれてたから。

私もそうなんだって。

初春の事、勝手に解ったつもりになって、初春も楽しいんだって思い込んでた。

その陰で、初春がどれだけ苦しんで、傷ついて、悩んでたかなんて、全然気付いてやれなかった！！

初春は！あんなに追い詰められてたのに！！」

浮かぶのは、得意気に強くなった『能力』を自分に見せる初春の姿。初春とて、その結果を知らなくとも、『幻想御手』が真っ当な品では無く、危険な物である事くらい解った筈だ。

それでも、使わずには、試さずにはいられない。
そんな所まで追い詰められていた親友を前に、自分は何をしていた
のだろう。

「だから……私は……私は………」

ある意味で、今回の事はいいい教訓だったのだ。

戦う事しか出来ず、戦場でしか生きていけない人間が妙な夢を見る
など言う。

あの魔術師との一戦で、自分がどんな人間なのか思い出したのだろ
う？

「私は!!」

「逃げるな!!!!!!」

「!!!」

絞り出す様にして告げようとした、最後の一言。

だが、それは、床に拳を叩きつけた上条の言葉で遮られた。

「なに………を？」

佐天は戸惑う。

自体が何から逃げているというのだ？

「俺は佐天さんが今まで、どんな人生を歩んで来たかなんて知らない。」

それが、どんなに重くて、どんなに佐天さんを縛ってるのかも！

けど！それを言い訳に、初春さんと向き合うのをやめるのは違うだろう！？

俺は初春さんの事も良く知らないし、佐天さんとだって深い付き合いだとは言えない。

けど、そんな俺にだって、病院で会ったあの瞬間だけで、2人が親友なんだってのは解ったんだ！！

今、2人は何かすれ違って、傷つけ合ってるのかも知れないけど。

それでも、今まで2人が築き上げてきた時間は………絆は嘘なんかじゃない。

そうさ！

俺は羨ましかったんだ！！

あの病室で互いに互いを信頼しきってる2人を見てさ！！

今、初春さんが何かに悩んで追い詰められているんだったら、佐天さんがするべき事は、こんな所で、悩むことでも、落ち込む事でも無い。

今すぐ初春さんのところへ行って、初春さんを助けて上げる事じゃないのか！？」

「……………私にそんな資格……………」

「違う！友達を助けるのに資格なんていらない！！
友達でいるのにも！！
必要なのは、そうしたいのか！そうありたいのか！
その気持ちだけなんだ！！
佐天さんは、初春さんを助けたい！
初春さんと友達でいたい！
そうだろ！！？」

「わ…………たしは…………」
部屋に静かな少女の声が響く。

傷つき疲れ果てていた少女の声。
けれど…………

「私は、初春を助けたい」

「うん」

「私は初春の親友だから！！」

「ああ！」

今、少女の瞳に、心に。
再び、力が宿った。
決して揺るがない意思と共に。

少女は駆け出す。

自身が為すべき事を為すために。
少年は穏やかな瞳でそれを見送るのだった。

一心不乱に駆け出した、佐天だったが、寮を出た所で、突如立ち止まる。

「……………」

遠くに見えるビルを一瞥。

何事か呟くと、再び全力で駆け出すのだった。

とあるビルの屋上。

「『手を出せば殺す』……………ですか」

そこから、佐天の寮を監視していた1人の女性は、小さく呟いた。

彼女が去った今、あの部屋に一番の脅威はおらず、自身が出向けば、実にあっさりと、目的を達成できるだろう。

だが、彼女は動かない。

彼女には借りが2つあるのだ。

相棒と言える魔術師を見逃して貰った事。

自身の大きなミスを救って貰った事。

「僅かですが、時間も残されていますし………」

小さく呟き、ただ寂しげにその部屋を見続けた。

佐天さんと初春さん？

『なんであんな事言っちゃったんだろう？』

佐天の部屋を飛び出した、初春は当てもなく走り続けながら考える。

佐天に『幻想御手』を使っているのを見破られ、その事を叱られた際、初春の中で、何かが切れた。

それは、初春が佐天に出逢ってから、ずっと溜め込んで来たもの。

自分と同じ歳で、同じ女の子で。

『能力』的には、自分より下。

けれど、何時だって、明るく強く、自分を引っ張ってくれた。

解る。解っている。

『佐天さんが悪い訳じゃない。

私が嫉妬していただけだ』

それが、解っていて、その上で理不尽に彼女に感情をぶつけた。

部屋を出る直前の、彼女の表情を思い出す。

呆然と立ち尽くしていた。

『佐天さんには意味が解らないですよね。
急にキレて飛び出して……………』

佐天さんは何も悪く無いのに』

そう、悪いのは自分。

勝手に羨み妬んで……………

挙げ句のはてに『幻想御手』（あんなもの）に手を染めて。

きつと傷つけた。

嫌われたかもしれない。

自分が悪いと知りつつ、その事が、とても悲しかった。

羨ましくもあった。

妬みもあった。

けれど、初春が、『幻想御手』等と言う、怪しげな物に手を染めて
まで力を求めたのは、

『佐天さんの横に立ちたい』

その、一念によるものなのだから。

ぐちゃぐちゃな頭と心を振り切る様に走って。

普段の自分では考えられ無い程の距離を走って。

気がつけば、辿り着いたのは、何時かの廃ビル。

佐天と初めて出会った場所だった。

「あ……………」

認識すると同時に声がでた。

ここに何があるわけでは無い。

ましてや、彼女がいる筈などある訳がない。

けれど初春は、まるで吸い込まれる様に、その場所へ足を進めるのだった。

身体が重い。

息が乱れる。

昨日から、随分と回復した筈の身体は、再び最悪のコンディションになっていた。

普段の半分程の速度も出ない。

余裕で走れる筈の距離で、身体は既に汗だらけだ。

『初春!!?』

それでも佐天は止まらない。

全速で走り、彼女の姿を探す。

言わなきゃいけない事がある。
伝えたい想いがある。

走って走って辿り着いたのは、初春の寮。
もどかしい思いで、インターホンを数回押すが、反応は無い。

同時に、部屋の中に人の気配が無い事も確認する。

『まだ帰って無い？』

初春が部屋を飛び出してから、既にかなりの時間がたっている。
どこに行ったのか？

ポケットから携帯を取りだし、初春の番号を選択。
コール音になる事無く、留守番サービスに切り替わった。

メッセージは残さず、直ぐに他の番号を呼び出す。
選択したのは『白井さん』と記された番号。

風紀委員の仕事に向かったのかも知れない。
そんな思いが過ったからだ。

数度のコールの後、今度は反応が得られた。

『もしもし？白井でございませうの』

「白井さん！？初春知りませんか！！？」

思わず大きな声を出してしまう。
数人の人が、何事かとこちらを見るのが解った。

『佐天さん？ いえ、むしろ、こちらも初春を探しているところですよ。』

あの娘ったら、今日、風紀委員の仕事、サボってしまっただけ。もう少ししたら、こちらから、佐天さんにお聞きしようかと思ってたところですよ。

この忙しいのに困ったものですわ』

「解りました！ 初春が見つかるか、連絡がとれたら私にも教えて下さい！！！」

『佐天さん？ 初春となに………』

返事を待たずに、電話をきる。
部屋にはいない。

風紀委員にも行ってない。
これだけで、佐天は初春の居場所に心辺りが無くなった。

『確かに、私は初春の事、何も解って無いわね』

心の中で自嘲し、すぐに駆け出す。
あてなど何も無い。

それでも、ジッと待つことなど出来る筈が無かった。

佐天は初春の姿を求めて夜の街へと駆け出した。

『何してるんだろ？私？』

思わず入ってしまった、廃ビルで初春は人知れずため息をつく。

ビルの中には、何も無かった。

当たり前である。

それでも、思わずここに入ってしまったのは。

『最低ですね……………私は……………』

自分の身勝手さが嫌になった。

心配させて、暴言をはいて、傷つけて……………

その上でまだ初春は、佐天の姿を求めていたのだ。

「おいおい！今日はラッキーデイか、何か？俺らの隠れ家に獲物の方から、やって来てくれてるぜ！？」

「ヒャア！マジか！？お嬢ちゃん迷子かい！！？お兄さん達が、今まで送っててあげるよ！！」

何時帰れるかは、わかんねーけどなあ！！！！」

思いに沈んでいた初春を現実に戻したのは、そんな下品な笑い声。

見れば、だらしな性格をした男が2人の入口の方に立っていた。

思わず後退り、自分の迂闊さを呪う。

佐天と出会った場所と言う事は、そう言った連中の溜まり場だと言うことだ。

あの時の連中は全員、アンチスキルに連行され、今頃は更生施設にでもいるだろうが、この手の連中はどこにでもいるのだ。

前の連中が居なくなつて、空白になつたこの場所に、他の不良たちが目をつけない筈が無い。

「あらあ？警戒されちゃってんのかな？大丈夫だよ！！お兄さん達、とっても優しいから！！」

一緒に気持ちいい事、一杯しようぜえ！！」

逃げようとした初春に回り込む様に前歯の無い男が駆け寄り、初春の腕を掴んだ。

嫌悪感に身体中に鳥肌がたつ。

「嫌です！離して下さい！！」

何とか男の手から逃れようと足掻くも、非力な初春の力ではどうにもならない。

「おいおい。そりゃあ無いんじゃないの？

自分から、こんなところ入ってきといてさ。」

お兄さん達に言わせりゃ誘つてるとしか思えない訳よ？」

もう一人の細身の男も、抵抗出来ない初春に近づき、その上着に手をかけ…………

「ああああ！！？」

初春が嫌悪感でいっぱいになったとき、初春を押さえていた男が、

弾ける様に初春から離れた。

「!?!?」

突然、拘束を解かれた初春はたたらを踏むも、慌てて2人から離れ、奥にある非常階段を駆け上がる。

「おいおい。何やってんだよ？俺らのウサギちゃんが逃げちまったじゃねーか……………」

呆れた様に言う細身の男。

「わりい……………なんか、急に腕が……………」

前歯の無い男は気持ちの悪い汗をかきながら、自身の腕を見て絶句した。

そこには、人の手形がついた様に焼き爛れた痕があった。

「うわあああ!?!?!」

把握すると同時に、思い出したかの様に激痛が走る。

「ち!あの女、能力者かよ……………」

細身の男は吐き捨て、転がっていた鉄パイプに手を伸ばした。

「興は乗らなくなっちまうが、気絶させてから頂くとするか。オラ!テメエもいつまでも騒いでねえで、行くぞ!」

蹴つとばされ、痛みのあまり涙をうつすらと浮かべた前歯の無い男

は、

「ふざけやがって！あの女！！グツチャグチャに犯してやる！！」

怒りを顔に滲ませ、鉄パイプをその手に取り、少女の後を追うのだった。

「なにが………！？？」

階段を登る初春は、自身を襲う異変に気がついた。

激しい頭痛に、吐き気。

何よりも、身体が焼ける様に熱い。

時折ふらつきながら、階段を登りきった時、初春の前にあったのは絶望の現実。

階段の先にドアは無く、ただ壁だけが、広がっていた。

慌てて引き戻そうとするのももう遅い。

視線の先には鉄パイプを手に、階段を登る男達の姿があった。

「ようう………お嬢ちゃん！！」

能力者なら能力者って言ってくれねーと！！

俺達にも……対応の仕方ってのがあるんだから………よ！！！！」

細身の男が鉄パイプを振りかぶる。

初春は咄嗟に手で頭を庇い………

初春の手に触れた瞬間、鉄パイプは蒸発した。

「な!!?」

男の手に残るのは、先端の消えた鉄パイプ。
残された部分の先は、まだ紅く燃えていた。

同時に男は戦慄する。

もし、あの手が自分に触れたなら……

「じょうだんじゃねえ……」

サーっと、顔から血が退くのが解った。

「……………」

後ろを振り返れば、前歯の無い男も顔を青くしている。
今の光景に頭に昇った血も醒めたらしい。

「逃げんぞ!!」

細身の男の一言を合図に、2人は階段を駆け降りる。

能力者相手の喧嘩はそれなりにこなしたが、それでも、あんな化け物の相手はごめんだった。

『なにが……どうなって……』

男達2人が去った後も、初春の体調は悪化を続けていた。

暑い…………熱い…………

身体を蝕む熱は限界を迎えようとしていた。

初春は気づいていないが、既に、手を触れていなくても、周りの非常階段はうっすらと湯気をあげている。

何とか階段を降りようと手すりに手をつき……………
手すりが蒸発した。

「あ!？」

声を上げた時には初春の身体は、半分宙に浮いていた。

咄嗟に伸ばした反対の手も、手すりに触れた瞬間、手すりを消滅させた。

バランスを崩した身体。

消えていく手すり。

全てがスローに見える世界。

その中で初春が最後に見たのは……………

「……………ヒーロー見参! ってとこかな?」

「……………バカじゃないんですか……………!？」

自身の右手を掴む佐天の姿だった。

走って、走って、走り回って…………

佐天がそこに着いたのは、初春を襲った2人が逃げ出して来たときだった。

恐怖に震える2人を殴り飛ばし、事情を聞いた佐天が、階段を登りきった時、目にしたのは、宙に舞っていく初春の姿。

考えるより先に身体が動いた。

気がついた時には、初春の手をとっていたのだ。

「待ってて……………すぐ……………引き上げるから……………」

頭上から聞こえる佐天の声。

夢じゃない。

その事が、信じられなかった。

「佐天さん……………どうして!?!」

「うーん? 私もだけど、初春も何かに呪われてるんじゃない? なかなか、こんな映画みたいな状態は経験しないよ?」

確かにそうだ。

こんな手と手が命綱の状態、映画か栄養ドリンクのCMでしか見た

ことが無い。

「そうじゃなくて!!?」

何故来てくれたのか?

そう問おうとして、初春は気づく。

彼女は今、自分のどこをもっている?

「佐天さん!!?」

「いや……? 手の温かい人は心も温かいって言うけど、初春の心はかなりホットだね……!!!」

見上げた先には、顔色の悪い佐天と、煙をあげる彼女の手があった。

そう。考えてみれば、普通の状態で、彼女が自分を引き上げるのに苦勞などする筈が無いのだ。

彼女は今日の朝まで入院していて……
今、自分の手は……

「佐天さん! 離して下さい!!」

「やだ……!!」

『ジュウウ!!』

何かが焼ける音が響いている。

当たり前だ。

鉄さえ溶かす熱を相手に、今、手が原形を留めてるだけで、既に異常なのだ。

「離して下さい!!!」

佐天さんの手が!!

私の事はいいですから!!」

「絶対!! やだ!!!!」

僅かに身体が持ち上げられる。

その身を焼かれてまで、どうして……

「どうしてですか!!!!」

あんなに酷いこと言ったのに!!!!

私に助けて貰う資格なんて無いのに!!!!」

「友達だから」

「!!!!」

「私、バカだから。」

初春が傷ついてるのも、悩んでるのも気づいてあげられなかった」

「そんなの!!? 私が! 私が勝手に!!?」

「でも！私は初春と友達でいたい。
ずっとずっと友達でいたいんだ！！
だから、この手は離さない！！」

今、この手を離しちゃったら、私は初春の友達だなんて絶対言えなくなるから！！」

「佐天……さん………」

身体が持ち上がる。

ゆっくりゆっくりと持ち上げられ……
今、初春の身体が、階段へと戻された。

「………バカじゃないんですか………」

「初春酷いよ。こういう時位、ありがとうとか言つてよ！」

泣きながら言葉を連ねる初春は佐天は笑顔で答える。

「佐天さんはバカです。大バカです！！」

私に、佐天さんに助けて貰う資格なんてありません！
友達でいる資格なんて無いんです！！

なのに、そんな大怪我までして、私を助けるなんて、バカ以外の何者でもないじゃ無いですか！！！！」

佐天が負った、手の火傷を見て、初春は自責を感じずにはいられなかった。

だからこそ、泣き叫ぶ様に告げるのだ。

対して佐天は悟った。

初春が自分に告げる言葉は、内容こそ違え、自身が上条に告げたモノとよく似ていた。

つまりは、自分達は随分と遠回りをしていたのだと。

「初春さ。入学した頃の事、覚えてる？」

「なにを………？」

突然の話題に、初春は戸惑う。

佐天は構わず続けた。

「私さ、あの頃本当に参ってたんだよ？」

周りの皆は、どんどん仲良くなっていくのに、私だけ取り残されちゃって。

だって、皆が話す、アイドルの話も、ドラマの話も私には解らないんだもん」

佐天の言葉に初春は、その当時の事を思い出す。

入学式の時に、佐天の事に気づいた初春だったが、佐天の放つ独特の気配に、なかなか話しかけれずいたのを思い出す。

聞いた事は無いが他の皆もそうだった筈だ。

「で、そのまま1週間くらいたっちゃって、気づけば孤立しててさ」

確かに、最初の頃の佐天は一人でいる事が多かった。

その当時は、それを好む人だと思っていたのだが。

「だから、やっぱり私には学園生活なんて無理なのかな？ って思ってたんだ。

学校やめて、元の生活に戻ろうかな？ とかね。そんな時だったんだよ。

初春に『お礼』されたの」

覚えている。

入学式で佐天に気づいて、何とかお礼を言おうとして。けど、全然話しかけれずに、気づけば1週間。

焦った私は。

「帰ろうとしたら、急に制服を捕まれて、

『お礼にご馳走したいから、何がいいですか？』

だもん。びっくりしたよ」

そう。キョトンとした顔をしていた。

覚えられて無かったのが寂しかったのを覚えてる。

「それで、初春にパフェ奢って貰って。

初春と仲良くなって。

そしたら、他の皆とも、少しずつ喋れる様になった。だからね？ 初春？

今も私が学園都市に居るのは、初春のお陰なんだよ？」

「そんなの！ 別に私は……………」

「うん。初春にとっては、特別な事じゃ無かったのかもしれない。でも、私には特別だったんだよ」

穏やかに本当に穏やかに告げる佐天の言葉が初春を包んだ。

「で、そんな恩人の初春が、傷ついたり、悩んだりしてるのを気づかなかった私は、初春の友達の資格無いんじゃないかな？ ってね」

「そんな！ そんなこと！！……………あ……………」

気づけば、自分を見つめ優しく微笑む佐天。

佐天は、先に気がついたのだ。

自分達はお互いがお互いに遠慮して、言いたいことを言えずに、傷つけたのだと。

「バカみたいですわね……………」

「ホントだね」

気がつけば、2人とも笑っていた。

「ある人に言われたんだ。友達になるのは資格とかじゃなくて、そうでありたいかどうかなんだって。

私は、ずっと初春の友達でいたい」

「私も、ずっと佐天さんの友達でいたいです」

「じゃあ、ずっと友達だ」

「そう……………ですね……………」

眠い……………

酷かった頭痛が治まり、あんなに熱かった熱さえ抜けていくのが解る。

これは、きっと副作用。

ズルをした罰なのだろう。

けれど、きっと……………

「佐天さん……………すいません……………」

「ん〜？」

「後……………お願い……………す」

「うん。任された」

頷く佐天の顔を最後に、初春の意識は途絶える。

けれど、眠りに着いたその顔は、安心しきったものだった。

佐天さんと決意

眠るように初春が倒れて。

体力を使い果たし、初春を病院に運ぶ事さえ儘ならなかった佐天は、ポケットから携帯を取り出し、救急車を呼んだ。

ここまでが、昨日の佐天の記憶である。

人の気配を感じ、ウッスラと目を開けると、涙目でこちらを見つめる美琴の姿があった。

「佐天さん!!」

「あれ？御坂さん？」

「…………おはようございます」

「あはよう……………じゃない!! 本当に心配したんだから!!?」

佐天が目を開けると同時に声をあげた美琴だが、佐天の気の抜けた返事に、今度は怒り出す。

状況の解らない佐天は困惑するばかりだ。

「ここは……………?」

「佐天さんが、昨日退院した病院。
看護婦さん達が、呆れてたわよ？」

朝に全快して退院した患者が、夜には帰って来たって」

なるほど。確かに、そんな患者が居れば呆れるだろう。
我が事ながら、妙に納得する。

「初春は？」

「……………別の病室よ。今は、黒子が着いてる」

その言葉に、ホッと胸を撫で下ろす。

良かった。初春は無事なのだ。その様子に何かを感じとったのだろう。

美琴は眉をしかめながら、口を開いた。

「ねえ？佐天さん？一体、何があったの？」

昨日の夜、初春さんが病院に運ばれたって、連絡があって……………
これは、黒子に風紀委員からだったんだけどね？

朝になってから慌てて来てみれば、佐天さんも一緒に運ばれてるって言うし。

おまけに、2人とも昨日の夜から意識が戻らない。

佐天さんに至っては、その火傷……………

心配したなんて言うもんじゃ無かったんだから！！」

「えーと……………友愛の確認をしたら、ちょっと、熱が入り過ぎまして」

「佐天さん!!!」

どう説明したものが判断に悩み、そんなことを口にしてみたが、見事に怒られた。

嘘はついていないのだが。

「……………すいません。取り敢えず、私の方は大丈夫です。

昨日、少し気を……………御坂さんに解りやすく言うなら、能力を使いすぎたみたいな感じです。

今は、大分回復してますし、火傷の方も大した事は無いですし」

美琴の様子に素直に謝り、自分の状態を説明する。

体力は8割方回復しているし、痛みはあるが、手も動く。

問題は無かった。

「大した事無いって」

そんな筈が無い。

美琴は思わず口に出そうになった言葉を飲み込む。

今朝、美琴は看護師が佐天の右手の包帯を代える様子を見ている。

決して、大した事が無いなんてことは無かった。

が、本当に平気そうに笑う佐天に、それを言うのは戸惑われたのだ。

「私の方は本当に大丈夫です。
初春は……………」

そこまで話した所で言葉をきる。
美琴にだけ、話すわけにはいかないだろう。

これは、『私達』の友達の話なのだから。

「白井さんと呼んで貰えますか？」

美琴にそう頼む。

心配をかけた。

駆けつけてくれた友達に黙ったままにいる訳にはいかなかったから。

白井を待つ間に、佐天の意識が回復した事を聞いた、蛙顔の医者と
看護師がやって来て、随分とお説教を貰う事になった。

さすがに、退院してその日に救急車で運ばれたのはまずかったら
しい。

そして、今

「大体、佐天さんは、いつもいつも無茶をしすぎですの。
何事も無く終わっていたから、今まで黙っていましたけれども、風
紀委員でも無い貴女が……………」

凄まじい勢いで白井にお説教を貰っていた。
チラリと、美琴に視線で助けを求める…………

見事に目を逸らされた。

「聞いていますの！？佐天さん！！！」

「は！はい！！！」

しばらく、時間にして30分近く、白井のお説教は続いた。
それだけ、白井も2人の心配をしたのだ。
同時に、未だ意識の戻らない初春の事を心配していると言うことである。

「…………それで、初春さんの事で話って？」

白井のお説教が、一段落した所で美琴が切り出す。

一瞬

『助かった！』

という顔をした佐天に、鋭い視線を向ける白井がいたが。

「多分、お二人とも気づいてると思いますけど…………
今、初春の意識が戻らないのは、『幻想御手』の副作用です」

「！！？」

「初春……さんが……」

正直に言えば、2人とも、佐天と初春が病院に運ばれ、意識が戻らないと聞かされた段階で、その可能性を考えていた。

だが、佐天の意識が戻った事。

何より、友人が事件に巻き込まれた事を、心のどこかで否定していたのだ。

「間違いありません。昨日、初春本人に確認しましたから」

「なぜ……？」

声を震わせたのは、白井だ。

共にいた時間が長かっただけに、佐天同様、気づけなかった事を悔やんでいるのだろう。

「初春は、横に立ちたかった。って言っていました」

「初春さん……」

美琴も押し黙ってしまう。

初春の気持ちに気づけなかったのは、ここにいる誰もが一緒なのだ。

「……バカですわね。初春。貴女はとっくの昔に、私の相棒でしたのに」

呟く白井の声。

佐天は困ったように笑っていた。

「私もそのつもりだったんですけど。」

初春が起きたら、今の言葉、伝えてあげて下さい。

言葉にしないと伝わらない事って意外に多いみたいです」

そう。

初春の気持ちに、皆が気づけなかった様に。

皆の気持ちに初春が気づけなかった様に。

言葉にしなければ伝わらない。

そんな当たり前の事を人は忘れてしまうのだ。

相手の事を信頼していればしているほど。

「……………それで、白井さん。お願いしたい事があるんですけど」

「また、無茶をなさるんじゃないでしょうね？」

ジト目で見つめる白井に苦笑を返す。

「さすが白井さん！よく解ってる！！」

「貴女は……………もう……………」

そんな風に茶化してみても、帰ってきたのは呆れた反応だけだ。
それでも、

「この事件！解決するまで協力させて下さい！！」

約束したのだ。
大事な親友と。

だからこそ決めていた。

例え、自分のプライドとルールを曲げても。

己の持つ全てをかけて、この事件は必ず解決してみせると。

佐天さんとインデックスさん

佐天の協力の申し出を、渋る白井を

「ダメって言われても勝手にやっちゃいますけどね？」

の一言で一蹴。

渋々、風紀委員に入った情報を教えて貰えることに。
代わりに、こちらで情報を手に入れた時は必ず伝える事。
絶対に危険な事はしないことを約束させられた。

白井は、初春の件を風紀委員連絡するために、先に帰り。
佐天は、あの後、更に少々のお説教を医者に貰い、家路についていた。

……………美琴と一緒に。」

何故こうなったのか？

それは、白井が帰り際に放った言葉が切っ掛けだ。

「お姉様。佐天さんの見張りをお願いしますわ。」

とりあえず、今日1日だけでも無理をさせないように」

「うん。解ってるって！」

今日の門限までは、私が一緒にいるから安心して！」

見事に佐天の意思を無視して、そんな包囲網が完成していた。

「いや……………いくら、私でもそんな連日連夜、無茶しませんって！！」

少しは信頼して下さいよ!」

佐天としても、反論くらいはしたのだが、

「出来ませんわね」

「この手の件に関してはさすがにね………」

「酷!!?」

にべもなし。

どころか、テレポートで目の前に移動してきた白井が

「大体、退院した当日に、意識不明になって再入院したにもかかわらず、

『事件を追うから、風紀委員に協力させろ』
なぐんて言ってる人の

『無茶はしません』

て言葉を信用しろと言う方が、無理がありませんこと?」

実に、怖い『いい顔』で迫ってきた。

全部、事実なだけに反論の余地も無い。

結局、2人に押し切られる形で、今日1日、美琴と一緒にいることになったのだが。

「あの………御坂さん?

本当にいいですよ?

今日は、大人しくしてますから」

「だゝめ。佐天さんには悪いけど、全く信用出来ないもん。
諦めて、今日は私と一緒にいること」

美琴の言葉に、佐天は知れず溜め息をついた。

白井が見張りをつけた事、美琴がそれを受けた事。

それが、2人が自分を心配しての事だとは解っている。

その気持ちは嬉しいのだ。

だが、その実。

佐天は大人しくしている気なんて無い。

というより、『できない』と言うのが正しい。

なにせ……

振り返り、遠くのビルを見れば、その屋上には女の姿。

その視線は、確実にこちらを捉えている。

おそろくは……

そう遠くない内に仕掛けてくるだろう。

『幻想御手』の方はともかく、そちらには、美琴を巻き込みたくない。
い。

それが、佐天の本音だった。

『まったく。魔術師相手の喧嘩って、何で毎回毎回、めんどくさい
かなあ?』

心の中で呟き、ふと思う。

はて?何か忘れて無いか?

残念な事に、佐天がその事に気づいたのは、部屋のドアを開いた直

後だった。

「あ！佐天さん…………おか…………え……………」

「おじゃま…………しま……………」

「……………」

硬直する2人。

顔を手で覆い、俯く佐天。

沈黙が部屋を……………」

「とーまー！お腹空いたんだよ！！」

支配はしなかったが、妙な空気が流れた。

そうだ。

昨日から今日の朝までバタバタしていて、すっかり忘れていたが、昨日、上条の後ろで喚いているシスターの治療をこの部屋でしただ。

上条の部屋は火災にあったし、怪我の治療を終えたばかりのシスターもいたのだ。

普通に考えれば、そのままこの部屋にいる。

「えーと……………ですね？御坂さん？」

混乱している美琴に声をかける。
とりあえず、説明はせねばなるまい。

本当の事は言わないし、言えない。
言った所で信じて貰えるとも思えない。

ここは、学園都市（科学の街）で、美琴は、その超能力者。
魔術なんてオカルトどうして、信じて貰えようか？
何よりも、心配してくれる様な友達を裏側こちらに招く様な真似を佐天は
したくなかった。

適当に話を、でっち上げて、それを、上条に合わせる………そう
しようとしたのだ。

帯電した美琴がそこに居なければ。

「………んで………が………」

「は？」

「へ？」

「お腹空いたんだよー！」

「なんで！アンタが！！佐天さんの部屋に居んの………！？」

「てい！！！」

美琴の雷が放出されようとした直前。

佐天のかけ声と共に美琴が崩れ落ちた。

「ちょ！佐天さん！？」

上条は見た。

いや、正確には見えなかったのだが。

前後の様子から、佐天が美琴の首に手刀を叩き込み、気絶させたのは明らかだ。

「だってだって！」

我が家の家電さん達が、絶滅の危機だったんですよ！！」

「気持ちには解るけど……………」

佐天の気持ちは痛いほど解る。

家電製品は、貧乏学生には死ぬほど高いのだ。

だが、崩れ落ちて眠る美琴に、上条としては内心複雑な物があるのだ。

美琴をベットに運び佐天が最初にしたのは、昼食作りだ。

ずーと……………

「お腹空いたんだよ！！」

と言ったシスターに根負けした形だ。

聞けば今朝方、目を覚ましたらしい。

「美味しい！凄く美味しいんだよ！！るいこ！！」

「……………」

一口食べて、超加速したインデックス（長髪呼ばわりを嫌った佐天が、早々に自己紹介した）と、硬直した上条。

対応は真反対だが2人とも気に入ってくれたらしい。

火傷した手を濡らせないので、簡単な物しか作れなかったのが、佐天としては不満だったのだが。

「それでさ、インデックス。確認しときたい事があるんだけど？」

「なにかな？」

食事が終わり、洗い物を上条に任せて、佐天はインデックスに向き直る。

「インデックスを狙ってる魔術師って、2人だけ？」

男女1人ずつの」

「！！？るいこは、魔術師の存在を知ってるの！？」

質問をしておいて、インデックスの反応に佐天が首を捻る事になった。

知っているも何も、昨夜の魔術師を撃退したのは佐天だ。

「あれ？聞いてないの？？」

「るいこが、私の怪我を治療してくれたのは聞いたんだよ？でも……」

「悪い。話してないんだ。

俺から、佐天さんの力……とか、そういうの話して良いもんか解らなくてさ」

台所から手を拭きながら戻ってきた上条が、言葉を繋いだ。

佐天が頷く。

佐天としては、状況が状況だけに構わないのだが、それでも、こういった気遣いが出来るのが上条の良いところだと思うのだ。

「知ってるよ。やり合うのも、今回が初めてって訳じゃないし」

「と言うか、昨日、長髪の魔術師を倒してくれたのも、佐天さんだ」

「るいこが!!?」

インデックスとしては、驚きを隠せない。

怪我を治療してくれた、美味しいご飯を作る人。

それが、インデックスの中の佐天で。

何より、佐天の雰囲気荒事に向いてる人間とはとても思えなかったのだ。

「私も、学園都市で魔術師と会うことがあるなんて思わなかったんだけど……」

関わっちゃったからね。

少なくとも、今回の連中と蹴りをつけるまでは付き合うよ。

まあ、教会に付き合えつてのは勘弁して欲しいけど。相性悪いから」

佐天の脳裏に浮かぶのは、今まで出会った教会関係者。

投擲剣で追い回されたり、事件の裏で糸を引いたり……録なのが居ない

対してインデックスの表情は苦し気だ。

佐天は強いかもしれない。

けれど、やはり巻き込んでしまうのに気が引けるのだ。

「……………合ってるんだよ。男と女の2人組。

少なくとも私はその2人しか見たこと無いんだよ。

けど、るいこが戦うことはないかも？」

私がここを出ていけば、魔術師は私を追って来るはずだから……………」

何かを言おうとした上条を佐天は手で制した。

「ん？ ちょっと、遅かったかな？

此処、もう、見張られてるよ。

多分、インデックスの足で逃げきるのは無理でしょ？」

インデックスと上条は息を飲む。

バレていた事に……………では無い。

それを知った上で平然としている佐天にだ。

「それに、私としても、戦えない女の子を後ろから切りつけるようなヤツを許す気は無いしね？」

こちらは、武術家としての本音だ。

魔術を使ったにせよ、あの太刀筋からみるに、かなりの使い手の筈。それほどの腕を、抵抗できない相手に使ったのが許しがたかった。

「ただ……………代わりにお願いがあるんだ」

上条とインデックスが頷く。

もとより、この状態において、2人には佐天の力を頼りにするしかないのである。

「この事は、御坂さんには絶対に内緒にして気づかれないこと。私は、裏側^{こうち}に、私の知り合いを巻き込みたくない。

魔術なんて、知らずにいられるなら、その方がいいんだから」

佐天の言葉に2人は大きく頷いてくれた。

佐天は胸を撫で下ろし……

だから、気づけなかった。

背後で眠る筈の美琴の表情が、悲しげに歪んだ事に。

佐天さんと神裂さん？

「……………と言う訳ですね、この娘はインデックスⅡメイフィールドさん。

上条さんの、異母兄妹で近々、本格的に教会に入ることになったそう。

そうなる前に、最後に兄の上条さんに会いにきたそうです。

ただ、いかに兄妹と言えど、主の教えを受ける者が男女1つ屋根の下と言うのは……………という訳で、ウチに泊まって貰った訳ですよ！上条さんは、ちょうど、インデックスさんに会いに来たところで……………」

うんうんと、頷く上条とインデックスに、疑わし気な様子の美琴。

あれから30分。

目を覚ました美琴に、佐天の説明と言う名の、オールフィクション大嘘が始まっていた。ちなみに名字は、知ってる名前を借りてきた。

「アンタ……………妹なんていたんだ？」

「あ……………はい。上条さん家は、色々複雑なんですことよ？」

内心、妻一筋な父親に土下座する上条。

まさか、息子に他所に子供がいることにされているとは思えない。

「はあ……………まあ、いいわ。なんか事情がありそうだし、とりあえず信じておいてあげる。

その代わり、もし佐天さんに手を出そうとしたら……………」

パチパチと美琴の周りで弾ける火花は……………

「その場合は上条さんが、お星様になることを約束します。勿論、物理的な意味で」

佐天の笑顔の一言で消え去った。

と言うか、上条も美琴も顔が青い。

「アンタ、間違っても佐天さんに手を出しちゃダメよ？」

「絶対、出しません」

美琴が、再度忠告するが心配の対象は上条の様だ。

上条も大きく頷いている。

主に自分の身の安全の為に。

本当に出来そうで怖いのだ。この娘の場合は。

「あれ？なんでだろ？これでいい筈なのに、凄く納得いかない」

人それを『自業自得』と言う。

「それで佐天さん。私たちの方の問題はどうするの？

……と言っても、風紀委員の情報待ちしか無い気もするけど」

「風紀委員を当てにして無い訳じゃないですけど、少し『知り合い』に頼んで、調査して貰おうかと。

初春はアレをネット上で落としたみたいだし、何時、どこからアツプされたのか解れば犯人特定も楽になると思うんで………」

美琴の質問に答えながらPCをたちあげる。

上条は、こちらの話題が気になる様だが、聞いてはこない。魔術師の件がある以上、下手に藪はつけないのだ。

もっとも、聞かれたところで、佐天は答えないが。

『幻想御手事件』は、比較的、表に近いとは言え、やはり危険なのだ。

そんな所へ行くのは自分だけでいい。

それが、佐天の本音である。

「でも、風紀委員が調べて特定出来なかったんでしょ？」

「初春抜きのこと……ですわね。」

正直、初春抜きの方風紀委員じゃ、ネット関係調べる能力は半減以下ですよ。

それで、私が知りあいにも頼もうかと……」

裏側を知る佐天から見ても、初春のPC関連の能力は高い。

いかに、学園都市と言えど、あれほどの能力を持っている学生は、そうは居ない筈だ。

となれば、今回、風紀委員に対して、ネット側からの犯人特定は期待できない。

それなら……

チャット画面を開けば、事前に連絡していた為か、その2人は既に待機してくれていた。

少し躊躇して、タイピングを始める。

『お久しぶりです。藤丸さん。サーティさん。少し力を貸して貰いたくて、連絡しました』

佐天が、『知り合い』に協力を求めるのは、これが始めてだった。

10分程かけて説明した結果、2人は驚くほどあっさりと協力を約束してくれた。

終了間際、

『響さんと、ひとしさんにもよろしく』

なんて言ったら、逆に驚かれてしまったが。

考えてみたら、彼等とそんな話をしたのは始めてかも知れなかった。

「それで、信頼できるの？その2人の腕の方は？」

「んゝ……：そうですね。あの2人が協力すれば、学園都市の全システムを掌握出来るとは断言できます」

「『どんなレベルよ（だ）……：』」

佐天のあっさりとした爆弾発言に、美琴と上条はでっかい水滴型の汗をかくのだった。

1人内容の解らないインデックスはキョトンとしていたが。

ともあれ、現状、佐天に出来るのはそこまでだ。

調べたい対象がハッキリしていれば、忍び込むなど出来るが、犯人の目星もついていないのだ。

今は待つしか無い。

不意に上条が口を開く。

「しかし、佐天さん自身といい、その『知り合い』といい、凄いな……………」

「そうね…………正直、佐天さんがその気になれば、学園都市全部とやり合っても勝てるんじゃないかな？」

おそらくは、微妙にぴりぴりしていた空気を和ませる為の言葉に、美琴も乗る。

……………とは言え、あまりな内容に佐天は苦笑気味だ。

「やだな……………それじゃあ、まるで私がメソ……………ゲフンゲフン……………」

『『メソって言った……………!!?』』

「メソって何かな？」

『『って聞いた……………!!??.?』』

素直に聞いた、インデックスに佐天は『にっこり』と笑いかける。

「インデックス?世の中、知らない方が良いことは、沢山あるんだよ?」

「わ……………解ったんだよ……………」

若干、脅えながらインデックスは頷く。

佐天の目が全く笑ってない事に気づいたのだ。

『『メソって何^だ!!』』

そんな2人の心情を他所に、その内容が会話に上ることは無かった。

「それじゃあ、私は帰るけど、くれぐれも無茶はしないこと。
それと、何か解ったら、私にも教えてね!」

景色がオレンジ色に染まる頃、美琴はそう言い残して、佐天の部屋を出ていった。

『カチャカチャ……………』

食器に箸が当たる音だけが響き渡る。

『? 味つけに失敗した……………?』

あまりの静けさに、夕飯を用意した佐天は、不安を感じながら、
おかずに箸をつける。

『おいしい……………よね?』

味つけに失敗したとは、思えない。

だとしたら、何故こんなに静かなのだろうか?

理由が思いつかない佐天が2人を見回しても、2人共、固い表情で
食事を続けるだけだ。

「なあ……佐天さん。」

さっきの話なんだけどさ……」

それが原因か。

ようやく得心のいった佐天は1人頷く。

「ダメですよ？女魔術師とは、私1人でやります」

「けど！」

「さっきも言いましたけど、相手のやり方が解らない以上、場馴れしてない上条さんは邪魔です。」

何より、相手は2人。

私が女魔術師と戦ってる間に、昨日の魔術師が来る可能性がある以上、私が戻るまでの間、上条さんにはインデックスを守って貰わないと困ります。

目的と手段を履き違えてはダメです」

そう。今回の勝利条件はインデックスを守りきる事。

こちらから女魔術師に仕掛けるのも、その一環に過ぎない。

つまり、戦場になる場所にインデックスを連れていくのは論外だし、インデックスを1人にするのもだ。

「けど！それだと最悪、佐天さん1人で2人を相手にする事に……！」

「私としては、その方が楽なんですけど……多分、それは無いです」

昨日の魔術師を足手まといでは無く、戦力とするレベルなら、まず負けない。

けれど、二度程見た、あの相手は………強い。
1人で仕掛けるのは、守りながら勝てる自信が無いのもあるのだ。

「とーま………もうやめよう。
多分、るいこが言ってるのが正しいんだよ」

「インデックス………」

インデックスとて、佐天を1人で行かせるのを納得出来ている訳ではない。

ようやく巡り会えた、『優しい人』を、どうして危険な場所に行かせたいものか。

けれど、冷静な自分が。

優秀過ぎる頭脳が答えを出しているのだ。
それが最善だと。

「けど！………けど、無茶はしないで、帰って来て欲しいかも！！
るいこが、私の為に、無理する必要は無いんだよ！！」

「インデックス。良いこと教えてあげようか？」

インデックスの言葉に、佐天は薄く笑う。

こんな時に、こんなことを思い出す自分は随分と甘くなったものだ
と。

「相手の事を名前で呼ぶのは友だちの始まりらしいよ？」

つまり、私は、インデックスの友達だから………頑張らなきゃだね？」

「!?!?………」

否定しようとして。

そんな事はないのだと言おうとして、インデックスには、それが出来なかった。

出会ってたった1日。

それだけで、自身を友達と呼び、危険に飛び込んで行く人の言葉を、どうしても否定出来なかったのだ。

「さて!それじゃ、そろそろ、いってきます!」

立ち上がり危険へと向かっていく佐天を、上条もインデックスも止められない。

「……………気をつけて」

出来たのはインデックスの、そんな一言だけ。

上条は、止めることも、認める事も出来ずただ見送るだけだった。

「はぁ……………相変わらず、魔術師と言う連中は、用意周到と言うかなんて言うか……………」

佐天がやって来たのは、駅前のターミナル。

夏休み中のこの場所は、完全下校時間を過ぎても、それなりの人が行き交えっている筈である。

にも、関わらず現在、その周辺は閑散とした風景が広がっていた。

「人払いの結界……この規模はやり過ぎじゃない？」

「相手が相手でしたので。

それなりの規模にさせて貰いました」

佐天の問いかけに現れたのは、1人の女性。

ジーパンを片方バツサリ切り、Tシャツの裾を結ぶと言う、かなり奇抜なファッションであるが、10人に問えば10人が美人と答える。

そんな容姿の女性だった。

「傾奇者？」

ただまあ……ファッション的な意味で佐天がそう呟いたのは仕方無いかと。

「誰がですか！

一応、聞いておきたいのですが……」

黙って、あの娘を渡してくれませんか？」

「答えが解ってる問答は無しにしようよ。

その気があれば、昨日の魔術師の地点で渡してるよ」

溜め息混じりに答えた佐天に、女魔術師は視線を移す。

場所は駅前のベンチ。

そこには。

「私としては、これ以上、彼女の様な怪我人を出したくない」

「……………」

言葉が出ない。

喉がカラカラに渴く。

だって、そこにいたのは。

『くれぐれも無茶はしないこと』

とっくの昔に帰った筈の。

「急所は外してあります。

命に別状も無い筈です。

彼女は、貴女達の中でもトップクラスの実力者なのでしょう？
諦めて……………」

ボロボロに傷ついた美琴だった。

「……………す」

「え？」

「お前を殺す！！」

佐天さんと神裂さん？（訂正）

悲しかった。

隠し事をして、危険に飛び込んで行って……
何時も通りに笑うあの娘が。

そんな状態になっても頼って貰えない自分が。

解ってはいた。

アイツの前で話すとき、あの娘は、決して事件を知られる様な決定的な言葉を口にしなかった。

つまり、必要以上に他人を事件に関わらせたくない。

それがあの娘の気持ちなのだろう。

けど……けれど……

私はそんなに頼り無いだろうか？

危険へと飛び込んで行くとき、背中を任せてすら貰えないのか。

だから……

「私の友達にちよっかい出さないで貰える？」

気がつけば夕暮れのビルの屋上で、奇抜な格好をした女性と対峙していた。

「あああああ!!!!」

凄まじい速度で接近してくる少女に、魔術師、神裂は自身の失敗を悟った。

出来る事なら、無用な戦闘は避けたい。

そう思っていたからこそ、あの屋上で仕掛けてきた彼女を、ここへ連れてきたのだ。

今の彼女の姿を見れば、戦意を喪失してくれるだろうと思って。

結果は……

不用意に突っ込んで来る姿を見れば明らか。

自身の迂闊さを呪いながらため息をひとつ。

こうなれば、なるべく少ないダメージで戦意を喪失して貰うしかない。

「七閃！」

咻くと同時に、腰の刀を操る。

極細のワイヤーが、向かってくる少女のすぐ脇を疾る。

『これで足は止まる筈』

その上で再度説得を。

だが、七閃の発てた砂煙。その向こうに人影。

「バーン!………ナックル!!!!」

跳び出すと同時に、拳が神裂を襲う。

『ガキイイ!!』

咄嗟に盾にした七天七刀が、鈍い音をたて同時に重い衝撃。

「ぐうう!!」

あの少女のどこにそんな力が?

だが、神裂にそんな事を考える時間は許されない。

彼女の拳が届く範囲。

それは、死地を意味しているのだから。

「火中天津……………」

聞こえる少女の呟き。

即座に距離を取ろうとして……………僅かに遅い!

「甘栗拳!!」

「……………つつう!!」

怒涛の勢いで繰り出された、少女の拳。

その幾つかを避け、大半は距離をとった為に、空を切った。

だが、身体に残る幾つかの熱さ。

佐天の拳は確かに、神裂を捉えていた。

再度開いた少女との距離。

油断無く相手を睨みながら神裂は思考する。

油断した？

それはある。

確かにステイルを一度退けた相手らしいが、所詮は年端もいかぬ少女。

自分の相手になるとは思っていなかった。

では、このダメージは油断故のものか？

否。最初の一撃で、なにより、七閃が側に疾ったのを気にも止めず、迫ってきた地点で彼女がただ者ではない事は確かだった。

つまり、彼女は……………

強い。

覚悟を新たに、相手を睨みつけた時。

目の前の少女が笑っているのに気がついた。

「……………なにを……………」

「……………アンタ達は絶対にしちやいけないことをした」

ゾクリと背中走る悪寒。神裂にはそれが何なのか解らない。

「私の中に眠っていたモノを起こしたんだ。
生きて帰れると思うな……………」

「!?!? 七閃!?!」

身体か沸き上がる何かに抗う様に、攻撃を仕掛ける。

今度は少女に向けて。

手加減はしない。

出来る筈など無い。

アレは少女の形をした何かだ。

佐天の脚が十字を描く様に動き……その中央を蹴り抜いた。

足を中心に竜巻が起こる。

佐天を狙って動いていたワイヤーは、吸い寄せられ互いに弾き合い逸らされる。

疾走する佐天。

同時に、神裂も七天七刀に手をかける。

もう、躊躇は無かった。

目の前のアレは、自分と同質か、それ以上の化物だ。

「唯閃!!」

己の身体への負担を無視して放つ。

渾身の一撃は、確かに佐天を捉えて……その胸元を切り裂いた。

だが……

『浅い!!』

放つ直前、佐天が後ろに跳んだのだ。

再度、迫る佐天。

同じく再度、『唯閃』を放とうとして、神裂は佐天を見失った。

「ぐう!!」

「残影拳!!」

見失った相手は自分の懷で肘を突き立てていた。

瞬間力を失う身体。

佐天はその隙を見逃さない。

鉤突き、肘打ち、両手突き、手刀、貫手……

撃つ打つ討つ……

武術の素人から見れば、それはただの連撃。

が、佐天にとって、これは対人戦の切り札の1つだ。

一度入れば、相手に抜け出す術は無い。

「ぐううううう!!」

現に神裂は成す術なく連撃を受けている。

一撃一撃は軽い。

先程までに放たれたものとは比べる迄も無いだろう。

だが……

連撃を抜け出そうとした、その先に必ず佐天がいるのだ。

「グウ!!」

覚悟を決め、防御を捨てる。

同時に入る、側頭部への鋭い一撃。

だが、構わず七天七刀を振るう。

聖人と言われる肉体を持つ、神裂だからこそなせる荒業だった。

「唯閃!!!」

同時に佐天が跳び退く。

が、その手からは大量の血が流れている。

「今のをかわしますか……………」

あのタイミング。

神裂は取ったと半ば確信していた。

だが、目の前の少女はまるで細胞が反応したように、避けて見せた。

「そっちこそ、煉獄から抜け出すなんて、どんな身体してんのよ？
普通死ぬわよ？ あんな抜けだししかた？」

軽口を叩き合いながら、場の空気は弛まない。
互いに次が、最後の一撃になると悟っていた。

張り詰めた空気が動こうとした瞬間。

『ボン!!!』

2人の間を一筋の炎がかけた。

「ステイル!!?」

割って入ったのは昨日の魔術師。
眼前の魔術師が驚いている事から、予定とは違うのだろう。

「なんのつもり?」

玉碎覚悟の救援のつもりなら、容赦するつもりは無いが、炎の魔術師は既に両手を上げている。

「少し話をしたい。聞いてくれないか?」

双方にとって損ではない事を約束しよう」

女魔術師を捉えたまま、

「話さない」

先を促す。

このタイミングで割って入ったのは、女魔術師の事を思っていた事だろう。

畏の目も無いわけでは無いが、その場合は畏事、蹴散らす。

こちらが話を聞く事を了承したのを受けて、女魔術師が、刀から手を離れた。

同時に佐天も構えを解く。

とはいえ何時でも、離脱は出来るように、してあるが。

「まず最初に、誤解の無いようにしておきたいんだが……
あの娘（美琴）に仕掛けたのは、僕たちからじゃない。」

あの娘が神裂に仕掛けてきたんだ」

「な！！？」

驚きの声をあげたのは佐天。
てっきり、部屋から離れたところを、魔術師が襲ったと思っていたのだ。

『聞かれていた！？』

可能性があるのは部屋での会話。
だとすれば、今の美琴の怪我は自分のせいだ。

「それと……見た目は派手だが、実際には大したダメージは無いよ。

どれも、2～3日で治る程度のものだ」

ステイルの言葉に神裂は頷く。
能力こそ強大だったが、戦闘し慣れてない相手だった。
それくらいの手加減はできた。

「それで、僕たちの目的なんだけど………」

ステイルは語る。

自分達の正体と目的。

インデックスの能力とそれによって起きる悲劇を。

「話を纏めると、インデックスには絶対記憶能力があつて、その中に10万3千冊の魔導書が記憶されてる。

そのせいで、インデックスは1年に1回記憶を消さないと死んでしまう。

で、貴女達は、過去のインデックスのパートナー。

彼女を狙ってたんじゃないくて、守っていた……と」

頷く2人を見て首を傾げる佐天。

話は解った。

それが本当なら、敵対する理由はない。

美琴の怪我も本当に大した事は無かったし、なにより、それは自分のミスだ。

しかし、引っ掛かる。

10万3000冊覚えたから、他の記憶を消さないと1年で死ぬ？
そんなことが有るのだろうか？

「ん………？」

「あんた達ばか？」

佐天が悩んでいると声をかけて来たのは……

「御坂さん!!?」

美琴だった。いつの間にか気がついていたらしい。

「なにを!! 私たちがどんな気持ちで!!!」

憤慨する神裂をステイルが諫める。

美琴は小さく肩を竦め続ける。

「人間の脳みそってもっと優秀よ。

少なくとも10万冊程度記憶した位で、パンクなんかしない。

嘘だと思うなら、明日、脳の専門家に一緒に聞きに行っただけでもいいわよ?」

「そんな!?!」

息を飲むステイル。

だが反論もある。

「でも、あの娘は確かに」

「ん?そこは、教会上層部の策略じゃない?

呪いかなんかで、一年に一回記憶を消さなきゃいけないようにして
いて、反逆を防いで、ついでに貴女達って言う番犬もつけれる。

この辺の陰険さが如何にも教会ばい気がするけど?」

答えるのは佐天だ。

佐天の意見は、彼女の教会嫌いがあってこそだが、そう考えれば、
辻褄が合うのも確か。

「しかし、だからと言ってどうすればいい?

期日はもう3日後なんだぞ!!!」

ステイルの言葉に神裂の表情も厳しい。

確かに後3日では、対処は厳しいのだ。

「んゝ…………手が無いわけじゃ無いけど……………」

佐天の歯切れは悪い。

だが、それにステイルと神裂は食いついた。

「「何だ（です）！？」」

「あんまり、借りを作りたい相手なだけだなあゝ」

佐天が提案したのは国内にいる、とある優秀な魔術師のアイテムを借りるというもの。

「多分、インデックスに掛けられてるのって、魔術的な呪いとか契約でしょ？」

それなら、それを破棄出来るアイテムを使えばなんとかなるんじゃない？」

佐天の言い分に、啞然とする2人だが、その魔術師の住む場所を聞いて納得した。

教会、もしくは魔術に身を置くものにとっては、曰く付きの場所だったのだ。

「アイテムは…………私が借りを返せって言えば貸してくれると思う。問題は、インデックスへの説明なんだけど……………」

『説得できる？』

その瞳は問うていた。

神裂とステイルは力強く頷く。
彼女の為に生きて来た2人だ。
その為ならなんだってするだろう。

インデックスへの説明は、翌朝、佐天付き添いの元で行われる事になった。

佐天は今、美琴と2人家路の最中だ。

「あのさ…………ごめんね？足…………引っ張っちゃって……………」

「そんな！！私の方こそ巻き込んでしまっ…！！？」

2人して頭を下げ合う。

「私さあ…………結構強い自信あったんだ。
だから、『なんで頼ってくれないの？』って思ったんだけど…………
全然ダメだね。歯も立たなかった……………」

「いえ。御坂さんは強いですよ？

あの男の魔術師の方には勝てたと思いますし。

経験を積みめば…………とも思います。

ただ…………私はあんまり、こういった事に、御坂さん達に関わって
欲しく無いです」

「なんで？って聞いてもいいのかな？」

「裏の世界は人の命が軽いんです。
だから、簡単に殺す側にも殺される側にもなります。

その両方を、私は私の友達にして欲しく無いです」

「私達に言わせれば、佐天さんにもして貰いたくないけどね……………」

「善処します」

きっと、それでも、この娘はイザとなれば戸惑わず飛び込んで行くのだろう。

だから、強くなろう。

この娘の背中を守るくらいに。

美琴はそう決意するのだった。

佐天さんと作戦会議

結局、その日の美琴は佐天の部屋に泊まって行く事になった。

時間は既に遅かったし、あのまま帰って、白井に心配をかけたく無かったのだ。

「ただいま」

普段は使わない言葉を使って玄関を開ける。

「るいこ!!」

同時に飛び込んで来たのはインデックス。

随分と不安だったのだろう。

強く抱き締められた。

「良かった! 無事だったんだね!」

インデックスの頭に手を伸ばす。

先程まで流れていた血は既に止めたし、洗い流した。

さらりと、絹のような手触りがした。

「大丈夫だよ。佐天さんは強いんだから!」

その言葉に、ようやくインデックスも笑ってみせてくれた。

「良かった! 無事だっ……た……た……」

続いて出てきた上条は、変に言葉をきり、突如、視線を逸らした。

「?」

不信に思って自身の身体を見下ろす。

異常は無い。身体には。

そう。身体には。

これは、佐天のミスであり、その生き方による弊害だった。

神裂と死闘において、その刃は、佐天の胸部を掠めた。

その傷は癒した。

だが、服はそのままなのだ。

つまり………

「きゃあああああ!!」

お約束である。

下段、中段、上段。

流れるような動きで、佐天の脚が、2発づつ。

計、6回の蹴りを放つ。

「だあああああ!!」

避ける術も無い上条は、見事に宙に浮き、その攻撃の全てを受けた。
最後の1撃で、吹き飛ばされ………

その先には、インデックスがいた。

「だよ!」

咄嗟に。その身を守る為、インデックスは上条を押し返した。
佐天の方に……………

「つて! えええ! ?」

佐天の混乱はまだ収まっていない。

7、8、9……更なる蹴りが、上条の身に襲いかかる。

『コンボが繋がりました。 1 2 H i t』

だが、上条の不幸はまだ終わらない。

再び蹴り飛ばされた先には……………

「ええ! ! ?」

美琴がいたのだ。

飛び掛かってくる上条（美琴視線）に、咄嗟に電撃を放つ。

「N o o o o ! !」

頼みの綱の右手も間に合わず、弾き跳ばされた先には、再び佐天。

「! ! ! ! ! ? ?」

何度も戻ってくる上条に、佐天の羞恥はピークに達し、先程の倍の蹴りを放っていた。

1 3、1 4、1 5、1 6……

『コンボが繋がりました。24Hit』

吹き飛ばされ、見事に頭から着地を決めた上条。
最期の呟きは…………

「ふ…………不幸だ…………」

いつも通りだった。

いや？死なないけどね？

「まったく！アンタは本当にまったく！！」

「とーまは、エッチなんだよ！？信じられないんだよ！？」

上条が正座させられ、若干理不尽なお説教を受けている隙に、着替えを済ませる佐天。

「上条さんが悪いのでそうか？」

あ…………お説教の勢いが増した。

佐天が着替え終えた時には、力尽きた上条と、鼻息の荒い、シスター&ビリビリコンビの姿がそこにあった。

多少、悪い気がしないでは無いが見られたのは事実で恥ずかしい佐天もフォローはしない。

かくして、上条は翌日の朝まで打ち捨てられたままになるのだった。

翌朝、佐天の部屋にやって来た2人の魔術師（神裂とステイルと名乗った）。

咄嗟に警戒するインデックスと上条を宥め、事情を説明する。

「つまり、この2人はインデックスの為に動いてたって訳か。けど……………」

「上条さん。気持ちには解りますけど、絶望の淵に立たされた時、皆が皆、上条さんや御坂さんの様に戦える訳じゃ無いですよ。諦める人も、流される人もいます。

むしろ、そういう人の方が多いんです。

それに、あの2人をどうするか決めるのは、私や上条さんじゃない筈です」

黙ってステイルと神裂の話を聞いていたインデックスは、深々と頭を下げていた。

「ごめんなさい」

その声は震えていた。

「覚えて無くてごめんなさい。

私のせいで、2人はずっと辛い想いをしてきたんだよね？」

上げられた瞳には、涙が浮かんでいた。

「それなのに私は、2人から逃げて、今も2人の事思い出せないん

だよ」

無自覚のまま他人を傷つけて、それを知っても為す術を持たない。優しい少女にとって、それはあまりに辛い現実だった。

「気にしないで下さい。

私たちも随分と貴女に酷い事をしてきました。

貴女の為………と言いついてきましたが、謝るのは私たちの方でしよう」

返したのは神裂だ。

おそらくは、この時を恐れながらも望んでいたのだろう。その表情は悲しげで、だが笑みが浮かんでいた。

もう1人の魔術師。

ステイルは素直に慣れないのだろう。

煙草に火をつけようとして………

「ここ禁煙だからね？」

佐天の一言に阻まれ、煙草を箱に戻し握り潰した。

それでも、抱き合うインデックスと神裂を見る視線は優しげだったが。

少しの時間を開け。

当人達の感情が落ち着くのを待って切り出す。

「さっき、相手方には連絡しておいたから、今日、明日にはアイテムが届く筈だよ。

頼りきりになるのは、気が退けるけど、魔術師じゃない私にはこれ以外じゃどうしようも無いし」

やれやれと、ため息をつく

相手はこれで、貸し借り無しだと言っていたが、佐天的には、大きな借りを作った気分だ。

まあ、借りを作る程度で、インデックスの記憶を守れるのなら安いとすべきか。

「それについてなんだが。僕から提案がある。
インデックスを当日まで預からせて欲しい」

「な!!!??」

面食らっているのは上条。

対して佐天と美琴は、冷静なものだ。

「理由くらいは、教えて貰いたいけどね?」

「君の言うアイテムを信用しない訳じゃないが、相手が魔術だというなら、ギリギリまでは、正攻法での解呪を試したい。」

それに万が一、今回、解呪が出来なかった場合。

彼女を縛っている魔術の正体さえ解っていれば、1年後までに、必ず彼女を救ってみせる!」

最後まで最善を目指し、同時に、最悪の事態も想定する。

その姿勢は佐天の共感できるものだった。

「わかった。インデックスもそれでいい？」

インデックスが戸惑いながらも頷く。

納得出来ないのは、上条だ。

魔術師達の事情は解った。

だが、それを完全に信用はしていないのだ。

「待ってくれ！そんなことして、こいつ等がインデックスを狙う魔術師だったら！！」

「はい。だから、上条さんはインデックスと一緒に、向こうについて行ってください。

それで、おかしな動きをするようなら連絡を。

インデックスも、いきなり覚えていない人達と3人になるより、その方がいいでしょうし」

構わない？と視線で問えば、神裂が頷く。

上条も納得したのか、腰を下ろした。

実は、佐天は既に2人をさほど疑っていない。

2人のインデックスを想う気持ちに嘘はないと感じているからだ。

上条を向こうにいかせるのは、インデックスの為。

そして、上条をこちらの事件に関わらせない為だ。

その実、佐天から見れば、上条と美琴は似ているのだ。

優しすぎて、お節介で甘い。

そのせいで、余計な事に首を突っ込む。

昨日、美琴をこの事件に関わらせてしまった事で、上条の扱いにも

慎重になっていた。

インデックスと上条、魔術師2人が部屋を出ていったのは、それから10分程してからだった。

しばらく、今後の身の振り方等を考え、とりあえず、風紀委員に新たな情報がないか確認しようとしていると、佐天の携帯にメールが届いた。

「御坂さん。白井さんに連絡を!!」

『幻想御手』を配布した人、特定出来ました!!」

送られて来たメールには、犯人の顔写真。

名前、職業、職場、現住所。

『幻想御手』をアップした場所と、その日時。

おまけに、その時の防犯カメラの映像まで、こちらのPCに送ったらしい。

犯人本人のPCはネットから遮断されていた為、覗けなかったらしいが。

証拠としては文句は無い………無いのだが………

「ねえ?あの人達、どれだけハッキングしたの?」

「そこは考えない事にしましょう………」

頼んだ私が言うのもなんですが、少し寒気がしました………」

外界より20年先を行くと言われる、学園都市のセキュリティは固い………筈なのだが。

あの2人には、ザル同然らしい。

「行こう！佐天さん！！」

玄関を飛び出す佐天と、美琴。

本来なら美琴には休んでおいて貰いたいところなのだが……

今回はNOとは言えない。

初春の事である以上、美琴も無関係では無いし、何より、相手が科学側である以上、美琴の能力が役立つかもしれない。

佐天は駆け出すと同時に、美琴を抱き抱える。

「へ？」

呆氣にとられる美琴。

佐天は構わず地を蹴る。

「ちょっと揺れますから……舌嚙まないで下さいね！！！」

突如、遠ざかる地面。

佐天が跳んだのだと美琴が悟るのは、僅かな浮遊感の後の落下中。

「きゃあああああ！！！」

美琴の絶叫を撒き散らせながら、犯人の職場だという研究所を、文字通り、『一直線』に目指すのだった。

佐天さんと木山先生？

「ひゃあああああ！！！！」

跳ぶ、跳ぶ、跳ぶ。

屋根から屋根へ。

ビルの屋上から屋上へ。

慣れている佐天には何でも無いが、初めてそれを経験する美琴には、さながら、絶叫マシーン。

しかも、安全性の保証は無く、安全ベルトは佐天の腕だ。

犯人、『木山春生』の職場。

『A I M解析研究所』は、佐天の寮から、繁華街を挟んだ反対側。必然、人と車が多い。

故に、佐天は道路では無く、ビルの上を走り跳ぶ。

佐天の腕の中で叫ぶ……………

「……………」

……………気絶している美琴には気の毒だが、美琴達が使えうる『移動手段』としては、最速なのだ。

「御坂さん！御坂さん！！」

佐天が腕の中の美琴が、気絶しているのに気づいたのは、研究所についてからだった。

てつきり、途中で慣れて叫ばなくなったものだと思っていたのだ。

慌てて、美琴を揺り動かす佐天。

よく見ると、半透明な美琴が身体から抜け出し、これまた、半透明な天へと続く階段の前へ立っている。

「逝ける!!」

「逝くなあ!!?」

咄嗟に、何処からともなく取り出したハリセンで、半透明な方の美琴を叩き、身体へと戻す。

そんな風にバタバタしていたものだから、見逃したのだ。

佐天達が研究所に着くのと入れ違いに、研究所から出ていった一台の車を。

それに乗っていた人物を。

「風紀委員です!」

「いいっ!」

研究所の入口を抜け、受付の前で美琴がどうしようか思案していた時。

（佐天も美琴も協力者ではあっても、一般人なので、なんの権限も持たない）

佐天のとった行動に、美琴は奇声をあげた。

佐天はあろう事か、ポケットから、風紀委員の腕章を取り出し、受付の人間に見せたのだ。

身分詐称である。

慌てる受付と、美琴。

佐天は飄々としたまま告げる。

「研究者『木山春生』に、幻想御手配布の容疑で令状が出てます。研究室への案内を」

堂々とした態度である。

事実、佐天の言っている事は嘘ではない。

白井へ、佐天からメールの転送。

もっと言えば、美琴の連絡の地点で、これは降りている。

ただ、それを行う権限が佐天には無いだけだ。

「大丈夫なの？」

慌てて受付が上司への確認へ行った隙に、小声で美琴が訊ねる。

「さっき、固法先輩から既に白井さんも、こっちに向かっているってメールがありましたから。

なんとかありますよ！」

そのメールには

『だから、くれぐれも無茶はするな』

という文面があったのだが。

佐天は都合よく、そこを見なかった事にしたらしい。

「と言うか、それ（腕章）どうしたの？普通手に入らないわよ？」

「初春のを借りたんです。

この事件を解決するまで、私は初春の代わりですから」

それは、覚悟の表れだ。

もったも、厳密には風紀委員で無いものが、腕章を使用するのは勿論、所持するのも禁止なのだが。

「っ！！逃げられた！？」

案内された部屋は既に無人だった。

研究所内部、どこにも木山の姿は無く、木山の車も消えていた。

佐天達は知るよしも無いが、木山は『幻想御手』に手を着けた時から、アンチスキルに網を張っていた。

自分への令状が出ると同時に察知出来るようにしてあったのだ。

佐天が風紀委員に連絡を入れようと携帯を手にとると、狙ったかというタイミングで白井が入ってきた。

美琴からの連絡を受けてから動いたにしては早い。

流石はテレポーターと言った所か。

「木山の車がバイパスを北上しているのを、監視衛星で確認しましたわ。

アンチスキルが封鎖線を張りましたから、じきに……………」

「佐天さん！？」

白井の言葉の終わりを待たず駆け出す佐天。

「あの娘はもう!!」

追いかけてようと駆け出しかけて、美琴は足を止める。
追いかけていつてどうする？

犯人の木山は、能力者でも無いただの研究者だ。

アンチスキルだけでも充分である所に、佐天まで向かってる。
戦力的には充分だろう。

ならば、自分のすべき事は……

「黒子！風紀委員に木山のPCを調べる許可を貰って!!
どんな罠があるか解らないから、私が能力使って調べるわ！」

そう。『幻想御手』による昏睡者を復活する術が、ここに無いか調べる事だ。

木山が研究者である以上。

まして、『幻想御手』なんてヤバイ物までに手を着けた状態で、研究成果を他人に見られる状態にしているとは思えない。

ならば、それを確実に引き出すために、『電気使い』の最高峰。
そこに位置する自分がやるべきだ。

「犯人の確保は佐天さんと、アンチスキルに任せて……
私達は、初春さんを確実に取り戻すわよ!!」

「お姉様………はい!!」

走る。走る。走る。

白井に聞いたバイパスをひたすらに北を目指し走る。

佐天は、車やバイクより速く走れる。

……が、それはあくまで、『一般道』での話である。

大きな道で、車が能力を十全に発揮するなら、佐天はそれに追いつけない。

つまり、このまま走っても木山に追いつくのは、アンチスキルの封鎖線と言うことになる。

木山はただの研究者。

アンチスキルに捕まれば、それで終わりだろう。
それならばいい。

初春をあんな目に遭わせた奴を、自分の手で一発ぶん殴りたい。

そんな思いは勿論あるが、事件が無事に解決し、初春が目覚めます。
それが叶うなら、他はどうでもいいのだ。

だが、胸騒ぎがするのだ。

それは、佐天の女としての勘であり、武術家としての勘でもある。

『このままじゃ終わらない』

ただの勘である。

だが、確信めいた何かを感じ、佐天は道を急ぐのだった。

アンチスキルが引いた封鎖線は、地獄絵図と化していた。

味方が操られ、火が舞い、風が切り裂く。

アンチスキルは予想すらしなかったのだ。

研究者である木山春生が、能力を使うなど。

だが、それを責める事は出来ない。

能力者は学生。

これは、学園都市における常識であり、研究者でありながら能力を

行使している木山が異常なのだ。

しかも、木山は明らかに複数の能力を使用している。
能力は1人につき1つと言う常識さえも無視しているのだ。

そんな非常識の塊と化した木山に、対一般人用の装備しか持たなかったアンチスキルは、数分の時を持って、沈黙を余儀なくされた。

「あっ……………あ……………」

そんな風景に、アンチスキルで唯一氣を失っていない人間『鉄装綴里』は、言葉を失った。

そして今、視線が木山と……………合った。

「すまないね。手荒な真似はしたく無いんだが……………」

邪魔をされる訳にはいかないんだ。

少し氣を失っていてくれ……………」

抑揚の無い。

ともすれば、優しげにさえ聞こえる声で告げられ、その手が自分に向けられる。

「ひ!？」

恐怖で引きつった身体は、銃の引き金を引くことも出来ず、硬直するだけだった。

木山の手が光り……………」

思わず目を閉じる

『やられる!？』

そう思った。

だが、いつまでたっても衝撃はこない。

「君は何者だい？」

木山の声。

恐る恐る開いた瞳に映るのは、白いシャツとジーパン姿の少女の姿。

「風紀委員……代行よ」

風紀委員の腕章を手にも、少女は静かに宣言した。

佐天さんと木山先生？

「……………1つ聞いておきたいんだが……………黙って私を行かせてはくれないか？

出来れば、手荒な真似はしたく無いんだ……………」

自分の行く手を遮る少女に、木山は投げかける。

無駄であろう事は、百も承知している。

わざわざ、こんな所まで自分を追って来た相手が、こんな言葉ひとつで諦めてくれる筈がない。

それでも、自分の目的達成の為に払われる犠牲は少ない方がいい。

木山のそんな気持ちが言わせた言葉だった。

「愚問ね。そのつもりなら、こうやって立ち塞がったりせずに、貴女が去った後に、怪我人の回収と、アンチスキルへの再連絡をするわ。」

貴女こそ、大人しく投降する気は？

既に礼状が出た以上、学園都市の何処に行っても逃げ場なんて無いわよ？」

少女の返事はやはりNOだ。

そして、少女の投げかけに木山も薄く笑う。

「それこそ愚問だろう？

投降する意志があれば、アンチスキル相手にこんな真似してないさ」

「そりゃそうか……………」

小さく嘆息し、少女は構えを取り、木山も身構えた。
言葉でのやり取りは終わり破綻した。
ならば、これより先は力にて己の分を押し通すだけだ。

「木山を、ここから切り離します。
その間に、怪我人の収容と応援の要請を」

張り摘めた空気の中で木山と対峙したまま、佐天は自分の背後にいる筈の、アンチスキルに話し掛ける。

「無茶よ！今の木山は異常よ！！
貴女がどんな能力者でも……………」

「無茶でも何でもやるしかないし……………
何よりも私は……………
最初から！アイツを殴りに来てるのよ！！！！」

叫びを最後に、佐天は駆ける。
狙うは、木山の顔面。
愚直なまでに真っ直ぐに、繰り出された拳は、木山の前に壁になったアスファルトへと吸い込まれる。

「身体能力を強化するタイプの能力者かい？
大した速度だったが、それぐらいでは、今の私には！！！！？」

木山に驚愕が走る。
能力で分厚い壁になっていたアスファルトに亀裂が走ったのだ。
亀裂は徐々に数を増やし……………壁が砕けた！

「な！！！！？」

驚愕に木山の動きが止まる。

いくら、人体を能力で強化しようとも、素手でアスファルトの壁を砕くなどバカげてる。

ニヤリと笑う佐天。

そして、右手を大きく振り上げ……………

「すごいパンチ!!」

学園都市に入ってから、何度も試合を挑んでくる相手の真似をしなから、地面に叩きつける。

木山の能力によって操られ、薄くなっていたアスファルトを軽く破り……………

その下の、鉄骨やコンクリートさえ撃ち破り、地面へと大きな穴を開ける。

支えとなる地面を失えば、身体は落下を始める。

次なる地面は、数十メートル下だが、能力を使える木山は勿論、佐天も問題無い。

タン！と軽やかな音をたて着地する佐天と、物音すらたてずに降り立つ木山。

「なるほど。私をアンチスキルと切り離すのが目的か……………」

先ほどまで自身が居た場所を見上げる木山。

ホンの一瞬で随分と距離が出来ていた。

「さすがに、あれだけの人数を庇いながらは戦えないしね。」

まあ……それを気にしてたのは、私だけじゃ無いみたいだけど？」

「なんの事かな？」

木山は惚けるが、佐天は気がついていた。

穴が空いた瞬間。

木山は、その気になればあの場に残れた筈なのである。

勿論、それは佐天にも言えることだが。

だが、木山と佐天では立場が違う。

アンチスキルを気にしなければならない佐天と、気にしなくて良い木山。

木山は、自分に有利な場所を選ぶなら、あの場に留まるべきだったのだ。

佐天はそこまで考え、木山をこの場所へ引きずり込む算段をしていたのだが、それを使う必要は無かった。

先程の自分への言葉といい、今の行動といい。

木山は随分と甘い犯罪者だった。

「もう一回聞いとくけど、投降する気は？」

「くだいな。私にはどうしても、成さなければならぬことがある。ここにきて退くことなんてできないよ……」

それでも、譲れぬものはあるらしい。

そして、それは佐天も同じなのだ。

「そう……じゃあ、力づくで捕まえて、初春の目を覚まさせる！
！」

「やれるものなら！！」

互いに譲れぬ、大切な者をかけた戦いが始まった。

「はあああ!!」

場所を変えてからの木山は一気に攻勢に出た。

他を気にする必要がなく、能力を行使できる。

なるべく他者を傷つけない。

そんな木山にとっては、佐天の行動は、渡りに舟だったのだ。
だが、

「ちいい!!?」

避ける、避ける、避ける。

木山が放つ、火を水を石を雷を。

飽和攻撃とも言える、木山の攻撃は、ひとつとして佐天を捉えない。
そして、それこそが、木山が攻勢を余儀なくされている理由である。
一度目の接触で、木山は佐天の速さを目の当たりにしている。

手を弛めれば、即座に懐に入る事を許す。

木山の手札の中には接近戦で使える能力もあるが、彼女相手に通用
するか確信は持てなかった。

故にこそ、接近させずに勝つ。

彼女が『身体強化系』の能力者である以上、接近戦にならなければ、
自分の勝ち揺るがないのだから。

ひとつ。

木山は大きな勘違いをしている。
だが、それはやむ終えない事だ。

学園都市において、力とは能力。

それが、常識なのだ。

そして、木山は、今、その常識を覆した能力を手に行っている。
どうして、目の前に立つ相手が、今の自身を越える『非常識』等と思おうか。

木山の能力の行使。

その影響を受けたごみ箱が倒れる。

溢れ出たのはアルミ缶。

それを見て、木山の脳裏に、この膠着状態を脱する策が浮かんだ。

念動力でアルミ缶を操作する。

気がついた少女が、足下の小石を投げ迎撃する。

小石にぶつかり、念動力の束縛から逃れたアルミ缶は大地に堕ちると、その場で形を歪ませ爆発した。

1つ、2つ、3つ。

驚異的な勢いで迎撃されていく、アルミ爆弾。

だが、それは構わない。

それは、注意を引くための囷なのだから。

その為に、わざわざ『幻想御手』が引き起こした事件の中でも、一番目立った能力を使ったのだから。

4つ、5つ、6つ。

少女の注意が完全にアルミ缶に移り、足が止まる。

この状態でも、生半可な攻撃では彼女は避けて見せるだろう。
だが、突然、真横に爆弾が表れたなら？

手にしたアルミ缶（爆弾）を、跳躍させる。
舞い上がる土煙。

「今の私相手によく戦ったよ。
将来有望な能力者だ……………」

決着はついた。

アンチスキルの増援が来る前に離脱しなくては……………」

そんな木山の想いは……………」

「ひとつ教えておいてあげる」

自身の真下から響いた声で……………」

「素人の下手な作戦は敵に逆に利用されるわよ？」

打ち消された。

驚愕に目を見開く木山。

棒立ちになった木山の顎に、佐天は拳を撃ち抜いた。
ふき跳び地面へと倒れ伏す木山。

「よし！一発ぶん殴った！！」

佐天はスッキリとした表情だ。

そして、その身体には、ひとつの傷も無かった。

「な……………なぜ……………」

よろよろと身体を起こしながら木山は問う。

あのタイミング。

完全に意表をついた攻撃を避けれるとは思えなかった。

「貴女、素直すぎるのよ。」

攻撃するときは、常に目で追う。

新しい能力を使うときは態度にでる。

だから、全部避けれるし、捌ける。

……で、そんな貴女が『量子変速』を使ってからはあからさまに様子が変だった。

これは、なにかあるな……ってね。

だから、誘いに乗ってみたのよ。

まあ、流石に爆弾のテレポートは焦ったけど、何時でも跳べる様にしてたから、ギリギリセーフ……

で？まだやる？

正直、貴女相手なら100回やっても負ける気はしないけど？」

出来の悪い教え子に、説明するように人差し指をたて解説する佐天。その態度は余りに余裕があって……

今までの戦いがまるで本気で無かった事を木山にも悟らせた。

勝ち目は無い。

木山とて、ここまで本気でやっていたかと言われればそうではない。

殺さぬ様に最低限の手加減はしていた。

だが、逆に言えばそれだけだ。

殺さぬ様にはしていたが、彼女を捉える為には死力を尽くしていた。

今更、殺す気でいった所でまだまだ余裕がある彼女を捉えられるとは思えない。

だが。

それでも。

それでも、決めたのだ。

何をして、何があっても、あの日失った者達を取り戻すと。

「あああああ!!」

再度、能力を発動し攻撃…………

「うおう!?!」

「諦めなさい。貴女に勝ち目は無いわ。
もう、解ってるんでしょ?」

攻撃しようとした時には、彼女の拳が、自身の腹部に叩き込まれていた。

今度は目で追うことすら出来ない速さだった。

「君に…………君に何が解る!!」

私は!何をしても!

この街の全てを敵に回しても!!

あの子達を取り戻すと決めたんだ!!!!!!」

怒りと悲しみと後悔と決意。

それらを、ごちゃ混ぜにしたような木山の表情を佐天は知っていた。
運命を呪い、復讐を誓う兵士の顔。

だからこそ、佐天はやれやれと肩を竦める。

「知らないわよ。貴女の都合なんて。

…………でも、そうね…………

何をして、何を敵にまわしても、取り戻したいモノがあるってのは解るわ。

だから、私も貴女を逃がすわけにはいかないの」

もしも。

もしも、初春がこの事件に巻き込まれず。

別の形で木山と出会っていたなら、佐天は木山に協力していたかも知れない。

木山と佐天が敵対する理由。

それは、互いに大事な者を取り戻す為なのだから……

「あああああああ!!!!」

突然、頭を抱え込み絶叫する木山。

新たな攻撃かと警戒する佐天だが、様子がおかしい。

「がッ!ぐ……ネットワークの……暴走!?

いや……これは……AIMの……」

「ちょ!?!大丈夫なの!!?!」

慌てて木山に駆け寄ろうとして、佐天は見た。
倒れゆく木山から飛び出るモノの姿を。

「胎児……?」

木山から飛び出たソレは、今……
産声をあげた……

「キィヤアアアア!……!」

佐天さんと幻想猛獣

「キィヤアアアアア!!!!!!」

木山から産み出されたソレは、産声を上げると同時に、辺りを無差別に攻撃する。

ソレが撃ち出すレーザーの様な攻撃は、一発一発が木山の比ではない。

「うひゃああ……………」

ソレの攻撃が始まると同時。

佐天は気を失った木山を抱え、大きく跳んだ。

たどり着いたのは、最初に木山と遭遇した場所。

負傷していた、アンチスキルの姿は無い。

既に回収は終わっているのだろう。

「うゝん。随分、大きなお子さんを孕んだのね……………
うん? って事は、私、妊婦さん殴っちゃった! ?」

「違う!!!!」

ソレを見つめ、一人呟いていると、突っ込みが入った。

佐天の腕の中にいた木山だ。

気絶から目覚めてまで突っ込む。

そこに意地が感じられる。

主に女としての。

「あれは、虚数学区だ……………」

眼下に見えるそれを厳しい目で見つめ、木山はソレの説明を始める。

「虚数学区?……………確か、都市伝説で聞いた覚えが。
4時44分になると、突然脱ぎだす、どんな能力も効かない人だっ
け?」

「それは……………色々混ざってないか?

いずれにしても、巷で言われるモノとは随分と違う。

虚数学区とはA I M拡散力場の集合体の事を言う。

アレも原理は同じ。

さしずめ『幻想猛獣』(A I Mバースト)と言った所か」

佐天の、とんでも都市伝説を気にかけるでも無く木山は続けた。
目の前のソレは、仮に学会で発表すれば、表彰ものの成果だが、木
山にとってさほどの意味は無い。

「アレは、『幻想御手』が作り出したものだ。
ネットワークは既に私の手を離れた……………」

それは、木山の計画の不成功を意味していた。
ここまでして、彼女は己の目的に届かなかったのである。

「難しい話はいいんだけどさ……………それは、アレをどうにかしない
と、『幻想御手』を使った人は目が覚めないってこと?」

佐天の表情は厳しい。

その為に佐天はここにいるのだから。

木山は口元に手をあて、しばらく考えてから顔を上げた。

「可能性は高いな。

今やネットワークは、あれの支配下。

違うな。アレが、ネットワークそのものだ。

アレを破壊しない限り、『幻想御手』使用者の意思は捕われ続ける事になる筈だ」

「そう………」

小さく呟き、ソレに向かい歩み出す佐天。

慌てるのは木山だ

「待て！何をする気だ！！

アレは1万人の意思そのものだぞ！！

とても、個人の手に負えるモノじゃ無い！！」

振り向いた佐天は小さく笑っていた。

「出来るか出来ないかなんて、どうでもいいのよ。

人生の選択肢はいつだって、『やる』か『やらないか』なんだから。

第一、貴女だって今回の事、誰かに『無理だからやめろ』って言われてもやめなかったでしょ？」

言って、飛び降り遠ざかって行く少女の背中。

木山は悟る。

『幻想御手』使用者の中に、彼女の大切な誰かがいたのだ。

だからこそ、彼女は自分の前に立ち塞がり、今、アレと対峙するの

だと。

「……………らしくないな」

気がつけば木山は走り出していた。

向かうは自身の乗っていた車。

そこに、『幻想御手』アンインストール用のプログラムがある。

今のままでは、確実に彼女は負ける。

だが、昏睡患者全員に、それを使用することが出来れば……………

おそらくは、それでも勝てない。

相手は考えるのもバカらしい化け物だ。

だが……………不可能では無くなるのだ。

「君は届いて見せるのか？」

自身の『目的』を挫いた相手。

その彼女が、彼女自身の『目的』に届くのか。

木山は見届けたかったのだ。

共に相手は強大な敵なのだから。

「ギィアアアア！！！」

ソレは無差別な攻撃を繰り返していた。

ソレに意思は無い。

あるのは、どこまでも深い悲しみと、行き場の無い怒り。

生まれた時から、その2つしか持たない。

故にただ暴れ、ただ苦しむのだ。

「キィアアアアア！！！」

今、またその身から電撃を放ち、バイパスの一部を破壊した。
…………そこに彼女達はいた。

「なんだ!?! あれは!?!?」

「生物兵器!?!」

木山にやられたアンチスキル。

その中で、比較的軽症だった者だけで再編した、即席の隊だった。

「動ける者だけでやるしかないじゃんよ!!
実弾の使用を許可する! 撃て!!!!」

全員の装備する銃が一斉に火を吹く。
次々と弾丸は、ソレに命中し傷を負わせる。
だが…………

「な…………なんか大きくなって…………」

与えた傷は即座に回復され、あろうことか、ソレは肥大化していく。

「ぐああ!?!」

「うわ!?!」

次々とあがる隊員達の悲鳴。
気がつけば、それから伸びた触手とも言うべきモノが、隊員へと攻撃を加えていた。

「チッ!!」

舌打ちを1つ。

この隊の隊長。黄泉川は、その長い髪を振り乱し反撃しようとして、自身に迫る触手に気づいた。

「しまっ!!?」

「ヒヨオオオ……シャオ!!」

来る筈の衝撃に備え、身構え……目の前でバラバラに切り裂かれた触手を見た。

「なあゝんで、手え出すかな？」

今の戦力だと厳しいのくらい解るでしょ？」

突然表れた少女は、凄まじい速さで動き、触手を次々に切り落とす。触手は、何度でも即座に再生したが、やがて、諦めたかの様に、あるいは飽きたかの様に触手が退いていく。

「あ! あなた!？」

少女の姿を認めた鉄装から声があがる。

「知ってるじゃん？」

「あの! 私たちが下がる様に木山を引き離してくれた……」

鉄装の言葉に黄泉川は頷く。

自分達がやられた後に、応援に来た、少女の報告は既に受けている。

少女に二度も助けられた、と言うのはアンチスキルとして情けなくもあるが。

「そうも言ってられないじゃん。
アレが何か解るか？」

黄泉川が指差した先。

そこには、何かの施設が存在した。

佐天の視線が、そこに向いたのを確認して黄泉川は続ける。

「原子力実験炉じゃん……………」

「……………どこかの怪獣映画ですか……………」

呆れた様な、佐天の声が響いた。とはいえ、流石に洒落にならない。

「了解。アレは私が引き受けます。

学園都市への連絡と、さっき戦った辺りに、木山春生がいるんで、保護をお願いします」

それだけ言い残すと、ソレに向かって行く少女。

黄泉川と鉄装は頷き合うと、即座に動きだした。

「なんて事だ……………」

木山は絶望を感じていた。

『幻想猛獣』に対して、唯一の切り札になったかも知れない、アンインストール用プログラム。

それを、乗せていた自身の車が、グシャグシャに大破していた。

おそらくは『幻想猛獣』の攻撃の余波。

ただの偶然か。それとも本能的に、それが危険だと判断したのか。いずれにせよ、切り札はこれで失われた事に…………

「いや！まだだ！！」

そう。まだ切り札は残されている。

研究所の自身のPCの中。

適切な手順を踏んで起動させないと、全てをアンインストールするようにしてあったが、木山がここに来るまで、それは作動していなかった。

急がなければ。

万が一、アンチスキルが証拠を掴む為、不用意にPCを起動させれば、切り札は本当に全て失われる事になる。

先ほど、数百メートル先で発砲が行われていた。

つまり、そこまで行けば、アンチスキルが。

最低でも、連絡手段はある筈である。

木山は再び駆け出す。

彼女の大切な者を失わせたくは無かった。

「こっ……………のおおお！！」

もう何度目になるか解らない攻撃をソレにしかけ、案の定、即座に回復される。

雨霰と降る攻撃を、滑るようにして避けた。

「つくもう！キリがない！！」

攻撃しては回復され、反撃をされ、回避して攻撃。

何とか足留めにこそ成功しているが、佐天は勝機を見出だせずにいた。

だが……………

「こっちは、初春との約束と、ついでに一万人の命背負ってるんだから！

負けてらんないよ！あんたなんかに！！！」

手に気を集中し、小さな六角形の盾を作り投げつける。

ブーメランの様に飛んだそれは、『幻想猛獣』にぶつかると同時に爆発する。

爆発は、大きくその身を挟むが、やはり即座に回復された。

ウッスラと全身に汗を浮かべる佐天。

けれど、その瞳はまだ諦めていなかった。

木山が、アンチスキルの居場所を目指して走る中。

一台の車両が、こちらを目指し走ってくる。

頑強な作りと物々しい雰囲気放つ車両。

それは、アンチスキルの専用車であることを示していた。

木山の正面で止まった車から、飛び出る2人の女性。

木山に銃を向け、長髪の方の女性が口を開いた。

「木山春生。『幻想御手』……………」

「私の研究所にいる、アンチスキルに連絡を！
大至急だ！！！」

打ち消す様に言葉を重ねる木山。
顔を見合わせた2人に構わず木山は続ける。

「アレに有効な切り札が、私のPCに入っている！
だが、私のPCは所定の手続きを踏まずに起動させると、その全て
を消去する様に設定してある！！
手遅れになる前に早く！！」

「！！？研究所にいる連中に無線は！！？」

「いけます！！！」

木山の言葉を聞いた2人の行動は迅速だった。
即座に無線を飛ばし、連絡をとる。

『PCの起動ですか？

既に行われましたが……………』

終わった……………

木山が、力尽きた様にその場に崩れ落ちる。

「となると、データは全て失われた訳じゃん……………
木山。データの予備は！？」

「無いよ……………私の車に積んであったんだが……………
さっき、スクラップになっていたのを確認したよ。
これで、切り札は全て……………」

苛立ち気に爪を噛む黄泉川。
力無く、座り込む木山。

不安気に黙り込む鉄装。
だが…………

『ちょっと！勝手に起動に失敗したって決めつけないでよ！！
私があんな罠に引っ掛かる訳、無いでしょ！？』

希望の灯火は、まだ消えない！

「キィヤアアアア！！」

「う……………るさい！！」

異変が起きたのは、もう何度目か解らない触手に寄る攻撃を、蹴り
跳ばした時。

派手に爆ぜたそれは…………

『回復しない！？』

今まで即座に回復し続けて来た、『幻想猛獣』の回復が明らかに落
ちていた。

ポコポコと音をたて徐々には回復しているが…………
その程度の回復力なら、佐天にとっては許容範囲内。

「佐天さん！？聞こえますの！！？」

目前まで迫っていた、原子力実験炉の施設。
そのスピーカーから響いたのは、佐天のよく知る……………白井の声だ。

「先程、『幻想御手』のアンインストール用プログラムを学園都市全域に放送致しましたわ。

後は、佐天さんの目の前にいる、『幻想猛獣』のコアを破壊すれば、終わりですよ!!」

「了解!!」

白井の声に、聞こえる筈の無い返事を返し、疲れた身体に鞭を打つ。

攻撃を再開した、『幻想猛獣』を次々と破壊していく。

「とは、言うものの……コアってどこよ?」

切り裂き、粉碎する。

だが、ここまでに肥大化した『幻想猛獣』は、あまりに巨大だ。

「ああああ!!」

殴り、蹴り、引きちぎる。

自分の身が、返り血で汚れるのも構わない。

『能力者になりたかった……』

声が聞こえる。

『自分の身を守りたかったただけだ!!』

『幻想御手』に身を委ねてしまった人達の声。

『努力して、努力してそれでも、届かない!!』

能力が全ての、この街で…………

『落ちこぼれが夢を見て何が悪い!!』

あまりの現実にかけてしまった人達。

それに、佐天は…………

「知ったことか——!!!!」

ぶちギレた。

「あんた達の想いも、気持ちも、私の知ったことじゃない！
…………けど！それが欲しかったのなら！譲れなかったなら！！ねだ
らず！勝ち取りなさい！！！！」

『幻想猛獣』の動きが止まる。

同時に、佐天は跳ぶ。

高く。高く。

「…………結局、最後まで歩み続けるのは、そういう人達よ」

上昇する力が無くなり、僅かな停止状態。

そこで、佐天は残された全ての力を解放する。

「全力全開!!」

両の手を右腰に当て溜めを作り

「真空！！波動拳！！！！」

一気に解放する。

撃ち出された、蒼白い極太のレーザーは、『幻想猛獣』の全てを呑み込み、消し去った。

地へと堕ちていく佐天。

風に舞った、『幻想猛獣』だったモノとすれ違う。

「迎えに来たよ。初春……………」

『ただいま。佐天さん……………』

こうして、『幻想御手事件』の、1番の山場は幕を閉じるのだった。

佐天さんと筋肉痛

突然だが、佐天の使っている『気』とは、生命エネルギーである。

人が無意識下で使っている、それを武術家は鍛え、操作し、己の武に取り入れるのだ。

……で、生命エネルギーである以上、不足すれば当然、問題が起きる。

最悪は死。

そこまで、いかなくとも少なくとも支障を起こすのだ。

例えば……

「あううううう!!!!」

今、ベットで悶える佐天の様に。

「……あまり、非科学的な患者は遠慮したいんだがね……」

そんな佐天の様子を見ながら、蛙顔の医者が呟く。

「申し訳ありません……」

けれど、あの状態で部屋に1人で置いて置くわけにもいかなかったんですの……」

「それは、そうだろうね」

呆れた顔で白井は返し、蛙顔の医者も、納得したように頷いた。

佐天の今の状態を一言で表すなら、『全身筋肉痛』である。

木山戦に続き、『幻想猛獣』との戦い。

長時間の戦闘で削られていた『気』。

残り少なくなっていた『気』で、大技を使った報いを佐天は、支払わされているのだ。

なにせ、ピクリと動くだけで全身に激痛が走るのだ。

生活はおろか、トイレに行くことさえ1人ではままならない。

「はう！！」

今も、身動きしようとしただけで、声をあげる程の激痛だ。

「だから、無理はするなと言いましたのに……………」

「ひゃうっ！！」

ツンツンと白井に身体を突かれ、悲鳴をあげる。

「だって……………まさか、あんなの出てくるとは思わないじゃないですか……………」

既に佐天は涙目だ。

白井は気楽に突いてくるが、佐天には洒落にならない。

今の佐天は全身、弱点なのだ。

「それで、どれくらいで回復出来そうかね？」

さすがに、気なんて言うものは専門外でね」

放置出来ないのは解る。

症状的にも充分、入院するべきだろう。

が、蛙顔の医者には、この症状に対しての知識は無い。どう治療し、完治にどれくらいかかるか。

それを、この病院で一番詳しいのは、目の前の患者なのだ。

「ご飯をいっぱい食べて、グッスリ眠れば、明日には動く分には問題無いくらいにまで回復します……………」

佐天も、目の前の医者に迷惑をかけているのは解っているので、シユンとした態度だ。

「そうかい。まあ、ゆっくりしていくといいんだね」

と、病室を出掛けた所で何か思い出した様に振り返る。

「そうそう……………ウチのナース達が、随分と張り切っていたから、覚悟はしておいた方が良くかもしれないね？」

そういつて、今度こそ部屋を出ていく蛙顔の医者。

佐天の顔は真っ青だ。

「し……………白井さん？」

「はい？」

「私、今すぐ退院します……………」

「はい！！？」

這うようにして、ベットからの脱出を計る佐天。

その間も身体には激痛が走っているのだが、強靱な精神と執念がが、それを上回った。

「…………は………」
「ふにゃ!!?」

それも、ため息を吐きながら繰り出された、白井の一撃で阻止されたが。

「そんな状態でどうやって帰るんですの?」

「だって!だって!!」

ここのナースさん達、凄く怖いんですよ!!? それなのに、また入院したなんて知れたら……………」

佐天は風邪で入院した初回にも、ナース達に怒られた。

…………が、退院した、その日に入院した前回は、その比では無かった。

真剣に恐怖を感じるレベルで怒られたのだ。

それが、1日あけたとはいえ、再入院。

考えるだけで震えがきた。

「自業自得ですの。」

良い機会ですから、しっかり絞られてきなさいな」

「他人事だと…………あう!…………やあう…………あうん!!…………しら…………だめえ……………」

反論しようとした佐天を、連続攻撃（指で突いただけ）で黙らせる。実際、良い機会だ。

この無茶が過ぎる友人が多少でも反省するのなら、白井的には大歓迎だと言ってもいい。

勿論、白井だって、今回の事件の解決。
佐天の活躍の大きい事は理解している。

佐天が木山を追っていなければ、木山はアンチスキルを撃退後、悠々と逃げていただろう。

佐天が戦わなければ、『幻想猛獣』が原子力実験炉を破壊していたかも知れない。

ただ、何かある度、危険に飛び込み、ボロボロになって帰ってくる友人を、白井は素直に心配しているのだ。

「……………何してんの？あんた達……………」

病室の入口。

気づけば、そこに美琴が立っていた。

気のせいか、その顔が仄かに赤い。

「ああ！お姉様。いらっしゃってましたの？」

いえ……………佐天さんが、脱走を試みましたが、少しお仕置きを……………」

「……………どんな？」

ちなみに、佐天は息を荒くして、ベットに伏している。

外で声だけ聞いて、この状態を見たら……………？

「……………まあ……………ほどほどにね？」

「はあ……………」

深く追及出来ない、乙女な美琴の勘違いは、放置される事になった

らしい。

「それで？なんで、佐天さんは脱走なんか？」

「それが……………」

「あっきた！看護婦さんが怖いなんて……………」

「だって……………」

さすがに脱走は諦めたらしく、ベットに大人しく横になっている佐天。

「まったく。昨日、『幻想猛獣』と、やり合った人と同一人物とは思えませんわね」

「アレは殴れるけど、看護婦さんは殴る訳にいかないじゃないですかあ……………」

「あ……………基準はそこなんだ……………」

若干、呆れた口調で美琴が納得した時。佐天の怖いもの基準は、『殴れるもの』『殴れないもの』で分けられる。

例えば、同じホラーでも、『13日の○曜日』や『エイ○アン』は全然平気で、『リ○グ』や『四谷○談』は大嫌いだ。

これは、物理的な例であるが、精神的な理由で殴れない者もダメなのである。

初春も看護婦達も心配して怒っている。
それが解るから佐天も手が出せない。
故に、佐天は初春も看護婦も怖いのだ。
勿論、初春は好きだし、看護婦にも感謝はしているのだが。

『コンコン!』

「ひゃう!!?」

そんな話をしていると、病室の扉がノックされる。
飛び上がる様に脱走をしようとした佐天。

……の脇腹を流れる様な動きで突く白井。
佐天が声をあげたのは、その為だ。

「はーい。どうぞー!」

再びベットに崩れ落ちる佐天を呆れて見ながら、美琴が返事を返す。
入って来たのは……

「「初春!」」^{さん}

美琴と白井の声がハモる。

佐天は、まだ悶えていて反応出来なかった様だが。
入口に立っていたのは、看護婦に連れ添われた初春だった。
そんな2人の反応と、声は出せずとも、笑顔でこちらを見つめる佐天。

それらに、困った様に笑い……

「ご心配お掛けしました。

初春飾利ただいま戻りました!」

頭を下げながら、そう言葉にした。

そんな初春に3人は目を合わせ……………

「「おかえり！初春^{さん}」」

言葉を合わせ出迎えるのだった。

目を覚ましたばかりの初春は、この後、いくつか検査があるらしく。
その間の時間を使って、ここへやって来たらしい。

初春を連れてきた看護婦は、時間になれば迎えに来ると言って部屋
を後にした。

その際に、

「佐天さん？後でゆっくりOHANASHIしましょうね？」

と言に残し、佐天を震えあがらせていたが。

「夢を見ていたんです」

初春が語るのは、眠っていた間の事。

「暗くて広い部屋の中に、沢山の人がいて……………
でも、他の人達は自分の事しか見えて無いみたいで。
ずっと、誰かの文句や怨み事を呟いてるんです」

「なんと言うか……………ひどく憂鬱な光景ですわね」

思わず溢れた白井の言葉に初春は頷き。

「はい。気が狂いそうでした。

でも突然、強い光がさして…………

佐天さんが来てくれたんです。

『迎えに来たよ?』って…………」

佐天は照れ臭そうに頭をかこうとして、身体の痛みを思いだし諦める。

「多分、初春があんまりお寝坊さんだから、叩き起こしに行ったんだよ」

佐天の言葉に初春の目頭が熱くなる。

この人は、きつとまた無茶をしたのだ。

そうでなければ、健康が代名詞のような佐天が入院などするわけが無い。

でも、それは…………

全て自分の為だ。

「佐天さん!」

思わず佐天に抱き着き、泣き出してしまう。

…………さて、佐天は今、全身筋肉痛である。

その状態は酷く…………

白井に指で突かれただけで身悶えるレベルだ。

そんな状態で、おもいつきり抱き締められたりしたら？

「にやあああああああ！！！！？」

その日、一番の佐天の叫び声が院内に木霊した。

佐天さんと儀式の始まり

結局のところ、佐天が退院したのは、翌日の朝の事だった。

その間に、看護婦数名十何故か初春と白井も一緒になっての『大説教』を数時間に渡って頂く事になり、それが終わる頃の佐天は真っ白に燃え尽きていたのだが、その辺の様子は割愛する。

とにもかくにも、ようやく全身の痛みから解放された佐天は、慣らしの為の『軽い』トレーニングをしながら、寮へと向かう。ランニングの途中、佐天の姿を見た運転手がハンドルを切り損ねたりしていたが、いつもの事である。

なにより、佐天には時間が無い。

今夜は、『もうひとつの事件』の山場なのである。

何事も無く終われば問題無いが、万が一、何かあったとき

『動けませんでした』

では、話にならないのである。

「おかえり」

「はい？」

2時間かけて、寮へと帰り着いた佐天を出迎えたのは、美琴だった。自室の玄関の前で待っていたのである。

「そーいえば、宅配便が来てたわよ？」

2時間後に、また来るって言ってたけど……………」

「そうですか……じゃなくて、御坂さん。何か用ですか？」

若干、棘のある言い方になってしまいが、構わない。

美琴が病室ではなく、こちらに来ている地点で要件など、解っているのだ。

「なにして、もちろん……」

「ダメですよ？」

美琴の言葉を、言わせない様に佐天が言葉を被せ、場に沈黙が訪れる。

「前にも言いましたけど、私は、裏側うらがわには御坂さん達に関わって欲しく無いんです。

そんな私が、今回の件に御坂さんが参加するの許すと思います？」

「うん！ 思わない！！ だから……」

美琴は怯まない。

実に『いい笑顔』で取り出したのは……

「携帯電話？」

「今、この携帯は、ボタンひとつで、メールを送れる様になってる。宛先は、初春さんと黒子。

内容は、ここまでの事件の粗筋と、これからの予想かな？」

佐天が凍りつく。

そんなものを、あの2人に送ったなら………
来る。間違いない。

どんなに隠れ、見つかりにくい所でやろうとも。
それが、学園都市内なら、必ず見つけやってくる。
それが、佐天の知る、白井と初春のコンビだ。

「………解りました。とりあえず、お茶でも飲みながら、ゆっくり、
お話ししましょうか？」

「あっ！私、紅茶ね」

まだ認めず、足掻く佐天だったが、部屋に入っていく背中が、勝者と敗者の明暗を、既に知らせていた。

結果から言うのであれば、美琴が譲る事は無く………

佐天は渋々、美琴が今日の解呪に参加する事を認めるたのであった。

さて、佐天が頭を悩ませ、美琴が勝利の笑みを浮かべた頃………

『ピンポーン！』

宅配便がやってきた。

思い当たる物はひとつしか無い。

佐天の知り合いに頼んだ、今日の切り札である。

「はーい！」

佐天が返事をして、玄関まで出て、サインと引き換えに小さな段ボール箱を受け取る。

「?」

頭を下げ去っていく、宅配業者の背中を見ながら、佐天は首を傾げた。

「どうしたの?」

「いえ……ちょっと……」

受け取った箱が軽い。

確かに、佐天が知るソレは決して重い物では無いが……
それにしても軽すぎる。

嫌な予感を感じて、箱を開封する。

中には……何も入っていなかった。

「……………」

「え? 空?」

予想が当たり、頭を落とす佐天と、意味が解らない美琴。

携帯電話を取り出し、相手の名前を選ぶ。

コールする事数回。

『ガチャ!』

繋がった。

「凜のバカー!!!」

思いつきり叫ぶ、佐天の姿があった。

「要するに、相手が肝心の中身を入れ忘れたって事？」

「はい……………」

美琴の問いに力無く頷く。

そう。

佐天が頼った魔術師は、あろうことか『うっかり』肝心のアイテムを入れ忘れたのだ。

先程の電話の際、平謝りついでの、その理由を言い訳していたが、そんな事はどうでもいい。

大切なのは、切り札が失われた。

この一点だけなのだ。

「今からじゃ持って来て貰うのも、こっちから行くのも厳しいか……………」

「とりあえず、上条さんに連絡をとって、魔術師達と合流します。事情を話して、今日の対策を練らないと……………」

最悪、インデックスの記憶を消す。

その選択肢も考えなければならなくなった。

『すつごく美味しいんだよ!!』

『私の為に、るいこが無理する必要なんて無いんだよ?』

友人になり始めたばかりのインデックスの顔が頭を過り、自分の間抜けさに腹がたつ。

それを行えば、今のインデックスは失われる。

死ぬ………と言ってもいいのだろう。

自分のせいで、そうなるうとしている。

苛立ち気に机を殴りかけ………やめる。

まだだ………

後悔も懺悔も全て終わってからだ。

時間はわずかだが、まだ残されている。

魔術師達の方で、何か対策が見つかるかもしれない。

諦めてしまえば、可能性が失われる。

インデックスを失わない為に………

見苦しくとも、情けなくとも、最後まで諦めない。

それが、インデックスの友人である為の最低限のルールだと自身に言い聞かせ、電話を手にとった。

上条に連絡をとり、案内されたのは、学園都市内にあるホテル。その最上階だった。

来るものを早い段階から、監視でき対応に必要な時間を稼げる。

何より、用があるもので無いと、そこまで来ない………

守る者がある状態において便利な場所だった。

ただし、ホテルの最上階Ⅱお高い部屋だ。

その値段を聞いて、佐天と上条の顔が引き吊ったのは余談である。広い部屋の中。

リビングと言える場所に魔術師2人の姿はあった。
インデックスは今朝から寝たきりになっており、今は寝室にいるらしい。

「そうですか。切り札が……………」

「すみません。私の落ち度です」

「いや。君達が居なければ、僕と神裂は今も騙されたままだった筈だ。

解呪の術を得られなかったからって君を責めるのは筋違いだろう」

佐天の話を聞いた魔術師2人は、思いのほか、冷静だった。

時間はあったのだ。

アイテムが手に入らない。

それが効かない。

様々な可能性を考慮済みだった。

さすがに、相手がそれを入れ忘れる……………と言うのは、思考外だった。

いつだって最悪の事態は予想の斜め上をいくものなのだ。

それでも……………

それでも、最悪を予想し、備えておけば、打つ手は出てくる。

「そうになると、私たちが用意した、もうひとつの方法と言うことになりますね……………」

「何か手があるの?」

聞き返したのは、美琴だ。

魔術と言うオカルトに疎い美琴でも、ここまでの話の流れで、随分とまずい状態だというのは理解できていた。

何より、インデックスは美琴にとっても、顔見知りだ。救えるものなら救いたい。

でなければ、美琴はここに来てすらいないのだから。

喫煙スペースの設けられたベランダに出て、煙草に火を着けたステイルが紫煙を漂わせながら返す。

「僕らも、この二日間、何もしなかった訳じゃ無いさ。

あの時、言ったようにあの娘の身体を隅々まで調べ……

彼女の口内に、それらしい術式が刻まれているのを見つけたよ……

…」

「ですが、この短期間では、解呪に必要な知識や道具を揃えるのは無理でした。

ですが、貴女の言うアイテムとは別に、もうひとつ、私たちには『切り札』があったのですよ」

ステイルの後を継いだ神裂。

その2人の視線が、1人の人物に集まる。

佐天と美琴は理解が出来ず混乱するばかりだ。

全員の視線を受けた上条は、自身の右手を見つめながら告げる。

「佐天さんや御坂には、言ったことが無かったな。

まあ……御坂は見たことはあるんだが。

俺の右手は、それが『異能』の力なら、相手が神様だって打ち消せるんだ」

美琴を見れば、納得したように頷いていている。
心辺りがあるらしい。

そして、ここで、ようやく2人にも魔術師達が立てた、もうひとつの解呪方法が理解出来た。

「つまり、あんたらが立てた方法ってのは、コイツの右手で、あの娘に刻まれた『呪い』を無理矢理、打ち消すってこと？」

マジマジと興味深そうに、上条の右手を見つめる美琴に、神裂は頷く。

「ええ。彼の右手が、呪いに対しても有効なのは既に試しました。
しかし、危険があるのも確かです」

「罠がある……って事だね？

教会が重要視してるモノに、保険をかけてないってのは考え難いし
……

确实にあるって思った方がいいね……」

嫌そうな佐天の言葉に、ステイルと神裂も頷く。

数度、教会とやり合った佐天。

教会に身を置く、神裂とステイル。

その立場は違えど、教会のやり方は熟知していた。

「けどよ……それでも、やるしかないだろ？

時間をかければ……

ここで、インデックスの記憶を消して、後一年あれば……

もっと安全で、確実な手が見つかるのかも知れない。

けど。それでも、危険はついて回るだろうし……

なにより！

それじゃあ、今の俺達が知っているインデックスは失われちゃう!!
俺は! 例え危険があっても、今のインデックスを守りたい!!」

上条の言葉に、今度は全員が頷く。

「当たり前です。私は、今度こそ、絶対にあの娘を守ります……………」

「君に言われるまでも無く、僕の命は、彼女の為にあるからね。
多少の危険で、彼女を救えるなら安いものさ」

かつての彼女を知り……

一度は挫け、心折れた者達が。

「知り合ったばかりだけど。

そんな目に、あってる娘はほっとけないし……………」

「『友達』に勝手に忘れられても困ります」

今の彼女に出会い……………

新たな友情を育んで来た者達が。

「始めよう! インデックスの未来を取り戻す戦いを!!」

今、彼女を守る為にひとつになった。

佐天さんと『自動書記』

「それじゃあ………始めるぜ？」

神妙な顔で上条は、後ろに控える面々に告げる。
全員が頷いた。

空には星が瞬き、眼下に見える街並みは、明かりが消え眠りについていた。

深夜。

もう少して日付が変わる。

先程まで居た部屋の真上。

ホテルの屋上が、神裂とステイル。

魔術師組が選んだ解呪の場所だった。

普通の人にとっては意識の死角であり、見られない事。

万が一、妨害しようとする者がいても、ここならば確実に気づける事。

それが、この場所を選んだ理由らしい。

コンクリートの上に敷かれたマットの上………

そこに、苦しそうに息を乱す、インデックスの姿があった。

神裂が近寄り、インデックスの上体を抱き起こす。

左手を首に添え、反らす事で、その口が開かれ………

魔術知識の無い、美琴や上条にも解る程、禍々しいオーラを放つ、ナニかが姿を表した。

「あれが……………」

「ああ。僕らを騙し、あの娘から記憶を奪わせ続けた元凶。あの娘を苦しめる『呪い』そのものだ！」

苛立ちを隠せないステイルが吐き捨て

「でも……………これで、その日々も終わる。
いえ。終わらせて見せます!!」

神裂が決意を言葉にする。

上条の右手の指先が、インデックスの口内に伸び……………
ソレに触れた……………

「ッ!!?」

電気に触れた様に、弾かれる上条の右手。
それには、黒く濁った『呪い』の残骸が、流れ出た血液の様に纏わり着いていた。

同時に、宙を舞い起き上がるインデックス。

黒い……………

『呪い』と同質のオーラを放ちながら、こちらを振り向いた、インデックスの瞳には……………

幾何学的な紋様が刻まれていた。

「あっ……………」

呆けた様に、ソレに見とれてしまう上条。

気づけば…………インデックスが目前に迫っていた。

インデックスの瞳が光る。

「うわぁ…………！」

咄嗟に右手を差し出そうとして…………

身体が宙を舞っている事に気づいた。

「前にも言いましたけど。

予想外の事態が起きたからって、呆けないで下さい」

着地と同時に、頭上から聞こえた声で、佐天が自分を抱え跳んだのだと気づく。

「悪い！それにしても……………」

「やっぱり、仕掛けてあった……………て所ですね」

視線の先には幽鬼の様に漂うインデックスの姿。

先程の攻撃の影響か。

周りのコンクリートは、砕けヒビが入っていた。

「警告。第3章、第2節。第1から第3までの全結界の貫通を確認

……………」

「何よ！あれ！！？」

「僕らにも解らんよ！ただ……………！！！」

「アレを何とかしないと、あの娘を救えないのは確かです!!」

別人の様なインデックスに取り乱す美琴だが、神裂とステイルにも余裕は無い。

インデックスが魔術を使う等、2人にとっても予想外だったのだ。

「はぁ!!」

他の4人が動けない中、最初に仕掛けたのは、佐天だ。

まだ、ブツブツと何かを呟くインデックスの首筋に、手刀を叩き込む。

トン!と確かな手応え。

だが……

「ええ!!?」

インデックスは無表情なまま振り返り、その身体を光らせた。

「かはっ!!?」

トラックが突っ込んで来たかの様な衝撃。

吹き飛ばされた佐天の身体は、屋上のフェンスの外へと向かう。

「佐天さん!前!!」

下から聞こえた声。

と、眼前に向かいのビルにあった筈の看板が迫っていた。

「!!?」

体勢を切り替え、看板を足場にする。

『ガン!!』

大きな音をたて、看板は凹み落下していったが、お陰でビルの屋上に戻れた。

「御坂さん！ ナイスアシスト！！」

「あんまり無茶しないで！！」

トン！っと音をたて、屋上へと降り立つ。

「……………侵入者個人に対し、最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。

これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動。侵入者を破壊します」

変わらず紡がれるインデックスの声。

と、突然、赤黒いナニかが、葉脈の様にインデックスの前に広がった。

「……………なんかヤバそうな感じじゃない？」

隣に立つ、美琴が冷や汗を流していた。

インデックスから放たれる圧迫感は、既に一般人でも解るレベルだ。

「ですね……………」

頷きながら、佐天はアレの攻略法を考える。
先程の一撃。

手加減をしたとは言え、普通なら確実に相手の意識を刈れる。
にも関わらず、鍛えてもいないインデックスが普通に反撃してきた。
つまり……………

「魔術的に造り出した、『仮想人格』

しかも、本体のダメージはお構い無し……………

まったく、教会らしい嫌らしい罠なこと!!」

忌々しげに吐き捨て、それでも考える。

認めたくは無いが、実に良い手だと言える。

インデックスに刻まれた『呪い』を解こうなんて人種は、インデックスを救いたい者。

つまり、インデックスと親しい者達だ。

恐らくは、こちらを殲滅するか、インデックスが死ぬまで発動したままのアレは、そういう者達にとって悪夢と言える。

「ステイル！ 神裂さん!!」

アレを解くことは!？」

「無茶を言わないで下さい!!」

「相手が大人しく調べさせてくれても、1ヶ月はかかるよ」

当然、待ってくれる筈など無い。

……………となれば

「ぶっ壊して止めるしか、無いか……………!!? 上条さん!!」

佐天の中で結論が出た。

その瞬間を狙った様に、インデックスの口元から放たれたレーザーが、上条を狙う。

見ただけで解る。

アレは、自身の持つ手札のどれよりも上の威力だと。

……………が。

「ぐッ！ぐうう……………！！」

上条は右手を盾にして、その一撃を防いでいた。

「なんてチート能力……………」

「それ…………佐天さんが言う？」

思わず出た呟きに、美琴が突っ込む。

だが、佐天に言わせれば、上条の右手は、それほどまでに驚異だったのだ。

少なくとも、佐天にはアレは防げない。

もっとも、あんな直線的な攻撃に簡単に捉えられる気も無いが……………

「つつう〜！ちょー！！早くなんとかしてくれ！！」

いくら防げると言っても限度があるらしい。

ビームが勢いを増した所で、上条が泣きついた。

「……………！！」

神崎の七天七刀が動き、インデックスの足元のマットが翻る。

インデックスが体勢を崩し、上条を狙っていたレーザーが、天を貫

いていく。

「上条さん！」

「解ってる!!」

佐天の声と、上条が駆け出したのは同時。

上条もまた、自身がなにをすべきか既に悟っていたのだ。

「『魔女狩りの王!!』（イノケンティウス）」

駆ける上条を狙って、再度、レーザーが照準を合わせた。
だがそれは、ステイルの呼び出した、炎の魔人に阻まれる。

もう1人のインデックス。

『自動書記』^{ヨハネのペン}は優秀だった。

戦場を速やかに把握し、効率的に敵を排除していく。

だからこそ、『呪い』を破壊し、謎の魔術を使う上条を最脅威とし、
最優先の排除目的とした。

優秀であるが故に、上条を守る『魔女狩りの王』の正体を即座に見
破り、その破壊の為の魔術を組み上げた。

それで、問題無かった筈なのだ。

最脅威（上条）との距離は、まだ十分にあり。

魔女狩り王を倒すのに必要な時間は、1秒と少し。

それだけの時間で、上条への攻撃を再開できる。

優秀な彼女の頭脳は、いつでも、最効率の方法を選択する。

だが、彼女は気づいていない。

この場には、上条に匹敵する非常識が、^{イレギュラー}もう1人存在するのだ。

インデックスの元へと、駆ける上条。

その体に、もう慣れてしまった感触を感じ……………
上条は、その身を任せる。

「縮地！」

少女の声が聞こえた瞬間には、インデックスが目前に迫っていた。
ならば、上条のする事はただ1つ。

「いいぜ？お前がインデックスの、過去と未来の幸せを邪魔するつ
て言うなら……………
まずは！その幻想をぶち殺す！！」

自動書記には理解出来なかった。

何故、先程まで十数メートル先にいた上条が自身の真横にいるのか。
感情と言うものを持たない彼女だが……………

その、理解不能な事態に確かに『驚愕』していた。

上条の右手が、インデックスの額にに触れ、その身を侵していた魔
術を破壊していく。

「警……………告。最……………終章。『首輪』……………致命的な……………破壊。再生
……………不可……………」

壊れたラジオの様に、言葉を紡ぎ、倒れていく『自動書記』の瞳に
映ったのは……………

『首輪』を破壊し、自身にも致命的なダメージを与えた、最脅威の
少年と、脅威とすら考えていなかった、最初に攻撃を仕掛けてきた
少女の姿だった。

「終わった……………のか？」

倒れたインデックスを見下ろし、気が抜けてしまう上条。

が、それは、この場に置いては愚かと言える。

戦場において、最大の危機とは、何時だってその瞬間にやってくるのだ。

「……………！！！？」

聞こえたのは、神裂の声。

佐天が見たのは、白く美しい羽。

だが、それが恐ろしく凶悪なモノだと、磨き抜かれた6感が告げていた。

上条だけなら。

インデックスだけなら。

自身と、もう1人であれば、アレが降り注ぐ前にこの場から離脱できる。

だが……………2人を抱えては無理だ。

どちらを救い、どちらを見捨てるのか。

昔の自分が問いかける。

答えなど決まっている。

両方だ。

気がつけば、佐天は上条をインデックスの上へと押し倒し、2人を守るように、その上へと覆い被さる。

『ああ……………これは死んだかな？』

アレがどれだけ危険なものかなんて、考えるまでもない。
今も、自身の身体は『逃げろ』と命令しているのだ。
だが……………

迷い無く、友達を守る選択が出来た。
その自分に、佐天は満足だった。

白い……………

破壊の力を帯びた、美しい羽が舞い降りる。
それが、佐天の身に触れ……………

直前。

雷がその全てを焼き払った。
その発生源は……………

「無茶しないでって言ってんのに！！」

美琴だ。

美琴にも、アレの危険さは解った。

そして、そんな美琴の前で、佐天は信じられない行動をとったのだ。
雷を放ったのは、友人を守ろうとした美琴の……………

無意識による、無我夢中の行動だった。

「はぁ……………死ぬかと思った！御坂さん！！ナイスアシスト！！」

ケロリとした様子で起き上がる友人に、美琴は安心し……………同時に
怒りが沸いた。

「佐天さん……………今の行動については、後でゆっくりお話ししましょ

うね？」

笑顔で。

そう。まるで、聖母の様な笑顔で告げる美琴に、佐天の身体が震えだす。

知っている。

アレは、初春や看護婦達が自分にお説教する時の顔だ。

「…………上条さんたちは…………無事ですか…………？」

なんとか逃げ出すために、話を逸らそうと、上条とインデックスに視線を移し…………佐天は固まった。

「ん？……………！！？」

硬直した佐天を疑問に思い、視線を追った美琴も固まる。
顔を真っ赤に染めて。

上条は固まっていた。

佐天が自身を押し倒し、被さって来た理由を。
命に危険が迫っていた事を上条は知らない。

では、何故、固まっているのか？

上条がインデックスの『呪い』を破壊した時、インデックスは後ろ向きに倒れた。

すなわち、仰向けに。

羽が降り注いだ時、佐天に後ろから押し倒され、上条はインデックスの上に重なった。

うつ伏せに。

結果、上条とインデックスの唇が重なった。
要は、キスした状態になったのである。

「は!!?」

我に還った上条は、即座にインデックスから離れる。
しかし、我に還ったのは理由がある。
感じたのだ。凄まじい殺気を。

「Fortis931」

「Salvare000」

上条の目に飛び込んで来たのは、先程までのインデックスが、可愛く見える程の殺気を放つ、人の形をしたナニかが2体。

「え……これは不幸な事故でして……
魔法名を名乗るのとか止めて欲しいなど、上条さんは思うことですよ?」

とりあえず、言い訳というか、真実を明らかにする事で、その身を守ろうとするのだが。

「言い残す事はそれだけですか?」

「とりあえず、その娘の呪いを解いてくれた事だけは、感謝していると伝えておこう」

片方は刀に手をかけ。

もう一方は、その手に炎を作り出していた。

「御坂!!?」

こうなれば、第3者に助けを求めるしかない。

「知らない!!」

だが、常盤台のお嬢様は何が気に入らないのか、不機嫌そうにソッポを向き。

「佐天さん!!?」

「南無南無……」

最後の希望の少女は、手を合わせて、こちらを拝んでいた。
縁起でもない。

そして、キツチリ、インデックスを連れて距離をとっている辺りは
流石なのだろうか?

「七閃!!!」

「魔女狩りの王!!!」

「不幸だ……!!!」

上条の声が空に木霊する。

それは、日常が彼女達の元に戻ってきたことを示していた。

佐天さんとお料理

「とうま。覚えてない？ 私たち、学生寮のベランダで会ったんだよ？」

「俺、学生寮なんかに住んでたの？」

「とうま。覚えてない？ とうまの右手で、私の『歩く教会』が壊れちゃったんだよ？」

「『歩く教会』って何？ 散歩かなんかのクラブ？」

「とうま……覚えてない……？ とうまは、私の為に魔術師と戦ってくれたんだよ！？」

「……………『とうま』って誰の名前？」

病室で行われる、1人のシスターと、1人の患者の会話。

シスターの声は痛々しく、ツンツン頭の患者の声は、何処か間が抜けている。

そんな2人を廊下から見つめる2つ影。

「いいんですかー？ 御坂さん？」

「ってもねー。恐怖と頭部へのショックによる、一時的な記憶の混乱で、2〜3日で治るって話だし……………」

常盤台の制服に身を包んだ、亜麻色の髪の少女、御坂美琴と、今日は、久しぶりに柵川の制服を来ている、黒髪ロングの少女、佐天だ。

ちなみに、ツンツン頭の少年。

上条当麻が入院する事になった原因については、割愛させて頂くが、とりあえず、凄く怖い目にあってこうなったらしい。

美琴が言っている様に、数日で治るらしいが。

「いえ。そっちでは無く………」

だが、佐天が言っているのは、その事では無い。

「ん？」

「いいんですか？あの2人、随分といい感じですけど？」

悪戯っぽく笑う佐天。

瞬間、沸点に達した様に美琴の顔が朱に染まった。

「なっ！ベベベ別に私は、あいつの事なんて、何とも思って無いんだから、あの2人がどうなろうと………」

あからさまに動揺して、早口で捲し立てている地点で、何とも思っ
て無いわけが無いのだが。

残念な事に、当の本人が、その事にまだ気づいてないのだ。

「とうま……覚えてない………？インデックスは………
インデックスは………とうまの事が、だいす」

「ちょっと待ったー!!」

あつ。今、少し自覚したらしい。

ちよつと待ったコールをかけながら、上条とインデックスの間に駆けていく美琴。

記憶が無い状態で、2人の美少女に迫られる（少なくとも、端からはそう見える）上条を微笑ましそうに見ながら。

「上条さんて、もしかして持つてる運の全てを、女運に使ってるんじゃない?」

そんな事を、佐天は呟くのだった。

「へー?じゃあ、インデックスは、しばらく『学園都市』に住むことになったんだ!」

「うん!なんか、上との話し合いで、そうなったって、かおりが言ってた」

病院からの帰り道。

話題に上がったのは、これからの、インデックスの処遇。

『呪い』を解いたから、何かしらあると佐天は踏んでいたのだが、結果は意外なものだった。

案外、2人の魔術師が上手いこと立ち回ったのかも知れない。

なにせ………

「さすがに、放置は出来ないからって、アパートを借りて、かおりと一緒に住むことになったんだけどね？」

おそらく、名目は見張りとかなのだろうが、あの女性に言わせれば、願ったり叶ったりだろう。

インデックスも、あの数日で、神裂になついたようだし。

2人が過去で、どの様な関係だったのか。

佐天には知るよしも無いのだが、出来る事なら、その頃と同じか、それ以上の関係になって欲しいと思う。

もうインデックスから、理不尽に記憶が奪われる事は無くなったのだから。

「でも、るいこの料理が食べられないのは残念かも？」

「あゝ……それは解る」

ガックリと肩を落とし、本当に落ち込むインデックスと、同意する美琴に、苦笑してしまう。

そこまで言って貰えば、料理人として本望だ。

「あはは。材料費さえ払ってくれるなら、何時でも作るよ」

出来れば、無償で………と言ってあげたいのだが、インデックスの食事を知る身としては、そうもいかないのだ。

佐天の中の『主婦佐天』が『ダメ！絶対！！』のプラカードを掲げていた。

「「本当に!!」」

「あはは……………」

まあ、2人が凄い勢いで食いついたので、それどころじゃ無かったのだが。

「いざ進めやキッチン♪目指すはじゃがいも♪」

結局、『じゃあ、早速』と言う話になり……………」

佐天の寮に2人を呼んで、調理をしていたりする。

まあ、実は佐天としても調度、良かったりするのだ。

少し前に、初春が買ってきてくれた食材。

日持ちする物や、冷凍出来る物はいいとして、葉物野菜は、そろそろ寿命が近いのだ。

買った食材は残さず使う。

捨てるなんて言語道断。

それが、佐天家の掟なのだ。

「るいこが歌ってる歌はなに？」

「ん〜？確か、歌がレシピになってるんじゃないかな？」

佐天が調理するのを待つ2人は、のんびりと、そんな話をしている。

「じゃあ、歌を聞いてたら、お昼ご飯が何か解るかも？」

「かもね〜?」

と、意外とこの2人、仲がいい。
元々、面倒見のいい……姉御肌の美琴に、インデックスがなついた形だ。

1万3000冊の魔導書を、その頭脳に持つ、魔術の申し子のインデックスと、学園都市第3位。『超電磁砲』御坂美琴。
この2人が仲良くなっているなんて、双方の関係者には頭の痛い話だろうが。

「揚げれば〜コロツケだ〜よ♪」

聞こえてくる歌が、最後に差し掛かり、インデックスの顔が、パツと輝く。

その様子に美琴は苦笑していたのだが……

「キ〇レツ〜がい〜じん♪」

「キャベツは!?!?ってか何作るつもり!?!?」

歌のラストに即座に突っ込む。

「え? インデックス、お腹空いてるみたいですし、手早く、パスタとサラダにしますけど?」

「歌、全然関係ないよね!?!?」

「はい?!?」

不思議そうに首を傾げる佐天。

いや。確かに調理してる最中に、何を口ずさんでも、料理人の自由なのだが…………

『なんか納得いかない!!』

そう思ってしまう美琴なのだった。

「そう言えばさ、佐天さんって料理は誰に習ったの？」

「ん…………料理の種類によりますね。

サバイバルな関係は、父親とか、師匠達ですし。

普通の料理は、母親と、行った先々の人達によって感じですね」

食後、お茶を飲みマツタリとしながら、美琴がふと気になった事を佐天に尋ねた。

自身も多少料理をするが佐天ほどでは無い。
何か特別だったりするのかと思ったのだ。

「やっぱり基本はお母さんなんだね」

「じゃあ、るいこのお母さんは、るいこより料理上手なの？」

まあ、帰ってきた答えは『わりと』普通で、代わりに、インデックスが興味津々だったりするのだが。

佐天の母親に会えたら、ご飯をねだる気なのだろうか？この娘は？

「うーん？料理するのは上手いね……………色んな意味で……………」

『あっ！これ、ヤバいパターンだ』

遠い目をした佐天に、美琴の危険レーダーが反応する。

これだけで、反応出来る辺り、染まっているとも言えるが。

「佐天さ……………」

「なにせ、フライパンとおたまで、ウチの父親を『料理』してたし……………」

「どんな状態!？」

話を逸らそうとして……………」

即座に突っ込んでしまった。

悲しいかな。美琴の身体には対佐天用、自動突っ込みが装備されてしまっているのだ。

「いや。ウチの母親曰く『フライパンとおたまは、主婦の最強装備よ?』らしいんですけど……………」

実際、無敵……………てか、もうバグキャラですよ?

私が、どうしても勝てない父親が瞬殺されましたから……………」

「……………」

美琴から見れば、佐天も十分バグキャラなのだが。

世界は広いらしい。

そんな事を改めて感じる美琴なのだった。

佐天さんとモデル

『ボタン!』

突然、激しい音と共に倒れ込む佐天。

「佐天さん!」

慌て駆け寄る、初春。

そんな、初春を弱々しい瞳で見つめ…………

「初春が退院して、もう一度、頑張ろうと決めた夏休み。

私、頑張ったから…………

もうゴールしていいよね?」

「佐天さん!ダメです!!まだ夏休みは、始まったばかりですし。私!佐天さんとした事が、いっぱい!いっぱいあるんです!!」

「ゴ……………」

「なにをしていますの?」

と、佐天と初春の寸劇がクライマックスを迎える所で、白井の冷めた声が響いた。

ここは、風紀委員177支部。

白井と初春の勤め先(?)である。

「聞いてください！白井さん！！初春が苛めるんです！！」

と、立ち直った佐天が、白井に抱きつく様に救援を求め。

「苛めてません！佐天さんが宿題に全く手をつけてないって言うから、一緒にしてるだけです！！」

「あゝ……………」

続いた初春の言葉で状況を理解する。

要は、勉強のしすぎで力尽きていたのだ。

「あはは♪じゃあ、お茶でも飲んで、一息いれる？」

返したのは頭を抱える白井では無く、着いてきていた美琴だ。

「ケーキも買ってきたんだよ？」

と、更にシスター服姿のインデックスまで続いている。

元々、この後、初春と白井にインデックスの紹介がてら、遊びに行く予定だったのだ。

「いいですね！食べます！食べます！！」

「佐天さん。そのページまで、終わってからですよ？」

「うぐう……………」

食いついた佐天だったが、初春の慈悲の無い言葉に奇妙な鳴き声（

?)をあげる事になったのだった。

「水着のモデル?」

「私たちがですか?」

四苦八苦しながら……

おまけに、美琴に教えて貰って、ようやく宿題を一段落させ、ケーキをつっていると美琴が意外な事を切り出した。

「そ。ウチの水泳部が頼まれたらしいんだけど、人数が足りないらしくて。」

それで、初春さんと、佐天さんも協力して貰えないかな? って」

「はぁ……………」

「えーと……………私はパスで……………」

初春は気の無い返事ながら、OKらしいが、佐天は参加しないつもりらしい。

「えー?なんで?私も、黒子も、インデックスも参加するんだし、一緒に参加しようよ!」

多少、強引に迫る美琴に、佐天は苦笑いを浮かべる。

「ほら?私って、武术やってるじゃないですか?」

それで、筋肉ついちゃってるから、水着になんてなっちゃうと、見苦しいかな? って」

「「そんな事ないです（わよ）」」

「ってダブルで!？」

本人は気にしているが、佐天の身体の筋肉のつきかたは綺麗なのだ。それは、同じ女性である、初春や美琴が憧れるくらい。

ほっそりとした身体を、無駄無く鍛えぬいた、一種の芸術なのだ。

と、いくら他者が言った所で、本人が気にしているのでは、どうしようも無い。

初春と美琴の説得も虚しく、結局、佐天が断ろうとしたところで……

「バイト代出ますわよ？」

悪魔（白井）が囁いた。

「え？」

悪魔の声に耳を傾けてしまい、動きが止まる佐天。囁きは止まらない。

「水泳部にモデルを頼んだのは、ある企業ですの。当然、参加していただければ、アルバイト代はでますわよ？」

「ちなみに……おいくらくらい？」

お金が絡むと佐天は弱い。

美琴や白井と違って、そんなに余裕が無いのだ。

「ざっと……これくらいでしたわね」

「!!?」

白井が叩いた電卓。

そこに記された数字に固まってしまう。

大金。

少なくとも、佐天にとっては大金が記されていた。

「とは言え、それだけ嫌ならしやうがありませんわね。他を当たりますから、佐天さんはお気になさらず」

「こういうのも、青春の思い出には必要ですよね!!」

フリーズしていた佐天は、白井の一言で動き出し、先ほどまでとは、真反対の事をいいます。

悪魔に魂を売った様だ。

その様子に呆れる、美琴と初春。

ちなみに白井が

「計画通り!!」

と呟いていたのには、誰も気づかなかったようである。

ようやく、ドタバタが終わり、残りのケーキを食べようとして……

：佐天は気づく。

無い。

無いのだ。

佐天が楽しみにとっておいた、ショートケーキの苺が。

「あ！るいこ！苺いらないうたいただから、貰ったんだよ？」

無邪気なインデックスの一言。
それが、引き金になった。

『ドン！！』

そんな音と共に、佐天を中心に吹き荒れる風。
書類が飛び、机の上の物が落ちる。
隣に座っていた、白井まで吹き飛ばされている。

「な……………なんですよ！！？」

白井の問いに答える者はいない。
だが、部屋にいる全員が悟っていた。
何かとてつもなく、まずい事になっていると。
佐天の放つナニかが、何時もと違うのは全員、肌で感じているのだ。
もし、ここに、佐天の武術家の知り合いがいたのなら教えてくれた
だろう。

『今の佐天は、殺意の波動に目覚めている』と。
吹き荒れる殺意。

それが、一点に集まり始める。
向けられた先は……………

「ひゃう！！」

インデックスだ。
人に出せるものとは思えない、殺気と存在感。
まるで、蛇に睨まれた……………

いや。龍に睨まれた蛙のような心境だ。

震える事も、息をすることさえ、出来なかった。

「佐天さん！」

だが、そこに勇者が現れた。

それは、魔王と化した佐天の視線を受けても、脅えず、怯まず。堂々とこう言った。

「私の苺あげますから、落ち着いて下さい！」

「あっ！ほんと？悪いね！」

『シュン』と。

そんな表現がぴったりくる。

そんな感じで、先ほどまでの、殺意や圧迫感が無くなり、そこにいるのは何時もの佐天だ。

「インデックス？」

「ひゃ！ひゃい！！」

声をかけられ、噛みまくりながら返事をする。

まだ、先程の恐怖から抜けきれてはいないのだ。

「ショートケーキの苺は取っちゃダメだよ。

私、悲しくて泣いちゃうよ？」

「わ……わかったんだよ………」

反射的に頷いたが……

そこに居た、全員の気持ちは1つだった。

『』『泣かない。貴女は！泣かない！！』『』

泣きたくなるのは食べてしまった相手の方だろう。

いや。泣いて済めば良い方かも知れない。

下手すれば命が無い。

この日から、

『佐天さんの食べてる物には手を出さない』

が友人間の共通認識になるのだが……

本人が知ることは決して無いのだった。

「今日は協力して頂きありがとうございます」

「あゝ………いえ。」

私はバイト代目当てですから、お気になさらず……」

「いえ。それでも、助かりましたから……」

白井と美琴の案内で到着した、『いかにも』な会社のビルの前。

そこで待っていたのは、おっとりとして、上品な雰囲気を持つ、2
人の少女。

こう言ってしまうとなんだが……

白井や美琴と違い、間違い無く常盤台の生徒と言う感じだ。

ライトブラウンのセミショートの髪の女性が湾内。

佐天と同じく、黒髪ロングの女性が泡浮^{あわつき}らしい。
しかし…………

『この手のタイプの人…………苦手だ……………』

それが、佐天の本音だったりする。

『ちょっと』変わった、荒っぽい幼少期を過ごした佐天は、こういつた『お嬢様』と、どう接していいのか解らないのである。

と、たじたじしていると、

「あれ？ 貴女達もモデルのバイト？」

「固法先輩!!」

初春と白井の風紀委員の先輩、固法がやって来て。

「あら？ ゾロゾロと社会科見学か何かかしら？」

と白井の知り合いらしい、着物姿のタカビー女もやって来た。
ちなみに、名前は婚后と言うらしい。

「何て言うか…………濃いメンバーかも？」

「インデックスがそれを言う？」

インデックスのシスター姿は、この面子の中でもしっかり目立っているのである。

かなり、騒がしく待つこと数分。
ようやく、訪れた担当者に案内されて、水着を選ぶ事になった。

「ううう……………」

試着室の中で、1人唸る佐天。

「佐天さん。いい加減諦めて出てきましょうよ」

そんな佐天を初春が外から呼ぶ。

「うう……………初春く！？やっぱり、私にビキニは無理があると思うんだけど!？」

佐天の水着は、本人が決められなかった為、初春が選んだのだが……

着替える為に試着室に入ってから、出てこなくなってしまったのだ。今も、顔だけをカーテンから出し、てるてる坊主の様な状態である。

「往生際が悪いですわね……………貴女以外、もう着替え終わってますのに」

「だって〜！やっぱり、変ですって!!」

「るいこ〜。いい加減諦めた方がいいかも？」

既に、他のメンバーは着替え終え、佐天が出てくるのを待っている。
……………婚後がないか？

そんな風に、視線を集めてしまったから余計に出るに出れない。
どうしたものか……

やはり、服を着てしまおうか。

そんな風に悩む、佐天の背中に誰かの手が触れた。

「へ？」

一瞬、目眩に似た感覚を感じて……

次の瞬間には、皆の後にたっていた。

その中に、こちらを見る人物が1人だけ。

「あまりにも、強情ですから強硬手段ですの」

ニヤリと笑う白井。

『やられた！』

そうなって、ようやく何をされたのかに、気づいた。

引っ張り出されたのだ。

レポートで無理矢理。

「ひどいですよ！白井さん！！」

「あら？なにか問題でも？」

ある。あるに決まっている。

こんな似合わない格好をして、笑い者になるのはごめんだった。

「はあ………」

「こうやって見るのは初めてだけど……………」

「とても素敵ですね」

だが、佐天の想いとは裏腹に、皆の反応は意外なものだった。

「えっと……………あれ？インデックス？私の格好……………おかしくない？」

初春が佐天に選んだ水着は、白いビキニ。

それに、モスグリーンのパレオを合わせた物だった。

ワンピースタイプの、露出の少ない、地味な水着を選ぼうとしていた佐天にはかなり抵抗がある物だったのだが……………

「ううん！すっごく綺麗なんだよ！！」

首を振り、褒め称えるインデックス。

美しく鍛え上げられた肉体。

その身を覆う、清廉さを感じさせる、白い水着と薄い色のパレオ。

その様子は、さながら戦乙女。

どこか危険でありながら、見るものを魅了するものだった。

「はう……………ああの！あんまり……………見られると……………恥ずかしいです……………」

自身の予想とは大分、違ったとはいえ、皆の視線を集めてる事に違いは無く。

佐天は顔を紅く染め縮こまった。

……皆の視線が佐天に集まる中、出番を失った、婚后光子の姿があったとか。

ようやく、全員が着替え終え、若干待ちくたびれ気味だった社員の人が、次に案内したのは……

「何もないけど？」

一面、真っ白に統一された広大な空間。

軽くサッカーくらいなら、出来そうである。

「ここで撮影するんですか？」

余りの殺風景さに、思わず口に出た質問。

それに、女性社員は笑顔だけを返し、何かのリモコンの様な物を操作した。

「「「わあ!!」」」

あがる歓声。

目の前に突然、南の島の海岸が表れていた。

「このスタジオは色んなシチュエーションを作り出せるんですよ」

スイッチ1つで次々と景色が変わる。

繁華街、高原、学校、尸魂界……

「あれ!?! 変なの混ざってた!?!?」

気のせいです。

「すごい！触れるんだよ！！」

再び、海岸へと戻った風景。

椰子の木に触れたインデックスが驚きの声をあげた。

「学園都市の最新技術です」

誇らしげに胸を張る社員。

『行き着く先は、科学も魔術も一緒って言うけど……………』

辺りを見回し溜め息をつく。

限られた空間とはいえ、現実を侵食し、別の世界を構築する。

実際には、まだ、そこまでは至っていないのかもしれないが……………
まるで、限り無く『魔法』に近いと言われるモノのようだった。

「カメラが視界に入る事はまずありませんので、自然体でお願いしますね？」

そんな事を考えてる内に説明が終わったらしい。

色々聞き逃してしまったが、要は、普通に海を楽しめばいいらしい。

「……………と言われてもね」

中々にそれも難しい。

そもそも、『普通』の友人と海に行った記憶など、佐天には無いのだ。

取り敢えず……………

と、周りを見れば、婚后はカメラを意識しまくった、ポーズをとっており。

白井と美琴は、追いかけてっこをしている。

「なるほど……いつも通りか………」

あまり意識しない方がいいらしい。

ならば………と、腰まで海に浸かる。

「佐天さん？泳ぐんですか？」

トコトコと初春が様子を見に来た。

「ん？あまり意識しない方がいいみたいだから、とりあえず、いつもしてる事をしてみようかと思って………」

初春に答えながら、脱力する。

佐天が海でいつもする事。

決まっている。

修行だ。

軽く息を吐き………

「はぁ!!」

撃ち出す拳。

同時に海が十数メートルに渡って割れた。

「ん。こんなもんかな？」

「」「」「………」

それを見たもの。

或いは角度によって水柱にしか見えなかったかも知れないが。けれど、反応はひとつだ。

つまり沈黙。

慣れていようが、解っていようが、驚くものは驚くのである。

「……………今のは？」

が、さすが、付き合いが長いだけあって初春の立ち直りは早い。

「ん？『水斬り』って言って……………お遊び兼、打撃のチェックかな？初春もやってみる？」

コツさえ掴めば誰でも……………」

「出来る訳無いんだよ……………」

突っ込むのはインデックス。

科学に疎くても、今のが普通に出来ないことくらい解る。

「えー？そんな事ないよ？別に『能力』でも『魔術』でも無いから……………」

「うん。佐天さん。いい加減、自分が『特別』なのを自覚しよう」

能力も魔術も使わず、そんな事が出来る時点で異常だ。

『普通』は絶対できない。

その証拠に、初見組は未だに硬直中である。

ちなみに、この一撃のせいで機械トラブルが発生して、撮影は中止になったりするのだが……
あと数分は誰も気づかないのだった。

佐天さんとスキルアウト

「あなた方……この私を、常盤台の婚后光子と知っての狼藉ですの？」

学園都市。外の20年先に行く科学の街。

そこに住む者達は、科学者として……

或いは、能力者として、希望の光が与えられる。

だが、光があれば影ができる。

その光が強ければ強い程に……

闇は色濃く、深くなるのである。

例えば、この様に路地裏に溜まり、表を歩く者達を獲物にする輩も、その一部であると言えよう。

「狼藉？さすがお嬢様は、俺達と違うお言葉をお使いだあゝ！なあ？」

婚后を囲んでいた連中。

その中の1人が下品びた笑いと共に吐いた言葉に、他が同調する。

その様子がバカにしている様だったが……

婚后は呆れた様に笑うだけだ。

「どうやら、日本語が通じない方の様ね。

ならば、お相手致しましょう！」

余裕たっぷり、手にしていた扇子を開き構える。

事実、強能力者の婚后にとって、二桁にも満たない無能力者の群れなど、相手では無いのだ。
だが…………

「へへ……………」

群れのボスと思われる男が、嗜虐的に嘲い……
状況は一変した。

「が！ぐう……………！！……………これは！？」

脳に直接響く様な、不快な甲高い音。
同時に身体から力が抜けていく。

「どうした？頭が痛いのか？」

変わらぬ笑みを浮かべたまま近寄る男達。
その様子に身の危険を感じるも、鳴り響く不協和音が、能力の行使を許さない。
どこまでも高い、婚后としてのプライドだけが、辛うじて、その身が地に倒れるのを防いでいた。

「女の子をデートを誘うなら、スマートに。
……………ああ。婚后さん相手ならエレガントにかな？」

と、倒れそうだった身体を後ろから支えられ、知っている声が聞こえた。

「さ……………てんさ……………？」

既に声も録に出ないほど意識は朦朧としていた。
だが…………

「あんた達が、何が目的でこんな事してるんだか知らないんだけど
さ…………

私の友達に手を出すなんて、ちょっと悪さが過ぎたみたいね？
武術家、佐天涙子が全員纏めて、留置所に行かせてあげるわ…………
！」

静かに響いた、その声を確かに聞いたのだった。

「……………が！？」

「はい。お仕舞い…………と、そろそろ、隠れてないで出てきたら？」

婚后を囲んでいた、スキルアウト。

その最後の1人を気絶させた所で、佐天は路地裏の角に声をかけた。

「気づいていたのか…………」

気まずそうに歩んで来たのは、緩いウェイブのかかった茶髪。

ジーパンに、黒い革ジャンを羽織った、背の高い男だった。

「一応、聞いておくけど、こいつ等のお仲間？」

佐天が確認するのも無理は無い。

男の格好は悪ぶった…………要は、スキルアウトが好む格好だからだ。
とはいえ、実のところ、その可能性は低いと判断していた。

仲間なら、もっと早い段階で助けに入る筈だし、何より、この相手

は、佐天の足元で眠る連中より、おそらく強い。

強さⅡ身分がスキルアウトの基本だ。

なら、連中の中心に、この相手が居なかったのはおかしいのだ。

「おいおい！勘弁してくれ！！」

俺は、そっちのお嬢ちゃんが絡まれてるのを見て、助けようとしただけだぜ？

まあ、アンタの方が先に助けに入ったせいで、ヒーローに成り損ねちまった訳だが………」

案の定、手を振って相手が否定したところで、佐天も警戒を解き………

「それは残念。お嬢様のピンチに現れる不良なんて、少女漫画的には、恋の始まりだったのに」

そんな軽口を叩いた。

「まったくだ………っと、1つ聞かせて貰っていいか？」

頭をボリボリと書きながら軽口に答えた相手に、頷く事で先を促す。

「どうやって、こいつ等気絶させたんだ？」

俺も、格闘技楫ってるんだが、何をやってたのかさっぱりでな」

男は、路地の入口から、ずっと中の様子を窺っていた。

不味そうな状況になれば、助けるつもりで。

だが、結果として見た物は、不可解な行動で、不良達を沈黙させる少女だった訳だ。

「どうやって……と言われてもな……
ただのシッペですけど？」

「は？」

意表をつく答えに、男の時間が止まる。

「え？あれ？シッペって方言なんだっけ？
えーと……なんて言ったらいいんですかね？
指二本で、相手を叩く……」

男の沈黙を勘違いしたらしい少女が、わたわたと説明を始める。
いや。『シッペ』の意味は解るのだが。

確かに良く見ると、倒れている男達には、どこかしらに、指二本程
の赤い痕がついている。

信じられないが。

本当に信じがたい事ではあるが、目の前の少女が言うことは真実らしい。

「なんで、『シッペ』なんだ？」

辛うじて口から出たのは、そんな問い。

『シッペ』で全員倒せる程の実力者なら、もっと楽な方法があるだろうに。

意味が通じていた事に安心したのか、ほっとした様子で、佐天は答える。

「友達に『風紀委員』の娘達がいるんですけどね？」

その娘達に、『風紀委員でも無いのに力を行使しちゃダメです!』
って言われちゃいまして。

『シッペ』なら、お遊びの範囲だしいいかな? なんて……………」

「ダメだと思うぞ?」

いざという時用の言い訳を、即座に否定されて佐天は青ざめる。

いや。普通に。苛めにならない程度のお遊びなら問題無い。

風紀委員だって、そこまで厳しく無い。

だが、少なくとも、普通はシッペで人は気絶しないのだ。

「どうしよう……………初春や固法先輩に知れたら……………」

佐天がオロオロと呟き、その中の1つの単語に男が反応しかけた時。
路地の入口が騒がしくなる。

どうやら、騒ぎを聞きつけた、アンチスキルが駆けつけたらしい。

「!!?」

咄嗟に。

佐天が取った行動は逃げる事だった。

悪い事はしてない……………と思うのだが、どうしても、事が知れた場合。

風紀委員177支部の面々に、お説教される未来しか思い付かないのである。

婚後を残しているのが気がりではあるが、アンチスキルが到着した以上、問題無い筈である。

「おいおい……………」

一方。

残されていた男も逃げ始めていた。

先程の少女に、聞きたい事はあったが、今から追いつけるとは思えない。

同時に、アンチスキルに事情を聞かれるのも、ご免こうむりだった。

結果、アンチスキルが現場に駆けつけた時には、加害者と思われる、スキルアウト数名と、被害者と思われる、常盤台の少女が全員倒れているという謎な状態が広がっていた。

佐天さんと風紀委員3人娘

「なんで呼ばれたかは解ってますわね？」

風紀委員177支部。

初春、白井、固法と、佐天の知る、風紀委員が所属する支部である。

あの場から逃げ出し、寮に帰り、さあ！お昼ご飯の用意でも……………
と思った所で、メールが来た。

差出人…初春

件名…すぐに

本文…177支部に来てください♪

『今日、私の携帯は壊れてたんだ……………』

見なかった事にしようとして、携帯を閉じかけた所で、またメールが。

差出人…白井さん

件名…ちなみに

本文…逃げるつもりなら、覚悟しておいた方がいいですよ？色々
と……………

「なにを！！？」

声に出して突っ込んでしまった。

……………で素直に、出頭した訳である。

ここに来れば、お説教は確実だが、来なかった場合は何が起こるか解らない。

人間、リアルな世界で『パル○ンテ』は唱えきれないものなのだ。

「いや……………それが、全然さっぱり！」

それでも、取り敢えず生き残る為に精一杯の努力はする。

それが、佐天の生き様である。

「今朝、婚后さんがスキルアウトに襲われたんです」

「へえ……………そうなんだあ……………」

ツウーと視線を逸らしながら、相槌を打つ佐天。

それを確認した、白井と初春。そして、固法は小さく頷き合った。

この地点で、風紀委員の面々はスキルアウトを撃退したのが、佐天であることを確信したのである。

実は、先程までは、

『十中八九、佐天さんだろう』

ぐらいだったのだ。

と言うのも、婚后は倒れる直前に、佐天の声を聞いていたが姿は見えない。

スキルアウトの連中は、まだ意識が戻っていないし、戻った所で、自分たちを倒した相手の話を、素直にするとも思えない。

状況と婚后の話から、佐天だろうと言うことで、呼び出した訳である。

それで先程の返しである。

佐天が何も知らなければ、友人が、そんな目にあって心配しない訳が無い。

つまり、佐天は婚后が無事だと既に知っているのだ。

とはいえ、素直には認めまい。

「それで、婚后さん酷い怪我をしちゃって………」

「え！？怪我なんてしてなかったよ！！？」

「佐天さん？なんでそんな事、知ってるのかな？」

「あ………」

気がつけば、固法が佐天の背後に立っていた。
うん。実にイイ笑顔である。

「謀ったわね！初春！！」

「先に嘘をついたのは、佐天さんですよ？」

肩を掴まれ、逃走を封じられている佐天に目もくれず、PCで調べものを続ける初春。

「白井さんへるぷ！」

「嘘をついていたのですし、自業自得だと思って諦めなさいな」

同じく目を合わせない白井。

白井の場合、無茶をして固法に迷惑をかけた回数も多いので、藪をつつくのを恐れているのもあるが。

「つまり、トレーニングの帰りに、スキルアウトに絡まれている婚后さんを見て、助けに入ったと」

「最初は、婚后さんの能力を見たくて、出歯亀してただけなんですけどね？」

見てたら、ヤバそうな感じだったんで……」

思いの外………と言わべきか、固法の話は事件の内容に終始していた。

本来、風紀委員でも無い生徒が力行使するのは望ましくない。だが………だ。

今回の場合、佐天が手を出さなかったら、どうなっていただろうか？ 婚后の話によると、突然、能力を使えなくなったらしい。

つまり、無力な女生徒と複数の悪漢という構図だ。

アンチスキルが到着したのは、佐天がスキルアウトを沈黙させた後だったのだから、少なくとも数分間は、時間があった訳だ。

最悪………

婚后が、アウトスキルに拐われて………

同じ女性として、考えるだけでも恐ろしい事態に身が震える。

『結果としては、佐天さんの行動は最善だったわけか』

犠牲者を出さず、『能力者連続襲撃事件』の容疑者と思われる者達の身柄も確保出来たのだから。

とはいえ……

なにかと無茶をする少女である。

注意くらいはしておくべきだろう。

なにより、嘘について逃げきろうとしていた訳だし。

「……………今回の件。佐天さんのお陰で、犠牲者を出す事無く犯人を確補できたわ。

その事に関しては、風紀委員を代表してお礼を言うわ」

予想だになかった謝礼の言葉。

佐天は戸惑い、初春、白井も驚いている。

だが、固法が『ただし』と続けた所で、佐天は硬直し、残り2人は苦笑いを浮かべた。

「風紀委員でも無い生徒が、力を振るう事を良しとは出来ないわ。

佐天さんの力は、私も知ってるけど、今度からは、力に訴える前に、風紀委員に連絡を……………」

「異議あり!!」

固法の言葉を、机を両手で叩き遮る。

「私、今回は力を使ったりしてませんよ?」

「はあ?」

何を言い出すのだろうか？この娘は？

佐天が無能力者なのは、固法も知っている。

故に、佐天があの人達を沈黙させるには、文字通り『力を振るう』しか無いはずだ。

「固法先輩の言う『力』って能力とか……

私の場合だと、突きとか蹴りみたいなモノの事でしょ？」

「……………まあ、そうね」

口許に指先を当て、少し考えてから答える。

これで、絞め技でした等と言われたら、説教を倍增させる気で。

まあ……………

だが、佐天は何時でも、人の予想の斜め上を行くのだ。

「じゃあ問題無いです！私は、あの人達に『しっぺ』しただけですもん！

要は、遊んでただけですから、無問題ですよ！！」

「……………」

沈黙。静か過ぎて耳鳴りがする程の沈黙。

「あ……………あれ？」

その反応に、佐天が狼狽え始めた頃……………

「……………「良いわけあるかー！！！」」

風紀委員3人娘の絶叫が鳴り響いた。

「いったい何をしたら『しっぺ』で人が気絶するんですの!？」

「えーと……そこは『ジャングルの王者』に習った秘伝の技で……」

「いやいや。それでも、結果として人が倒れてる訳だし、やっぱり『暴力』でしょ?」

「えー?でも、街行く人、100人に聞いても『しっぺ』は暴力じゃないくて、罰ゲームって言うと思いますよ?」

「そんな危ない人達と、遊んじゃダメですよ?」

「「いや!突っ込む場所はそこじゃない!!」」

怒濤の勢いで行われる会話。

ちなみに、上から、白井、佐天、固法、佐天、初春、白法である。

と、ここで初春が溜め息をひとつ。

「白井さん。固法先輩。相手は佐天さんですよ?常識で考えちゃダメです。」

私は、佐天さんが生身で大気圏突破したとしても驚きません!」

「いやいやいや……」

「さすがに私は、そこまで常識を捨てられませんの……」

初春のともんでも発言に、固法は漫画汗を垂らし、白井はガツクリと項垂れた。

「初春……いくら私でも、生身で大気圏突破は無理だよ………多分。」

どこかの煩惱お兄さんじゃ無いんだから」

「断言して！お願いだから、そこは断言して！！」

「というか……どこかには、いるんですのね。」

生身で大気圏突破した方が」

固法の言葉は既に懇願であり、白井はどこか遠い目をしていた。こうして、美琴の知らないところで、美琴の味方（常識人）は、今日も減っていくのであった。

「えーと………取り敢えず、事件のあらましはこれでいい？」

30分後。

どうにか、立ち直った固法の手によって、報告書が纏められていた。………深く考えるのを脳が拒否したとも言う。

「はい！………ああ、そう言えば、私の他にも婚后さんを助けようとしてた人がいましたよ？」

固法に渡された報告書に目を通し、そこにもうひとりの救出者の姿が無いことに気がついた。

「え？でも、婚后さんはそんな事、言ってませんでしたよ？」

婚后に事情聴取を行った初春が、報告書を確認し直しながら訪ねる。

「うん。姿を見せたの、婚后さんが気絶した後だったしね？」

というか、正確には佐天がスキルアウトを倒した後だ。

「目撃者が他に居たと。……佐天さん？」

「は……はい？」

「そういう事は、もっと早く言って下さいな？」

「すみません！」

顔は笑顔で。

でも、瞳はまったく笑ってない。

そんな器用な真似をしながら迫る白井に、佐天は反射的に謝っていた。

佐天は知らないが、この瞬間、報告書が書き直しになったのである。

「はぁ……まあ、いいわ。それで、その人の特徴、教えて貰える？」

固法もまた、帰りが遅くなる事に溜め息をつき……

だが、それを佐天に当たる訳にも行かず話を続ける。

救出者が佐天ひとりと決めつけた落ち度は、風紀委員にあるのだから

ら。

「そうですね……軽くパーマをあてた茶髪の、男の人としては長めの髪で。

黒の革ジャンとジーパン姿で、背は高め。

後、よく身体、鍛えてましたね。

多分、喧嘩慣れしてるタイプの人じゃないかな？」

「スキルアウトによくいるタイプの服装ですわね？」

「後半部分は、佐天さんらしい感想ですね」

「……………」

白井、初春が思い思いに情報を整理する中。

固法は固まってしまう。

その特徴に、思い込りがあった。

有りすぎる。

首を振り、ただの偶然と言いつ聞かせた所で。

「あっ！事件を起こしていた、スキルアウト達の情報来ました。

えっと……所属組織『ビックスパイダー』だそうです」

その言葉がだめ押しになった。

佐天さんと固法先輩

夕焼けに暮れる街を、固法は1人歩いていた。

救出者たる佐天からの情報。

及び、それにより新たに発覚した、もう1人の救出者。

それらの報告書の作成と、関係各所への連絡の為、随分と遅くなっ
てしまった……………

いや。それは正確ではない。

確かに、佐天からの情報で、やることは多くあったが、それでも、
普段通りにこなしていれば、2時間は早く終わっていただろう。

こんな時間までかかってしまったのは、一重に固法が『普段通り』
で無かった事に起因していた。

書類の書き間違いに、連絡ミス。

書き上げた報告書に牛乳をぶちまけたり……………と、今日1日で、1
年分のミスをした気分だ。

お陰で、後輩達に随分と心配されてしまった。

らしくない。

自身でそう思うものの、佐天の言う『もうひとりの救出者』の、容
姿的特徴。

そして、事件の中心と言われる、アウトスキル『ビックスパイダー』
の名前。

その2つが、固法の心を縛り、気づけば上の空になってしまってい
た。

「先輩……………」

小さな呟きに答える者は無く…………

心の痛みを灯した言霊は、夕焼けに溶けて消えた。

「固法先輩？今、帰りですか？」

突然の声に、ビクッと身体を震わせ振り替える。

そこには、数時間程前に支部を後にしていた、少女の姿があった。

「佐天さん……………」

買い物帰りなのか、佐天の左手には、黄緑のエコバック。
そこから、いくつかの食材が、チラリと姿を見せていた。

「ええ。報告書の作成に思ったより時間がかかったね？佐天
さんはお買い物？」

何気なく返事を返しながら、ふと思う。

他人と随分と違うこの娘なら、今の自分の気持ちにどう答えるだろうと。

『…………それは言い訳か』

その実、誰でもいいから相談したかっただけだ。

ただ、過去の自分を知るルームメイトには話せないし、風紀委員である後輩2人もアウトだ。

佐天は、ただ、この話をするのに丁度良い相手であるだけ。

勿論、固法が、それなりに佐天の事を信用しているのもあるが。

「はい！今日のタイムサービス！！茄子の袋詰めで茄子大量ゲット
ですー！！」

ご機嫌な様子の佐天。

左手のエコバックを覗いて見ると………確かに大量だった。

『袋詰めって、そんなに入るものだったかしら?』

そう思ってしまうくらいには。

「それは、よかったわね。

ところで……佐天さん、晩御飯まだなのよね?

良かったら、一緒に食べない? 奢るわよ?」

さすがに、道で歩きながらするような話でも無い。

ゆっくり話をするために、夕飯に誘ってみると……

「本当ですか!? 是非!!」

凄い勢いで食いついて来た。

若干、退くほどに。

『そう言えば、生活費が厳しいって、こぼしてたっけ?』

妙に張り切る佐天に、財布の中身の心配し……

「あんまり高くないのにしてね?」

と継ぎ足した固法だった。

一度、佐天の部屋に寄り、やって来たのは『アレキサンダー』と言

う名のファミレス。

店舗数は少ないものの、都心部を中心にチェーン展開している店で、最近、学園都市にも進出してきたらしい。

ちなみに、メニューの横の数字を見て、固法は胸を撫で下ろしていたりする。

良心的な値段のお店だった。

フェアをやっていた、オムライスとチキンドライアを、妙に愛想の無い女性店員に注文し、待つことしばし。

「ん！おいし！！」

「確かに、ファミレスとしては、大当たりの部類ね……」

届けられた食事は満足のいくものだった。

佐天の頼んだオムライスは、ふわふわ玉子にシチューが絡み絶妙の味わいだったし、固法の頼んだチキンドライアも、濃厚なチーズと下味のついたチキンが、食欲をそそる物だった。

「さてと……お腹と心が幸せになったところで、固法先輩？
私に何か話したかったんじゃないんですか？」

食事を終え、コーヒーを飲みながら、固法が、どう切り出したものかと悩んでいると、逆に佐天からそう切り出された。

「……そんなに解りやすかった？」

見透かされていたことが、少なからずショックだった。

佐天に会ってから、態度に出したつもりは無かったのだから。

「いえいえ。多分、普通なら気づけなかったと思いますよ？」

ただ、私の事情聴取してた時、それと、さっき私と会う直前の様子です…

キーワードは、『もうひとりの救出者』『ビックスパイダー』『先輩』ですかね？』

ビクリと、身体が震えた。そして、大きく溜め息をつく。

「参ったなあ……そんなとこまで、解っちゃうんだ。

……って、最後のは盗み聞きしてたの？」

「まさか！ただ、私の耳は他の人より、ちょっとだけ高性能なんですよ」

ちよつとじゃ無いと思うわよ？と、苦笑いして、コーヒーを一口。妙に苦い味に、顔をしかめてから、ようやく口を開いた。

「どこから話したものかなあ？」

……例えば、昔の知り合い……友達が、今の自分の敵として現れたら、佐天さんどうする？」

我ながら、随分と遠回しな質問だと思うも、佐天は真剣に考えてくれているようだった。

「そうですねえ……相手によりますかね？」

「それは、親しさとか？」

「いえ。強さです」

「は？」

あまりに意外な答えに、呆気にとられる固法を余所に、佐天は続ける。

「手加減して勝てる相手なら、取り敢えず捕まえてから話を聞きます。」

命懸けの戦いになりそうな相手なら、先に理由くらい聞きたいですし」

「あゝ……戦わないって、選択肢は無いんだ」

「無いですね。今の私の『敵』って、私と私の大事な人達に手を出す相手の事ですから。」

それに手を出すなら、相手が誰であれ、躊躇しません。

まあ、でも……多分、これは固法先輩の参考にはならないでしょ？」

あっさりと言ったのけた佐天を羨ましいと思った。

悩んでいる自分と違い、彼女は既に選んでいるのだ。

今と過去を比べて、今を選ぶ事を。

「私ね……好きな人がいたのよ………」

「はあ……て！ええ！？あの！固法先輩！！恋愛系の話題は、私以外の誰かに相談した方が……！」

「大丈夫よ。そういう話とは、少し違うから……」

予想以上に慌てふためく相手に

『そう言えば、この娘のそういう話、聞いたこと無いわね』

等と思いながら、全てを話していく。

それは、2年前に始まって、終わった……

それでも、未だ胸を傷つける、小さな恋の話。

「えーと、ざっと簡単に纏めると、固法先輩は一時期、スキルアウトに居た時期があって、それが、今、問題になってる『ビックスパイダー』

で、そのボスが『黒妻綿流』って人で、固法さんが好きだった人。その人と、私が会った『もうひとりの救出者』が似てると……」

「そうなんだけど……」

なんだろう？ 間違っては無いのだが、そんな風に纏められると色々、台無しなきがする。

主に、固法の思い出とか、苦悩とかが。

「でも、これっておかしいですよね？」

「なにが？」

佐天の言葉に、思考を中断し耳を傾ける。

「まず第一に、黒妻さんって人は、2年前に死んでるはず。

まあ、これは単純に生き残ったのかもしれないですけど、そこまでの事件を起こした組織の片側のボスですよ？

生きてるなら、風紀委員もアンチスキルも血眼で探す筈です。

少なくとも、学園都市内で悠長にスキルアウトのボスなんてやっ
られませんよ。

なのに、『黒妻綿流』は、この2年間、変わらずにビックスパイ
ダーのボスをやっている。

第二に、私が会った人が『ビックスパイダーのボス』だとするなら、
あそこで姿を現す意味が無いんです。

私に姿を見られる前に姿を消すのが普通だし、なにより彼は、本当
に婚后さんを助けようとしてたみたいですから」

佐天の話を整理してみる。

黒妻はビックスパイダーのボスを続けられない。

ビックスパイダーのボスが、佐天の前に姿を出す筈が無い。

「つまり、今の『ビックスパイダー』のボスは、黒妻綿流を名乗る
偽物？」

「その可能性が高いって事です。

アンチスキルも本人の、確保、死亡どちらかを確認していれば、名
乗る程度の奴なら放置しそうですね」

確かに、多忙なアンチスキルは、その程度では動かない。

そして、それなら『ビックスパイダー』が、この2年で大きく変わ
ってしまったのも納得いく。

「それじゃ行きましょうか？」

佐天の声に時計を見れば、既に結構な時間になっていた。
完全下校時間も近い。

「もうこんな時間！？急いで帰らないと！

ごめんね！佐天さん！遅くまで付き合わせて……」

「え？」

「え？」

慌てて帰ろうとした、固法だったが、不思議そうな顔の佐天に戸惑ってしまふ。

と、嫌な予感がした。

この娘の行動力は、風紀委員随一の、白井に並ぶものがあるのだ。

「佐天さん……行くってどこに？」

「もちろん！ビックスパイダーのボスを確かめにですよ！！」

恐る恐る聞いた固法の言葉に、はっきりと佐天が答えた。

佐天さんと黒妻さん

さすがに、風紀委員たる固法が完全下校時間を破る訳にはいかず……

ビックスパイダーのボスを決めるのは、明日に持ち越す事になった。

まあ、佐天は破る気、満々だったのだが。

固法は知らないが、佐天は完全下校時間どころか、学園都市における禁忌。

『無許可における、学園都市からの外出』すらやっているのだ。

それも、わりと頻繁に。

その佐天に言わせれば、『それくらい』な事なのだが。

生徒の見本たる、風紀委員の固法は、そうもいかない。

風紀委員のなんたるか、規則を守る重要性を佐天に説き、なんとか説得したのだった。

もつとも、途中から納得済みの佐天に、説教する形になっていたが。

『けど、それも言い訳よね』

自身の内心に苦笑する。

そう。その気になれば、風紀委員の捜査の為、と言う切り札があったのだ。

まして、相手はスキルアウト。

夜間に行動を、起こしやすい相手だ。

最悪、単独行動にお小言と始末書は覚悟しなければ、ならないが……

今の固法の目的からすれば、些細な事と言えた。

では、なぜ翌日に行動を延期したのか？
単純に時間が欲しかった。

確かに、佐天の言う通り、自身の知る黒妻が、現在のビックスパイダーのボスと言う可能性は低い。
だが、あくまで低いだけなのだ。
可能性は0では無い。

仮に黒妻が、ビックスパイダーのボスだとしたら。
いや、そうでないとしても。

それを確かめて、自分は何をしたいのだろうか？
風紀委員として捕まえる？

それは……そう。

この事件の犯人は、捕まえないといけない。

それは、風紀委員として当然の責務。
けれど……

「先輩……」

もし、彼が犯人だった時。

自分はそれが出来るのだろうか？

翌日。

朝の内に、佐天と合流した固法は、第10学区エリアG。
『ストレンジ』と呼ばれる場所に足を運んでいた。

このエリアは、『ビックスパイダー』の溜まり場。
本人達に言わせれば、『本拠地』がある。

過去も現在も。

景色の変化が激しい、学園都市にあって……

この場所の風景は変わっていなかった。

2年前……

固法がここを去った時のまま。

まるで、人に見捨てられたかのように……

いや、事実そうなのだろう。

ここにあるのは、学園都市に見捨てられた、『人』と『物』なのだ。

「……………ねえ？ 寄っていきたい場所があるんだけど……………いい？」

「？ いいですけど……………」

不思議そうに首を傾げる、佐天を引き連れてやってきたのは、とあるビルの屋上。

視界を遮る物が無い、この場所からは……

かつて嫌悪し、逃げ出した、学園都市の中心。

今の自分の居場所が、遥か遠くに見えた。

「いい景色ですね……………」

「うん……………」

この場所は、彼のお気に入りだ。

それを知るものは少なかった。

だから、それを知ることが出来た固法にとっても、ここは特別な場所だった。

でも…………

屋上を囲う手すり。

その一部分に目を向ける。

そこには、マジックで消された、相合傘。

胸をチクリと刺す痛み。

同時にここは…………

「珍しいな。先客がいるとは…………と、昨日の嬢ちゃんと…………美偉か？」

「久しぶりですね？先輩？」

突然、響いた声に驚きは無かった。

不思議と、ここに来れば会える。そんな気がしていたのだ。

「えーと…………これは、私、空気を読んで、こっそり居なくなるべき場面なんでしょうか？」

数秒…………あるいは、数分か？

沈黙した場を破ったのは、佐天の、そんな呟きだった。

「いなくなつて貰ったら困るかな？」

一応、佐天さん、今日は私とペアの一般協力者になってるから」

「そうなんですか！？」

場違いな言葉に、思わず吹き出したせいも、少し緊張が解けた。

というか、本当にそういう場面だったとしても、佐天の一言は台無しにしていたと思う。

「今日は風紀委員として、先輩に聞きたいことがあってきました」

「へえ……お前、今、風紀委員なんかやってんのか？それで？聞きたいことってのは？」

改めて切り出したこちらの言葉を、黒妻は面白そうに受けた。

相変わらず食えない男だ。

仲間であつた時もあった事だが、相対するとより一層際立った。

聞きたいことは他にもある。

それこそ、風紀委員であることを忘れてしまつて、1人の女として聞きたいことが。

けれど、固法の口から出たのは風紀委員としてのもの。

「今のビックスパイダーのボスは誰ですか？」

「うん？……それに答える前に、ひとつ聞きたいんだが……美偉。俺だつて答えたら、お前はどうするんだ？」

「……………」

一番嫌な切り返しだった。

それを、固法はずっと悩んでいたのだから。

「答えないか。嬢ちゃんは？」

「さあ？固法先輩にお任せしますよ。」

まあ、犯人だとしたら、婚后さん襲った分で、一発くらい本気で殴らせて貰いますけど。

逮捕云々は、私的にはわかりかし、どうでもいいですから」

あっさりとした、その答えに、黒妻は肩をすくめ……………よく見ると顔が青いか？

まあ、それを感じさせないようにして、固法の答えを待つ。

「私は……………」

考える。考える。

ずっと悩んできた事だった。

「その時は、先輩を逮捕します。

今の私は風紀委員で、ここが私の居場所ですから」

その答えは、思いの外、簡単だった。

今の自分は、あの頃と違う。

一人で悩んでいた。

居場所を探していた頃とは違うのだ。

自分を頼ってくれる娘がいる。

危なっかしいが、頼りになる娘がいる。

無条件で、自分を信じてくれる娘がいる。

そんな自分が、どうして全部を捨てて、ここに戻れようか。

なにより……………ここは、私の居場所じゃないと言ってくれたのは、目の前の彼だった。

「そうか……………居場所は見つかったか？」

「少々忙しくて、賑やか過ぎる場所ですけどね」

黒妻は、満足そうに頷き……固法もようやく笑顔を見せる事が出来た。

「だが……残念ながら、今のビックスパイダーのボスは、俺じゃ無い。

『黒妻綿流』を名乗っちゃいるがな。
今の、ビックスパイダーのボスは………」

キイイイイン！！

甲高い音が鳴り響き、固法が頭を抱え込む様にして座り込む。

「な……に……これ？」

頭に直接響くような、感に障る音。

だが、他の2人は平気そうだ。

心配して駆け寄る佐天。

黒妻も続いている。

「2人は平気なの？」

「何がですか？」

「この……音……」

そうは言われても、佐天にはただの甲高い音にしか聞こえず、戸惑う。

それは、黒妻も同じだ。

だが、黒妻はそこである事に気がついた。

「なあ？嬢ちゃん？この音……嬢ちゃんの友達が襲われた時も、鳴

ってなかったか？」

とっさに昨日の事を思い返す。

婚後を助けに入る前。

余裕を見せていた婚後が、突然苦しみだした時。

確かに、この音が………

「おい!!」

「固法先輩を頼みます!!」

思い出すが早いか、ビルの壁面を駆け下りる。

鳴り響く音は、相手の居場所を明確に教えてくれていた。

そこが、敵の居場所だと。

佐天さんと蛇谷さん

同じ頃。

白井と美琴はピンチに立たされていた。

『能力者連続襲撃事件』

その中心だと思われる、ビックスパイダーのアジトを突き止め、そこにたどり着いたのだが。

相手が何かを起動させ、甲高い音が鳴り響く。

脳に直接響くような、不快な音。

思わず、耳を塞いだ白井を男が蹴り飛ばす。

「ぐう……!!」

「黒子!!? ……ううう!!」

ドサリ!!と音をたて、倒れこんだ後輩。

その返しにと放った雷撃は、誰にも命中せず、廃墟の一部を破壊しただけだった。

「そんな!!? 狙いも威力もまるで……」

驚愕する美琴に、スキルアウトのボスは嗜虐の笑みを浮かべる。

「へ! コントロール出来ねーか? お前は、もちろん知らねーだろうが……」

こいつは、キャパシティダウンってシステムでな!

詳しい事は知らねーが、要するに、音が脳の演算能力を混乱させるんだってよ……

ま……俺たちスキルアウトには、ただの甲高い音にしか聞こえないけどな？」

「!？」

思わず唇を噛む。

それが、事実なら……

いや、事実なのは、自身が既に体感して解っている。

能力無し、しかも酷い頭痛に悩まされる、この状態で見渡す限りの人数を相手にしなければならぬ。

そんな事は……不可能だ。

「『黒妻さん許して下さい』ってなら、考えてやってもいいけどな？」

苦しむ、少女2人の姿を嘲笑うボス。

勝ち目は無い。

けど。けれど……

「誰が!! アンタ達みたいのに、頭下げるくらいなら……死んだ方がマシよ!!」

それでも、目の前の男達。

逆恨みをして、卑劣な手を使って能力者を襲う様な奴等に屈する事は、美琴のプライドが許さなかった。

「そうかよ……じゃあ! その言葉!! あの世で……!？」

「それって、これの事？」

振り上げられた男の拳。

やって来るであろう衝撃に、身体を強張らさせ、目をキツくとじただけ……

が、聞こえたのは聞き馴染んだ少女の声。

『え!?!』

疑問に目を開く。

そこには、紫の車のトランク部分を指差す少女の姿。

「佐天さん!!」

声を発せない、美琴に代わって白井が、少女の名を呼ぶ。

佐天は、一度だけこちらを振り向き、2人を安心させる様に笑った。

「なんだ!?! テメエは!!?!」

明らかに狼狽した男の態度に、獰猛な笑顔を浮かべる佐天。

「正解みたいね?……じゃあ……」

振り上げられた右手が叩きつけられ、車の後部を粉碎した。

破壊したのでは無い。

粉碎したのだ。

パラパラと鉄粉へと変わった車の一部分が宙に舞い、同時に、白井と美琴を悩ませていた音も止まった。

予想すらなかった光景に、スキルアウトの面々が動きを止める中。その光景を引き起こした人物は、長い髪を掻き上げ、鋭い視線を周囲へと走らせる。

「なんで、御坂さん達がここにいるのか……とか、あの機械を、あんたらが、どこから手に入れたのか……とか。
まあ、解らない事は沢山あるんだけどさ………」

話ながら、ゆっくりと歩き、白井に手を貸し立ち上がらせる。

「大丈夫ですか？」

「ええ……まだ少し力が入りませんけども………」

「ごめん！助かったわ………」

様子を見ていた美琴も、隙を見て駆け寄る。

美琴の言葉に、佐天は苦笑を浮かべ。

「御坂さんも、白井さんも、無茶しすぎですよ？
帰ったら固法先輩のお説教と、始末書ですね？」

「うっ……！？」

「佐天さんだけには、絶対言われたくない、セリフですわね………」

ここぞとばかりに、切り出された佐天の言葉に、2人は苦い表情を浮かべ……

やがて、佐天は再びスキルアウトへと向き直る。

「とりあえず、あんたらは、私の友達4人に手を出したんだ。
全員、骨の2、3本は覚悟して貰うよ？」

肉食獣を思わせる視線が、その場にいるスキルアウトを撃ち抜いた。

「なにビビってんだ！能力者の女共は、まだ能力をつかえねーはずだ！！」

ただの小娘3人に、ビビるこたあねえ！！やっちまえ！！」

狂った様に、ボスが喚き散らし、一斉にスキルアウト達が動きだす。そして……一方的な『狩り』が始まった。

「すげえ……………」

その様子に、側近の1人が呟いた。

追い込まれているのは、自分たちの方だというのに……………

それでも、なんの能力も使わず。

数十人の敵を次々と無力化していく、少女の姿に、その場にいる者は、確かに魅せられていた。

「くそ……あの女……悪魔……いや。そんな生温いもんじゃねー！！」

だが、ボスたる立場の者にすれば笑えない。

圧倒的有利の立場にある筈だったのに、圧倒されているのは、こちらだというのだから。

「知らないのか？蛇谷？ああ言うのは、『鬼神』って言うんだぜ？」

「！！？」

不意に、過去に捨ててきた名で呼ばれる。

それも……

過去に憧れ、慕った者の声で。

「久しぶりね。蛇谷君。しばらく見ない間に、貴方、随分とゲスに成り下がったみたいね……」

そして、能力者でありながら、自分たちと同じ場所に居た少女の声。

振り返れば……

確かに、そこにいた。

2人共、あの頃より随分と大人びてはいたが……

あの頃の面影を確かに残した、かつての仲間が。

「久しぶりですね。固法さん。黒妻さん……」

焦った様子も無く、『ビックスパイダー』の、現リーダー。

『蛇谷次雄』は静かに返した。

「で？なんの用ですか？見ての通り忙しいんで、手短にお願いしたいんですがね……」

今も部下達と、少女の戦い。

いや。一方的な狩りは続いている。

長々と話している時間は無かった。

「蛇谷……お前、変わっちゃったんだな。

お前は……『ビックスパイダー』は、こんなモノじゃ無かった筈だぞ？」

苦々しげに告げる黒妻。

それに、蛇谷は呆れた様に苦笑を浮かべるだけだ。

「変わりましたよ。変わらずを得ませんでした。
この2年……

更正施設にいた貴方や、『ビックスパイダー』を捨てた、固法さんにゃ、解らんでしょーがね」

ビックリと固法の身体が揺れ、黒妻に驚愕が走る。

「知ってたのか……」

「ええ……まあ。知らなかったとしても、貴方があれくらいで死ぬとは思えないですけどね。

ああ。名前を勝手に借りたのは、謝っておきます。

必要だったんですよ。

貴方と言うカリスマが。

『ビックスパイダー』を守る為にはね……」

告げると同時に、最後の部下が倒れた。

小さく舌打ちし、蛇谷は、鬼神のごとき少女と対峙する。

「蛇谷！違うだろ！！これは！こんなのは！『ビックスパイダー』じゃ……」

「それでも！それでも……俺の居場所は！ここしか無かった！！」

向けられた背に、投げ掛けた黒妻の言葉も。

伸ばしかけた固法の手も。

そこに届く事は無かった。

かつての仲間達が、積み重ねて来た2年は。

悲しい程に、それぞれの距離を引き離していた。

羽織っていた革ジャンを脱ぎ捨てる。

対峙した相手は、律儀にこちらの会話が終わるまで待っていてくれたらしい。

「よう……待たせたな……」

「別に？もういいの？」

少女の問いに苦笑しつつ、小さく頷く。

なにがとは、問うまでもない。

先程の少女と……固法の腕にも、風紀委員の腕章があった。加えて、この場にいる構成員の殆んどが、何かしらの怪我をしている。

勝っても負けても、『ビックスパイダー』は終わりだと、誰の目にも明らかだった。

「固法先輩の知り合いみたいだし……」

大人しく捕まるってなら、見逃してやってもいいわよ？

個人的には、無茶苦茶ムカついてるけど……」

ハンッと鼻で笑う。

「悪いがそりゃないな。力と恐怖で押さえつけてた様な組織だが……それでも、そこに倒れてる連中は、俺の部下で仲間だ。仲間倒されて、黙ってちゃボス失格だろうが！！」

猛然と振り下ろされた拳を、左手で払いのけ、相手の懐に入る。

「嫌いじゃないわよ……そういうの……」

相手の腹部に添えた手に、全身の荷重をかけ撃ち抜く。
身体の一部が、拳大に凹み……

「うおおお!!」

それでも、蛇谷は止まらなかった。

硬直状態の佐天を左手で、エルボーの様にして振り払う。

元より体格差のある2人だ。

派手に吹き飛ばされた佐天は、即座に立ち上がり……
だが、反撃をすること無く、笑みを浮かべただけだった。

「お見事……貴方のボスとしての意地……確かに受け取ったわ……」

眩き、蛇谷に背を向ける。

「佐天さん？」

「白井さん。アンチスキル……と、救急車かな？
呼んで下さい。もう、終わりです」

意味が解らず、狼狽える白井。

背後で、蛇谷に駆け寄った、黒妻と固法は、ようやく事態を把握していた。

そこには、どこか満足気に微笑み、立ったままで気絶している蛇谷

の姿。

道を誤り、それでも、最後まで『ビックスパイダー』のボスであった男の姿だった。

佐天さんと大蜘蛛の歴史

ギイギイギイ……

薄暗い部屋の中に、古いイスのあげる悲鳴だけが響く。

ギイギイギイ……

部屋の中には、2人の人影。

1人は、やや大柄なアンチスキルの制服に身を包んだ女性。

もう1人は、素肌の上に革ジャンを羽織った男。

革ジャンの間から見える身体つきは、よく鍛えられてる事が解る。

ガンガン！

この部屋の唯一の出入口。

鉄製の古いドアが、鈍い音をたてる。

アンチスキルの女性は、チラリと男の方を一瞥してから席を立つ。
開かれたドアから、新たに2人の人間が入ってきた。

1人は別のアンチスキルの女性。

顔に貼られた絆創膏と、脅えた様な表情が特徴だろうか？

そして、もう1人は……

「や！」

「よう……」

気安い友人通しの様に、軽い挨拶をかわす。

長い黒髪が特徴の、可愛らしい少女。
彼……蛇谷次雄を留置所に送った張本人。
佐天涙子だった。

「はぁ……貴方も物好きですね。
自分を倒した相手に会いたいだなんて。
お陰で、参加してなかった事にして、取り調べから逃げようとして
た、私の計画が台無しですよ……」

ガックリと頭を垂れ、深いため息を吐く佐天。
態度はあまりよろしく無いが、それでも、蛇谷相手に敬語を使って
いるのは、彼の事を、それなりに認めているからだ。

そもそも佐天は、敵対していたり、よっぽど嫌いな相手で無い限り、
年功の序は守るのだ。

もっとも、先程の発言に、蛇谷以外の年功者は、露骨に顔をしかめ
ていたが。

「そりゃ悪かったな。
けど、ま！これから、それなりに長いお勤めに行く人間の、最後の
我が儘だ。

不運だと思って付き合ってくれや」

「だから、こうして来てあげてるんですよ。
一応、断る事も出来たんですよ？

……半強制でしたけど」

病院に搬送後、身柄を拘束された蛇谷は、一切、事件に関しての事
を喋らなかった。

ジャッジメントが、知りたい事は、ビックスパイダーの使用していた装備がどこから流された物なのか？

その一点。

他に拘束した連中を調べた結果、解った事は、『それに関しては、蛇谷しか知らない』ということだった。

だが、当の蛇谷は黙り。

司法取引や脅しをかけても、ビクともしなかった。

そんな状態で、事件が暗礁に乗り掛かった頃。

ようやく、蛇谷が重い口を開いた。

「俺を倒した女になら、全部、話してもいい」

結果、佐天は『捜査への協力要請』と言う名目で呼び出されたのだ。何故名目か？

その連絡をした、アンチスキルの女性が……

「断ったら、アンタの周囲で起きた事件を念入りに調べ直すジャン？事情聴取何回増えるジャン？」

と、のたまったからである。

つまり、最初から佐天は断れなかったのだ。

「しかし。なんで、私なんですか？

固法先輩とか、黒妻さんとか、他に話したい相手いそうですけど……」

それは、佐天の素直な疑問だった。

確かに、彼を倒したのは自分であったが、逆に言えばそれだけだ。

彼が自分と話したがる理由が解らなかった。

蛇谷は、『そうだな』と小さく笑い、少し考え込む様にして、宙を睨む。

やがて、大きく頷くと口を開いた。

「そりゃ。お前さんが俺達を変えてくれたからだな。

きつと、お前さんの存在がなけりゃ、俺達はもっと腐ってた……」

「どういう事？」

佐天は首を傾げる。

佐天としては、ビックスパイダーに関わったのは、今回が初めてである。

それなのに、蛇谷の口調では、それ以前から自分が関わっていたかの様である。

「そうだな……その辺も含めて話すとするか。

あの2人が去ってからの『ビックスパイダー』の歴史ってヤツを……」

蛇谷は語る。

あの2人の知らない、変わっていくビックスパイダーを。

黒妻の姿が消えてから、暫くして、チームから去っていく者が増えた。

元々、ビックスパイダーは、黒妻を中心にして出来た。

言わば、彼の為のチームだ。

黒妻綿流と言う柱が抜けてしまえば、チームの結束力は酷く脆い物

だった。

時期を同じくして、ビックスパイダーは、様々なスキルアウトから攻撃を受ける。

他のスキルアウトと違い、義賊の真似事をしていて、ビックスパイダーは、他チームから恨まれている事も少なくなかったのだ。

ただ、黒妻綿流と言うカリスマが、それを防いでいたに過ぎない。

連日連夜に渡る死闘。

抜けていく仲間。

「あの頃、自分を責めなかった日は無かった。

黒妻さんが消えるキツカケを作っちゃったのは、俺だったからな。

そんな時だった。アイツから連絡があったのは……」

その連絡は、非通知で蛇谷の携帯にかかってきた。

最初は、無視した蛇谷だが、あまりのしつこさに根負けし、電話をとった。

「アイツは言ったよ。

『チームを守る力が欲しくないか』ってな。

欲しいに決まってる。

そう答えたら、

『ならくれてやる』

だよ。

それを使うだけって言う破格の条件でな。

ああ。声は機械合成音。物の引き渡しは、相手の指定した場所に取りに行くだけ。

だから、悪いが、アンタらの知りたい事は、俺も知らないぜ？」

蛇谷の言葉に肩を落としたのは、アンチスキルの2人。
それでは、なんの為に佐天を呼んだのか解りはしない。
解ったのは、何も解らないという事だけなのだから。

力を手にした蛇谷は、黒妻綿流を名乗り、ほぼ壊滅状態だったチームを纏めあげ逆襲にでる。

縄張りを取り戻し、チームの人数も前と同じ……
それ以上になっていた。

「だが、気付いた時には、ビックスパイダーは力が全ての、かつての物とは全く別物になっちゃってた。

それでも。そんな組織でも、そこを居場所にしてる連中がいた。
かつての俺と同じようにな？」

それに気づいちまった時、俺は蛇谷であることをやめたんだよ」

それから、ビックスパイダーは、迷走を始める。

強請、盗難、強盗。

なんでも有りの、正にスキルアウトへと堕ちていこうとしていた。

「そんな時だよ。あんたの話が出たのは……」

「へ？ 私？」

「正確には、もう1人いたんだが……そっちは、裏がとれなかったしな」

曰く。超能力者を倒した、無能力者がいる。

「ちょ！ちょっと待って!!」

そりゃ、学園都市に来てから、何人か能力者相手に戦って勝ってるけど……

超能力者（レベル5）相手に、やり合った事なんて無いわよ!？」

慌てる佐天を面白そうに見た後で、蛇谷はからかう様に続けた。

「削板軍覇……名前に聞き覚えは？」

「削板さん？そりゃ、知ってるけど……」

知っていると言うか、一時期、しつこい程に自分に試合を挑んで来た相手だ。

佐天に言わせると、素材はいいが、まだまだ鍛練の足りない武術使いと言ったところか。

戸惑う佐天を他所に、蛇谷は肩で笑い、アンチスキル2人は、思いっきり呆れている。

「なに？削板さんがどうかしたの？」

居たたまれない空気に切り出したが、未だに蛇谷は笑っている。数分をかけて、呼吸を整えた蛇谷がようやく返事を返した。

「その名前。帰ったら誰でもいいから……

いや。超電磁砲が知り合いだったな？

アイツに聞いてみるという。

どんな知り合いか、説明した上でな」

その時の、美琴の反応を想像したのか、蛇谷は再び笑いだす。今度は、アンチスキルの2人もつられている。

「なんなのよ……」

一人状況の解らない佐天だけが、取り残されるのだった。

「……とにかくだ。無能力者が、超能力者……お前さんが認めないなら、大能力者でもいい。

それを倒すっていう、夢物語を達成しちゃった訳だ。

それで、ビックスパイダーには目標が出来た。

無能力者でも、大能力者クラスに勝てる事を世間に知らしめるって言うな」

皮肉な話……

これが、決まってからビックスパイダーの迷走はピタリと止まる。

能力者に対する劣等感。

スキルアウトへと堕ちる無能力者は、必ずと言って良いほど、それを持っているのだから。

「ついでに、今のビックスパイダーが、本当の意味でチームになったのも、その頃からだ。

無能力者が大能力者に挑む。

それが、どれだけ危険か学園都市に住んでりゃ、嫌でも解る。

実際、キャパシティダウンが手に入るまでは、綿密に作戦を練って、不意打ち、罠なんでもありでやっても、返り討ちってのがザラにあったしな？

だからこそ……戦友とでも言っとくか？

そう言う一体感が、チーム内に出来た。

俺が、本当の意味でアイツ等のリーダーになれたのも、その頃だろうよ」

やがて、どこから聞きつけたのか、例の人物からキャパシティダウンが送られてきて、ビックスパイダーの動きはエスカレートしていき……

そして、今回の騒動へと行き着くのだ。

「せめて、お前さんが制服姿だったなら、一目で気づいて、部下連中だけでも逃がしたんだがな……」

「なんで夏休みに、制服着なきゃいけないんですか！
常盤台の生徒や風紀委員じゃあるまいし……」

ため息をつく蛇谷に、佐天が反論する。

だが、蛇谷……と言うより、ビックスパイダーにとっての一番の誤算は、そこだったのだ。

まさか、無能力者にとつてのヒーロー（佐天は女だが）が、敵になるとは夢にも思わなかったのだから。

「でも、正直、微妙な気分かな？

それって間接的にせよ、婚后さんが襲撃されるキツカケを、私が作っただけで事でしょ？」

「逆に言えば、間接的にせよ、ビックスパイダーによる、強盗や盗難の類いは防いだとも言えるぜ？

まあ、その辺は結果論だ。

お前さんに責任は無い。

責任は、俺が今から取りに行くんだしな」

確かに、佐天に否は無い。

が、結果だけ見れば、確かに自分は関わっていたのだ。

そのことに、どうにもスッキリしない気分でいると、アンチスキルの2人が席を立った。

どうやら、時間切れらしい。

後ろ髪を引かれる思いで、席を立つ。

……と、蛇谷に呼び止められた。

「最後に伝言を頼めるか？」

「なに？」

断る気は無い。

確かに、その在り方に問題があり……一度は敵対した相手であれ、彼は彼なりの戦いをしてきて。

何より、自分達の居場所を守ろうとしていただけなのだ。

佐天と蛇谷は、その居場所が違っただけ。

共感は確かに出来たのだから。

「黒妻さんに……残ったビックスパイダーのメンバーを頼みますってな」

「大丈夫なの？」

元は同じ組織とは言え、今のビックスパイダーは、蛇谷を中心に出来ていた物と言える。

そこに、元リーダーとは言え、黒妻が戻った所で、上手く回るのか？ 佐天の危惧はもっともであった。

「なに。なんとかなるさ。」

今の幹部連中は、大半が『あの頃』を知ってる奴だ。

それに、そいつらには、本物の『黒妻綿流』が戻って来た時、どうするか話してある。

……なにより、あの人は、俺が憧れてた人だぜ？」

「あんだ……」

ようやく……佐天は悟った。

蛇谷は、遅かれ早かれ、黒妻が戻って来た時には、ビックスパイダーを去るつもりだったのだ。

その罪を一身に背負って。

「そんな顔すんな。これは、俺が選んだ俺の道だ。

後悔も悔いもねえよ。

まあ、一緒に捕まっちゃった奴等には悪いがな……」

そう言われてしまえば、佐天に言える事は、もう何も無い。

佐天に出来たのは、アンチスキルに連れ添われて、部屋を後にする蛇谷を見送る事だけだった。

あの後、いくつかの追加確認的な、事情聴取を受けた佐天は、蛇谷から遅れる事30分程で部屋を後にした。

既に薄暗くなり始めた、景色を背景に、携帯電話をその手にとった。

翌朝。

ビックスパイダーのリーダー。

蛇谷次雄の身柄移送は、ひっそりと……

だが、嚴重な監視体制の元、行われた。

武器の密輸及び使用。

大能力者への襲撃。

その他の余罪。

無能力者が起こした事件としては、学園都市史上でも、最高規模になる事件の首謀者。

その移送に、アンチスキルも慎重になっていたのである。

生徒達が行動開始するには、まだ早い時間。

移送車は、人影の無い道を静かに走り続け、やがて大通りへと出る。ここを抜ければ、学園都市の外へと繋がるゲートまで後わずか。

その時、辺りが突然騒がしくなる。

『襲撃か！？』

護衛についていたアンチスキルの動きが慌ただしくなる。

だが、突如として現れた多くの人影が、車に近寄る事は無かった。変わりに、ただ声が響くだけである。

「蛇谷さん！俺ら待ってますから！！」

あんたが出てくるまで、ずっと待ってますから！！」

「あんたは、偽物なんかじゃない！！」

名前は嘘でも、俺達のリーダーは、確かにあんただったんだ！！」

次々と響く男達の声。

だが、それだけだ。

マイクを使い制止を呼びかけるものの、相手がそれしかない以上、アンチスキルとしては、手が出せない。

慌ただしい車内。

護送を担当するアンチスキルの隊長は、どこか楽しそうに呟いた。

「誰じゃん？情報漏らしたのは？」

そんな事をしそうで、実際に出来そうな人物は、彼女が知る限り、一人しかいないのだが。

「大人気ね。蛇谷君」

下に行く護送車を歩道橋の上から見送る人影が2つ。

「まったくだ。これから、アイツ等を纏めなきゃいけない立場としては、頭の痛い話さ」

盛大にため息を吐く男は、

「嫌じゃ無いくせに」

と返した少女の声に、苦笑いを浮かべる事になった。

方法に問題はあったのかも知れない。

道を誤ったのかも知れない。

それでも、自分の後輩は、そこを守り通して見せたのだ。

それを託されたのなら……守りきって見せなければなるまい。

「ところで……よかったのか？」

彼が言うのは、この騒動のキッカケになったメールの事。
出所不明のメールには、今日の護送の日時と、ルートが記されていた。

出所は不明。

だが、それをしたのが誰かなんて、火を見るより明らかだ。

「なんの事かしら？ウチの後輩達は優秀だから……」

後に続く言葉は、風に消された。

ただ2人は、遠ざかっていく車を、何時までも見送るのだった。

「バカ野郎共が……」

車内に小さな声が響いた。

だが、周りの騒動に気を取られているアンチスキルは、その事に気がつかない。

その声が、震えていた事も、彼の膝に水滴が落ち、小さな染みを作った事も……

こうして、婚後が襲撃された事に始まる、1つの騒動は幕を閉じた。

後日、佐天の奢りで、ジャンボパフェを満足そうに食べる初春の姿があったりするのだが……それは、完全な余談である。

佐天さんとあすなろ園

「本気ですか……？」

その日の夕方。

受けた電話の内容に、佐天は戦慄し、恐怖していた。

電話の相手は、佐天の担任。大園先生。

その内容とは……

「しょうが無いだろ？ 期末テストの点数悪いのに、入院して追試も受けなかったんだから。

お前以外は、全員合格してるんだ。

諦めて、罰を受けてくれ。幸い、初春も一緒に行ってくれるらしいからな？」

解ってる。

それは、テストで満足な点数を取れなかった癖に、再テストを受けなかった自分が悪い事くらいは。

でも、だからって、なんでよりにもよって、その罰とやらが……

「こどもの世話なのよー！！！！」

開けられていた窓から、佐天の叫び声が、空高くまで響き渡った。

てくてく………

トボトボ………

そんな擬音が当てはまりそうな、2つの足音。

対称的な足音の主達は、特に特徴の無い、柵川の制服に身を包んだ2人の少女。

佐天と、初春だ。

説明の必要があるかは疑問だが、てくてくと軽やかに歩くのが初春。トボトボと重い足を引きずっているのが、佐天である。

対称的なのは、足音だけでは無く、その速度にも表れている。

初春が速く、佐天が遅い。

先に行く初春が、少し距離が空いた所で足を止め、佐天を待つ。

佐天が追いついた所で、再び歩き始め、再び徐々に距離が開き……そんな事を数度、繰り返した所で、先に行く初春が突如として振り返った。

「もう！佐天さん！！いい加減にして下さい！！」

どうして、普段は私より歩くの速いのに、今日はそんなに遅いんですか！？」

「うう……だって……」

初春の剣幕に既に半泣き状態の佐天。

だが、初春は追撃の手を緩めない。

ここで、甘やかすのは佐天の為にならない……と、母親の様な心境だったりするのだ。

「だってじゃないです！！」

テストで点数悪かったのに、再テストの日の前日に、海に行って、びしょ濡れになって風邪ひいて、入院までしたのは、どこの誰ですか！！？」

「はう!!!? ここの……私です………」

しょんぼりと、小さくなる佐天。

対比としては、横にマッチを置くと、ちょうど良さそうな感じだ。

「お陰で、風紀委員の仕事がある、私まで駆り出されたんですから……」

諦めて、サクサク歩いて下さい!!」

「うう……解りました……」

自分で歩いているのに、ドナドナが似合いそうな様相で、初春に続いて行く佐天。

ちなみに。

初春に大園教諭が今回の件を頼む時、こんな事を言っている。

『佐天1人だと、100%逃げるから』

成る程。流石、担任。良く解ってる。

相変わらず、自分の後ろを……それでも、今度は離れず、ついて来る友人を盗み見ながら、自分の担任を評価する初春だった。

「そう言えば……なんで、そんなに嫌なんですか？」

こどもの世話をすれば、再テスト免除なんて、佐天さんなら跳んで喜ぶと思ったんですけど?」

沈黙したまま、歩く事数分。

目的地まで、後少しと言うところで、ふと気になった事を口にする。
『初春の中の私の評価って……』等と、ブツブツと呟いた佐天だ

が、やがて素直に質問に答えた。

「私ね、弟がいるんだよ」

「え？はい……」

先程の質問の答えとしては、随分と予想外のところから始まった言葉に、初春は戸惑う。

むしろそれなら、子どもの扱いが得意そうだが……

「……でさ。そういう家系だったからなのか、血なのか、弟も武術を始めたんだけど……
ある時、弟と初めて組手……と言うか、ほぼ実戦形式の試合だね！
をすることになってさ……」

「は……はあ……」

話がキナ臭くなってきた事を、今までの経験で感知した初春は、心の中でそっと、ASF（あんち佐天ふいーるど）を形成する。
これが出来る辺りが、初春と、他の2人の差だったりするのだ。

「まあ……お姉ちゃんとしては、弟に良いところ見せたくて、張り切っちゃってさ……」

試合が終わったら、弟が息して無かったんだよね……」

「………って！？ええ！！？殺しちゃったんですか！？」

あ。今回は突破されたらしい。

それでも、数秒耐えたのは防御の効果か？

「いやいや！数秒落ちてただけだから、大丈夫だったよ？」

今も、父親と一緒に修行の旅とかしてるみたいだし。でも、その時以来、どうにも年下の子ってのは苦手でさあ……」

大きくため息を吐く佐天。

釣られる形で初春もため息を吐いた。

『良かった。死んでなくて、本当に良かった！』

内心にあるモノは大分違うようだが。

だが、ドンヨリとした空気を放つ友人を放って置くわけにもいくまい。

辛気くさい手伝い等、相手にも迷惑だろうし、何より初春としても、こんな空気のまま仕事する等、ごめんなのだ。

「佐天さん。ひとつ勘違いしてみたいなんで教えてあげますけど……」

私たちの今日のお手伝い先。

確かに『置き去り（チャイルドエアー）』の子達を預かってる施設ですけど、主だった内容は、お掃除とか、片付けとかですよ？」

と、佐天の顔に希望が灯る。

「え！じゃあ！？」

初春は、一度大きく頷き続ける。

「もちろん、全然、無関係って訳にはいかないでしょうけど、気をつけていれば、そんなに関わらずに済みます」

佐天は初春に後光が射したのを見た。

地獄に初春。溺れる佐天は藁をも掴む。

ドンヨリとした空気は取り払われ、佐天の足取りも、ほんの少し軽くなったのだった。

2人が目的地である、置き去り保護施設『あすなる園』に着いた時、その玄関には2人の担任である、大園教諭の姿があり、手を上げ2人を出迎えた。

「おっ！佐天、ちゃんと来たな。初春も、護送ご苦労だったな！」

「護送って……私は、犯罪者か何かですか………」

思わずため息を吐いた佐天だったが、

「いえいえ。大人しく付いてきてくれましたから、楽なものでしたよ？」

「初春も否定して！お願いだから！！風紀委員に護送されるとか、洒落にならないから！！」

思わぬ友人の裏切りに、背後から攻撃される形になった。だが、追撃は止まらない。

「似たようなものだろ？」

「というか、私の仕事は、たった今、8割方終わりましたよ？」

「……解りました。2人とも、ゆっくりと話し合いましょう。主に拳で……て、あれ？」

あまりの扱いに、拳を突き出したのだが、その時には2人の姿は既に無い。

見れば園内に向けて歩き始めており、

「今日は倉庫の整理と、グランドの掃除を……」

「それなら……」

なんて話をしてる。

「ちょ！待ってくださいよ！！！」

何だかんだで、ここ数ヶ月、佐天と友人として付き合ってきた初春と、担任として付き合ってきた大園である。

その扱い方は手慣れたものだった。

慌てて2人の後を追う佐天は、先程までの苦手意識や緊張感が、綺麗に無くなっている事に気づかないのであった。

「うわ……これは……」

「なんと言うか、凄いですね……」

2人が大園に連れてこられたのは、園の裏手にある倉庫。
その中は……なんと言うか、魔窟と化していた。

「ここは、男手が無くてな。」

力仕事も難しくて、取り敢えず、使った物を仕舞っていったら、こ

うなったらしい。

俺が物を出して行くから、お前らは、中身を整理して……て、佐天？」

説明していた大園が、教え子の異変に気づく。

急に大人しくなったと思った佐天が、うつ向いて、プルプルと震えているのだ。

「大園先生!!」

「はい!!」

突然、顔を上げたかと思えば、凄い剣幕で迫る教え子に、教師にあるまじき返事をしてしまう。

「少し時間を貰えますか？着替えて来ますんで……いいですよね？」

「は……はい。どうぞ……」

とても『イイ笑顔』の迫力に逆らえず、大園が頷いた時には、佐天の姿は無かった。

「あ……火が着いちゃいましたね……」

と言う、もうひとりの教え子の、とても怖い発言は聞かなかった事にする。

聞こえないったら、聞こえないのだ。

「って！あいつ何処に着替えに行ったんだ？」

今日は、制服着用でここに来るようにしか言っただけで無かった事を思いだし、大園は頭を捻る。

少なくとも、ここに来た時の佐天は、それらしき荷物も持ってなかった筈だ。

10分後……どう見ても、学校指定のジャージに、軍手をして戻ってきた佐天に、大園は深く考えるのをやめた。

どう考えても、一度、寮に戻ってるのだが、そうだった場合、時間的におかしい事に気づいたからだ。

佐天と付き合っていくには、常識を捨てるか、考えないかの2択であり……

大園は後者を選んでいたのであった。

ちなみに、初春は前者。白井もそれに近く、美琴はどちらも選んでいない、類い稀なる人種である。

とにもかくにも、戻ってきた佐天は、

「さて！やりますか！！」

と、威勢のいい声をあげると、倉庫の中に入って行き……

スグに出てきた。

大量の荷物を持って。

その様子を例えるなら、漫画なんかでよくある、お嬢様の買い物に付き合わされた彼氏……と言った感じである。

『どう見ても、重さ的に無理があるんだが……』

そんな大園の思いを他所に、『ドスン！ドスン！』と言う音共に荷

物は広げられていき、初春は置かれた荷物の選別と、整理を始める。

「生徒ばかり働かせて無いで、大園先生も、荷物の整理してください！！」

「はい！解りました！！」

すっかり、立場が逆転している。

主婦モードに入った佐天は、無敵なのである。

この辺、母親の血を色濃く引き継いでいると言えよう。

2時間後。

「まあ……驚いたわね。すっかり、片付いちゃて……」

やって来たのは、『あすなろ園』の園長。

あらかたの片付けは終わったものの、大園や初春の判断では、どうすればいいのか解らない物が出てきた為、確認の為に呼んだのだ。

「生徒達が、頑張ってくれまして……」

答える大園の顔は引き吊っている。

その実、倉庫整理を終わらせる予定は無かった。

というよりは、普通は1日で終わる量では無かったのだ。

なので、当初の予定では、午前中に倉庫整理をある程度進めて、午後からは、グランドの掃除などをする予定だったのだが……

「それで、この辺の物はどうしたらいいですか？」

不可能を可能に変えた少女が、ここに1人。

実際、佐天は、初春と大園2人の仕事量の数倍を1人でこなしていた。

荷物を一旦、全部運びだし、それが終わった段階で、荷物の整理に合流。

その様は、千手観音の様に、手が複数に見え、瞬く間に取捨選択を行っていく。

それでいて、段ボール等の中に物を納める時は、後で解るように、それを記入する芸の細かさ振りだ。

結果、引越しの匠でも、こうはいくまいと言う早さと正確さで片付けが終了したのである。

ちなみに、開始から1時間程で、早々にリタイヤした初春は、今も佐天の横でへばっていて、内心、大園は、そんな初春が羨ましかったりする。

自身も高速で仕事しながら、きっちりと、他の2人もこき使ったのだ。佐天は。

「ええ……そうね。後は私達の方で片付けておくわ。お疲れ様。先程、ボランティアの方からピザの差し入れを頂いたから、良かったら貴方達も召し上がらない？」

「ぴ……ピザ!!」

「いただきます!!」

『ピザ』と言う言葉に、即座に復活した初春と、目を輝かせる佐天に大園は苦笑する。

『一応、これは罰なんだが………』

そんな思いが頭を過るが、相手の好意を無下にするのも失礼だろうし、それくらいの仕事は充分にしたらろうと言うことで見逃す事にする。

「ピザなんて久しぶりだな〜！」

「頑張って良かったですね！！！」

すっかりご機嫌で、職員室へと歩いて行く2人。

だから、この後、思いもかけない再会が待っているなんて、佐天は思いもしなかったのだ。

佐天さんと寮監さん？

「美味しかったですね」

「うん！普段、ピザなんか、絶対頼まないんだけど、これならたまには……」

でも、値段がね……」

あすなろ園、職員室にて、昼食にピザのお裾分けを頂き（3人とも、別に昼食の用意はしてあったので、一切れずつ貰っただけ）食後のお茶を楽しんでいる。

少女達2人……特に佐天は、滅多に食べない物だけあって、ピザの味に大満足のようなのだ。

「おいおい、2人とも。満足するのはいいが、昼からも仕事あるの忘れないでくれよ？」

ともすれば、このまま帰ってしまいそうな、少女達の様子に、2人の担任である大園が釘を刺す。

最悪、初春は帰ってもらっても構わないのだが、佐天の方は、一応、成績不振に対する罰なのだ。

帰ってもらっては困る。

「解ってますって！第一、午前中、一番、仕事したのは、私だと思えますけど？」

少なくとも、大園先生の数倍は働いています」

「よし！佐天。少し話をしようか。議題は、一学期におけるお前の成績についてだ！」

午前中の活動で調子が出た佐天が、少し生意気な返事をする。だが、大園も佐天の担任を、伊達に数ヶ月もしていない。佐天の弱点は把握済みなのだ。

「いやー！！夏休みの間くらい忘れさせて！！」

「現実逃避するな！というか、夏休みの間に、遅れを取り戻そうという、前向きな考え方はできないのか？」

「もう、手遅れですよ」

キャンキャンと騒がしい2人を尻目に、初春は我関せずとばかりにお茶をすすする。

夏休みの最中に、成績の事で、お説教を貰いたくないのは、初春も同じなのである。

もったも、初春は仮に成績の事を言われても、佐天程、酷くは無いが。

理数系優秀、文系が並な、割りと優秀な生徒なのだ。

ちなみに、佐天はと言うと、英語が、恐らく全学年通してもトップ。それ以外が、壊滅的という困った生徒だったりする。

テストが無いものを含めれば、家庭科と体育も、トップクラスだが。

「あらあら……賑やかですね……」

「園長先生！すいません！！騒がしくて！！」

大園のお説教が始まり、佐天がゲンナリとした表情を浮かべた頃、園長先生が顔を出した。

即座に頭を下げる大園に、話が逸れた佐天は、あからさまに、ホッとしていたのだが、大園に眼で制され、表情を引き締める。

「いいんですよ。それくらい、元気じゃないと、子ども達のパワーに負けてしまいますからね」

「そう言って頂けると……」

照れた様に頭を掻く大園に、柔らかな笑顔を浮かべる園長。

「それで、お昼から手伝ってくれる方を、お二人に紹介したいのだけど、構わないかしら？」

「あ！はい。ピザを持ってきてくれた方ですよね？
お礼を言わなくちゃ」

代表して、佐天が返事をする。

2人と言うことは、大園とは顔見知りなのだろう。

そんな風に考えたのだ。

今、その人は、グラウンドで子ども達の相手をしているとの事なので、園長に引き連れられる形でグラウンドへと出る。

そこには、優しい笑顔が浮かべ、子ども達に囲まれている女性の姿。

「優しそうな人ですね」

「ああ。あの人は、よく手伝いに来てくれててな。」

子ども達にも、大人気なんだ」

園長が、その人に声をかけてる間に、初春は、胸を撫で下ろし、大園が説明をしてくれる。

だが、そんな2人の言葉も、佐天の耳には届かない。目を見開き、あまりの驚きに、硬直していた。

「嘘……でしょ？」

ようやく絞り出せたのは、そんな一言だった。

園長に声を掛けられた相手が、こちらに視線を向ける。

最初に大園に頭を下げ、続いて初春に視線を向け……今、視線が合った。

瞬間、相手から表情が消え、数瞬の間だが、硬直していたのが、佐天にも解った。

2人の間に走る緊迫感。

相手の女性は、完全に顔に貼り付けただけと化した笑顔で、子ども達の間を抜け、こちらへと歩んで来る。

相手が、こちらの声が届くであろう範囲に来た所で、佐天が口を開い……

「一応、聞いと……とお!？」

開こうとした所で、佐天の口を押さえる形で、相手の手が迫っていた。

素晴らしい踏み込みの速さだ。

だが、安易に相手の攻撃を許す佐天では無い。

バックステップで、攻撃を避けると、即座に蹴りを放つことで反撃。避けられたものの、再度、相手との距離を離すことに成功していた。

「なに？ 問答無用って訳！？ それなら……………」

「涙子！ ちょっとこい！！ 頼むから！？」

「は？」

相手の動きに、臨戦態勢に入ろうとした佐天……………
だったのだが、相手の言葉に、毒気を抜かれた。
だって、それは、懇願に近いものだったのだから。

佐天が、女性に押されるようにして、園の裏手へと連れていかれ、
グラウンドへ残された面々は、呆気にとられていた。

いや、子ども達は、ホンの数手と言えど、目の前で行われた、ハイ
レベルな格闘戦に、大いに湧いているが。

ただ、園長を除いた2人には解った。解ってしまった。

『あの人は、佐天さんと同類だ』と。

さて、その事に気づいて、頭を抱えているのは、実は園内の人物だ
けでは無い。

あすなる園の塀の外から、例の女性を監視していた、2人の少女も
盛大に頭を抱えていた。

「お姉様……………ひとつ聞きたい事があるのですが……………」

ようやく、先程のショックから立ち直ったツインテールの少女が、

隣で同じ光景を見ていた少女に声をかける。

「いや……やめて。今、余計な衝撃を与えられたら、頭の中パンクしそうだから……」

弱々しい返事に、一度は、その疑問を飲み込んだ、ツインテール少女だったが、結局、独り言という形で、その疑問を口にした。

「私達は、佐天さんとやり合えた寮監に驚くべきなのか、寮監とやり合えた佐天さんに驚くべきなのか……」

それとも、佐天さんと寮監が、同類だった事に驚くべきなのでしょうか？」

彼女のそれは、あくまで独り言。

だが、隣にいた少女には、しっかりと聞こえたらしい。

「いやあああ！！もう『非常識』は、佐天さんだけで、お腹いっぱいなの……！！」

これ以上、身近に『非常識』な人が居たのなんて、気づきたく無かったのに……！！」

騒ぎだした少女に、初春達が気づくまで、後、数秒。

さて、そんな騒ぎが起こっている等、ちっとも知らない二人は、午前中に佐天達が片付けていた倉庫の前で対峙していた。

ここまで来た方がいいが、沈黙を続ける相手に、どうしたものかと考えていた佐天だったが、いい加減痺れを切らしかけたところで、ようやく相手が口を開いた。

「なんで、お前が『学園都市』にいるんだ？」

散々待たせたあげく、出てきた質問はそれか。

軽く肩を竦め、溜め息を吐く。

とはいえ、鋭い視線でこちらを観察している辺り、向こうも、こちらを警戒していると見える。

確かに、お互い油断出来ない相手である以上、初手は無難なものになるか。

「それは、こっちの台詞なんだけど……まあ、いいわ。

なんで？ って、聞かれたら、学園都市（こく）の生徒だからよ。

嘘だと思ふなら、大園先生に確認してみなさい？

確かに、4月付けで入学してるから……

そう言う、貴女こそなんているのよ？

正直、子ども達相手に、聖母の真似事してる貴女を見たときは、目を疑ったわよ？」

と、厳しい眼でこちらを見ていた相手の圧力が僅かに緩む。

少しは信用したらしい。

それでも、油断したりはしないのだろうか。

この相手は。

「うるさいな！ 私に言わせれば、学生の真似事をしている、お前の方こそ無理があるぞ？」

私は、数年前に、あの世界から足を洗って、ここで働いてるんだよ。常盤台は解るだろ？

あそこで、寮監をやっている。

こちらにも、調べて貰って構わんぞ？」

言葉の起伏。顔と身体の動きや変化から、嘘をついているとは思え

ない。

まあ、この相手は、それらを全部、誤魔化した上で、平気で嘘を吐きそうだから、全面的に信用することは出来ないが……

少なくとも、ここ数年、寮監をやっているのは、本当だろう。

そこまで考えてから、佐天は髪を掻き上げる。

双方共に、嘘はついていない。

少なくとも、そう見える。

……と、言うことはだ……

「ここで、合ったのは本当に偶然って事？どんな確率よ……」

心底呆れて、力が抜ける。

全開で警戒していた自分が馬鹿みたいである。

「全く……そんな奇跡が起きるのなら、お互い、会いたい相手は他にいくらでもいるだろうにな。ところでだ……」

相手も納得したのだろう。

緊張は解けている。

だが……だ。

心無しか、こちらを見つめる瞳が怖い。

これは、あれだ。

戦闘的なソレでは無く、初春達に叱られる時に感じるソレに近い。

「……なによ？」

微妙に警戒しつつ、先を促す。
何故か妙に嫌な予感がしたが。

「お前と大園先生はどういう関係なんだ!!」

気がつけば、常盤台の寮監様が、目前に迫っていた。
その踏み込みは、明らかに先程の数倍速い。
初手が、この速さだったなら、絶対避けられなかったと思う。

「はや!てか、近!!近いつて!!」

文字通り、目と鼻の先まで近寄ってきた相手に狼狽える。

見方を変えたなら、百合好きな方には、とても喜ばれそうな状態である。

「こんな休日に、一緒にボランティア活動しているんだ!無関係と
言うことはあるまい!!」

ままま……まさか!こここ……こい……こいび……」

「いや。無いから。年齢差考えてよ?

と言うか、普通に考えたら解るでしょ?

大園先生は、私の担任よ」

他人が混乱すれば、他の人間は冷静になるもので……

相手の狼狽ぶりに、すっかり落ち着いた佐天が、冷たい突っ込みを
いれた。

「そうか……そうだよな……」

と、相手もようやく自分が取り乱していた事に気がついたのか、恥
ずかしげに姿勢を正す。

相手が落ち着いたのを見計らって、佐天は切り出す。

「なに？貴女、大園先生が好きなの？」

「何故解った！！？」

「解らないでか！！」

顔を今度は煙が出そうな位、真っ赤に染めて、

「だって、かっこいいし、優しいし、私を女扱いしてくれるし……」

等と呟く、ナニか可愛い物体に化してしまった相手を見て、佐天は深い、ふかーい溜め息をついた。

『これを、全開で警戒していたなんて……本当に馬鹿みたい……』

と、心の中でこぼしながら。

佐天さんと寮監さん？

ようやく正気に戻った寮監と話し合い、現状、お互いに敵意は無い事を確認。

双方共に、相手の生活を脅かさない事を約束して、皆の元へと戻る事となった。

グラウンドには、元気に遊ぶ子ども達の姿。
見渡すと、隅の方に大人達の姿があった。
あったのだが……

「あれ？多い？」

そう。人影が多い。
近づく、園長に大団。そして、初春の姿と……

「御坂に白井。何故、お前達がここにいる？」

佐天が、その姿を認めたのと同時に、横の女性が口を開いた。
一瞬、何故彼女が2人の事を知っているのか疑問を感じたが、

『そーいや、常盤台の寮監だったわけ？』

と、納得する。

同時に、前に白井が言っていた、

『物凄く怖い寮監がいる』

の言葉にも納得がいった。

白井や御坂が怯える、寮監とは、どんな人かと思っていたが……なるほど。彼女が寮監なら、それは怖いだろう。

「いえ！寮監様！！今日は……その……

そう！友人達がここで、ボランティアをすると聞いて覗きに來ましたの！！

その先が、たまたま偶然、寮監様の行先と一緒にしたのよ！！」

何故か泣いていて、説明どころでは無さそうな、美琴をおいて、白井が答えた。

……と言うか、それだけ強調すると、『たまたま』でも『偶然』でも無いのが、バレバレだと思うのだが。

訝しげにこちらに、確認を求める視線を寄越した彼女に、肩を竦めて見せ。

「本当よ。あっちの娘。初春って言うんだけど、あの娘が白井さんと同じ支部の風紀委員なの。」

その縁で、私も、白井さんと、御坂さんの友人なのよ」

その言葉に、嘘は感じられなかったのだろう。

どこか腑に落ちない表情だったが、取り敢えずは納得したらしい。

そう。佐天は嘘はついていない。

佐天は、白井が言った『友人』の部分だけを肯定したのだから。他の部分については、肯定も否定もしていない以上、嘘はついていないのだ。

彼女の様に、身体の反応を完全に消せない佐天が、嘘を見抜ける相手用に編み出した、嘘はつかず真実を悟らせないテクニックだ。

「それで、なんで御坂さんは泣いてるの？」

「えーと……色々ショックな事があったみたいなんで、今はそっ
としておいてあげて下さい……」

初春が非常に困ったような曖昧な笑みを浮かべる。

さすがに、美琴の世界に非常識な存在が増えたからですとは、本人
達を目の前にしては言いづらい。

えぐえぐとシャックリをあげながら泣き続ける美琴は、大園と園長
2人がかりで慰められていた。
その様は、まんま幼児である。

「たく！なにをやってるんだ……あいつは……」

忌々しげに、美琴に近づいて行こうとした寮監の肩を掴んで止め、
小さく首を振る。

「安心なさい。大園先生は、私の知る限り普通の感性の持ち主だか
ら、御坂さん相手に欲情したりしないから……」

「よくじょ!!?」

「なんて言葉を使ってるんですか!!?」

あまりにストレート……

あからさまな表現に、寮監の顔は、サツと朱に染まり、聞こえてい
たらしい初春から、即座に突っ込みが入る。

「へ? 愛だの恋だのって結局は、そう言う事でしょ?」

だが、当の本人である佐天に、全く解った様子は無く、とんでも発言を繰り返すだけである。

「違います！いいですか佐天さん……」

「そうだぞ！その理屈で行くと、私が発情している事になってしま
うではないか！！」

そんな訳で、御坂が復活するまでの十数分。

佐天は、恋愛のなんたるかと、乙女としての在り方を、2人がかりで叩き込まれる事になったのである。
そんな3人の後ろで、

「あながち間違いと言うわけでは、無いと思いますが……この場で
言うことではありませんわね……」

と呟いた人物がいたのは、本当に、どうしても、いい話である。

「はぁ……酷い目にあった……」

ようやく復活した美琴は、思わずそんな一言を呟く。

これだけ弱っている、超能力者を見れるのも珍しいかもしれない。

今の彼女の姿を見たなら、どこかの、お節介英雄辺りは、問答無用で慰めてくれるだろう。

まあ……もつとも、その場合、彼も学園都市にもうひとつ非常識があることを知るはめになるのだが。

「はあ……お姉様も、存外にだらしありませんのね？
あれくらいの事で、あんな醜態を、お晒しになるなんて……」

「悪かったわね！というか、なんでアンタはそんなに平然としてられるのよ！！」

深いため息をついた、後輩に詰め寄らずにはいられない。

自分だけが、こんなに苦悩しなければならないなんて、さすがに理不尽だ。

「それは……私だって、あの方が佐天さんと、同類（非常識）だった事には驚きましたが……」

私、あの方の力の一端は、何度も見て……体感していますから。
私が、何度、寮監にきぜ」

と、白井の背中に『ゾクリ』と走る悪寒。

即座に振り返れば、いつの間にか、自身の間近にまで迫っていた寮監の姿と、その横に立つ、佐天の姿。

「邪魔をしないで貰いたいな。佐天君？

私は常盤台の寮監として、白井と良く話し合わなければならない事があるんだ」

ニツコリと実にいい笑顔で……なのに、強烈な重圧を放ちながら、
彼女は佐天に向き直る。

「ええ。ごゆっくりどうぞ？お話をするだけならね？」

と、こちらは実に涼しい笑顔で、それを受け流す。

この一瞬の間に起きたことを、簡単に説明すると……

大圓の近くで話していた、白井と美琴の2人。

それを気にして、聞き耳をたてていた寮監は、事が普段の自分の行動に至った所で、白井の口を封じるべく行動を開始。

白井に接近しようとした所で、その進路上に放たれた佐天の蹴りで足を止められたのだ。

ちなみに、当事者2人を除いて、この事を理解できた者はいない。他の者に言わせれば、佐天と寮監が突然、違う場所にいたくらいな感覚だ。

ただ白井だけは、その培われた本能から、寮監の暴力から、佐天が自分を守ってくれたのだと、理解出来た。

自分に背を向け、寮監と対峙する佐天の姿は、まるで、お伽噺話に出てくる王子様の様で……

『は！？ いけませんわ！ 黒子！！ 私には、お姉様という、心に決めた相手が！！』

ああ……でも、この胸の高鳴りは………』

火照る頭を懸命に振りながら、胸に宿った新たな想いに悩む白井。そんな事に、全く気づかない佐天は、突然、自身を襲った悪寒に首を捻るのだった。

「えっと！ そう言えば、佐天さんと、寮監さんは昔からのお知り合いなんですよね？」

どういった関係だったんですか？」

急に殺伐とした空気変わった場を、敏感に察知した初春が、話題

変換とばかりに話を振る。

『黒子は！黒子は！？』

まあ……一部、場の空気に関係無く、苦悩していたりする人もいるが……スルーでいいでしょ？

「どんな……と、言われても……困ったわね。的確な表現が思いつかないわ……」

「ひ！？」

近くに大団がいるからなのか、はたまた、自身の担当する寮の生徒以外には、基本的にそういう態度なのか……

柔らかな物腰で、初春に対応した寮監に、美琴がひいて……いや？怯えているのか？

「そんなの簡単じゃない。お互いに、全力で殺しあっ……ムガ！？」

軽い口調で、佐天が話している途中で、ビュン！っと言う、風切り音が響いたかと思ったら、その場に佐天と寮監の姿は無かった。

どこにいった？つと、キョロキョロと見回すと、美琴達がいる場所から、グランドの対角線上。

そこに、佐天と寮監だと思われる2人の姿があった。

「わあ……寮監さんも足、速いんですね……」

「H A H A H A！本当だなく！！」

「いや……あの………」

素直に称賛する初春と、虚ろな目で笑う、その担任。
どう考えても、短距離の世界新を更新している、その走りに……しかも、見た感じ、人を1人引き摺ってだ。

『突っ込む事は何もないの?』

と、問おうとした美琴は、大団の瞳を見て、その言葉を飲み込んだ。
それは、

『頼むから、その話題に触れてくれるな』

と、どんな言葉よりも、雄弁に訴えていたのである。

戦っているのは、私1人じゃないんだ。

そんな、悲しくも嬉しい事実を知ることが出来たのが、今日一番の
美琴への慰めだったかもしれない。

「お前は! そんなに!! 私の恋路の邪魔をしたいのか!?!?」

「いや……そんな気は、更々無いんだけどね?

とりあえず、首筋にナイフは冗談でも危険だと思っただ?」

一方その頃、逆らうことも出来ず連れ去られた佐天は、盛大に冷や
汗をかいていた。

一連の動作が明らかに、彼女の實力以上のものなのだが……

『愛の力ってやつかな』

等と、場違いな感想を抱いた。

「出来る事なら、今すぐ、ナイフを横に引きたいくらいだ!!
頼むから余計な事は言うなよ!!」

「はあ……わかったわよ……」

相手の瞳に危険な物を感じ、両の手を上げた状態で了解する。
頷く事も出来ない状態での『頼み』は既に、脅しでは? 等と思わなくも無かったが。

「すみません。お待たせして……」

「うわ……」

再び皆の元へと戻った2人だったが、寮監の態度のあまりの違いに、思わず佐天は、声を漏らしてしまう。

それも、鋭い視線の一睨みで、打ち消されてしまったが……
常盤台組には、なんと無く伝わったらしい。
小さく頷いてくれた。

「いえいえ。それより、2人は仲がいいんですね?」

「いえ……そんな。ちょっと、昔の知り合いってだけで……」

明らかに、おかしな所が在ったにも関わらず、普通に会話出来ているのは、大園が大人だからなのだろうか?
それとも、佐天の担任だからなのだろうか?
美琴が妙な所を気にしている間にも話は進む。

「そうですよ。仲なんて全然、良くないですよ?」

さっきだって、首筋にナイフ突きつけられ……によ!!!?」

今度は、パン! っと言う、破裂音と突風を残して、2人の姿が消えた。

「かんがえちゃだめだかんがえちゃだめだかんがえちゃだめだ……」

「大園先生! しっかりして下さい!!」

佐天さんの周りでは、割りと普通の出来事ですよ!!」

「いや……それも、どうなのよ?」

突然、頭から煙を噴き出した大園。

どうやら、許容範囲を越えてしまったらしい。

そんな大園に、容赦無く初春が止めを刺しているが。

美琴が比較的冷静なのは、他の人が先に壊れたからか。

でなければ、立ち直ったばかりの精神は、再び破壊されていたかもしれない。

「すまん……一回、全力で殴らせてくれないか?」

「もの凄く痛そう……と言うか、命の危険まで感じるから、全力で拒否します」

再々度、反対側へとやってきた2人。

寮監の身体は、怒りで小刻みに震え、佐天は困った顔で、苦笑していた。

「頼むから! 本当に頼むから!! 余計な事は言わないでくれ!!」

私だって、好きな人の前では、1人の女でいたいんだ!!」

「わ……解ったわよ……」

敵として命を奪いあったこともある。

味方として、背中を預けた事もある。

どちらの時も、飄々として決して弱みを見せなかった相手の涙ながらの訴えに、佐天は狼狽えながらも頷いた。

同時に、

『恋愛ってのは、人を強くも弱くもさせるのね……』

等ということをお願いながら。

それは佐天には、まだ解らない……

未知の感情だった。

それから……

彼女の願いを聞き入れた佐天が、余計な事を口にする事は無く……その後の作業は、つつがなく終了した。

まあ……佐天の目から見れば、大園の彼女を見る目は、大園が自分を見るときの『ソレ』と同じになっていた気がするのだが……

彼女の想いが成就する様に、気のせいだと思う事にした。

彼女とは、色々あったが……

それこそ、再会した時に、相手の企みを探り合うくらいに……

それでも、彼女が幸せになりたいと言うのであれば、それを応援したいと思うくらいの情は確かにあるのだから。

「○X□☆∥◇▽△♪」

「えーと……」

翌日の夕方。

自室で夕食の準備をしていた佐天は、突然、号泣しながら訪れた来客に、大いに困惑していた。

「※▼▽△□◇◆→(T|T)」

「んっと……大園先生に……相談された……」

園長先生に……プロポーズ……ああ!!失恋したんだ!!」

「%*@☆←∪∪∪〒!!」

「解った解った!!話を聞いてあげるから!!」

とりあえず落ち着いて、使う言葉を、どこか1つに統一して!!
さすがに、4つも違う言語混ぜられたら、まともに聞き取れないって!!」

多数言語を同時に使い、泣き喚くという、ある意味、この上なく器用な真似をする友人?を部屋に招き入れる。

彼女が落ち着いて、まともに話が出来るようになったのは、佐天が出した紅茶がすっかり温くなってしまってからである。

「それは……私だって、絶対、上手くいくななんて思ってた訳じゃ無かったさ。

けど、それなりに好感触だったしさ……」

「……で、蓋を開けてみたら、相手は別の人が好きでしたと」

なにやら語り出した相手を遮る形で、バツサリと結論を口にする。
本人が全く意識しないまま放たれた言葉の、突き穿つ死翔ゲイボルグの槍は、的確に相手のハートを捉え、粉碎したようだ。

佐天の目の前で、寮監は見事にテーブルへと沈んだ。

ある意味、彼女との対戦史上、佐天がもっとも、ダメージを与えた攻撃かもしれない。

「涙子……そういうのは、もう少し、遠回しに言うか、オブジェクトに包んでくれ。」

「それでも、結構、傷ついてるんだぞ？」

「私になにを期待してるのよ？」

慰めとか、そういうのなら、他の誰かにあたってよね。

正直、貴女にお茶を出して、話を聞いてあげてるだけでも、かなりの譲歩よ？」

「それは……そうだが……」

そんな甘い関係で無いことくらい、彼女自身良く解っているが、今くらい慰めてくれてもいいじゃないかと思ってしまうのは、やはり心が弱っているからなのだろう。

「ああ……もういい！今日は呑む！！付き合え！！」

そう言ってヤケクソ気味の彼女がバックから取り出したのは、琥珀色の液体が入った瓶。

ちなみに、火を近づければ引火するほど強力な物だ。

「ちょ！仮にも常盤台の寮監が、未成年者に飲酒を勧めないで！！」

「えゝ……いいじゃない。これくらい。慰めてもくれないなら、せめてこれくらい付き合ってよゝ……」

普段なら絶対出さないような、猫なで声で甘えてくる相手に、心の底から思う。

『うわゝ……めんどくさい……』

と。

とはいえ、本来は弱味を見せたく無いであろう相手の自分の所まで、わざわざ来たのだ。

誰かに話を聞いて貰いたくて、その上で、その相手が居ない事等、容易に知れる。

この上無くめんどくさいが、ここで見捨てるのは、いくらなんでも、酷な気がした。

「あゝ！！もう！！じゃあ、貴女の失恋話と、やけ酒に付き合ってくれそうな相手、紹介してあげるから！！
その人達が来たら帰ってよね！？」

結果、佐天が選んだのは、他人に丸投げする事。

机の上で充電しておいた携帯を手に呼び出すのは、

「何かあった時は、自分でなんとかする前に、必ず連絡するじゃん？」

と言っていた、アンチスキルの女性。

その言葉に遠慮無く甘えとしよう。

「あ！もしもし？失恋酔っ払い女に絡まれてるんで助けてくれませんか？」

どう考えても、目の前の相手は自分の手には余るのだから。

「泣くジャン！呑むジャン！！失恋した時は、それが一番ジャン？」

「そうですよ！それに、次はもっと素敵な恋が待ってますよ！！」

「でも……私、もうすぐ30だし……」

「年齢を言い訳にしたらダメなのですよ？」

女性はいくつになっても、素敵な恋愛が出来るものなのです！」

失恋した人を慰める、複数の友人達。

まるで、ドラマの一場面の様な、その情景は、とてもこの人達が、今日出会ったばかりとは思えない程である。

その意味で言えば、慰め役に、この人を選んだ佐天の選択に間違いは無かったのだろう。

ただ……である。

佐天には、どうしても物申したい事がひとつあった。

「なんで私の部屋で飲んでるんですか！！」

そう。

場面は変われど、場所は同じ。

彼女達が盛り上がっているのは、佐天の部屋なのである。

「お前の友達を慰める為の飲み会ジャン？
だったら、お前も、ちよつとは協力すべきじゃん？」

至極真つ当な反論なのだが、佐天にも言い分はある。

「いや。友達じゃないし……」

途端にボタンと何かが倒れる様な音。

見れば、寮監がテーブルへと突っ伏していた。

「うう……かれこれ6年以上の付き合いになるのに、あんな言い方するなんて……」

「ダメですよ？佐天ちゃん？お友達に、そんな事言ったら……」

「え……」

確かに、付き合い自体は長いが、その付き合いと言うのは『殺し合う』様な間柄だったのだが……

「まあ、今からお店に出掛けるのも、億劫ですし、美味しいツマミも出てきますし……」

「それが本音ですか。

と言うより、最初から、そのつもりでしたよね？

じゃないと、調理が必要な食材、あんなに買ってきませんよね!？」

現在、佐天の部屋の冷蔵庫の大半を埋めているのは、事情を把握した、アンチスキル2人が、この部屋に来たときに持ってきた食材である。

ちなみに、彼女達が飲んでいるアルコール類は、遅れてきた、ちびっこ先生の持参品である。

「はぁ……一区切りついたら帰って下さいよ？」

ぶつぶつ文句を言いながら……

それでも、ツマミが切れないように様子を見ながら、料理を出すあたり……

なんだかんだで、佐天も、自分に似た道を歩んできた彼女の傷心を気にしているのだ。

もっとも……

この宴が翌日の明け方まで続くと知っていたら、佐天も、こんな態度を取らず即座に全員叩き出したのだろうが……

それは、結果的な話である。

佐天さんと盛夏祭？

閉めていたカーテンと、窓を開き、朝の陽光と、新しい空気を部屋に招き入れる。

冷たい水で顔を洗い、まだわずかに眠っていた脳に刺激を与え、顔を拭いたら、随分と長くなってしまった髪に櫛を通していく。

髪が整えば、最後に何時もの白い花をイメージしたヘアピンを挿して、身支度は完了。

「よし！準備万端！！」

佐天が気合いを入れるのも無理は無い。

今日は年に一度の寮祭……

『常盤台中学女子寮盛夏祭』

美琴達の。

「あのさ……黒子……」

「？」

「来年度以降の開催に向けて、どうして私のそんな写真が参考になるのか教えてくれないかしら！？」

「いひゃい！いひゃい！」

所変わって、常盤台中学女子寮。
本日の催し。

『盛夏祭』の一環として、お客様をもてなす為、生徒達は、本日、全員がメイド服を着用している。

当然、それは美琴も例外ではなく……

その姿を、カメラに収めていた……超ローアングルから。

白井が、両頬を引っ張られて折檻されている。

超解りやすく言うと、

『何時もの情景』である。

「こんにちわ〜！」

「相変わらずやってますね〜……」

と、聞こえてきたのは、聞き親しんだ友人達の声。

「ああ！いらっ……！??」

「おーす！ビリビリ！！」

「みこと！遊びに来たよ〜！」

振り返った先にあったのは、予想通りの姿が2つ。
そして、完全に予想外の姿が2つ。

「ななな！なな……なんで!?!」

完全に動揺した美琴が指差す先にいるのは……

「あ……上条さんと、インデックスも知り合いに招待されたくて。」

途中でバツタリ会ったから、一緒に来たんです」

そう。その先には、白いワイシャツに、黒いズボン。もっとも、オーダーボックスな夏季男子制服姿。

そして、ツンツンと立った髪型が特徴の上条当麻が、白いワンピースに身を包んだインデックスと一緒に立っていた。

余談だが、インデックスの服装がシスター服で無いのは、

「もう礼装としての加護が無いなら、目立たない格好の方が良いんじゃない？」

という、佐天の意見によるものだ。

確かに、シスター服。

しかも、安全ピンで止めまくっていた、神聖なのか、パンクなのか判断に悩む、インデックスの格好は、この科学の街では、目立ちまくってたのである。

閑話休題。

「しょ！招待されたって！誰に……！？」

「誰って……」

この盛夏祭。

学園都市に通う、男子学生に言わせれば、夢の舞台のひとつである。

なにせ、普段は男子禁制……どころか、許可がなければ、女子すら入れない常盤台に入ることができ、その生徒達と、お話ができるのだから。

故にこそ、その来場者は、常盤台の学生に招待された者に限られる。解りやすく言おう。

兄弟でも無い男子生徒を招待すると言うことは、

『私、あの人に気があるんです』

と、言ってるのに等しい。

少なくとも常盤台的には。

だからこそ、美琴は、誰かさんを招待していなかった。

なのに、件の誰かさんくだんは、他の誰かに招待されて、やって来ているのだ。

「その2人を招待したのは私だぞ？」

「え？……て舞夏！？」

詰め寄る美琴に、上条がタジタジになっていると、やってきたのは、美琴達と同じく、メイド服姿をした少女。

ただし、美琴達、常盤台の生徒のそれが黒を基調にしているのに対し、彼女の物は紺を基調にされている。

一般来場者には、解り難いようにしてあるが、これは彼女が常盤台の生徒ではなく、指導要員及び、ヘルプ要員の『繚乱家政女学校』の生徒である事を示している。

「ど……どういう事？なんで、舞夏がこいつを……」

「舞夏の兄貴が俺のクラスメイトで、ついでお隣さんなんだよ。……で、ウチの厳しい家計状況も知ってな。

今回、ここで美味しいものが無料で食べれるからってんで、招待してくれたんだよ」

説明する上条の言葉に、胸を撫で下ろし……

「良かったですね？御坂さん。好敵手が増えたんじゃないかって……」

「え！？いや！！ちが！？」

実に人の悪い笑みを浮かべて囁いたのは頭に乘せた花飾りが特徴的な友人。

否定しようにも、その相手は既に佐天達の方に行き、今日廻る場所の相談等を始めている。

『違う！そんなんじゃないんだから！！』

誰も聞いてくれない言い訳を、自分の胸中に響かせて1人頷く。そう。あの時のアレは、一時の気の迷いなのだと言い聞かせて。

さて、舞夏に手伝いをサボっていた、白井が連れていかれ……結果として、招待客4人を美琴が案内することになった。

男の眼があるという事で、今の自分の格好が、ちょっと恥ずかしかったりするのだが……（あくまで、男性の眼であって、それが特定の誰かだからでは無いらしい）

と、そこで佐天にしておくべき注意があったのを思い出したのだが……

「あの！柵川の佐天涙子様ですよね！？」

「え！？はい……そうですけど……？」

一足遅かったらしい。

見れば、一年生らしい娘が、瞳を輝かせて佐天に話しかけているところだった。

「あの！私、前に柄の悪い殿方に言い寄られて困っている所を助けて頂いて……」

「あゝ……そんな事もあったかな……？」

佐天の様子を見るに、覚えが無い……というよりは、該当する出来事が多すぎて、どれの事が解らないのだろう。

そんな風に、お礼を言う少女と、困っている佐天と言う構図が続いていると……

気がつけば、周りの視線が佐天に集まり始めている。

『あちゃ……』

美琴は佐天への忠告を忘れていた、自分の失敗に頭を抱える。

「御坂さん！御坂さん！どういう事ですか？これ？」

「えーとね……」

周りの雰囲気がおかしいのに気づいたのだろう。
初春が、事情を知っていそうな美琴へと駆け寄る。

「実は佐天さん。今、常盤^{うち}台じゃ、かなりの有名人なのよ。
私の友達っていうのもあるんだけど……

その前から、佐天さんに助けられた娘とかいたみたいで……
おまけに、どこから漏れたのか、幻想御手事件の解決に関わって
るのも知れ渡っててさ……

だから、今日は本名ばれないように言うつもりだったんだけど……」

気づけば……

佐天の周りには、人垣が出来つつある。

とりあえず、強引にでも一度連れ出して、後は自分がどうにかする
か……

美琴がそんな思考を始めた時……

「えーと……ごめんなさい！」

今は、デートの最中なんで……」

声が響いた。

その声の先には……

意味が解らず呆然とする上条と、その右手に両手で抱きつく、佐天
の姿があった。

解っていただけにいると思うが念のため。

佐天は上条に対して『そういう』感情を抱いていない。

より正確に言うなら、上条がどうこうでは無く、未だそういう感情
を覚えた事が無いのだ。

では何故、佐天が突如こんな行動をとったのか？

単に知り合いに聞いたことのある、人に言い寄られて困った時の行動に従っただけである。

まあ、それは本来『男』に言い寄られた場合の行動指針なのだが。

佐天に言わせれば、美琴や初春を待たせている状態で話しかけてくる少女達は、少々鬱陶しく、その場を脱け出す口実として、上条を使ったに過ぎないのだ……

「ちょ！佐天さん！？」

「ここを脱け出すまででいいんで、合わせてください。

あのまんまじゃ、何時までたっても、身動きとれないですよ……」

慌てるのは上条だ。

いくら多少親しいとは言え、年頃の女の子に突然そんなことをされれば、焦るやら恥ずかしいやら……

上条は、そっち方面に免疫が無いから尚更だ。

小声で告げられた内容によりやく納得し、取り合えずそれっぽく振る舞ってみるも……

『ああ……周りの視線が痛い』

さすがの上条も、先程の女生徒達が、佐天に対して憧れとか、下手をすれば恋愛的な感情を持っている事くらい解る。

そして、そういう娘達から、自分がどういう風に思われるかも。だからといって、珍しく自分を頼りにしてくれた少女の手を振り払う訳にもいかず……

小さく誰にも気づかれぬ様に溜め息を吐き、胸中で叫ぶ。

『ふこ……（フニ）…へ？』

さて……もう一度詳しく描写するが。

今、上条の右手には、佐天が両手を使って、抱きつく様にしている。
なにが言いたいかというところ……

当たってるのだ。

只今、上条さんの右腕には、佐天さんの慎ましい、発展途上のソレ
が。

そんな状態を……

例え何人の女生徒の敵意の眼差しで見られていたとしても。

そんな、羨ま……

けしからん状態を『不幸』等と言えるだろうか？
言えない。

いや。言わせねーよ？

『当たって……いや、意識しちゃ……でも!!?』

まあ、本人はそれどころじゃ無さそうではあるが。

さて、そんな風にして人混みから、脱出してきた2人を見た友人一
同はと言うと。

「な……ななな!!」

「むう……」

「ふわあ……佐天さん……大胆ですねえ……」

驚き過ぎてテンパる。

不機嫌になる。

我が事のように頬を朱に染める。

と言った様子。

誰が、どの反応かまでは言わないが。

「すいません。お待たせしました！」

先程の場所から、少し移動した所で、ようやく合流を果たした、佐天達。

当然……

「さ！佐天さん！いいいつの間に、こいつと、そんな仲に！！？」

こういう質問が来る訳で。

最初は何を聞かれているのやら……と言った感じの佐天だったが、やがて気がついたのか、ああ、と頷き

「イヤだなあ。違いますよ。あんまり、さっきの娘達がしつこかったから、上条さんに助けて貰ったんですよ」

と、上条の右手から身体を離れた。

瞬間、上条は、ホッとしたような、残念なような、微妙な気持ちになったのだが……なにやら、妙に怖い2つの視線に気がつき表情を引き締めた。

「でも、どうする？さっきの感じからして、佐天さんって、常盤台（とてい）じゃかなり有名人だろ？」

当然、御坂もだろうし……普通に廻るのは厳しく無いか？」

「私の方は問題無いわよ。」

確かに有名……ではあるんだけどね？

私とは、その気になれば何時でも会えるから、そんなに無茶しない筈よ？」

せっかく招待された寮祭の先行きを心配する上条に答えたのは美琴。実際、先程の場所でも注目こそ集めていたものの、美琴に話しかける者は居なかった。

「……と、なると問題は佐天さんですか。どうします？変装とか……？」

初春が、打開策を検討するも、当の本人は気楽なもので……

「ん？別に普通に回って大丈夫じゃない？

全員が全員、私の顔を知ってる訳じゃ無いだろうし。

いざとなったら、さっきと同じ手で……」

等と言い出す始末。

だが、

「「それはダメ！」なんだよ！」

その提案は、見事なユニゾンアタックによって打ち消されたのだった。

佐天さんと盛夏祭？

「ううー……そりゃあさ、変装するのは納得したけどさ……」

常盤台中学の寮。

多くの人が行き交う、その場所で、佐天が小さく唸りをあげていた。その理由は、現在の佐天の格好に原因がある。

この常盤台において、なぜか有名人と化してしまっていた佐天。

このままでは、普通に見学も出来ない……と言うことで、初春発案で変装する事になったのだ。

で……美琴が用意したのもっとも、目立たない変装。

黒いワンピースに白いフリフリ付きエプロン。

単純に言うなら、今、常盤台の生徒達がしている、メイドの格好である。

「佐天さん……何時までぶつぶつ言ってるんですか……？」

「だって……やっぱり、この格好恥ずかしいよ？」

「なんかフリフリだし、スカートだし……」

呆れたように話しかけた、初春に佐天は、顔を朱に染めたまま、潤んだ瞳で抗議する。

基本、ボーイッシュな格好を好む佐天は、スカートに抵抗があるのだ。

にも関わらず、そこに更に、可愛いらしいフリフリ付きである。

佐天にとっては、完全に恥死量を超えている。

「大丈夫だって。常盤台の生徒は、全員その格好だから、誰も気にしないわよ。」

おまけに、その格好してる人が『柵川』の佐天さんとは思わないだろうしね？」

「それは、そうかも知れないですけど……」

確かに、この場でこの格好は目立たないし、誰もこの格好の人間が、他所の生徒等とは考えないだろう。

でも！誰がなんと言おうと、恥ずかしいものは、恥ずかしいのだ。

「そんな恥ずかしがる事ないと思うけどな？
凄く似合ってるし、可愛いだから……」

見かねて声をかけたのは、この場で唯一の男。当麻だ。
……が、このセリフは失敗としか言えない。

「か！かわ……！？」

ポン！と言う音が聞こえそうな勢いで、真っ赤な茹で佐天が出来上がった。

「止め刺してどうするんですか……」

「いや……面目無い……」

完全にその場で停止した佐天を見ながら、突っ込んだ初春に、上条が頭を下げる。

『可愛い』と言う言葉に、佐天は全く免疫が無い。

それより先に、凜々しい等の言葉が先に来てしまうからである。
そこを、ピンポイントで選択するあたりは、流石、天然ジゴロである。

「まったく！アンタは……私の時は、何にも言わなかったクセに……」

「へ？聞かれなかったから、何も言わなかっただけで、御坂も似合ってるし、可愛いと思うぞ？」

「ええ！？……そんな！ついでみたいに言われても、嬉しく無いわよ！！」

思わず毒づいた美琴は、予想もしなかった返しに、素直じゃない言葉の口にながら、それでも、顔を真っ赤にしてしまう。

そんな様子を見ながら、初春はひとり、

『被害者を増やしてどうするんですか……』

と、溜め息を吐くのだった。

10分後。

ようやく復活を果たした佐天をつれ、一行は、寮内を回り始める。

『寮祭』と言うことで、たいして期待をしていなかった上条だったが、その期待を裏切る様に、寮内では、様々な催しが行われていた。一例を上げるなら、シュガークラフトの展示に、ステッチの体験。

活け花の展示に、茶道教室。

それらを覗きながら、結果として、佐天が感じたのは……

「お嬢様って肩凝りそう……」

だけだったりする。

「……私も同感かも？人間馴れない事はするべきじゃないんだよ……」

横では、同じようにインデックスが、ぐったりとしていた。

面々の中で満喫してるのは、お嬢様に憧れを持つ、初春くらいか。

「あはは……だから言ったでしょ？そんな良いものじゃ無いって。そろそろ、お腹空いただろうし、ご飯にしない？」

そんな2人に苦笑しながら、時計を見た美琴の提案に……

「さ！はやく行くんだよ！！みこと！！」

インデックスが大復活を遂げた。

食の力は偉大である。

長机の上に並べたのは、色とりどりのフルーツにデザート。

そして、様々な料理達。

美琴に案内された食堂。

本日の昼食は、来場者の数も考えて、バイキング形式のものとなっていた。

「これ……ホントのホントにどれだけ食べてもいいの！？」

「うん。そういう方式だから……って！インデックス！よだれ！よだれ！？」

気づけば、床にまで垂れそうになっていた、インデックスのよだれを拭いてあげながら、普段なら真っ先に反応しそうな、保護者（上条）に目を向けると……

「俺……今日、ここに来て良かった……」

「私もです……」

佐天と2人で、どこか遠い世界へと旅立っていた。

豪華な食事をバイキング形式で。

それは苦学生と食いしん坊にとっての『今は遠き理想郷』アツアロン

そんなものには、慣れている美琴と、比較的冷静な初春は、顔を見合わせて苦笑を浮かべるのだった。

ガツガツガツガツ……

「急いで下さい！パスタのお皿も無くなりました！！」

「やってるわよ！あれだけの量が乗ってるお皿が13皿……5分で全滅って、どんな大男が来てるのよ！？」

先程まで、静寂……とまでは、いかないまでも、それなりに余裕をもって回っていた厨房は、今や戦場と化していた。

なにせ、補充するより早く、料理が次々と消えていつているのだ。

「あの……それが……」

「なによ！？来てるのは、レスラー？相撲取り？？ギャル○根って事は無いでしょ！？」

言いにくそうにする後輩に、厨房の中で動く彼女の口調もキツくなってしまう。

「あゝ……最後のが一番近いかもです。

食べてるのは、私たちと同じ位の歳の娘2人です……」

「……………は？」

厨房を駆け回っていた彼女が、思わず動きを止めた、その頃……………

ザワザワ……………ザワザワ……………

「すげえ……………あんな小さな娘が……………」

「いったいどうやって……………」

食堂には、一種、異様な空気が漂っていた。

本来、食事をするべきその場所で、今、箸を動かしているのは、たった2名の女の娘だけだった。

1人は白いワンピースを着た、銀髪の女の娘。

凄い勢いで、だが決して下品にはならない様に、食べている。

「すげえ……………山盛りのパスタが、もう無くなっちゃった……………」

「バカ野郎……………あの娘もすげえけど、となりの娘は、もっとすげえぞ……………」

言われて、視線をずらせば、そこには、今日、常盤台（こてい）の生徒達が着

ている服を来た長い黒髪の娘が、ごく普通に食事をしていた。
いや……

「なんだ……ありゃ……」

男も異常に気がついた。

黒髪の娘は、一見、普通に食事をしている。

だが、よく見ていると、おかしい事に気がつく。

彼女が口に物を運んだ瞬間、物が消えるのだ。

「あれは……恐らく、伝説の『キャップ喰い』!!」

「なんだよ? そりゃ?」

「俺も詳しくは知らないんだが……」

とある高校で『キャプテン』と、呼ばれていた少女が編み出したとされる、大食いの奥義だ。

その技を使う者の食事は、その早さ故に、常人には食べている姿を認識出来ないらしい……」

明らかに、常軌を逸した2人の少女の食べ合い。

食堂にいる、彼女たちを除いた者達の興味は、ただひとつ。

『どちらが、より多く食べるのか?』

その一点のみだった。

まあ、結果を言ってしまうえば、食堂の責任者が泣きついてきて、決着はつかないのだが。

さて、そんな2人を横目に見ながら、美琴は深い……ふかあーい溜め息を吐く。

ちらりと時計を見れば、今この時も秒針は時を刻み、『その時』が刻一刻と近づいている事を示していた。

『はあ……なんだって私が……』

憂鬱な気持ちの原因は、午後からステージで行われる演奏会。

年に一度行われる、その場に立つ権利……或いは義務が、美琴には与えられたのである。

その場に立つチャンスは、常盤台に通う間に3回。

しかも、全校生徒の約半分を相手にだ。

つまり、演奏会の代表に選ばれる事は、常盤台の生徒にとって、最大規模の誉れなのだが……

美琴は、正直、今回の代表が自分だと言うことに、納得いっていないのである。

例えば、昼から行われるのが、能力の測定だとか、能力を使った戦闘だとかいうなら、それは、自分が代表であるべきだし、自分以外が選ばれれば不満である。

だが、やる事は演奏だ。

正直、美琴の目から見て、寮生の中に、自分よりも演奏が上手い生徒など、いくらでもいるのだ。

そして、恐らくは、自分と違って、そこに立ちたい娘も。

そんな事を考え始めてしまえば、もうダメで、気分はどんどんと、鬱々としてきてしまっていた。

「どうした？御坂？あの2人の食べっぷりにでも、当てられたか？」

だからだろうか？

気楽な様子で、見当違いな事を聞いてきた上条に、そんな事を聞いてしまったのは。

「あのさ……もしもの話なんだけど……」

例えば、学校代表のマラソンの選手にアンタが選ばれたとしてさ……」

「はあ？」

突然の例え話に、間抜けな顔をする上条に構わず美琴は続ける。

「学校には、アンタなんかより、足の速い人なんていっぱいいるのでも、皆は、アンタが一番速いと勘違いしてて、代表に選ばれちゃってさ……」

そうになったら、アンタならどうする？」

突然の話に、最初は訝しげな顔をしていた上条だったが、美琴の様子に真面目な話だと判断したらしい。

美琴の言う場面を脳内に想定し、考えてみるが、答えはひとつしか無いような気がした。

「それは……頑張るしか無いんじゃないか？」

「アンタより足が速い人もいるのに？」

美琴の質問に上条は苦笑を浮かべ、クシャクシャと頭を掻く。

「だからだろ？勘違いにせよ、なんにせよ、俺が選ばれちゃったんなら……」

本当は走りたかった奴等の為にも、せめて精一杯頑張らないと、そういったに申し訳ないじゃねーか？

それで、そういったら納得してくれるかどうかはわからねーけど……選ばれた人間の礼儀ってやつじゃねーかな？」

「そう……なのかな？」

上条の言葉を噛み砕く様に、何度も頭の中で考える。

けれど、確かに、結局のところ、今の美琴に出来る事は、それくらいしか無いのも確かだった。

「うん。そうだよね……」

ようやく納得したように美琴が頷くと、ポンとその頭に、上条の手が置かれる。

「まあ……なんに悩んでるのは知らないけど……」

上条さんと違って、皆に慕われてる御坂なら、ちゃんと頑張れば、皆、納得してくれるさ！」

優しい口調と、笑顔で、そう告げる上条の姿に、沸騰したような血液が、顔に集中したのが、美琴には解った。

「うっ！うっさいわね！！そんな事、アンタに言われなくても、解ってるわよ！！」

後、子ども扱いするな！！」

パチンっと、左手を小さな雷で弾かれた上条は、苦笑いを浮かべて、美琴から離れる。

初めから、そうなることを予測していたのだろう。

ひとり残された美琴は、一度、自身の頭に手を触れ、小さく微笑み、頷く。

「よし！頑張ろう！！」

「お腹……いっぱいなんだよ……」

「私も……今なら、冬の間、寝てるだけで、何も食べなくても、平気な気がする……」

「熊ですか……」

佐天達がステージ前にやって来たのは、美琴の演奏が始まる少し前だった。

直前まで、インデックスと2人で食堂を荒らし続けていたのだ。

2人が出ていくときに、真っ白に燃え尽きていた、食堂担当の生徒達が居たことは、初春しか気づかなかったようだが。

「それで、今からなにが始まるの？」

食べるのに夢中で、話を聞いていなかったインデックスの質問に呆れた様子で、佐天が答える。

「聞いてなかったの？今から、ステージで御坂さんが……何するんだっけ？」

「佐天さんも、聞いて無いんじゃないですか！！」

もう！演奏ですよ！演奏！！

しかも、バイオリンですよ！！

さすが、お嬢様って感じじゃないですか！！」

興奮する初春の様子に、2人は顔を見合わせて苦笑する。

今日1日一緒にいれば、初春のお嬢様への憧れは、嫌でも解るからだ。

まあ……お嬢様云々は別にしても、せつかくの友人の晴れ舞台である。

しっかりと、応援……は、演奏だからまずいか。

鑑賞させて貰うことにする。

3人が座る席は、美琴に予定を聞いた上条が、先に食堂を出て、確保しておいてくれた。

周りが女生徒だらけで、居心地が悪かったのか、ようやく、やって来た佐天達の姿を確認すると、ほっとした様子だった。

まあ……佐天達が来ても、上条の周りは、女ばかりなんだけどね？

佐天達が席についてから数分。

ステージに現れた人影に、周囲から黄色い歓声があがる。

アイドルのコンサートさながらである。

少し離れたステージに立つ人影が、ドレスで着飾った、美琴なのは誰の目にも明らかだった。

「みこと……凄い人気だね……」

「さすが、学園都市第3位ってとこなのかな？」

佐天やインデックスは、普段、まったく気にして無いが、美琴は学

園都市に7人しかいない、超能力者。

更に、飾らず、面倒見の良い性格も手伝って、年下の生徒を中心に、爆発的な人気を誇っているのだ。

まあ、だからこそ、美琴にとって、自分を特別視せずに、普通に接してくれる友人は貴重な存在なのだが。

美琴がバイオリンを構える。

波紋が広がる様に、会場のざわめきが消えていく。

そして、音が響いた。

大勢の人が集まる、その場所で。

他の音は忘れ去られた様に消え去り、今は美琴の奏でる、バイオリンの音色だけが、世界に響く音だった。

上条は音楽なんて、よく解らない。

それは、テレビでよく流れる、流行りの曲や、CMソングくらいは解るが、今の美琴が演奏しているクラシックになったりすれば、さっぱりである。

でも、それでも、今のこの演奏が『良い』演奏なのは解ったし、なにより……

『綺麗だ……』

そう。なにより、その曲を奏でる彼女に、確かに魅せられていた。本人も知らぬ間に、見とれてしまう程に。

この日。

ほんの少し。

ほんの少しだけ、とある少年と少女の関係が変化した……これは、

そんなお話。

佐天さんと春上さん

「はふ……」

「随分と眠そうですね？佐天さん？」

初春の部屋に、新たな同居人がやって来る事になった。

その、引越しの手伝いを頼まれて、初春の部屋へと向かう道すがら、アクビをかみ殺した佐天を見た、白井は、珍しい事もあるものだと思いながら、その事を指摘した。

「すみません……ちよつと夢見が悪くて、寝不足なんです……」

アクビを噛み殺した所を、友人に見られたのがバツが悪かったのか、照れたように頭を掻く佐天。

そんな、佐天のセリフに美琴が興味を示す。

「あら？佐天さんが、眠れなくなるほどの夢ってどんなよ？
例の看護婦さん達でも出てきたの？」

一般的に『夢見が悪い』と言えば悪夢。

要は、怖い夢であろう。

だが、美琴は佐天が怖がる様なモノを、件の看護婦達と初春くらいしか知らない。

それにしたって、眠れなくなるほどのモノとは思えないのだが……

「女の方は出てきたんですけど……看護婦さんじゃなくて、巫女さ

んでした……」

「へ？」

なんだろう？

その、コスプレが好きな男性が喜びそうな、職業の対比は……

「髪の毛長い巫女服姿の女の人が、真っ暗な中、私に迫って来るんです。」

『出番は？私の出番は？』って、呟きながら……」

「それは……」

「なんというか、画図的には、かなりホラーですわね。セリフ的にも、別の意味でホラーですし……」

その場面を思い浮かべてしまったのか、絶句する美琴と、何か意味あり気に苦笑する白井。

「本当に無茶苦茶怖かったんですよ？
なんか執念染みたモノを感じたんですから……！」

「おそらく、もう大丈夫ですわ。
これで少しは、その執念も祓われた筈ですから……」

「へ？」

首を傾げる佐天に、白井は人差し指を立てて、得意気に解説する。

「生き霊は、自分の想いを達成すれば、祓われてしまう……と言う

ことですわね！」

「はぁ……」

今一つ理解出来ず、頭を捻る佐天を『気にしないでいい』と促し、初春の部屋へと3人は足を向ける。

ごめんよ。巫女服魔法少女。君の話に、佐天さんが介入する要素が見出だせなかったんだ……

「えっと……春上衿衣さんです。

それで、こちらが、常磐台中学の白井黒子さんに、その先輩の御坂美琴さん。

それから、私達と同じクラスになる『歩く非常識』『学園都市の悪夢』佐天涙子さん」

「よろしく！……って！なに！？その物騒な2つ名！！それに、なんで私だけ！？」

寮の前で合流した初春が、早速、新たなルームメイトの紹介と、こちらの紹介をしてくれたのだが……

その紹介文がおかしい。

主に佐天の部分だけ。

「え？……全部実際に使われてる、佐天さんの2つ名ですよ？

他にも、『最強の無能力者』とか『柵川の修羅姫』とかもありますけど？

クラスメイトになりますから、なるべく、佐天さんの非常識振りが、早く伝わる2つ名を選んでみました！」

実に良い笑顔で告げる初春。

「うーん……何て言いますか、どれもこれも、的確に佐天さんの事を示していますわね……」

「私的には、『歩く非常識』が一番しっくり来るかなあ？ピッタリじゃない？」

「皆ひどい！！というか、私は2つ名なんか名乗った事無いし！！」

佐天の2つ名について話し合い始めた2人に、佐天が突っ込む。そして、佐天は自分の2つ名なんて聞くのは初めてだったりする。

「それは、ともかく……どうしたの？この荷物？」

このままでは、埒が開かないと判断した、メンバーの常識人……美琴が、玄関前に積まれた、段ボール箱の山に対して訪ねる。後ろの方で佐天が、

「流された！？」

とか、言っているが、気にしたら負けである。

まあ……この、段ボール箱をスルーして、今まで会話していた辺り、美琴もたいがいなのだが。

「えーと……その！春上さんを駅まで迎えに行ってる時に、引っ越し屋さんが到着したって言う連絡が来て……」

困った様に説明する初春に、呆れる美琴。

……と、その後ろで復活していた佐天が、白井の肩を叩く。

「白井さん！白井さん！！最近、影の薄かった白井さん！！出番ですよ！！！」

「余計なお世話ですよ！！？」

まあ……仕方ありませんわね……」

随分と失礼な事を言う佐天に、突っ込みをいれて、溜め息を吐きながら、段ボール箱に手を付く。

……と、白井の細い指が触れた瞬間、高く積み上げられていた段ボール箱が列姿を消した。

「わぁ！？」

「おお！！流石、大能力者のテレポーター！！！」

その様子に、初春は手を叩いて喜び、今度は佐天も素直に誉め、勢いで、白井に抱きついた。

「こ！これくらい当然ですよ！！」

私の能力を持ってすれば、簡単なものですわ！！！」

抱きつかれた白井は、頬を朱に染めながら答える。

その様子はどこか嬉しそうだ。

「はいはい！百合って無いで、チャツチャと片付けちゃお？」

「はい！」

「はいなの!!」

勢いよく頷く2人と……

「ちょ! 誤解ですわ!? お姉様!! 黒子は、お姉様一筋ですのに!」
「?」

「そうですよ!! 白井さんを、私に押し付けようとししないで下さい
!!!」

キャンキャンと猛反論する2人。

まあ、美琴は、その2人に構うこと無く、そそくさと片付けを開始
しているのだが。

『これで、黒子の気が佐天さんに向いてくれれば……』

そんな事を、考えていたりいなかったり……

「皆さん! ありがとうございますなの!!」

ペコリと頭を下げる春上。

整頓された部屋と、積まれた、空になった段ボール箱。

春上の引越し作業は、思いの外、早々に終了した。

春上自身の荷物が、多く無かった事。

初春が、迎え入れる準備をしていた事。

なにより……

「ふいふ……」

『引っ越しの匠』佐天涙子が居たことが、要因に上げられる。

「あれ！？また、なんかおかしな、2つ名をつけられた気がする！？」

「気にしない！気にしない！！」

それより、予定より早く終わったし、どこか遊びに行こうか？」

おかしな事を言い出した佐天を、華麗にスルーして、美琴が提案する。

引っ越し準備が必要なのは、物だけでは無く、人もなのだ。
この辺の気遣いを、自然に出来る所辺りが、御坂美琴が、お姉様（御坂美琴）たる所以である。

「賛成ー！！」

当然、春上を歓迎している初春が便乗して……

「賛成じゃありませんの！」

白井に思いつきり渋い顔をされた。

「忘れましたの？初春と私は、これから合同会議」

「は！！？」

完全に忘れていたらしい。

白井の言葉に、目を見開いた初春は、ガックリと肩を落とした。

「合同って？」

聞き慣れない単語に、美琴が疑問を挟む。

風紀委員が、他の組織と合同で会議するような事は、そう無い筈である。

「風紀委員とアンチスキルのですわ。

なんでも……この所、起きている地震に関する話とか……」

「地震で会議？」

腑に落ちない解答に、美琴は納得のいかない表情だ。

地震に対して、風紀委員とアンチスキルで話し合ってどうしようと言うのか。

自然現象相手では、精々、注意喚起を促すのが関の山だし、第一、それなら既に幾度となく行われている。

誰かが人為的に地震を起こしているならともかく……

そんな事が出来る能力者など……

と、そこで、佐天の姿が目止まる。

『いやいやいや……無い！無いよ！！？』

いくら、佐天さんが『歩く非常識』だとしても、それは無いって！
』

胸中に沸いた疑問。

それを必死に否定する美琴だったが……

それを直接、佐天に聞けない所辺りが、美琴の内心を表している。

美琴は、これ以上、自身の世界の常識を壊したく無いのだ。

「んじゃあ！御坂さんと、私と、3人で行こうか？」

「ずるいですよー！？」

「終わったら合流すればいいじゃん？ねえ？」

微妙に白けてしまった場の空気を払拭するように、佐天が春上に声をかけ……

それに、初春が噛みつく。

声をかけられた春上は、驚いた様に、ビクリっと身体を震わせた。

「大丈夫ですよ？佐天さん、こう見えて、噛みついたりはしませんから！私も終わったら、すぐに行きますし！」

それに気がついた初春が、フォローを入れたのだが……

「私は、犬かなんかか！」

「そんなに可愛いモノじゃないです！どっちかと言うと、虎とか豹の類いです！！」

「猛獣！？」

フォローの仕方がおかしかったせいか、佐天から突っ込みが入り、即座に反論する。

そんな2人の様子を見て、春上は優しく微笑むのだった。

「えい！……なの」

『ぽふ!』そんな可愛いらしい擬音が似合いそうな感じで繰り出された、春上の拳が、機械仕掛けのミットへと吸い込まれ……35 pointと画面に表示される。

「あはは! 春上さんらしい数字ね! 次は私っと!!」

初春の部屋を出た3人は、クレープを食べてから、近くのゲームセンターへと繰り出していた。
今、3人がやっているのは、パンチングマシンである。

「せーの!!」

ダン!! 掛け声と共に、美琴が繰り出した拳は、勢いよく、ミットを叩きつけた。

表示された数字は、85 point。

「うん! まずまずかな?」

「すごい!!」

その数字に満足そうに頷く美琴と、素直に称賛する春上と、ここで佐天が、グローブを身につけた。

「なかなかやりますねえ……でも! 負け……て、あれ?」

「さ! 春上さん! あっちの方の、クレーンゲームでも見てみよう!」

「で……でも……」

「いいから！いいから！！早く！！」

張り切る佐天を尻目に、そそくさと、その場を後にする美琴と、戸惑いながらも、そんな美琴に追従する春上。

「御坂さん！ひどい！！なんで、私を置いていくんですか！！？」

「置いていくわよ！

全力で繰り出した佐天さんの拳が、機械を壊して、店員さんにアンチスキルまで呼ばれてのお説教コース。

そんなオチが、スタッフロールが流れる所くらいまで見えるじゃない！！！」

半泣きで追いかけて来た佐天に、美琴が容赦無い突っ込みを入れる。白井と初春の2枚看板が居ない以上、春上を守るのは、美琴だけなのだ。

……外敵からでは無く、佐天（非常識）からだが。

「そ！そんな事無いですよ！？私だって、ゲームなんだから、ちゃんと手加減しますもん！！」

「いいから！とりあえず、佐天さんは、アレ禁止！次は……」

明らかにドモツた佐天に、パンチングマシン禁止令を発動させて、美琴は硬直した。

美琴の見つめる先にあるクレーンゲーム。

その中にあるのは……微妙なカエルのぬいぐるみだった。

「あゝ……春上さん。多分、長くなるから、私と2人で他のゲームしてようか？」

「?……はいなの?」

「どういう状況ですの?」

「さあ……?」

初春と白井が会議を終え、佐天達がいると言う、ゲームセンターに、やって来た時、場は異様な雰囲気包まれていた。

構図としては、力尽きた様に崩れ落ちた状態から、涙目で春上を見て(睨んで)いる、美琴といった状態。

「あっ!佐天さん!!これ、一体どうしたんですか?」

少し2人から離れた所で、苦笑を浮かべている佐天を見つけた初春が駆け寄る。

本人達には、声を掛け辛いオーラが出ていたのである。

声を掛けられた佐天は、指で小さく頬を掻き……

「いやあね……御坂さんが、あのクレイゲームにハマっちゃってさ……

しょうがないから、私と春上さんは、他のゲームをしてただけ……

御坂さんが、両替してる間に、春上さんが、やってみたら、一回で取れちゃったみたいで……」

見れば、確かに春上の腕の中には、微妙な両生類の形をした、ぬい

ぐるみが抱えられている。

『ああ……』と、2人が納得していると、春上が腕の中のナニかの形をした、ぬいぐるみを美琴に差し出した。

「今日、付き合ってくれたお礼なの!!」

途端、美琴の顔がパツと輝く。

まるで、地獄の底で、天からの蜘蛛の糸を見つけたかの様である。

「いいの! 本当にいいの!?!」

ガッチリと春上の手を取り、確認する美琴。
春上がにっこりと頷くと

「ありがと!!」

と、涙ながらに、頭を下げた。

その様子を、半ば微笑まし気に、半ば呆れ気味に見つめる一同。
あの様子では、美琴は、白井と初春が、やって来ている事すら気づいていなさそうではあるが……

「花火大会?」

「ああ! そう言えば、今日でしたっけ?」

初春と白井を加えた面々は、プリクラをとったり、メダルゲームをしたり……

まあ、女の娘らしい? 楽しみ方をしていた。

春上が、花火大会告知のポスターを見つけたのは、そんな時だ。

「ねえ？皆で行こっか！？」

となれば、楽しい事大好きな美琴が、それを見逃す筈もなく……

「いいですわね！浴衣なんか着て！！」

当然、白井も乗っかる。

そして……

「行きましょっか？」

初春が春上に優しく問いかけ、

「うん！！」

春上も嬉しそうに頷いた。

ただ一人……

「……花火……大会？」

何かが引っ掛かる佐天だけが、頭を捻るのだった。

佐天さんと花火

『佐天さん！ヘルプです！！』

そう言って、呼び出されたのが15分前。

慣れない浴衣姿に、悪戦苦闘しながらも、初春の部屋へと駆けつけ、玄関を開けた佐天は……

「ごめんなさい……間違えました……」

そっと、玄関を閉めた。

『うん……私、疲れてるんだよ。』

友達同士が、霰もない姿で緊縛プレイしてる幻覚みるなんて……どうかしてるよね。

早く帰って寝ないと……』

軽く現実逃避した佐天の想いは、部屋の中から聞こえた

「なんで閉めてるんですか！間違って無いです！！早く助けて下さい！！」

と言う、親友の声で脆くも崩れ去った。

どうやら、これは現実で……

自分は今から親友達を、あの状態から開放しなければならいらしい。

……それはいい。

それはいいのだが、助けた後に、親友の新たな一面……主に性癖な方面において。

語られた場合、どういう対応をとれば良いのだろうか？

そんな事に頭を悩ませながら、佐天は再び玄関の扉を開くのだった。

「はい！一丁あがり！！」

「ありがとうなの！」

春上の浴衣の帯を締めた所で佐天が告げ、嬉しそうに春上が頭を下げる。

どうやら、先程の出来事は怪しげなプレイでは無く、浴衣の着付けの途中で起きた事故らしい。

……まあ、佐天に言わせれば、何をどうすれば、あんな状態になるかの方が、よっぽど理解不能だが。

「凄いです！佐天さん！あっという間に、こんなに綺麗に！！」

その手際の良さに、初春が珍しく素直に感嘆している。

「ん〜？着物とか、民族衣裳とか着なれてるからね？

特に和服は、着ていくと、海外の人達に喜ばれるから……」

ちよつとしたネタバラシをしながら、初春の着付けにかかる。

まずは、無茶苦茶に巻かれた帯をほどくところからだ。

「はあ〜……こんな事なら、最初っから、佐天さんに頼めば良かったです……」

思わず、溜め息と一緒に、そんな言葉を吐露してしまう。

佐天が春上の着付けにかかったのは、僅か10分程度。

2時間近くかかって、まともに着れなかった立場からすれば、そう言った文句のひとつも言いたくなるというものだ。

「ん？誰だって、出来る事と、出来ない事はあるでしょ？

今回は、たまたま私が着付けが出来て、初春は出来なかっただけ。

それに……初春がルームメイトじゃなかったら、春上さん、こんなに早く皆と馴染めて無かったんじゃないかな？」

着付けの手は止めず……チラリと春上の方を見れば、にっこりと笑って、大きく頷いていた。

「うん。初春さんがルームメイトで本当に良かったの。頼りにしてるの！」

「だってさ？」

「はい！」

春上の言葉が余程嬉しかったのだろう。

わずかに頬を上気させて、頷く初春を見て、佐天は微笑む。

その実、佐天は春上が、こちらに馴染めるかどうかについて、さほど心配していない。

もちろん、自身も出来る限りは協力するつもりだが……

そんなものが無くても、春上は、きっと、すぐにこちらに馴染める。

何故なら、佐天と言う大問題児を、この街に馴染ませた初春が一緒なのだから。

「さ！早くしないと、遅れちゃうわよ？」

少しだけ妬ける想いを隠し、再び初春の着付けを始める。

けれど、楽しそうな2人を見れば、そんな事はどうでもいいと思うのだ。

初春はもちろん、今日、出会ったばかりの春上だって、確かに友達なのだから。

「わぁー！！御坂さん！凄い素敵！！」

「白井さんも、可愛いですねー！」

初春と春上。

2人の着付けを無事に終わらせ、向かった待ち合わせ場所。さほど待つでも無く、浴衣姿の美琴と白井がやって来た。

美琴が山吹色、白井が紫色の浴衣だ。

ここに、水色の浴衣の佐天。

桃色の初春と、白の春上が加わる事で、色とりどりの浴衣姿の美少女達が集った形になった。

道行く男性達が、チラチラと、5人の姿を見ているのだが、それに気づかないのは、このメンバー故か。

「勿論ですわ」

冒頭の初春の誉め言葉を、喜ぶでも無く、さも当然とばかりに受け入れる白井。

その自信に、美琴が苦笑しながら、

「初春さん達も可愛いよー」

と返す。

まあ、女性同士で、ありがちなやり取りである。

もっとも、自分たちで着れず、佐天に助けて貰った形の初春は、微妙な笑みを返す事しかできないが。

と、ここで、佐天が悪戯っ子の様な笑みを浮かべて、美琴に耳打ちをした。

途端、美琴の顔が『ポン!』と言う音が聞こえそうな勢いで、朱に染まる。

「そそそ……そんなことないもん!!」

別に私は、アイツの事なんて!!!!」

佐天の言葉は聞こえなかった、白井と初春だったが、美琴の反応で、佐天が何を言ったのか、おおよその見当がついた。

その反応は、苦笑と苦々し気な顔と対照的ではあったが。

「どうしたの？」

ひとり理解出来ない春上が、小首を傾げる。

「なんでもない! なんでもないわよ!!」

その反応に、少しだけ冷静になった美琴は、全力で誤魔化す。

なにかあったのは、事情を知らない春上ですら解る誤魔化し方なのだが。

「ほ! ほら!! 夜店出てるよ! 行こ!!」

チラリと視界に入った景色は、美琴にとっては、救いの光景だった。話題を逸らす、きっかけになったのだから。

逃げ出す様に、夜店へと駆け出す。

「あはは……苛め過ぎちゃったかな？」

小さく笑みを浮かべた、佐天が後を追ひ、続く形で、他の3人も夜店へと向かう。

さすがに、学園都市で年に一度の花火大会と言うべきか。

花火見物のメインとなる通りには、かなりの数の夜店が出ていた。

たこ焼、綿菓子、かき氷に、焼きもちこしと言った食べ物系。

金魚すくい、ヨーヨー釣りに、型抜きと言った遊び系と種類も様々だ。

皆で周りながら、食べ、楽しんでいく。

「あれ？」

そんな中、初春は、おかしな夜店を見つけた。

『射的屋』と書かれた、その店は、普通に考えれば、そうおかしく無い。

だが、その店には、コルク銃ばかりが並んでおり、景品が見当たらないのだ。

「初春？ どうした……うわ！？」

思わず足を止めていた初春に気づいた佐天が、その視線を追ひ……思わず声をあげた。

その射的屋に見覚えがあるからだ。

「初春！あっちいこ！あっち！！」

即座に、そこを離れるべく、行動を開始する。

「え？え？佐天さん！？あの射的屋さんが、なんだか知ってるんですか！？」

慌てる初春の言葉も無視だ。

誰が呼んだのかは知らないが、普通に花火見物をしたいのなら、あの射的屋に触れてはならない。

その瞬間に、ここは、戦場になるのだから。

怪しげな射的屋を後にしてからも、5人の夜店見物は続く。

遠くの方が、妙に騒がしかったり、爆発音が聞こえたりしても、気にしてはいけない。

「……不幸だ〜！！」

良く知ってる悲鳴が聞こえても、気にしてはいけないのだ。

「あれ？なに？あの車？？」

5人が、夜店を満喫……

特に『ゲコ太』の、お面を買った美琴は大満足だ。

した頃、夜店が切れた先に、変わったデザインのトレーラーが止まっている事に気がついた。

「MAR……先進状況救助隊のトレーラーですわね……」

トレーラーの横に書かれた文字から白井が、その所属を説明する。

「例の乱雑開放対策ですかね？」
ポルターガイスト

初春の脳裏に、今日の合同会議の内容が過る。

確かに、この人混みで、ポルターガイスト……地震が起きれば大惨事になりかねない。

となれば、打てる手は、打っておくべきだろう。

「ポルターガイスト？悪霊でもでるの？」

「いえ……そうじゃなくてですね……」

妙な勘違いをしている佐天に、初春が説明を始め、白井は溜め息を吐く。

「それにしても、あんな警備下で花火見物だなんて……風情もへつたくれもありませんの……」

「しょうがないんじゃない？」

そんな事件が起きてるんじゃない……」

「それはそうですけど……」

愚痴る様な形になってしまった言葉を、美琴が諫めるが、白井はどこか不満気だ。

勿論、白井も風紀委員として、その必要性は理解しているが、ソレはソレ。

せっかくの花火見物。

不粋な物に混ざって欲しくないのは、一学生としての本音である。

「ん〜？だったら、良い所がありますよ？」

初春の説明を聞きながら、こちらの話も聞いていたのだろう。
佐天が話にのってきた。

まあ。佐天としては、初春の話が、『RSPK症候群』とか難しい話になってきた辺りで、逃げ出す切っ掛けを探していたのだが。

『ドン！』

『ヒュー……ドン！！』

漆黒のキャンパスを彩る様に、夜空に花火が咲き散っていく。
次々と咲いては、散っていく花火に、少女達は感嘆の声を上げながら見惚れる。

「良くこんな場所を、ご存知でしたわね？」

佐天が案内してくれた場所は、花火が良く見えるにも関わらず、人の少ない……いわゆる、穴場だった。

素直に感心する、白井に佐天は照れ臭そうに頬を掻き

「あはは……実は私も、知り合いに聞いただけなんですけどね？」

と答えた。

そう。佐天は知り合いに聞いただけなのだ。
毎年、学園都市に花火を『打ち上げに』来る知り合いに。

「わぁー!!! 凄いの!!!」

春上が感嘆の声を上げる。

見上げる先では、火の鳥と虎が、競うようにして舞っていた。

「なんでも、学園都市の花火は、日本一になったこともある花火師さん達が、打ち上げてるらしいですよ?」

前もって調べていたのだろう。

ちょっとした豆知識を、初春が披露する。

次々と披露される華麗な花火。

面々は、しばしの間、時が経つのも忘れて、見惚れるのだった。

「あれ? 春上さん?」

「とと……どこ行くの?」

フラリと、春上がその場から離れたのに気づいたのは、春上の隣にいた初春と、佐天の2人だけだった。

まるで、夢遊病患者の様にフラフラと歩き出した春上を放っておける訳も無く、2人で後を追う。

「……こ? ……なの?」

「春上さん?」

段々と人気の無い方へと歩いて行く春上に、初春が声をかけるが、その歩みは止まらない。

「初春……何か変だ……」

「え？それは……見れば解りますけど……」

そう。春上の様子がおかしいのは、見れば解る。
だが、佐天が感じたのは、別の事。

「そうじゃなくて……」

自分が感じた物を、どう説明したものか？
言い淀んでる間に、初春は先を行く春上に迫り……

「……どこなの？」

わずかに遅れた佐天にも、はっきりと春上の言葉が聞こえた時……
ソレは来た……！

まるで、荒れた海を行く船の上の様に大地が揺れる。
最近、頻発しているポルターガイストと言われる現象。
その中でも、間違い無く、一番の規模だった。

「は！？」

倒れ込んだ春上を守る様に、覆い被さった初春は、激しい揺れの中で、街灯が自分に向かって、倒れて来るのを見た。
せめて、春上だけでもと、自身の身体に力を入れた所で、

『グワァァン！！』

と、金属同士が、激しくぶつかった音を聞いた。

「初春さん達は!？」

美琴達の元でも、ポルターガイスト現象は起きていた。

足元が崩れ落ちるアクシデントを、白井のテレポートで、間一髪回避した美琴が声を荒げ、まだ、わずかに揺れる大地を駆け出す。

その先で美琴達が見たのは……

「えーと……」

困った顔で立ち尽くす佐天と、街灯の下敷きになって仰向けに倒れている、ピンクのロボットだった。

佐天さんと自然公園

「ほんと……に、すいませんでした!!」

地に頭が地につかんばかりの勢いで、頭を下げる佐天。

「いいのよ! 結果として、皆、無事だったんだし」

頭を下げられた相手……妙齡の、少し赤みがあった、長い髪。
知的な雰囲気、かけている眼鏡が良く似合っている。
テレスティーナと名乗った女性は、若干、引き吊った笑顔で、気に
するなと手を振った。

あの時……

ポルターガイストで、街灯が、初春と春上の方へと倒れて来た時。

佐天は咄嗟に、街灯を誰も居ない方向へと蹴り飛ばしたのだ。

……思いつきり。

咄嗟だったとは言え、佐天は、その方向に誰もいない事を確認して
いた。

確かに、居なかったのだ。

その時には。

ただ……

佐天が街灯を蹴り飛ばした方向から、MARのロボットが急速に近
づいていた。

結果として、佐天が『思いつきり』蹴っ飛ばした街灯が、MARの
ロボットに直撃。

搭乗していた人物は、つい先程、他の隊員達が到着するまで、機体の中で目を回している事になったのだ。

勿論、それまでの間に、佐天達も助けようとしたが……

ロボットの開け方が解らず、だからといって、壊すという選択肢は戸惑われ……

そうこうしてる間に、他の隊員が到着したのだ。

「それにしても……まさか、街灯を生身で、蹴り飛ばす娘がいるとは思わなかったわ。

貴女、肉体強化系の能力者？」

テレスティーナの視線の先。

そこには、MARの救助用駆動鎧が3体並んでおり、その中の一体。ピンク色の機体の胴体は、細長い何かの形で、ベッコリと凹んでいた。

「えーと……そんな感じですよ……

あの……アレの弁償とか、私がしないといけなかったりするんじゃないか？」

相手の質問を微妙に回避しつつ、佐天は、一番気になっている事を尋ねた。

学園都市で良く見かける、警備ロボが一体、120万円。

明らかに、それよりは高いであろう機体を弁償等となれば……

貧乏学生の身には、厳しすぎる現実となる。

「大丈夫よ。災害救助中の出来事だから、事故として処理できるわ。貴女が故意にやった訳でも無いし、私の判断ミスだった訳だしね」

その言葉に、佐天は力が抜け、膝を着きそうになるのを、グツとこらえる。

「良かった……本当に良かった……」

でもまあ、声が思わず震えてしまうのは、堪えきれなかった様である。

「話はそれだけかしら？」

MARの隊長としては、貴女個人に興味あるのだけど、報告や現場確認があるから失礼するわね？」

「あ……はい……」

佐天が頷き、頭を下げたのに対し、軽く手を上げて返し、携帯を取り出しながら、テレステイナは崩落現場へと向かっていく。それを見送りながら、佐天は小さく呟いた。

「絶対にプライベートでは会いたく無いタイプの相手だね……」

寮監の見廻りがあるから……と、先に帰ることになった美琴達を見送り、佐天は携帯を取り出す。

先程のポルターガイストの際、気を失ってしまった春上が搬送され、それに初春が付き添っているのだ。

数回のコールの後、受話器の向こうから、初春の声が聞こえた。

『もしもし?』

「初春! 春上さんは?」

『心配無いみたいです。軽いショック状態とかで……
今、春上さんを連れて、アパートに帰ってる途中なんです』

その言葉に、胸を撫で下ろす。

ポルターガイストが起こった際、明らかに様子がおかしかっただけに、春上の事が心配だったのだ。

ロボットの件が無ければ、間違い無く、佐天も病院に付き添っていただろう。

「そっか！良かった……」

それじゃあ、私も初春のアパートに向かうから、そこで合流しようか？」

『解りました！』

とりあえず、詳しく話を聞くためにも一度合流する事を決め、大地を蹴り駆け出す。

向かうは、初春のアパート……の前に、ちょっとした寄り道をしてから。

「なんで……」

自宅であるアパートに到着した初春は、さすがに呆れた表情だ。

「なんで、タクシーで帰って来た私たちより、佐天さんの方が先に着いてるんですか？」

なぜなら、到着した自分達を、大きなスイカを片手に持った佐天が、

出迎えたからだ。

「へ？それは……ほら？

あの花火を見てた場所って、高台だったじゃない？

で、あそこから、ここまでって、ひたすら下りだから、跳びやすいんだよね？」

「……………」

大きくため息をひとつ。

そうだった。この人は、そういう人だったと、心の中のASF（アンチ・佐天フィールド）を起動する。

とはいえ、正直に言えば、佐天が先に着いてくれたのは助かった。

タクシーを降りてから、部屋まで、まだ気を失ったままの春上を運ぶのは、初春には厳しかったのだ。

結局、春上を佐天が抱き抱え、（俗に言う『お姫様抱っこ』で）運び、初春は、残りの荷物と、スイカを手には部屋に戻った。

「はあ……結局今日は、佐天さんにお世話になりっぱなしでしたね……………」

春上を着替えさせて、ベットに寝かしつけた時、初春が口にしたのは、そんな言葉。

春上の引っ越しから始まり、浴衣の着付けに、気を失った春上を、この部屋へ運んでもらい……

極めつけは、ポルターガイストの際、倒れて来た街灯からも守って貰っている。

「ん？？気にしないでいいよ？私が勝手にやってる事だし……」

「でも……」

そうは言われても、初春としては気にしてしまう。

春上の為と頑張ってみても、自分は空回りしてばかりで、ずっと誰かにフォローされてる形なのだから。

「じゃあ、こうしよう！ むーちゃんに聞いたんだけど、この間、繁華街に新しい喫茶店が出来たんだって」

「？」

突然変えられた話に、初春は対応出来ず、首を傾げるばかりだ。

「その、苺サンデーが凄く美味しいんだって。

だからさ、今度、春上さんと一緒に食べに行こうよ！

その時に、私の分を奢ってくれたら、今日の分は、全部チャラ！」

「!!??」

ようやく、佐天が何が言いたいのかが解った。

以前に佐天に頼まれ事をされた時、初春はそれを、パフェを奢って貰う事で引き受けた。

佐天は、今回の事も立場が違うだけで、一緒だと言いたいのだ。

「しょうが無いですね。その代わり、一杯だけですよ？」

「うん！ 約束だよ？」

やれやれとため息を吐く初春。けれど、その顔から気負いは消えて

いた。

「ここは……?」

春上が目を覚ましたのは、佐天が、そろそろ帰ろうかとした頃だった。

「寮の部屋ですよ。気分はどうですか?何か飲みます?」

ノロノロと身体を起こす春上に、初春は柔らかな笑みを浮かべて応対した。

だが、笑みを向けられた春上の表情は暗い。小さく首を振り、

「もしかして……私、迷惑かけたかな?」

戸惑う様にして尋ねた。

春上の記憶は、皆で一緒に花火を見ていたところまでしかない。

そして、気づけば寮のベットに眠っていたのだ。

迷惑をかけていない筈がない。

つまり、春上の言葉は、質問と言うよりは、確認だったのだ。だが、

「そんな事ありませんよ?」

あっさりと、新しいルームメイトは否定し、

「全然大丈夫!!」

その友人は、全く気にしてないと手を振って見せた。けれど、春上には、2人の優しさが痛く怖かった。

そう感じてしまうほどに、前の場所で色々な物を失ったのだ。春上は。

「私……変なの。また、皆に嫌われちゃうのかな？」

伏し目気味に呟く。

前の場所にも友人と言える人達がいた。

だが、ある時を境に、気味悪がれ、嫌われ、気づいた時には、一人ぼっちになっていた。

「そんな訳ないよ！」

春上の心情を知ってか知らずか、佐天は実にアッサリと、その言葉を否定した。

そして、佐天の言葉を初春が引き継ぐ。

「そのくらいの事で、皆さん、春上さんの事嫌いになったりしませんし……」

第一、『変』って意味で、佐天さんを越える逸材は、学園都市には居ません！！」

「そうだよ！！……って酷い！！」

「……………クスッ」

気がつけば、漫才の様なやり取りをしてる2人に、思わず笑みが零れた。

そんな春上の様子に気づき、佐天と初春も小さく笑みを浮かべるのだった。

「優しいの……初春さんも、佐天さんも皆……」

佐天がお見舞いに買ってきていたスイカを食べ始めた時、春上は憂いを帯びた表情で、そう呟いた。

「そう？ 私は特に意識しては無いけど」

呟きを聞き取った佐天が、そう返すが、春上は小さく首を振った。

「だから、凄いと思うの。私一人じゃ、何にも出来ないの。待てることしか……」

そんな自分が嫌なのに……
変わりたいのに……」

首から下げたロケットを握り締め、項垂れる春上。

その様子を見ていた2人は、顔を見合わせて小さく笑った。

「そんなの、私もそうだよ」

明るい声でつけた佐天。

その声に春上は思わず顔を上げた。

「私、1人じゃ何も出来ない。実際、初春が居なかったら、私は多分、もう『学園都市』には居なかったよ？」

「私もそうですね。佐天さんが居なかったら『風紀委員』になつて無かったでしょうし、もしかしたら、『学園都市』を辞めてたかも知れませんか？」

そんな風に語る、佐天と初春の顔は楽しげで……

だから、春上は思うのだ。

この2人は、本当に信じ合っているのだと。

「春上さん？多分ね、人1人って、きっと、そんなに強くない」

真面目な口調で語り始めた佐天に、春上が頷く。それを確認して、佐天は続ける。

「でも、今、春上さんには、私がいる。初春も、御坂さんに、白井さんもついてる！」

「だからきっと、春上さんが本当にそう願うなら……

『変わりたい』って、心の底から望むのなら、きっと、なんでも出来ますし、なんにでも成れますよ！！」

佐天の言葉を引き継ぐ形で、初春が力強く言い切った時、春上は驚きで目を見開いていた。

そんな事を、出会って間もない2人に言われるとは、思ってもみなかった。

この2人は信じてるのだ。

多分、春上自身よりも、春上の事を。

「変わるかな？」

春上の小さな呟きに、佐天が頷き、初春は『当たり前です』と答えてくれた。

春上の胸に、随分と久し振りに、暖かいものが溢れた気がした。

「きゃあああああ！！！」

初春の声が、晴れ渡った青空に木霊する。

第21学区『自然公園』

その中にある、ボートを走らせる為の川を、一隻のボートが疾走していた。

その勢いは、

「実は、あのボート……モーター積んでるんだぜ？
しかも、学園都市製の最新型のヤツをな！！」

なんて都市伝説が、後に生まれる程のものである。
当然、それに乗っている人間はたまったものでは無い。

「佐天さん！ちょっと速度を……」

「え……初春は、慌てすぎだよ？春上さんなんか、落ち着いたものじゃない？」

慌てもする。

何せ初春達が乗ってるボートは、既に水の上を滑空しているという表現が正しい様な速度なのだから。

「落ち着いてる佐天さんがおかしいんです！！
って春上さん？春上さん！！？」

佐天にお決まりの突っ込みを入れたところで、初春は春上の様子がおかしいことに気づいた。

先ほどから微動だにしていけないのだ。

そして、ようやく悟る。

春上は落ち着いてなど居なかった。

とうの昔に気絶していたのだ。

「うう……酷い目にあつたの……」

「大丈夫ですか？」

ボート貸し出し場近くのベンチ。

丁度、木陰になっている場所で、初春の膝を借りる形で、春上が横になっていた。

幾分、血色は良くなってきたものの、その顔色は、良いとは言えない。

「あの……」

「なんですか？」

恐る恐るといった感じでかけられる佐天の声。

それに、初春は思いつきり棘のある声で返事をした。

一瞬の躊躇の後、佐天は勇気を持って踏み出す。

「私は、何時までこうしていれば？」

春上の顔を眺めていた初春が顔をあげるとそこには、地べたに直接正座させられた佐天の姿。

「とりあえず、春上さんの具合が良くなるまでです。反省してください」

「してるよ！？……してますので、そろそろ許していただけでないで

しょうか？」

初春に随分と怖い目で睨まれ、佐天の語尾が弱る。

「ダメです！」

取りつく島も無いまま、ピシヤリと言い放たれ、頭を垂れる。

正直に言ってしまうえば、正座そのものは苦ではないのだが、なんと
言うか痛いのだ。この状況は。

「クスクス……なあに？ あれ？」

主に周りの視線が。

「初春さん。もういいの……」

しばらく、そんなやり取りを続ける内に、ようやく回復したらしい
春上が身体を起こした。

が、さすがに、全快とはいかないのだろう。

未だ、顔色は芳しく無い。

「ちょっと大変だったけど、私も楽しかったから……」

一番の被害者である、春上に、そう言われてしまえば仕方ない。
渋々、佐天の正座をとく事を許可する。

「はぁ……助かったよ。春上さん……」

ようやく、屋外正座の羞恥プレイから解放された佐天は、安堵の溜

め息を吐きながら、そんな事を言ったのだが……

「でも、次からは気をつけて欲しいの。次は助けないの」

続く言葉に凍りついた。

これはつまり……

学園都市内に、佐天が勝てない相手が、また増えたと言うことである。

「うん……気をつける……」

その事実には、戦々恐々としながら、佐天は乾いた笑みを浮かべたのだ。

「うーん……美味しい!!」

昼食……と言うのかも微妙だが、3人が昼時に食べたのは、屋台が出ていたクレープだった。

一応、3人とも昼食にお弁当は用意していたのだが、さすがに春上、そして、初春が食べれる状態では無かった為、軽く食べれる物へと変更されたのだった。

とはいえ……である。

いつもと違う状況で。

しかも、仲の良い友達と食べるのであれば、それは、なんであれ、ご馳走である。

初春も春上も、幸せそうにクレープに口をつけていた。

「あのね……私……友達を探してるの」

春上が、緊張した面持ちで、そう切り出したのは、佐天が最後の一口を飲み込んだ頃だった。

「春上さん？」

「佐天さんと、初春さんには、話しとかなくちゃ……その娘とは、ずっと仲良しで、いつも一緒に……丁度、今の佐天さんと、初春さんみたいな感じだったの」

2人は黙って、春上の話に耳を傾ける。

あまり自分から口を開くタイプでは無い春上が、一生懸命に話しているのだ。

余計な口を挟みたくは無かった。

「でもある日、離ればなれになって……その娘は約束してくれたの。」

『きっと、また会える』って。

だから……待ってた……」

悲しみに染まっていた春上の瞳。

そこに意志の力が宿る。

「でも！待っているだけじゃダメなの！！

自分から探しにいかないと……

こうしている今も、あの娘は……」

両手で祈るように、ロケットを握り締める春上の手。

それを包み込む様に、初春が手を重ねた。

「解りました！一緒に探しましょう！！」

「え？」

驚く春上。その肩に手が乗せられた。

「大丈夫！きっと見つかるよ！！
なんて言っても、学園都市最高のハッカーが……」

「違います！！」

佐天の一言に、初春は顔を真っ赤にして怒りだす。
そんな2人の様子を見ながら、春上はようやく理解する。
この2人は、今、自分に協力してくれると言ったのだ。
それが解り喜びを感じた瞬間……

「どこ？どこなの？」

「春上……さん？」

春上の焦点がおかしくなり、ぶつぶつと呟きながら、ふらふらと歩み始める。

その様子は、さながら夢遊病患者のようである。

「どこにいるの！？なにをそんなに苦しんでいるの！？」

「春上さん！！どうしたんですか！？春上さん！？」

春上の声は叫びに近いものとなり、初春は春上を正気に戻そうと、その肩を揺する。

と、そんな2人の腰に、佐天の腕が絡まる。

「佐天さん？」

タン！っと乾いた音と共に身体にかかる強力な重力。
一瞬の間の後に来る浮遊感。

何度かの経験と、目に映る景色で、佐天が2人を抱えて跳んだのだと、初春は理解した。

しかし、何故？

その答えは、着地と同時に解った。

大地がわずかに揺れていたからである。

佐天が着地した場所は、周りに何もない、芝生の広場。
一時的に避難するには、うってつけの場所だった。

「初春！！春上さんをお願い！！」

「解りました！佐天さんは！？」

返事が無いまま、佐天の姿は消えていた。

とはいえ、佐天が何をしに行ったかなんて、初春は解っている。
なら、任された事は果たさなければならぬ。

突如、激しくなり始めた揺れ。

その中で、初春は守るように抱きしめ、地震が去るのを待つのだった。

「確かに、これじゃあ本当の地震と区別つかないわね……」

大地がめくれ、木が倒れ、遊具が歪む。

ボロボロになった、自然公園に降り立った、テレスティーナは、
1
人そう呟いた。

負傷者を運ぶための、ヘリが次々と飛び交う中、隊員の1人が近づいて来たのを見て、思考を切り替える。

「被害状況は？」

「負傷者64名。内、重傷者10名。今のところ、死亡者はありません」

ハキハキと必要な事項だけ答える対応から、彼らが、よく訓練された隊員である事が伺える。

「引き続き救助作業にあたれ」

テレスティーナも短く指示を出す。

「いいから君も、病院に！」

「いやー！！病院はいやー！！」

テレスティーナの耳に、そんな声が聞こえてきたのは、その頃だ。

「いや！本当に怪我なんて無いですから！！大丈夫ですって！！」

「そうは言ってもだね……」

「貴女……」

テレスティーナの視線の先。

そこには、随分と汚れた格好の少女の姿。

「えっ？ えーと……テレスティーナさんでしたっけ？」

向こうもこちらに気づいたらしい。

頷いてから、

「悪いけど、あの地震の後に、そんな格好してて、怪我は無いと言われてもね？」

念のため病院に行って貰える？」

そう促すと、心底嫌そうな顔をした後、溜め息を吐き、頷いた。

「佐天さん!!」

病院に御坂、白井の2人がやって来たのは、佐天の一応の検査が終わってからだった。

「大丈夫なの？」

「ええ。見ての通り……」

「誰も、佐天さんの心配はしていませんの。

初春と、春上さんは？」

「酷っ!! 最近、私の扱いどんどん酷くなってません!？」

自分の元気をアピールしようとしたら、白井から随分と冷たい突っ込みが入った。

まあ、でも、佐天を知るものからすれば、その程度の事で、佐天がどうこうなるとは思えないのだ。しょうがない事とも言える。

「初春も春上さんも無傷ですよ。ただ、春上さんが気を失っちゃったんで、別室に。初春もそっちに付き添ってます」

そこまで言い終えた時、佐天は2人の間に漂う、異様な空気に気づいた。

「どうかしました？」

その事を指摘されて、ビクリッと身体を震わせた後、白井が口を開いた。

「佐天さん！乱雑解放直前、春上さんの様子に、変わったところはありませんでした？」

「？」

質問の意味が解らないと、小首を傾げる佐天に、白井は尚も追及する。

「ですから、この間の花火大会の様な……」

白井の質問の意味に得心がいったのだろう。

佐天は小さく頷き質問を返した。

「それはつまり……春上さんを疑ってる。そう捉えていいんですよ

ね？」

射るような視線が白井を捉える。

発せられた言葉に込められた冷たい響きも手伝い、全身が泡立つのを感じた。

「そう……ですわ。私が調べたところ、春上さんは、小能力者ながら少し変わったテレパスですの。

もし、あの時と同じように不審な挙動が見られたとしたら……」

「春上さんが乱雑解放の犯人かもしれないと……」

勿論、白井とて友人を疑う事に後ろめたさが無いわけでは無い。けれど、風紀委員として、ここは引けない。

既に、乱雑解放による被害者は3桁を超えている。

そして、時間がたつにつれて、規模を拡大しているのだ。

たとえ友人と言えど、疑わしければ、調べない訳にはいかない。

それが、風紀委員としての白井のあり方だった。

「白井さんの言い分は解りました。

けど、私からお話する事はなにもありません」

「佐天さん？」

御坂と白井は、感情を込めないままに話す佐天に違和感を覚える。

その姿は、まるで……

2人を敵と見ているかの様な……

「今回の件。白井さんが、春上さんを疑ってる限り、私は協力しませんし、何も話しません」

「!?!? 佐天さん……貴女は……」

「白井さんが、どういう人か。どうして、そう動いているか。」

それは、理解しているつもりです。

だから、邪魔はしません。

だけど、協力もしません」

淡々と、本当に淡々と語る佐天は、2人が知る彼女とはまるで別人だった。

「佐天さん！貴女は、乱雑解放で、まだ犠牲者が出てもいいと……」

「構いません」

あっさりと言いきる。

「私は、私の友達を疑わないといけなくらいなら、それで構いません。」

それに……多分、犯人は春上さんじゃ無いですから」

「何を根拠に!!」

佐天の付け加えた言葉。そこに、白井が噛みつく。

だが、佐天は既に興味を失った様に、手を振る。

「言いましたよね？白井さんが、春上さんを疑ってる限り、協力はしないって」

「それは………」

ここに来て、ようやく白井は悟る。

自分が風紀委員として譲れない一線があるように、佐天にも、『春上の友人』として、譲れぬ一線があるのだと。

それでも、邪魔はしないというのが、白井も、また友人と見ている、佐天なりの譲歩なのだろう。

「解りましたわ。ですが、春上さんの件。報告は上げさせて貰いますの。」

これは、風紀委員として、私も譲れませんの」

「ご自由に。邪魔はしませんから」

感情を込めずに返事を返す佐天。

その対応に寂しい物を感じる。

いっそ、責め立ててくれれば、どんなに楽か。

そう思ってしまう白井だったが、結果として白井が報告することは無くなる。

「面白い話ね。確かに、テレパスが、乱雑解放の切っ掛けになる可能性はあるわ……」

3人のやり取りを影から聞いていた者がいたからである。

佐天さんとテレスさん？

突如表れた……

正確には、少し前からそこにいて、こちらを伺っていたのだが、テレスティーナの言葉に、白井は息を飲む。

疑っているながら、それを調べていながら……

それでも、違って欲しいと、白井は願っているのだ。

「ただし、それには少なくとも、大能力者（レベル4）以上の実力が必要だし、余程、希少な能力だと言わざる得ない。

小能力者（レベル2）に、その可能性は、ほとんど無いと思うけど……

念のためちゃんと検査した方がいいのかも知れないわね……お友達の名前は？」

「春上 衿衣さんですよ」

「黒子！！」

今まで事の成り行きを見守っていた、美琴であつたが、さすがに、この白井の行動は行き過ぎだと感じた。

美琴としても、白井と同様、春上の事は疑っている。

ただ、それは、おそらくは春上が、何らかの形で、乱雑解放ポルターガイストに巻き込まれているか、あるいは、無意識で引き起こしているか。

そういった形での疑い。

あらゆる可能性を捨てきれない、ある意味で生粋の風紀委員である白井と違い、美琴は春上が、自分の意思で乱雑解放を起こしていると

は、全く思っていないのだ。

勿論、そうである以上、美琴も春上が検査を受けるのは賛成だ。だが、何も今、佐天を刺激するような形で、それを切り出す事は無いと思うのだ。

白井に何かを言おうとした美琴を、テレスティーナが手で制する。

「潔白を証明する為だと思いなさい。大丈夫。うちには専門のスタッフが揃ってるから安心して……」

どうやら、白井が春上を疑っている事に、異議を唱えているのだと勘違いされたらしい。

だが、そんなテレスティーナの言葉に、美琴が反論できる筈もない。検査自体は、美琴も賛成なのだ。

「お断りします」

静かに。

それでも、しっかりと響く声で、佐天はテレスティーナの提案……事実上は命令か？それを断った。

「あのね？佐天さん……」

あからさまに、視線を鋭くした白井。

そして、溜め息を吐いたテレスティーナに気を使う形で、美琴が佐天の説得にかかる。

「勘違いしないで下さい。春上さんに、検査は受けて貰います。」

ただ、それが貴女の病院とじょうである必要は無いでしょ？
私が、いつもお世話になっている、お医者さんに見て貰います。
それでいいですね？」

相変わらず、感情を表さないまま、淡々と語る佐天の言葉に、まず
白井が頷く。

佐天がなにを思って、こんなことを、言い出したのかは解らないが、
白井としては、無理のある注文ではない。
強硬する必要が無いし、なにより、それをして、佐天との溝を深め
たくは無かった。

「私の病院は信用出来ない？」

困った様に、手を顎に当てるテレスティーナ。

「ええ。大事な友人を信頼している医者に見て貰いたいと思うのは、
人して当然だと思いますか？
それに、貴女の病院に、冥土返し（ヘブンキャンセラー）以上の医
者がいるとも思えないですし」

その佐天の言葉に、テレスティーナの顔が引き吊る。

成る程。学園都市で、その名前をだされて、勝てるなどと言う医者
は、余程の自意識過剰か、ただのバカである。

そうである以上、テレスティーナとしても、ここは退くしかない。

「解ったわ。ただし、検査結果の方はMARに上げて頂戴。

いくら、ほぼ可能性が無いと言っても、少しでも可能性がある以上、
MARとしては、放置出来る事態では無いわ。

……それに、優秀な風紀委員さんの意見だしね」

「っ！！」

テレスティーナの言葉に、白井の身体が小さく震えた。

確かに、それは白井の意見。白井の言葉。

その事が間違っているなんて思わない。

風紀委員として、正しい事をしている。

だが『友人を疑い、調べた』

風紀委員として仕方の無いことなのだ。

理解はしていても、それで割り切れる程、白井も大人では無いのだ。

「解りました。では、友人の具合も気になりますので、私たちはこれで……」

対して、佐天は相変わらず淡々と、本当に事務的に返事を返し、その場に背を向ける。

「ちょっと！佐天さん！！」

慌てて美琴が、その背を追う。

白井も続こうとして……足が止まってしまった。

「気にしてるの？友達を疑った事。けど、貴女の行動は、正しいわよ？」

少なくとも、風紀委員としてはね……」

「解っていますの。けれど……」

そう。だからといって、今の自分に『友人として』春上に合う資格

は、あるのだろうか？

走れば追いつける所にある佐天の背中。

だが、今の白井には、その距離があまりに遠かった。

「あの……佐天さん……」

春上の病室までの道すがら。

美琴は佐天に話しかけて……そうしてから、何を言えいいのか
解らなかった。

このままでもいい筈がない。

白井も佐天も、数少ない、美琴が美琴のままで接する事の出来る、
数少ない友人だ。

けれど、だからと言って、自分に何が出来る？

白井も佐天も、互いに『譲れないモノ』の為にぶつかっているのだ。
そして、2人ともが、それを、どれだけ大事にしているかを美琴は
知っているのだ。

小学生の頃から、風紀委員になり、固法に怒られ、始末書を量産し
ても、身体を張り、学園都市の平和を守り抜こうとし続けてきた
白井。

友達の為。

それだけの為に、魔術師や木山、果ては幻想猛獣とさえ戦った佐天。

そんな2人の想いを、一番近くで見てきた美琴であるからこそ、2
人を仲直りさせる事など不可能と思えてしまうのだ。

「大丈夫ですよ」

気づけば思考の海に沈んでしまっていた美琴を呼び戻したのは、佐天のそんな一言だった。

「正直、白井さんの行動には、頭にきてますけど……でも、理解も納得も出来てるんです。

だから、まあ、しょうがないかな？くらいには、思ってます」

そんな風に話す佐天は、美琴のよく知る、『いつも』の佐天だった。

「だったら!!」

「けど……だからかな？この件に関してはしょうがないんですよ。私も、白井さんも退けない。だから、この事件が解決するまでは、仲直りなんて出来ないんです」

「あ……」

佐天に言われて、ようやく美琴も気づく。

結局の所、佐天と白井の仲違いは、白井が春上の事を疑った。

そこに、端を発しているのである。

だったら、まずは、そこを解決してしまえばいい。

互いに、決して謝ったりはしないだろうが、同時に、お互いがお互いの考え方を理解しているのだ。

少なくとも、現状の様な状態は終わる筈である。

だが、問題もある。

『もし本当に春上が原因だったら？』

「まあ、その場合は仕方無いですよね」。

カエル先生と相談して、一時的に春上さんに、『外』に行って貰って、その間に、治療方法を見つけて貰うぐらいじゃないですか？」

「そっか……A I M拡散力場の暴走で、乱雑解放が起きてるなら……」

「周りに能力者が居なければ、何も起こしようが無いです」

でも……と、佐天は続ける。

「さっきも言いましたけど、あんまり、その心配はしてないんですよ。」

白井さんには、ああ言いましたけど、根拠なんて聞かれたら、『勘』としか言いようが無いんですけどね？」

さらりと言う佐天。

根拠も何もない。本人はそう言うが、美琴は、佐天がそう言うのであれば、そうなのだろうと美琴は感じる。

美琴や、学園都市が基準とする『科学』

それでは、証明出来ない何かで、佐天は春上を犯人では無いと感じている。

だからこそ、根拠を問われれば、勘としか言えないのだ。

「でもなんで、春上さんの検査M A Rに任せなかったの？」

佐天さんが、カエル先生を信用してるのは解るけど……」

それは、美琴の中で、ずっと引っ掛かっていた事だった。

春上が犯人ではない。

だとするならば、検査するのは、別にどこでも良い筈なのだ。

冥土返しの腕は、美琴も信用しているが、今回は別に命がかかって

いる訳ではない。

わざわざ、テレスティーナに不快な思いをさせてまで、彼を指名した理由が解らなかった。

「正直、私もそう思ったんですけどね……
でも、嫌いなんですよ。あの人」

「佐天さん？」

あからさまに、嫌悪感を顕にする佐天。
そんな、佐天の様子に、美琴は、ただ戸惑うのであった。

白井さんと春上さん

「なんで！春上さんが！！」

春上が眠る病室に、初春の声が響き渡った。

「あのね！初春さん！！」

慌てて美琴が諫めようとするも、それより先に、初春の怒りの矛先は、佐天に向かっていた。

「佐天さんも！佐天さんも、疑ってるんですか！？春上さんの事！！」

「なんで？」

「へ？」

佐天の間の抜けた返事に、食って掛かった初春は拍子抜けしてしまふ。

その隙を狙ったかの様に、説明を始めた。

「勘違いしないで欲しいんだけど、私も御坂さんも……ホントの所で言えば、多分、白井さんもね？」

春上さんを犯人だなんて思っていないよ。

まあ、白井さんは、根っからの風紀委員だから、それでも、調べない訳にはいかなかったんだろうけど……」

「じゃあ！なんで！？」

春上に、乱雑解放を起こす可能性がないか調べる。
誰よりも友人思いな初春だからこそ、それが許せないのだろう。

「いくら私たちが、『違う』って言った所で、疑う人はいるわよ。
残念だけど、白井さんが調べずにいられないくらいには、春上さん
は疑わしい要素を持ってるしね…」

「それは…そうですね…」

幾分落ち着いたのか……
風紀委員としての、思考をしてみれば、確かに春上には疑わしい要
素がある事に気づいた。
だからと言って、春上を調べる気になれないのは、初春の優しさで
あり、甘さなのだろう。

「初春さんの気持ちはわかるんだけどさ……
話がMARの所長さんに伝わってる以上、検査しないってのは、出
来ないと思う。
それに、検査して問題無ければ、逆に、春上さんが乱雑解放とは無
関係だって証明する事にもなるわけだし……」

こちらを気づかう様な、美琴の話し方に、初春は思わず溜め息を吐
いた。

『なにをしてるんですか！私は！！』

冷静になって考えれば、佐天や美琴が喜び勇んで、春上に検査など
させる訳が無い。
その点に関しては、白井だって同じ気持ちの筈なのだ。

なにより、美琴が言ったような考え方は、本来、風紀委員である自分こそが、真っ先にしなければならぬ筈なのに。

「すみません。少し頭に血が上っちゃってたみたいです」

溜め息ついでに、数回の深呼吸で自分を落ち着かせ、初春は、佐天と美琴に頭を下げる。

「いいよ。別に。気にして無いから」

手を振り、そんな風に言ってくれる2人に、八つ当たりに近い感情をぶつけてしまった自分を初春は恥じた。

「それで、春上さんの検査はいつ？」

「あんまり長引かせて、変な疑いをかけられても嫌だからね。

カエル先生には、さっき連絡つけといたから、春上さんが気がつき次第かな？」

感じてしまう申し訳なさを、取り敢えず棚上げにして、今ある問題に向き直ると、佐天が既に対策済みであった。

成績は決して良い方では無い友人は、しかし、こう言うときの頭の回転は早いのだ。

「それじゃあ、春上さんが起きたら……」

「う……ううん……ここは……？」

タクシーを呼んでくと、続けようとした言葉は、目を覚ました春上の言葉で阻まれる。

「おはようございます。春上さん！」

「え？ 初春さん？……おはようなの……？」

訳が解らず、取り敢えず挨拶を返す友人の様子に初春の胸が痛む。今から、この友人に事の次第を説明しなければならない。

それは、酷く辛いことで……けれど、だから自分がしたかった。

春上の一番の友達は自分でありたかったから。

なるべく簡潔に。春上が傷つかないようにと考えながら話した初春だったが、それでも、その内容は、春上に衝撃を与えた様だった。

しばらく頭を下げ、何かを考えていた春上だったが、やがて、顔を上げた

「解ったの。皆に迷惑はかけられないし、検査を受けに行くの！」

力強い言葉とは裏腹に、その表情には、諦めの感情が浮かんでいたが。

初春の言葉。説明には、勿論、春上も驚いた。

全く身に覚えが無い事件の犯人として自分が疑われているのだ。ショックを受けない筈がない。

けれど、春上にとっては、それは、さほど大した問題では無かった。初春がなるべく解りやすく説明してくれたお陰で、妙に納得できたというのもある。

春上にとっての問題は……辛いことは、それによって、皆に迷惑をかけてしまったこと。

今もこうして、心配そうに自分を見つめる6つの瞳に、春上は消え去りたい気持ちを抱いた。
だが……

「春上さん？怒りますよ？」

「え？」

ニツコリと笑って……

それでも、本当に怒っていると解る初春が、その気持ちを否定する。

「確かに、検査は受けて貰わないといけません。
それは、申し訳ないですけど、疑われている以上、そうじゃない事を証明しないといけないですから……」

春上が頷いたのを見て、だけど！と初春は続ける。

「私達に迷惑をかけるとかは、気にしないでいいんです！
と言うかですね！迷惑かけても、いいんです！！
私達は、それを迷惑なんて思わないですから！！」

「なん……で？」

初春の思いがけない言葉に、声が震えていた。
初春はゆっくりと春上を抱きしめ、微笑む。

「だって。友だちじゃないですか」

限界だった。

ソレは、春上がずっと欲しかった言葉で。

無くしてから、ずっと手に入らなかったもの。

気づけば、春上の瞳からは熱いものが溢れ、脣からは嗚咽が漏れていた。

「簡潔に言ってしまうとね……彼女に乱雑解放は、起こせないね」

様々な検査結果が記されたカルテに目を通しながら、カエル顔の医者^者は、ハッキリと断言した。

瞬間、検査結果を今か今かと待っていた3人に安堵の息が漏れた。信じてはいても、違うとは思っていても、その言葉を聞くまでは、どうしても安心できなかったのだ。

「えっと……それじゃあ『特定の条件下においては、レベル以上の能力を発揮する』って言うのは？」

安心したからか、美琴がずっと気になっていた事を尋ねた。

書庫^{バンク}に、そんな項目が無ければ、白井だって、春上を疑う様な真似をしなくて済んだのだ。

「特定の脳波が相手の時だけ……要するに、相性のいい相手だと、距離や障害物に関係無く、会話出来るってことみたいだね？」

けれど、それぐらいじゃあ、A I M拡散力場を暴走させる切っ掛けにはならないよ……」

「よかった〜……」

初春が脱力するように眩き、佐天と美琴は目を合わせて微笑んだ。

「そうとも言えないんですの……」

これで、乱雑解放事件の原因調査は、また、振り出しに戻ってしまったのですから」

「白井さん!!」

いつの間に現れたのか、3人の背後に立っていた白井の言葉。

初春は、そんな白井を、思わず睨んでしまう。

白井の言葉が正しいのは解る。

解るが、友人の無罪が証明されたのだ。

今この瞬間くらいは、その事を喜んで欲しかった。

「はあ〜……白井さんって、本当に素直じゃないですね〜……」

だが、そんな白井を、佐天は怒るでも無く、心底呆れた様子で見つめていた。

「え〜と……こう言うのなんて言うんですたっけ？」

つん……ツン……つんだら？」

「ツンデレじゃない？」

「誰がですの!!」

言葉に悩む佐天に、美琴がフォローを入れたところで、白井の突っ込みが入った。若干、顔が赤くなっている。

「だって、そうじゃないですか？

わざわざ、あっちの病院から、ずーっと、後をついてきて、ここに
着いてからは、そわそわ、そわそわ、この部屋の様子窺って、さっ
き、春上さんが原因じゃないって解った時は、ガッツポーズまでし
てたのに……」

「え？」

信じられないと、初春が白井の様子を窺えば、羞恥で真っ赤に染ま
った顔色が、佐天の言葉が真実だと証明していた。

「な！な！なんで、そこまで知ってますの！！」

「武術家舐めちゃダメですよ？」

「いや！その理屈はおかしい！！」

楽しそうに笑う佐天に、美琴は、どこか疲れた様子で突っ込みをい
れる。

100歩譲って、気配だか何かで、『ついてきた』と『様子を窺っ
てた』くらいは、良しにするにしても、『ガッツポーズ』が解るの
はおかしい。

明らかに、透視の粋である。

「それじゃあ……白井さんも……」

驚いた様子の初春がそう呟くと、白井は気まずそうに視線をそらし、
咳払いをひとつ。

「私だって、春上さんの事を友人だと思ってますのよ？
それでも、疑わずにはいられなかったんですの……」

「白井さん……」

寂しげに呟く白井に、初春の声が重なる。

その実、今回の件で一番苦しんだのは、あるいは白井なのかも知れない。

風紀委員として、真面目で優秀であったが故に、春上を疑わずには
いられず、調べる事になったのだから。

一歩間違えれば、自分の相棒と友人を同時に失うリスクを背負って。

佐天は、それが解っていたからこそ憤りを感じ、『協力はしない』
というスタンスこそとったものの、敵対はしなかったのだ。

「ところで、今から彼女にも報告に行くのだけど……君たちはどう
するかね？」

場に、しみりとした空気が漂い始めたのを感じとったのか、カエ
ル顔の医者がそう切り出す。

勿論、佐天達に、行かないなんて選択肢は無いのだった。

「あ……皆……白井さんも……」

春上は入院病室の一室のベットの上で横になっていた。

乱雑解放の原因で無いことは確定したのだが、それでは、度々、気
を失っている原因が解らない。

それを気にした、カエル顔の医者が、検査入院を薦めた為だ。

「あの……春上さん……」

白井が口を開き……言い淀む。

なにを言えば良いのかが、解らないのだ。

謝る？だが、友人を疑った自分に、その資格があるのか？

そんな想いが、白井を金縛りにあわせていた。

「白井さん……ありがとなの……」

「え？」

だが、春上はニツコリと笑い、白井に頭を下げた。

「私が原因かも知れないって、調べてくれて。

もし、私が地震の原因だったら……知らないままで、知らない皆に迷惑かけてたの。

だから、調べてくれてありがとうなの」

「あ………」

春上が、白井に礼を言う必要など、本来は無い。

結果的に、春上は無関係だったのだから。

むしろ、勝手に疑い、調べた白井に対して、怒っても良いくらいなのだ。

だが、春上はそれをしない。

初春や佐天が、そうであるように。

春上も白井と友人でありたかった。

だから、春上は白井を責めない。

白井の性格を考えれば……理解すれば、それは、仕方の無いことであり……

同時に、自分の事を心配すればこそだと解る。

そして、白井の事を友人だと思うなら……

それを、『迷惑』など決して思わないのだから。

「ありがとう……ごめんなさい……」

そうして……白井の口から随分とらしくない台詞が漏れた。

そして、彼女は思わずにはいられない。

自分の友人達は、どうしてこうも、甘く優しい人達ばかりなのだろうと……

佐天さんをお願い

「皆にいつておかないと……」

静まり帰った病室の中で、春上はそう言いかけ、その言葉を否定するように小さく首を振った。

「ううん。聞いて欲しいことがあるの。」

私、もっと、ちゃんと皆の友達になりたいから……」

真剣な眼差しで語る春上。

少し戸惑ったものの、全員が頷いたのを見て、覚悟を決めた。

嫌われるかも知れない。

そうでなくても、前の学校の時の様に軽蔑の目で見られるかもしれない。

目の前にいる友人達は、そんなことはしない。

そう解っていても感じてしまう恐怖は、彼女が積み重ねてきた時間の中で染み着いてしまった習慣のようなものだった。

それでも……と、勇気を振り絞る。

胸元に下がるロケットを握り締めながら、その言葉を口にした。

「私ね？置き去り（チャイルドエラー）だったの」

瞬間。その場に居た全員が息を飲んだ。

置き去り（チャイルドエラー）

その特性上、子どもの存在無くしては、成り立たない学園都市。
それ故に、より多くの子どもを集める為、学園都市は数々の特典を
用意した。

学費、寮費無料。

能力開発協力に対する謝礼金。

完全保育制度。

それは育児と仕事の両立に悩む親には、救いの手に見えただろう。
だが、そこに大きな落とし穴があった。

『完全保育』とは24時間、いつでも、どれだけでも子どもを預か
るものだ。

多忙であったり、貧しい親にすれば、これほど助かるものはない。
しかも、子どもの進学先を学園都市と契約すれば、無料で利用できる
たのだから。

また、学園都市の保育施設のレベルの高さも、人気に拍車をかけた。
全国から優秀な保育士を集め、最先端の教育プログラムによって育
てられる子ども達は、能力の有無に関わらず、全員、優秀……ある
いは、天才と呼ばれる様に育ったのである。

そう……だからこそである。

優秀な教育を受けられ、確実に育てて貰える。

なら、自分が育てるより幸せになれるのではないか？
そう考える者達がいたのだろう。

学園都市が完全保育制度を始めてから数年……

学園都市に『捨てられる子』が増え始める。

いや正確に言うならば……

彼らは『捨てられて』は居ない。

学園都市に入るには、厳正な審査がある。

その為、子どもを『捨てる』のは難しいのだ。

だから、『預けた』ままにする。

子どもを預けたまま、行方不明になる者。

または、あくまで『預けた』だけだと言い張る者。

形はどうであれ、学園都市の保育施設に預けられ、親が迎えに来る兆候が全く見られない子ども達。

『置き去り（チャイルドエラー）』は、こうして生まれたのである。

「……………」

重い沈黙が病室に訪れていた。

初春や美琴が何度か何かを口にしようとして、何も言えずに口を閉ざしていた。

置き去り……そう呼ばれる子達がいる事は知っていた。

美琴達もボランティアで、その子達の為の施設を手伝った事もあるけれど、置き去りの子が身近な友人だった事は無く……

だから、どう返事をすれば春上を傷つけないのかが解らなかったのだ。

「えーと……じゃあ！私は、武術家やってます！！」

「え？」

沈黙を破ったのは、そんな明るい声。

自然と集まる視線を気にせず、佐天は続けた。

「まだ言っていない事を言うんだよね？」

だから、私は武術家やってます！！

はい！御坂さん！！」

「え？え？私？え〜と……『学園都市第3位』の超能力者やってます」

急に話を振られた美琴が、戸惑いながらも答えると、佐天の意に気づいた白井が続ける。

「そして私は、そのお姉様の相棒。露払いをしていますの」

「自称ですけどね？」

「初春！！」

勿論、それに気づかない初春ではない。

佐天との付き合いは、この中で一番長いのだ。

白井に茶々をいれてから、その流れに乗る。

「私は……そうですね。たま〜に……本当に極稀にですよ？ハッカーの真似事をしている時があります」

初春が、そんな物騒な事をのんびりと言い終えると、目を丸くした春上の前に、ユックリと佐天が歩み寄っていた。

「さて……春上さん？春上さんが知らなかった皆の一面を話したんだけどさ……」

春上さんの中で私達の評価は変わった？」

「え？」

キョトンとした春上の身体に佐天の手が伸びる。

「なんにも変わらないよね？ 私達も一緒だよ。」

今までの春上さんの人生に何があったのだとしても、私達の知ってる春上さんが変わる訳じゃない。友達なのも変わらない。

だからね？ 春上さん？」

ユツクリと伸ばされた手は背中へと回され、春上を優しく抱き締める。

「そんなに怖がらなくていいんだよ？ 皆一緒にいるんだから」

「あ……」

佐天に抱き締められて、初めて春上は自分の身体が震えていたことに気がついた。

怖かった。怖かったのだ。

たとえ覚悟していても、この暖かい友人達を失い、再びひとりぼっちに戻る事が。

「私……皆と一緒にいて……友達でいていいの？」

「当たり前です！！」

佐天の胸の中。

震える春上の声に、力強く初春は返す。

「それに今更、友達辞めるって言われても困ります。私達は春上さんの事、大好きなんですから！！」

「うん！うん！！」

佐天の胸の中で春上は何度も頷く。

春上が、ずっと望みながら手に入らなかったもの……

それが、今、ここにはあった。

「ふむ……昔の友人の声……それが聞こえると意識が朦朧として気を失う……」

話が一段落した所で、カエル顔の医者による、春上の問診が行われた。

本来はこの部屋に来てスグに行く予定だったのだが、空気を読んで待っていたのだ。

「友達って探してるっていう？」

「うん……」

頷いた春上は、胸元にぶら下がっていたロケットを取り出すと、中を開いて見せた。

そこには、前髪をカチューシャで上げた、1人の少女の写真。

「枝先絆理ちゃんって言うの。」

絆理ちゃんと私は同じ置き去りの施設にいたの。

私、人見知りで友達も出来なくて……でも、絆理ちゃんだけは仲良くなれたの。

いつも、テレパシーでお話してくれてたの。

けど……別の施設に移されてそれっきり……」

懐かしみ、そして、寂しそうに写真を見つめながら、春上の独白は

続く。

「なのに、この頃また聞こえるの。絆理ちゃんの声が。

『助けて』って。

『とっても苦しい』って。

でも……どこにいるのか、どうしてそんなに苦しいのか……解らないの。

助けてあげたいのに……私……なにも……」

春上の声が震え、その瞳から涙が零れそうになった時……

その頭がポンつと軽く叩かれた。

「春上さん？春上さんが、その娘を本当に助けたいなら、春上さんが今する事は泣く事じゃないですよ？」

「え？」

見上げれば、そこには暖かな笑みを浮かべた、4人の友人の姿。

「私の知り合い曰くなんだけど……『足りない物は他所から持ってくればいい』らしいよ？」

「上手い事言うわね？その人」

「そして、こういう偶然か、春上さんの前には『学園都市』最高の風紀委員コンビいますのよ？」

「ついでに、学園都市第3位の超能力者と、学園都市最高の問題児もいますしー！」

「初春！ひどい！！」

「あ……」

そうだった……とようやく気づく。

悲しいけれど……

情けないけれど……

今の自分では、彼女を助ける事も、探し出すことも出来ない。ただ、今の自分には、こんなにも頼れる友人達がいるのだ。

「お願い……絆理ちゃんを助けてあげて！！」

春上がそう口にした瞬間……4人全員が大きく頷いた。

「とりあえずは、春上さんがいた施設から出た後の、枝先さんの足取りですわね。初春？」

「ええ！帰りに支部に寄って調べてみます」

病院からの帰り道。初春と白井は既に、お仕事モードだ。

「春上さんがテレパシーを受けていた時期を考えれば、乱雑解放事件に枝先さんが関わってる可能性もありますの。おそらく、書庫^{バンク}へのアクセス許可も下りますわ」

「春上さんの友達を疑ってるみたいで心苦しいですけど……しょうがないですね。」

春上さんの話を信じるなら、枝先さんは助けを求めている筈ですし……」

その後方。

やる気全開の風紀委員組の後を追う2人は苦笑を浮かべるしか無い。戦闘面ならともかく、捜査や探索なら、前に行く2人の方が上なのだ。

「2人とも張り切ってるわね」

「手伝って上げたいですけど、捜査関係に手を出すと、固法先輩に怒られますしね」

「あはははは……」

佐天が苦笑混じりに呟き、美琴が乾いた笑いを返した。

実は……と言うか、想像の通りだと思うが、この2人、風紀委員第177支部で固法に怒られてる回数は、白井に続いて2位、3位と常連である。

その主な理由は、風紀委員の仕事を勝手に手伝う事。もっとも、年中人手不足な風紀委員としては、実力が確かな2人が手伝ってくれるのは、かなり助かっているため、固法としてもあまり強く言えて居ないのだが。

「まあ……正攻法は、あの2人に任せるとして……私は私で調べてみます。

少し気になる事もありますし……」

「また、固法先輩に怒られるわよ？」

背を向け、その場を離れようとした佐天を呼び止めた美琴に、けれど佐天は悪戯な笑みを浮かべるだけだ。

「あれ？じゃあ、御坂さんは大人しくしてるんですか？」

「まさか！！そんな訳無いじゃない」

当然と言い切った御坂に、2人して笑い合い、今度こそ別れる。

そう。この2人が……いや、白井や初春も含めた4人だ。

彼女達が大人しくしているはずが無いのだ。

この道の先には、彼女達の大事な友人の幸せがまっているのだから。

佐天さんと再び木山先生

コツコツコツコツ……

深夜の薄暗い病院。

病室の明かりも消え、静まり返った、どこか不気味な廊下に、ただ足音だけが響く。

コツコツコツコツ……

不意に足音が止まり、その主だった男は、その先の曲がり角に視線を向ける。

「ふう……やはり来たんだね？」

小声の呟きは、静まり返った廊下では思いの外響いたらしい。角から姿を表した人物は、

「ってことは、私の用件も解ってますよね？」

その小声に返事をしたのだった。

「コーヒーでいいかね？」

「ええ………」

深夜の訪問者と廊下での会話を続ける訳にもいかず、彼……カエル顔の医者は、訪問者の少女……佐天を自分の休憩室へと招き入れた。

自分で淹れたコーヒの苦さに顔をしかめながら、素早く考えを纏める。

が、考えた結論は『考えるだけ無駄』という、なんともバカらしい答えだった。

ここで沈黙したところで、そう遠くない未来、彼女達は答えにたどり着くだろう。

ならば、友人の弟子たる彼女に敵対する事にメリットは無い。

「ひとつ聞いてもいいかね？」

「どうぞ」

湯気を上げるティーカップをテーブルに置き、問いかけると、佐天は視線を上げ簡潔に返事を返す。

「どうして私が、彼女の行方を知っていると解ったんだね？」

こう見えて、必要に迫られて磨いたお陰で演技には自信があったんだがね？」

それは素直な疑問だった。

患者を不安にさせない為、医師には相応の演技力が求められる。

数十年医者が続けてきた、彼は呼吸をするように、それをする事が出来る。

だからこそ、そういう予感こそあれ、あっさりと見破った佐天に疑問を持たずにはいられなかった。

「ああ……実際、完璧な演技だったと思いますよ？多分、途中から見たら私も解らなかったと思います」

「ふむ……だとすると演技以外の所に問題があったのかね？」

頷いたカエル顔の医者を見ながら、コーヒーに口をつけ、僅かに唇を湿らせ佐天は続ける。

「そうですね。春上さんがあの娘の写真を出した瞬間。

あの時、先生、一瞬息を飲んだんですよ。

だから、多分、知ってるんだろうなって……

まあ、半分、カマカケだったんで、とぼけられたら手も足も出なかったんですけどね？」

「なるほど……私は見事に乗せられた訳だね？」

やれやれと溜め息を吐く、カエル顔の医者に、佐天は『助かりました』と笑ってみせる。

ともあれ、半ば嵌められた形になった彼も悪い気はしていない。

事情があるとはいえ、友人を心配する少女達に、その行方を知りながら黙っているのは、彼の良心を痛めていたのだから。

「それで、枝先さんは、今何処に？」

核心をつく佐天の質問。

それにカエル顔の医者は『そうだね……』と返しながら、腕の時計に目を落とした。

彼が、佐天をこの部屋に呼んだのは、話をする為だけでは無い。ちよつとした時間稼ぎも兼ねていたのだ。

いかに、現在の彼女達の主治医が自分になっていて、責任の全てを自分が預かっている状況にあるとは言え、その話をするのなら、『彼女』抜きには進められないと考えたからだった。

沈黙してしまったカエル顔の医者に、佐天が疑問を感じ始めた頃、部屋の扉がノックされた。

「ようやく帰ってきたようだね。どうぞ……」

小さく嘆息をして、カエル顔の医者は、扉の向こう側の誰かを促す。ゆっくりと扉が開き、『誰か』の姿が明らかになった瞬間、佐天は息を飲んだ。

そこに居たのは……

「おや……君は……」

「木山春生……」

佐天も知っている人物だったからだ。

「おや？ 知り合いかね？ なら話は早いね……木山君。彼女は……」

カエル顔の医者の説明を待たずして、木山は頷く。

ここまでの流れ……

少なくとも、枝先の友人（春上）が入院している所までは、木山もカエル顔の医者から聞いて知っているのだ。

もつとも、春上と佐天が友人などと言うことは、木山は知るよしも無かったのだが、それも……

「まったく……友人同士と言うのは、行動まで似るらしいね。『類は友を呼ぶ』と言ったか……」

そういう相手がいる事は、少し羨ましくもあるよ……
君も入ってきたまえ……」

「御坂さん!!?」

木山の声に呼ばれて現れたのは、私服姿で何故かゲコタのお面を頭に着けた、美琴の姿。

「ちょっと! 私を佐天さんと同類（非常識）にしないで!!」

「どういう意味ですか!!」

いや。一般人から見れば、超能力者（レベル5）も立派に非常識なのだが……美琴の中の譲れない一線があるらしい。

「そうは言うが……友人の為に無理をして、病院に忍び込む辺り、良く似てると思うよ。」

さて……君もここに居るということは、用件は彼女と一緒にいいのかね?」

いつかと同じように、どこか億劫気に問う木山に、佐天は頷く。

「貴女が出てきた事で、聞きたい事は増えたけど……一番大事な事は、御坂さんと一緒だと思う。」

正直、それ以外の事は、私には、わかりかしどうでもいいことだしね……」

「そうか。それなら……ついて来るといい」

目配せでカエル顔の医者に了解をとり、木山が席を立つ。

カエル顔の医者が、それに続き、佐天、美琴もついていく。
美琴としては、佐天と同類扱いされた事に、もう少し反論したいところだったのだが、さすがに目的を優先させたらしい。

木山に連れてこられたのは、病院内の薄暗い実験棟。
ガラスで区切られた施設内。

見下ろす形で作られたその場所で、ガラスの向こう側には、いくつものカプセルの様な物が並んでいた。
そして……その中には……

「居た!!」

「え!!!??」

カプセルの中には何人もの、少年少女の姿。

その中に、春上の見せてくれた少女……枝先絆理の姿がある事を佐天の瞳は捉えていた。

随分と距離があるため、美琴には、そこに眠る人達の姿の判別までは出来なかったが。

「よく解るな……その通り、君たちが探している『枝先絆理』も、あの中にいるよ……」

「なんで……こんな……まさか! アンタが!!」

木山の証言で、美琴にも、あの中に探し人が居ること伝わる。
だが、同時に疑問も起きる。

どう見ても、普通では無いこの状況。

そして、同時に頭を過る、春上に聞いた『助けて』という、枝先か

らのテレパシー。

だからこそ、美琴はこの状況を、そういう風に捉えた。だが、木山にとって、それは最大級の侮辱であった。

「ふざけるな！！どうして私が彼女達を、あんな目に遭わせなければならぬ！！！」

火を吹きそうな程な勢いの叫び声。

そのあまりの迫力に、美琴の身体は震えた。

おそらくは、現在は能力を失っている木山。

その力の差は明らかであるのに、確かにその瞬間、美琴は木山に恐怖していた。

「落ち着きなさい。こっちは、そっちの事情なんか知らないんだから、そういう解釈だって出来るわよ。

ましてや貴女は『幻想御手』なんて物をばらまいた犯罪者なんだから」

「……そうだったな。すまない……」

「いや。こっちこそ、早とちりして……」

怒りに震えていた木山を佐天が諫め、美琴も頭を下げた。

事情は未だ解らないが、それが、木山にとって耐え難い事であることは、明らかだったのだから。

「彼女達があんなってるのは、木山君のせいではないんだだよ。むしろ、木山君は彼女達を助けようとしている。やり方に問題があったりはしたがね？」

場が落ち着いたのを見計らって、それまで傍観に徹していたカエル顔の医者が口を開き説明を始めた。

「あ……それじゃあ、もしかして……」

「君たちが解決した『幻想御手事件』も、その一環だったんだね」

美琴が気づいた『幻想御手事件』の真実。

それを、カエル顔の医者は頷き肯定した。

「成る程……って事は、あの娘達が、あの時、貴女が言ってた『学園都市の全てを敵にまわしても取り戻したいモノ』って訳か……」

「……………」

佐天の質問を木山は無言で肯定する。

皮肉な話だと思う。

あの日、自分の目的を邪魔した相手が、今度はソレを助けに、ここに現れたのだから。

「彼女達は『置き去り』と言う立場を利用されてね。

木原幻生と言う科学者の実験動物にされたのさ……
モルモット

私も……知らなかったとは言え、その一端を担っていた。

結果……彼女達は、その日から眠り続けている」

カプセルの中で眠り続ける彼女達。

それを見つめる木山の瞳は悲しげで、痛々しかった。

木山と彼女達の間になにがあったのか。

佐天や美琴には知る術は無いが、それでも、木山が彼女達の事を思い、その為に行動している。

その言葉に嘘は無いのだと感じ取れた。

「彼女達に行われたのは『能力体結晶の投与実験』

詳しい説明は省かせて貰うけど、暴走能力の、その果てにこそ、レベル6への鍵がある。

そういった、狂気の考え方の産物だよ」

「そんな……レベル6なんて、足掛かりも無いモノの為に、この子達は……」

「なるほどね……そんなイカれた実験、普通の人になれば表沙汰になって問題になる。

身寄りも無く、誰も訴える人もいない『置き去り』の子達は、そいつらにとって、格好の実験材料だった訳だ……」

木山の後を継ぐ形で説明をしたカエル顔の言葉に息を飲む美琴。だが、佐天は冷静に受け止め納得をするだけ。その様子が、美琴には理解出来なかった。

「なんでそんなに冷静なの!! こんな……こんな事が……」

信じがたい事態に声さえ震える美琴。

けれど、どこまでも佐天は冷静だった。

「こう言っちゃうとアレなんですけど……

身寄りの無い子だと『よくある話』ですよ?」

「そんな……そんなの……」

信じたくないと首を振る美琴に、佐天は寂しそうに笑うだけだ。

「解らなくて良いと思いますよ？」

多分、御坂さんが普通で、私がおかしいんです。
それに……少なくとも、この子達は助けられる。でしょ？」

話を逸らす形で佐天は木山に問う。

解ってはいても、学園都市において、自分の異常性を認識させられるのは慣れないものなのだ。

相手が美琴の様に親しい相手なら尚の事だ。

「ああ……この設備を使わせて貰ったお陰で、この子達を起こすメドはついた。だが……」

「別の問題が発生したんだね……」

一度は明るくなった、美琴の表情が再度曇る。

希望の光が見えたと思えば遠ざかる。そんな気分だった。
そして……それは、木山が何度と通ってきた道でもある。

「問題って……」

「覚醒が近づくと、AIM拡散力場が異常値を示した」

告げる木山の表情は淡々としていて……故にこそ、最初の激情を
する美琴には、それが酷く弱々しく見えた。

「それって、能力者が無意識に放ってる奴だっけ？それが異常値
って事は……」

「能力の暴走が起きてるって事だね」

佐天がうろ覚えの授業内容を引っ張りだすと、カエル顔の医者が、

それを補足してくれた。

「そして、RSPK症候群の同時多発を起こした……」

「なんで……」

固まってしまう美琴。

RSPK症候群の同時多発。

それはつまり、乱雑解放をこの子達が起こしている事を意味する。

「皮肉な話……木原幻生とか言うマッドサイエンティストの実験は中途半端に成功してたって事でしょね。私達にしてみれば、最も厄介な形で……」

「ああ……彼女達に投与された能力体結晶は、彼女達を眠りながらにして、暴走能力者に変えてしまった」

佐天の予想に木山が答える。

そこから導き出される答え……それは。

「じゃあ……この子達が起きようとする……」

否定して欲しい。

ほぼ間違いないと解っているながら、美琴はそう願ってしまう。もし、自分の予想通りだとすれば、それはあんまりに……

「ああ……乱雑解放が起こる……」

けれど、現実はいつも残酷で救いが無い。

「そんな！なにか方法は無いの！？」

「暴走を静めるワクチンソフトを開発している」

それでもと、すがりつく様な美琴の問いに、木山からようやく希望の持てる答えが出た。

その言葉に、一瞬明るくなった美琴の表情。

けれど、それは続く言葉にすぐに曇らされた。

「能力体結晶の根幹を成しているのは、『ファーストサンプル』と呼ばれる初期の人体実験の被験者から生成された成分だ。ワクチンソフトを開発するには、どうしてもそのデータが必要なんだ」

「もしかして、さっきの研究所にいたのは……」

美琴の頭を過るのは、この病院に来る前に木山と出会った場所。

考えてみれば、美琴があそこを訪れたのも、乱雑解放の可能性を示した論文を書いた、研究者の関連施設だったからだ。

そして、その研究者の名前は木原幻生……

知らぬ間に美琴は、最短距離での事件解決に向かっていたのである。

「そのデータを探していた。何も残されてはいなかったがね……」

悔しげに唇を噛む木山。

だが、諦めきれぬ筈など無い。

その程度で諦めきれぬ思いなら、最初から、ここまでたどり着けてなどいないのだ。

子ども達を起こす。

木山の想いは。願いは。

ある意味において、木原幻生をも凌ぐ、狂気と言えるほどのモノなのだから。

それを言葉にしようとして……

だが、それは、佐天の言葉で遮られる。

「ひとつ聞きたいんだけどさ。」

それは、データだけでいいの？ 現物じゃなくて」

「ああ……データだけあれば、ワクチンソフトは作れる。」

と言うよりは、現物があっても、その成分解析から始めなければならぬから、データの方が助かるかもしれない」

質問の意図が解らなくても、素直に答えてしまう辺りは、身体に染み着いてしまった研究者としてのあり方か。

佐天は短く頷くと再び口を開いた。

「じゃあ、もうひとつ質問。そのデータは、間違いなく、学園都市内に残されてる？」

「それも間違いはない。あのデータは能力体結晶の研究に必要不可欠な物だ。」

あれだけの物が廃棄される筈が無い」

木山の答えに再度頷き、今度は何やら考えるようにしてうつ向き、ブツブツと呟いている。

佐天の質問の意図の見えない木山は、戸惑うばかりだ。だが、そんな時間は長くは続かなかった。

「OK！なら、そのデータ。私たちが見つけてきてあげる！！」

突然、顔を上げた佐天が、そんな事を言い出したからである。

「な……なにを……」

「そうだよ！佐天さん！！同じ場所で研究してた、木山にも見つけれないのに！！」

「重要なデータだ。一学生に見つけられる様な場所には無いと思うよ」

突拍子も無い佐天の意見に、木山は戸惑い、美琴とカエル顔の医者是不可能だと告げる。
だが、佐天は不敵に笑い、こう返す。

「御坂さん？幻想御手事件の時、私たちがどうやって、この人の場所に辿り着いたか覚えてませんか？」

「どうやって……あ！！」

少し考えてから、木山を犯人と断定した原因を思いだし、美琴は苦笑いを浮かべる。

「なるほど。確かにデータだけで良いなら、なんとかなるかも……」

「でしょ？第一、早くデータ見つけないと、この人、乱雑解放起こるの承知の上で、あの子達、起こすとか言いかねないですし」

「確かに……」

先程までとは違い、学生らしい和やかな雰囲気で、そんなやり取り

を始める二人。

「一体なにを言ってるんだ。君たちは……」

痺れを切らした木山の、問いかけに、佐天は変わらず不敵に笑い、人差し指を立てた。

「一週間。その間に必ず、そのデータを手にいれてきてあげる。だから、その間は大人しく待ってなさい」

「な………」

そう言い残し、部屋を後にする佐天と美琴。

随分と自信あり気な様子だったが、元研究者の木山が探し回って見つからない物を、ひとりが超能力者とはいえ、一学生に過ぎない彼女達に見つけられるとは思えない。

だが……

友人を救うために、幻想猛獣すら倒してしまった彼女なら……
そんな期待をしてしまう自分に、木山は思わず苦笑してしまった。

深夜。

そう呼ばれる時間帯になっても、この部屋の明かりが消える事は無かった。

友人の願いを叶えるため、PCの前に座り、行方不明とされている少女を探し続けていたのだ。

「やっと見つけた！表向きには行方不明にしておいて、実際には、

地下施設ですか……酷い目にあって無いと良いんですけど。
それで……その後は……で……あれ？ここって？」

相方の居ない部屋に、独り言が響く。

と、不意に携帯電話の着信音が響いた。

「ひゃあ！こんな時間にいったい誰から……って、佐天さん？」

「もしもし？佐天さん！枝先さんの行方なんですけど……え？はい！……そうなんですか……はい……はい……それは……出来ますけど……はあ……でもですね？……解りました……やってみます……」

電話を切った彼女は、思わず大きく溜め息を吐く。

なぜだろう？自分は正しいことをしている筈なのに、最近、違法行為に手をつける回数が増えている気がする。

元々、その手のスキルは高い方ではあったが……

やはり、彼女の知り合いの人に、そっち方面のスキルを色々と吹き込まれたからだろうか？

いやいや。それはちゃんと、風紀委員関係のセキュリティUPに反映されているから問題無い筈である。

ともあれ、これが、友人の願いに繋がっているのであれば、今回は悩むまい。

反省だとか、そういった物は後ですればいいのだ。

そう心に決め、彼女は再びPCの前に立つ。

今ここに、後の世でイーグルと呼ばれる伝説のハッカーが産声をあげたのだが、それを知るものは、まだ誰も居ないのであった。

佐天さんと法律

佐天と美琴が、木山と再会した日から3日が過ぎようとしていた。その間は、乱雑解放も起きず、他に大きな事件も無い、比較的平和な日々が続いていた。

強いて言うなれば、また勝手に事件を調べていた事がバレた佐天と美琴が、固法と白井から、小一時間に及ぶ、有難いお説教を頂いた事と、初春が毎日、眠そうにやって来る事くらいだろうか？

心配した固法が、何故そんなに眠そうなのか問いかけたところ、

「凄く難しいネットゲームにハマってしまっ……」

との事。

それを聞いた固法が、半ば呆れ気味に注意していたのだが、今日にも『ラスボス』が倒せ、『欲しいアイテム』が手に入り、『明日には大丈夫』

と言う事なので、本当に軽い小言で済ませる。

まあ、あまりに優秀で仕事も出来る娘だから、忘れがちだが、初春もまだ中学一年生。

そういった事もあるかと納得してしまった固法は、だから、初春の言葉に聞き耳をたてていた2人が小さくガッツポーズをとっていたのに気づかなかったのである。

事件が動き始めたのは、その日の午後。

佐天が作ってきたお弁当を皆で食べ、食後に、美琴が買ってきていたケーキを初春が口に入れようとした瞬間であった。

携帯の着信音が鳴る。

このメンバーの中で、携帯電話を着歌や着メロでは無く、着信音（しかも何故か、昔の黒電話風）にしているのは、1人だけなので誰の電話が鳴っているのかは明らか。

渋々、電話の主。佐天はフォークを置き、携帯電話を手取るのだった。

「もしもし？ え？ ……ちょっと！ 泣いてちゃ解らないって！？」

……うん？ 令状？ ……テレスティーナが？

……うん。うん。解った。

とりあえず、そっち方面に強そうな人連れて行くから、詳しくは、その時話して。

解ってる。5分で行くわ」

静かに電話を切った佐天は、携帯を仕舞うと、左拳をおもいつきり、金属で出来た棚へ叩きつけた。

思いつきり凹んだ備品に、固法が批難の声をあげたが、佐天の眼を見て黙り込んで仕舞う。

その身に怒りのオーラを纏いながら呟いた。

「やられた」

「きゃああああああ！！」

意味が解らない。

今の固法の心境を代弁するなら、その一言に尽きるだろう。

先程まで、美味しい昼食を食べ、優雅にデザートと洒落込んでいたのに、今は何故か、人力絶叫マシンに乗っているのである。

おまけに自分は現在、思いっきり風紀委員の仕事の時間内である。本来なら、177支部で書類整理なり、もしくは、学区内の見回りなり、いずれにせよ、風紀委員の仕事をしていなくてはならないのだ。

……とは言えである。

佐天に文字通り刺す様な視線で睨まれ、

「ついてきて下さい」

と言われて、断れる人がいるのだろうか？

いない……と、固法は少なくともそう思う。

もっとも、その直後、強制的に、この人力絶叫マシンに乗ることになった固法には、どの道、断る暇など無かったのであるが。

人力絶叫マシンに乗ること数分。

無重力と強重力を交互に数十回。

胃の中の物が反転して、固法が乙女にあるまじき醜態を晒す直前でようやく、その苦行から解放された。

「着きました」

「へこって……」

佐天の声で辺りを見回せば、目に入るのは見慣れた……とは、さすがに言えないが、見知った風景。

固法自身も何度かお世話になった事のある病院の前だった。

「行きましょう」

「ちよっ！ちよっ！！佐天さん？」

短く言い放ち、歩き始めた佐天の背を追い、固法も歩み始める。
佐天の様子から、ただ事では無いことが起きていて、佐天はソレに怒っていて、更に、その事態に対して、自分の知識がいる。

今までの流れを、まとめると、そういう状態だというのは、固法にも理解できた。

だから、それに協力するのは良い。

色々とも問題も起こす娘だが、なんだかんだと事件解決の為に、風紀委員に協力して貰っているし、そうでなくても、固法からすれば、可愛い妹分だ。

だが……ここに至るまでの、あまりと言えば、あまりな扱いに、固法の中の『ナニか』がキレた。

「佐天さん？」

ゾクリと背中に感じる悪寒。

恐る恐る振り返れば、ソコには、満面の笑みを浮かべた固法の姿。ソレを認めると同時に佐天は悟る。

『ああ……アレは固法先輩じゃない。お説教する時の固法お姉さんだ』と。

「えーと……その。今回は時間が無いので、手短かにして頂けたら嬉しいな〜なんて……」

それでもと、勇気を出して、天使の笑みを浮かべた悪魔に立ち向かう。

正直に、この一言を言えただけでも、佐天は自分で自分を誉めてあ

げたかった。

「うん。解ってる。だから、今回は一言だけね？」

「はい……」

そう言われて、佐天も覚悟を決める。

固法が息を吸い込み、佐天が身構える。
そして……

「ちゃんと説明をしなさい！！！」

「ごめんなさ〜い！！！」

2人の声が青空の下に響き渡る。

しかし、こう言うっては何だが、指をさして怒っている固法と、頭を垂れてシュンとしている佐天の図は、そのまんま、躑をしている犬と飼い主の様子である。

「それで、どういう状況なの？というか、なんで佐天さんが、病院の問題なんかに関わってるのよ？」

「え〜と……その……なんと云いますか……」

時間も無いと言うことで、固法のお説教は本当に短いもので済み（佐天曰く、過去最短）用のある病室までの道すがら、固法に事情と状況を説明する事になった。

だが、ここで問題が発生する。

実は、佐天も美琴も、乱雑解放事件を勝手に調べていた事は認めて

いたが、詳細に関しては、固法には話していなかったのである。

正確に言うと、木山の件や、乱雑解放の原因が、眠り続ける置き去り達にあると解った為、解決するまで話せなかったのだ。

だが、ここに来てソレが足を引っ張る事になった。

どう考えても、素直に話せば、お説教一時間コースだからだ。

したがって、どうしても、佐天の対応はシドロモドロのモノになってしまうのだが、その実、固法はなんとなく、佐天と美琴が隠し事をしている事くらいは、気づいていたのである。

もっとも、さすがの固法も佐天達が、ある意味で『犯人』を見つけていて、報告していないなんて思っていない訳だが。

「詳しい説明は、私からさせて貰おう」

「な!!?」

「ちよっ!!アンタ!?!」

佐天がどう言ったものか考えていると、廊下の角から予想外の……少なくとも固法にとっては……が現れた。

「木山春生!!?なんで!!?」

固法の混乱は当然のものだ。

木山が起こした、幻想御手事件は、幸いにして死者こそ出なかったものの、かなりの数の学生を昏睡状態にした大事件だ。

その主犯の木山が、早々に釈放される事など、普通はありえない。

「その辺も含めて説明しよう……そして、出来れば君の知識を貸し

ちから

て欲しい」

「なるほど……」

案内された部屋で、事件のあらましを説明された固法は、そう呟くと小さく溜め息をついた。

「佐天さん達が何か隠し事をしてるのは気づいてたんだけど……まさか、そんな事になってるとわね……」

チラリと横目で佐天の方を見れば、見咎められない様に小さくなっている。

相変わらず、走り出したら止まらない娘だと溜め息を吐きつつ、問題になっている部分に意識を集中するが、正直、固法にもお手上げだった。

現在、問題になっている事。

そして、先程、佐天が怒っていた事。

それは、今朝起きた出来事だ。

突然MARの部隊が、この病院を訪れ、乱雑解放の原因の子ども達の身柄を要求したのだ。

当然、木山や、カエル顔の医者に、飲める要求では無い。

無いのだが……相手は学園都市から発行された、正式な令状を用意していたのだ。

こうなってしまうば、さすがに手が出せない。

もう少しで子ども達を救える……その場所まで来て、木山の元から再び子ども達は奪われたのである。

固法に求められたのは、正式な手続きをもって、再度、子ども達を木山（正確にはカエル顔の医者）の管理下に戻せないかといったものの。

外の世界とは若干違うルールで動いている学園都市。

そのルールに一番詳しいのは、一部の例外（学園都市内における検察や弁護士）を除けば、アンチスキルや風紀委員といった、そのルールに則って権力を行使するもの達なのである。

「正直に言えば難しいですね。

向こうは『乱雑解放』の原因として、その子達の身柄拘束許可をとってますから……

オマケに移送先になってる場所も、問題のあるような所じゃないし。ここから逆転しようとしたら、相手によっぽどの不備とか、不祥事がないと……」

「やはりか……」

固法の言葉を聞き終えると、木山は大きな溜め息と共に、身体をソファーに沈めた。

なにせ、白昼堂々とあんな物々しい装備でやって来た連中だ。

そう簡単に、状況をひっくり返させてくれるとは思っていなかった。

「わざわざすまなかったね。研究者なんていう引きこもりな職業をしていると、どうにも、そういった関係の事は疎くなってしまったね……」

「いえ……」

対して固法の心中は複雑であったりする。

今回のMARの行動。

それに異論は無い。

乱雑解放の原因を調べ、それを拘束し隔離する。

それは、彼らの行動として正しいものであるし、何の問題も無い。

むしろ問題があるとすれば、それを知りながら黙っていた、木山やカエル顔の医者。そして、佐天や美琴であろう。

けれど……だ。

こうして木山の裏事情まで知ってしまえば、心情的には、木山を助けてやりたいと思ってしまうのだ。

大切なモノを守りたい、助けたい。

そんな気持ち強い固法だからこそ、風紀委員などというものをしているのだから。

「……で？ どうするの？ 正攻法じゃ、あの子達取り戻すの無理みたいだけど……諦める？」

重苦しい空気に包まれた室内の沈黙を破ったのは、そこまで黙っていた佐天だった。

木山を見つめる視線には何処か挑発的なものが含まれている。

「まさか！ 後少し！ 後少しなんだ！！」

その日の為に、全てを捨て捧げてきた……！！

今更諦める気など無いし、あの子達を救う日まで、私は諦める訳にはいかないんだ……！！」

慟哭の様な木山の叫び。

それに佐天は満足そうに頷いて見せた。

「そうこなくっちゃ!! さて……正攻法がダメとなると、裏から無理矢理かあ……ACEに頼んで……」

「ちょっと! 佐天さん!!」

佐天の危険な発言に黙っていられないのは固法だ。

佐天が、これからしようとしている事は、どう考えたって、学園都市の法に触れている。

いや、違法だからこそ、佐天は『裏』という表現をしたのだが……

「はい?」

だが、当の佐天は気にした様子はない。

というよりは、固法がなにに対して焦っているのか解らないといった様子だ。

「なにをするつもり? 場合によっては、私は貴女を止めないといけないわ」

冷徹な固法の言葉。

けれど、佐天は『ああ』と納得したように呟いき、薄い笑みを浮かべた。

「固法先輩は風紀委員ですもんね。

私の行動が納得いかないなら、邪魔して貰って構わないですよ?」

それは、まるで普段道理の様な軽い口調。
けれど、続いた

「出来るものなら……ですけど？」

瞬間、栗立つ身体。

全身を襲う震えを、無理矢理押さえつける。

「な……なんで………」

息苦しい。

佐天から発せられる圧力に、呼吸すら邪魔されているようだった。

それは『邪魔をするなら容赦はしない』と言う、佐天の意志の表れ。だが……だからこそ、固法には解らない。

どちらにせよ、あの置き去りの子達は、治療を受ける事ができるのだ。

木山の事は気の毒に思うが、佐天が法を犯してまで、木山に肩入れする理由は無い筈だ。

「あの子達を、アイツには渡せません………」

「え？」

『アイツ』

恐らくは、テレスティーナの事であろう。

だが、彼女はMARの隊長で、同時に研究所の所長でもある。

1女性として尊敬出来る程の人に、一体なんの不満があると言うのか。

「固法先輩は……近くで話したこと無いんですっけ？」

あの人、学生（私たち）の事、人間だなんて思って無いですよ？

多分、研究対象か実験動物くらいにしか………」

「なにを根拠に!!」

「経験と勘です。あの手の眼をしたヤツとは、何回も会いましたから」

そんな筈は無い……と思う。

そんな人間が責任ある立場になれる程、学園都市は腐っていない筈だ。

けれど……

年に数人の違法研究者が捕まり……

それが、氷山の一角に過ぎないと言われている現実が、ソレを言葉にすることを戸惑わせた。

「明日にでも捕まえに来てください。全部終わった後なら……固法先輩になら、捕まってあげてもいいです」

「あ……」

自身の横を通り抜けていく佐天。

その肩に手を伸ばし掴もうとして、躊躇してしまう。

そこまで覚悟を決めて歩みを進める者を、止める資格が自分にあるのか？

止めたい。

どうして自分の友人が犯罪者になることを許容できよう……

けれど、自分の身体は、まるで固まったかのように、動いてはくれなかった。

もう、手を伸ばしても、彼女には届かない……

「それは困りますわ。佐天さんが、何かしでかした時は、私が逮捕

すると決めてますの」

「白井さん!？」

固法が佐天を止めるのに失敗する……その直前。

佐天が向かう扉の前に、突然、白井が現れた。

余程急いだのか、わずかに息は乱れており、うっすらと汗をかいている。

「それって、私が何かしでかすのが前提になってませんか？」

突然の白井の乱入に、苦笑を浮かべる佐天。

そんな佐天を白井は睨み付け……

「今から事をしでかそうとしていた人の言えるセリフではありませんね？」

静かに告げる。

確かに、その通りなので二の句を告げない。

「ダメですよ？佐天さん？そんな事したら、この夏休み中の遊びの計画が台無しになっちゃいます!!」

「初春さん……」

「でも……それじゃ……」

初春の声は、白井の胸元から聞こえた。

おそらくは、携帯をスピーカーにしての発言なのだろう。そして、その言葉に、佐天の表情にも苦いものが混じる。

佐天とて、好き好んで犯罪者になりたい訳では無い。

けれど、今まで苦しみ続けた子達を見捨てる事も、春上との約束を破る事も出来ないのだ。

「こちらの状況は、既に把握しておりますの。
それでなんですが……」

「固法先輩？ 例えばなんですけど……『置き去り』の子達が連れていかれた先が、実は、あの子達をあんな風にした研究者の施設だとしたら、状況をひっくり返せませんか？」

「え……？」

実はこの2人……

というよりは、美琴も含めた3人は、佐天が固法を連れて飛び出して行ったのを疑問に思い、ずっとこちらの様子を覗いていたのである。監視カメラで。

そして、話の雲行きが怪しくなり始めた辺りで、初春が『宝探し』の間に手に入れた切り札を白井に預けたのである。

突然の2人からの質問に戸惑う固法。

だが、彼女もまた、白井とは違った形で根っからの風紀委員である。速やかに頭を切り替え、その状況を想定して、答えを出す。

「いけるわね。その状況だと、あの子達を集める動機が不審になるから、受け入れの停止をかけるわ」

我が意得たりと白井は頷く。

「となれば、申請と同時に動けますわね。初春!？」

「はい……申請……受理されました。これで動けますよ？」

白井の胸から聞こえる初春の声に、佐天は頭を捻る。
現状の理解が出来ないのだ。

「えーと……つまり……どういう事？」

「状況が変わったのよ。こっちから手を出せるわ。合法的にね！」

それに答えたのは固法。

その声は弾んでいる。

学園都市屈指のPC系の能力を持ちながら、自分に自信が無く、指示待ちになりがちだった初春。

学園都市でも数少ない、レベル4のテレポーター。その実力故に、暴走がちだった白井。

その2人が、確かに先を読み道を作った。

今回の事は、佐天や春上といった友人を助けたという気持ちが起こさせた事かもしれない。

けれど、確かに、この後輩達は成長していて、自分ですら諦めかけた局面をひっくり返して見せた。

先輩として、仲間として、こんなに嬉しいことは無い。

「ってことは……」

「なんの気兼ねもなく、あの子達を取り返しに行けますの。」

ちなみに、お姉様は一足先に、あちらの施設に向かっていますわ」

騒がしくなり始めた室内。

その中で木山は一人、小さく笑う。

なるほど。勝てないわけだと。

彼女には、こんなにも強く優秀な仲間がいるのだから。

佐天さんと追走

「……私だ……ああ……なんだと!?!」

薄暗い部屋に女の声だけが響く。

「間違い無いのか!?!……ああ……解った……」

やがて、手にしていた携帯を切ると、隠しきれない苛立ちをぶつける様に机を蹴りつける。

「クソがあ……」

呟いた女……テレスティーナの顔は酷く醜く歪んでいた。

テレスティーナⅡ木原Ⅱライフライン

優秀な実績と人柄で、この若さで、MARの隊長と研究所所長を務める、若きエリート。

事実、彼女の人生は順風満帆である。

少なくとも端から見たならば……

そんな彼女の人生は、今、強烈な逆風を受けていた。

どこから辿り着いたのか、自分が、木山幻生の行っていた、能力体結晶の投与実験に参加していた事に気づいた者がいるらしい。

既に、置き去り達への接触を危険と判断され、置き去りの再移送申請及び、自身への捜査申請が出されたらしい。

冗談ではない。

望む望まないに関わらず、文字通りの意味で、自分の人生をかけてきた研究。

その答えを見ずして、研究を止めることなど出来るわけが無かった。苛立ちを隠しきれず、部屋を歩き回りながら、再び携帯を手にとり、何処かへ電話かける。

短く数言。何らかの指示と確認をすると、

「私もすぐに行く」

と言い残し電話を切る。

同時に素早く部屋を出る。

施設の出口に向かいながらテレステイナは考える。

恐らくは今回の件、学園都市上層部から、アンチスキルには圧力がかかる。

自分が依頼したと言うのもあるが、同時に、それをさせるくらいには、自分の研究には価値がある筈だ。

だが、それは執行猶予の様なもの。

恐らくは、そんなに長くは持たない。

だが……それでいい。

1日。

それだけあれば実験は行える。

そして、それは、上層部も同じ考えだろう。

つまり……

実験をさせた後、全ての責任はテレスティーナに。

そして、実験結果のデータは学園都市に。

そういう事だ。

でも……それでも、答えが得られるのなら……

「待ってたわよ？」

万が一に備え、駆動鎧に乗り込む。

そして、目的地に向かうべく、施設の玄関へと歩を進めると、そこには、テレスティーナの知る少女の姿。

いや……学園都市の研究者で彼女を知らないもの等いない。

何せ、学園都市の能力者の頂点たる7人の超能力者（レベル5）。

その中でも、最も顔が知られている超能力者は間違いなく彼女なのだから。

『なるほど……この騒ぎも彼女達の仕業か』

美琴の存在を確認したテレスティーナは妙に納得した。

同時に胸中に広がる怒りの感情。

その実……テレスティーナは、乱雑解放の原因に早々に辺りをつけ、その確保に向かって動いていた。

その原因を研究していたのだ。可能性として、そういう事も起こりうるという事は、最初から解っていたのだ。

だが、テレスティーナが子供達、確保の為にうった策は、ことごとく阻まれてきたのだ。

彼女と彼女の友人達によって。

そして、今再び、彼女が自分の前に立ちはだかる。

「まあたテメエらか！！私の邪魔すんじゃねえよ！！！」

既に対人用の仮面を被る余裕は無かった。

研究者としての素顔を曝し、目の前の少女と対峙する。

「別に邪魔はしないわよ？私はただ、春上さんの友達を返して貰いに來ただけ……乗ってるんでしょ？あの中に」

美琴が視線を向けたのは、駐車場に止められた複数のトラック。先程エンジンがかけられた、その車内には、確かに複数のカプセルが積まれていた。

高まる緊張感。

一触即発の空気の中、先に動いたのは……

「貴重な実験台手離す訳無いだろーが！！バーカ！！」

テレスティーナだ。アメフト選手のように低い姿勢のまま駆け出すと、美琴目掛けて、体当たりを繰り出す。

だが、そんなものを易々と喰らう美琴ではない。

近くにあった外灯に磁力を伸ばし、飛ぶようにして、それを回避する。

キイイイイン……………

「あぐう………!!!?!」

だが、美琴が外灯に足をついた瞬間、異変は起きた。

感に障る耳障りな音が、辺りに鳴り響いたのだ。

そして、ソレは美琴の能力の演算式を狂わせる。

『ドサ!!!』

「ッ!!!? ゲホゲホ!!!」

突然、能力の発動を乱された美琴は、背中から大地に叩きつけられた。

「この音………!!!?」

脳に直接響く様な、その音を美琴は知っていた。
忘れる筈もない。

この音のせいで、一度は危うく敗北しかけたのだ。

「あらあゝ? 知ってるのオ?」

「なんでアンタが……」

意外そうな顔をするテレスティーナを、憎々しく睨む。

「だって、コレを作ったのは私だからよ!!!」

「っ！！！！」

真っ直ぐに振り下ろされる、機械の腕。

飛び起きる様にして間一髪、それをかわす。

同時に一直線に美琴は走り出す。

「逃げた？」

自分を止めに来た筈の相手の意外な行動にテレスティーナは首をかしげる……がスグに、その行動の意味を理解する。

「っちい！！させるかぁ！！！！」

叫び、腕内に装備された銃で美琴を狙い射つ。

だが、機械鎧の調整がまだ甘いのか。

それは、ことごとく美琴の身体に当たらない。

一直線に走る美琴。

その先にあるのは、キャパシティダウンの本体。

『音が邪魔をするなら、その発生源を叩けばいい！！』

そう。この状況下にあって、美琴はどこまでも冷静だった。

悔しいが、キャパシティダウン発動時の自分は、無能力者の集団にすら負けかけたのだ。

テレスティーナの操る、駆動鎧とでは勝負にすらならない。

幸い、この状況下においても、放電だけは出来る。

たどり着きさえすれば、容易に破壊できる筈だ。

ドン！ドン！ドン！

「っちー!!」

続け様に3発。

その全てを外したのを確認した所で、テレスティーナは美琴への追撃を諦め、移動用トラックのコンテナに乗り込んだ。

「出せ！」

苛立ち気に短くインカムで指示を出す。

同時にトラックが動き出し、コンテナが揺れるのが感じ取れた。

「クソがあ……」

忌々しい。

テレスティーナにとって、佐天、美琴を中心にした面々は、自分の計画を邪魔してくれた、殺しても飽きたらない程の存在だ。

では何故、美琴に追撃をかけずに、早々に退いたのか？

時間が無いから

その一言に集約される。

例え、キャパシティダウンが破壊され、美琴が本来の超能力者としての力を発揮しても勝てる。

それだけの力が、この駆動鎧にはあると、テレスティーナは信じている。

だが、それをすれば騒ぎは大きくなり、いくら圧力をかけているとはいえ、アンチスキルもやって来るだろう。

そうならば詰みだ。

今、自身がやるべきは、私情の恨みを晴らす事でも、超能力者（レベル5）を倒すことでも無い。

実験を成功させ、結果を見届ける。

ただ、それだけだ。

ならば、些細なことで時間を潰す訳にはいかなかった。

「このおおおお！！！」

『バチバチバチ！！』

美琴の手から、直接送り込まれた電流が、キャパシティダウン内部の配線、基盤を、次々と焼き尽くす。

同時に、美琴を苦しめ続けた音も止まる。

「はぁ……はぁ……やってくれるわ……まったく……」

額から流れる汗にも構わず、その場に崩れ落ちるようにして膝をつく。

テレスティーナ達を乗せたトラックが出発したのには気づいていたが、それを追うだけの体力は、既に美琴の身体には残されていなかった。

キャパシティダウンという、ある意味で能力者の天敵とも言えるものに自ら向かっていく行為は、それほどまでに、美琴の精神を削り取っていたのだった。

「急がないと……」

けれど、美琴は再び立ち上がる。

重い身体を引きずり、震える膝に手をかけて……

それでも、譲れないモノが、守りたいモノがあるのだと……

「御坂さん!!」

背後から聞き慣れた声。

『あっ』と思った瞬間に身体から力が抜けた。

足がもつれ、まるで子供の様に倒れそうになるのを、背後から伸びた手が力強く引き留めてくれた。

「ごめん……どじったわ……」

「いえ! 大丈夫です!! トラックの行方は、初春と白井さんが追ってくれてますから……」

私の方こそ遅くなって……」

振り返れば、心配そうにコチラを見つめる佐天の姿。

背中越しに感じる、熱気が、佐天が全力でここに駆けつけた事を報告してくれた。

「そう……じゃあ、私達も急がないと……」

「御坂さん!!」

フラフラと再び歩み始めた美琴を、佐天が責める様な口調で止める。だが、美琴としては、ここでリタイアする訳にはいかないのだ。

春上との約束もある。
何よりも……

「佐天さん……言いたいことは解るけど……同じ状態だったとして、佐天さんなら、ここで大人しくリタイアする？」

「うっ!!」

そう。この、どこまでも真っ直ぐで、平気で無茶をする少女から、目を離す訳には、いかなかった。

何せ、友人を守るために、平気で身体を投げ出す様な娘なのだから。

「私なら平気。少し頭痛がするだけだから」

「でも!!」

『キキイイ!!』

佐天が反論する間もなく、木山の運転するスポーツカーが、タイヤ痕をつけながら施設の前に止まった。

病院での話の後、佐天は自分の足で、木山は車で、それぞれ、この施設に向かっていったのだ。

ちなみに、美琴の戦闘やトラックの行方等は、177支部に戻った初春が、監視カメラを使って確認しており、インカムを通じて逐一、全員に連絡されている。

「悩んでる時間も無いし……行きましょ? 私なら、少し休めば平気

だから……」

言い残し、木山の車に向かい歩く。

そんな美琴を、佐天は苦しげに見つめる。

「無茶だけはしないでくださいね……」

美琴の身体を支えるようにしてついて来た佐天の言葉に、美琴は苦笑で返す。

「佐天さんには、一番言われたくない言葉よね？それって？」

「うゝ……」

そう言い返されて、佐天は唸りながら渋面を作るのだった。

『テレスティーナと置き去りの子達が乗ったトラックは、学園都市内バイパスに乗って、23学区方面に向かっていきます。』

ナビはコチラからしますので、それに従って追走して下さい！』

木山の車。

その車内に取りつけられた通信機から、初春の声が響いていた。

その声に反応するように、木山はアクセルを踏み込み、素直に操者に答えた車体は、大きな唸り声をあげ、一気に加速する。

「この分なら数分でテレスティーナのトラックを捉えられるわね」

その助手席……正確には、助手席に座る、佐天の上に乗っている美

琴の言葉。

だが、それに対する木山と佐天の反応は渋い。

「まあ……順調にいけばそうなんですけど……」

「向こうも、それは解っている筈だから……」

2人が、ぼやく様な、奥歯に物が引っ掛かった様な、物言いをして、それに美琴が、首を傾げると同時。

木山が、おもいつきり、ブレーキを踏み込んだ。

タイヤが悲鳴をあげ、アスファルトの上に、黒い痕が刻まれる。

「な！なに！？」

強烈な減速で、危うくフロントガラスに突っ込みかけた美琴が、慌てた口調で問いかける。

「……予想通りと言ったところか……」

「ハズレて欲しい予想こそ良く当たるものです」

「え？え？……あ……」

事態が飲み込めず、2人を見回した美琴であったが、2人の視線を追って、道路の先にあるものを見つけ、納得する。

そこには、茶色の斑模様の機械鎧が並び、道路を封鎖していたのだから。

「時間稼ぎって訳か……」

なるほど。

テレスティーナは、どうしても実験をしたいらしい。

その為に、ここに配備された部隊は、捨て石。あるいは生け贄か。

「どうでしょ？普通に、私達を潰しに来たって考え方も出来ますけど……どっちにしても、ぶっ飛ばさなきゃ前に進めないって意味じゃ一緒ですよね……」

軽い口調で……しかし、笑わない瞳で車を降りようとした佐天を美琴は制する。

相手の狙いは時間稼ぎ。

なら、わざわざ付き合ってやる道理は無い。

「このまま、車を真っ直ぐ走らせて……」

「なにを!!?」

高速で自動車が駆動鎧にぶつかれば、ただではすまない。
あまりに無謀な美琴の言葉に木山は戸惑うが……

「信じなさい。道は私が作るわ!!」

ポケットから取り出したコインを片手に、不敵に笑う美琴に思わず苦笑する。

何故なら、

「やはり良く似てるよ。君たちは……」

その様子は、いつぞやの佐天に、そっくりだったのだから。

「やめてよね！縁起でもない！！」

「どーゆー意味ですか！！？」

本人達には、酷く不評のようだが。

『来ました！車からは誰も降りずに、そのまま加速。
強硬突破を狙うようです！！』

部下からの報告に、機械鎧の中で男は、大きく溜め息を吐いた。
その前の報告で追跡者が女性3名と言うのを聞いていた為だ。

その実、彼は、何故彼女達が、自分達……正確には、先を行くトラ
ックを追っているのかを知らない。

現場の人間は、自分達のすべき事だけを知っていればいいのだ。

だが、出来れば女性に手荒な真似はしたくない。
この部隊を見て、諦めてくれればと思ったのだが。

『仕方ない。これもお仕事だ。』

車が残り300mまで近づいた所でマシンガンで掃射。

狙いはタイヤ。間違っても、乗ってる人間に当てるなよ。

車がスピンしたら、機体をブツけてでも止めてくれ……』

インカム越しに命令を下す彼は、気の進まない任務を、どうにか穏
便にすませる様に腐心していた。

だから、彼女達に、ここを突破する術があるなんて思いもしなかつ
たのだ。

彼……彼らにとって不幸だった事は、相手が、学園都市第3位と最強の無能力者だと知らなかった事。

そして、『御坂美琴』が、つい最近、一度、敗北を喫しており、負けず嫌いな彼女が、そのままにいる筈が無いということだ。

『残り1000!……900……800……』

インカム越しの報告を聞きながら、武装を選択。
モニターに映る車のタイヤに狙いを定める。

『700……600……高エネルギー反応!!?』

「な!!?」

モニターに映る車。

その窓から、少女が身を乗り出したのと同じ。
彼の機体の真横をナニかが通過した。

一瞬の間。

そして、目標の車がソコを走り抜ける。

咄嗟に、機体の腕を伸ばそうとして、ようやく彼は気づいた。
自身の機体から……左腕が無くなっている事に。

「どう? パワーアップした私の『超電磁砲』は?」

「……と、言われても、私、御坂さんの超電磁砲見るの初めてなんですけど……」

「え？ そうだっけ？」

目論み通り、機械鎧の防衛線を抜けた車内で、得意気に語った、美琴の言葉に、佐天の気の無い返事が返る。

意外な事に、佐天が、美琴の超電磁砲を見るのは、今回が初めてである。

と言うのも、今まで、美琴と佐天が敵対した事は無く、共闘した時でも、超電磁砲を使うような場面が無かった為である。

まあ……美琴の切り札である超電磁砲ではあるが、威力がありすぎて、逆に使い勝手が悪いのだ。

当たれば、普通の人なら確実に……

「ふむ……500 m 以上は飛んでいたな。射程を伸ばしたのかい？」

自身の成長を気づいて貰えなかった美琴にフォローをいれたのは、ステアリングを握る木山。

彼女も、超電磁砲を見るのは初めてであるが、データ上での数値くらいは知っている。

そこでは、超電磁砲の射程は確か50 m。

10 倍近く射程を伸ばしている事になる。

「まあね！ 接近戦じゃ、どうしても、佐天さんや、『あの人』に勝てそうに無かったから、遠距離で……って思ってた。

と言っても、『超電磁砲』用のコインを作って貰っただけなんだけど……」

「結果がついてきてるならいいんじゃないんですか？」

「そうなんだけどね？」

様々な材質、形状を試し作り上げた『超電磁砲』用のコイン。
結果としては、大成功と言えるモノだが、美琴としては未だ満足していない。

「出来れば、最低1kmくらい射程が欲しいのよね。
それで連射出来るようになれば……」

「それは……エゲツないですね……」

その光景を想像したのか、佐天の顔色が若干悪くなる。
ほぼ防御不能の高速の弾丸を連射で遠距離攻撃。
それは、近接タイプの人間に言わせれば悪夢といえる。
命中制度と連射速度にもよるが、最悪なものにも出来ずに終わる危険性
だっているのだから。

「佐天さんが、そう言うなら、やっぱり有効なんだ。
もう少し改良してみようかな？」

「一体ナニと戦うつもりなんだ？ 君は？」

随分と物騒な事を言う美琴に、呆れたように呟く木山。
それに、佐天は『聖女様です』と胸中で返すのだった。

『すいません！ ブラウンマール突破されました！！』

「ちっ！なにやってんだ！！しょうがない！！グリーンマール！
！お前らで、奴らを抑えろ！！」

『……ザザ……こちら……マール……化け物みたいな連中に……
…』

「あぁん！！？なんだと！？」

迫る木山の車と、部下の報告にテレスティーナの苛立ちが最高潮に達していた、その頃……
その下にある高速の入口では……

『……が！！！間接部分に鉄針！？やられた！！』

『なにをやってる！！？相手は生身の女2人だぞ！！？』

MAR隊員の悲鳴が響いていた。
隊員達が操る機械鎧。
その間を駆ける、2つの影。

「申し訳ありませんが……友人との大切な約束がありますの。
貴方に、お姉さま達の邪魔はさせませんわ！！」

次々とレポートで鉄針を撃ち込む白井黒子と

「まったく。随分と高い飲み代になったわね。

まあ……子供を犠牲にする様な実験……許す気も無いがな！！！！」

華麗な蹴技で、機械鎧をスクラップへと変えていく『強力助っ人』なんでも、たまの休日満喫している所を、電話で呼び出されたらしい。

「はあ……普段は恐ろしいですけど、味方となると、こんなに頼もしい方もいませんわね……」

「なにか言ったか？白井？」

「いえ！なんでもありませんの！！」

珍しく眼鏡をかけていない瞳で睨まれて、白井は反射的に返事をしていた。

今は味方でも、白井にとって、基本、天敵なのだ。この『強力助っ人』は。

『くそ！化物だ！！この2人！！』

『お願いだから一緒にしないで欲しいですの！！』

咽まで出た言葉を必死に飲み込み、白井は戦闘を再開するのだった。

『ダメです！！グリーンマーブルとの通信、完全に途絶しました！！』

「くそ！！役立たずどもが！！！！」

ガン！！っと鈍い音が、テレスティーナの乗るコンテナ内に響く。怒りのままに繰り出した拳が、コンテナを凹ませたのだ。

これで、テレスティーナに残された手駒は、現在、このトラック周辺を守る、イエローマールだけ。

だが、その部隊を、ここから引き離す訳にはいかない。完全に追い詰められた形となった。

だが、テレスティーナは諦めない。諦められる筈など無い。

一度、目を瞑るとキツく唇を噛む。

『出来ることなら、実験は全て私の手で行いたかったが……』

数秒の後、目を開き、覚悟を決めた。

「奴等は私が足止めする！」

お前らは、このまま、ガキどもを護送！！

ついたら、直ぐに実験を開始させろ！！」

『っ！！了解！！！！』

テレスティーナの発言が信じられなかったのか、インカムの向こうの相手は、一瞬の間を持ってから言葉を返した。

MAR古株の彼は、テレスティーナが、どれだけ、この実験に拘っていたのかを知っていたのだ。

テレスティーナは、コンテナ内に積まれていた機体に、機械鎧のまま乗り込む。

それは、MARの切り札。

テレスティーナのこれまでの、研究の成果。

『コンテナ開放します!!』

「ああ……どこまでも邪魔しやがって……潰してやるぞ!! 小娘ども!!!!」

狂気にとりつかれた研究者。

その切り札が、今、解放された。

佐天さんとテレスティーナさん？

「随分と静かだな……」

閑散とした……他には車が一台も走らない道路を、猛スピードで走行する車内で、木山が訝しげに呟く。

「いえ？結構うるさいと思いますよ？

夜中に、近所を走られたら、お鍋を投げつけたくなるくらいには」

「車の音の事じゃない！！第一、凄く良い音じゃないか！！」

佐天のピントのズレた返事に、趣味全開な突っ込みを木山がいれた所で、美琴は大きく溜め息を吐いた。

何故だろう？佐天（この娘）といると、凄くシリアスな場面な筈なのに、脱力してしまうのは？

そう思いながら……

けれど、同時に気づいていた。

一歩間違えれば、他人の命が弄ばれ、失われる。

そういう状況にありながら、自身が全く重圧を感じていない事に。

それは、約束など、他人の命の等、どうでもいいと……

そういう事では、勿論無い。

美琴は……おそらくは、ここには居ない、初春や白井も。

信じて、そして、疑っていないのだ。

『そんな事にはならない』と。

「才能かしらね？」

自身の背後に座る少女に聞こえぬ様に口内で呟く。

佐天の才能。

それは、『能力』でも『格闘技術』でも無く……

『佐天さんがいるから大丈夫』

無条件で皆にそう思わせる事こそが、佐天の最大の才能なのだと美琴は思うのだった。

「バカな話は置いとくとして、実際の所どう思う？
もう少しで追いつくのに、何もないってのは……」

弛んだ空気を絞め直す美琴の言葉。
それに答える形で、佐天も表情を引き締めた。

「考えられるのは、単純に戦力切れ……もしくは……」

そう言って、佐天は視線を上げる。

木山が操る車が、大きなカーブを抜け、視界が開けた……その先に
……

「な……！？」

「なによ……あれ……」

「相手が切り札を切ったか……」

巨大な重機を思わせるロボットが待ち構えていた。

「アハハハハ！！！！この道は、ここで、行き止まりだよ！！クソガキども！！」

建機ロボットに取りつけられた外部スピーカー。
そこから響いた声に、3人は顔を見合わせる。

「今の声は……」

「間違い無く、テレスティーナ本人ですね。
追い詰められて、大将自ら、切り札ロボで出撃とか……
何処の特撮ヒーロー物ですか……」

呆れた様な表情をしながら、『でも、お約束って大事ですよ？』
等と小声で続けた佐天。
その様子に、美琴も苦笑を浮かべるが、今は、ふざけている時間もおしい。

車から降りると、ポケットから取り出したコインを指で弾き、宙を舞わせる。

距離は300M。

今の美琴には、既に射程圏内だ。

「テレビなんかだと、丸一話使うような壮絶バトルしなきゃいけないだろーけど……さっさと、道を開けて貰うわよ！！」

青白い光と衝撃が走り、凄まじい速度でコインが撃ち出される。
紅い光跡を残しながら走ったコインは、そのまま建機ロボットへと
迫り……

『ギイイイイイン!!!!』

衝撃音と共に、空へと向かい、姿を消した。

「そんな!!? 弾かれた!?!」

『無駄なんだよ!! コイツは、超能力者おまえらと戦う為に造られた機体な
んだからよ!!!!』

「くっ!!!!」

スピーカーから聞こえる、テレスティーナの言葉に、美琴は悔しげ
に表情を曇らせる。

『超電磁砲』

美琴の二つ名にもなっているソレは、美琴の切り札であり、同時に、
もっとも信頼している技でもある。

それを、避けるでも、かわすでも無く、受けて見せられたのだ。

ソレは、超能力者として、学園都市第3位を名乗る者として、屈辱
だった。

「……………御坂さん。車に乗ってください……………」

「佐天さん……………」

再度、ポケットからコインを取り出し、構えようとした美琴を諫め
るように、肩を叩かれた。

「でも………」

退けない。退きたくない。
けれど、佐天は首を振る。

「多分、時間をかければ、御坂さんは、アレに勝てると思います。
でも……それは、私達の負けなんです。解りますよね？」

「うん………」

そう。勝てば終わり。

そういう話なら、佐天も止めたりしない。

けれど、今回は、アレに時間をかける訳にはいかないのだ。
それこそが、相手の目的なのだから。

「でも……どうするの？」

納得はしたものの、疑問は残る。

佐天の最大火力と言えば、美琴の知る限り、幻想猛獣の時に見せた
技だと思うが、超電磁砲すら防いで見せた相手に通じるのだろうか？

「ん？試してみたい気もしますが……下手したら殺人になっちゃい
そうですね……」

とりあえず、私がアレを抑えるんで、木山と一緒に先に行ってくだ
さい！」

「佐天さん！また………」

この娘は、いつもそうだ。

結局、一番危ない事は、自分が引き受けるのだ。
でも、そんなことは……

「枝先さんを……木山の生徒達をお願い……『美琴』」

「!?!?……ズルいよ……佐天さん……」

佐天を止めようとした美琴は、その一言で何も言えなくなってしま
う。

何故ならソレは……

「ゴメンね?でも、美琴にしか頼めないから……」

「ちゃんと、後から追いかけて来なさいよ?『涙子』」

間違い無く、『対等』な立場の友人からの願いだったのだから。

「……超電磁砲が効かなかったので諦めたか?」

対峙するテレスティーナは、無闇に接近するでも無く、挑発するで
も無く、ただジッと見張り、相手の出方を見る。

本来のテレスティーナの性格からすると、恐らくはもっとも向かな
い、忍耐力勝負の、地味な行動である。

だが、それが、自分の研究の完了、完成に近づくものなら耐えられる。
むしろ、ここで下手な動きをして、相手に、ここを突破されようも
のなら、目も当てられない。

だからこそ、溜まるストレスに耐えながら、ただひたすらに、相手
を見張り続けるのだった。

「動いた……強硬突破狙いか？」

そんな、テレスティーナの前で、ついに相手が動く。
何の工夫も無く、こちらへと向かってくる車。

テレスティーナの操る、建機ロボットは、別に道路全てを、封鎖出来ている訳ではない。

ロボットの左右。そして足の間と、自動車一台抜けるスペース位なら、いくらでもあるのだ。

だが、そんな安易な突破法を、簡単に許す、テレスティーナでは無い。

「いかせるかああ！！！」

近づく車に、左腕のアタッチを切り離し攻撃。

だが、車を操る木山も簡単には当てさせない。

タイヤに悲鳴を上げさせ、煙を吐かせながらも、ギリギリの所で、それを避けて見せる。

近づく、建機ロボットと車。

その距離が0になった時、建機ロボットの腕が振り下ろされる。

「行かせねーってンダローが！！！」

確かに車を捉えていたテレスティーナの一撃。

だが……

「行かせるわよ！！その為に！！私はココにいるんだから！！！！キヤノンスパイク！！！」

ソレは、車の背後から飛び出した少女によって阻まれる。
信じがたい事に、数トンはあろうかという建機ロボットの腕を、少女は蹴り返したのだ。

一瞬。ほんの一瞬。テレスティーナは、目の前の出来事が信じられず、呆気にとられてしまった。

……そして、その一瞬の隙こそが、佐天が作り出した、突破口。

『しまっ!!?』

テレスティーナも気づくが、もう遅い。

彼女が止めようとしていた青い車体は、建機ロボットの脚の間を抜け、数十メートル先を、爆音をあげながら、疾走していた。

眼下には、テレスティーナの行動を幾度と無く邪魔してきた少女の姿。

その彼女が、こちらを見て嘲った。

「このクソガキイイイ!!」

その瞬間、テレスティーナの中で、何かが切れた。

蟻を踏み潰すようにして足を動かす。

その下のアスファルトは、大きく揺れ、ヒビ割れを起こす。

だが、ソコに少女の姿は既に無い。

足が降りる直前、後ろへと跳んだ少女は、テレスティーナの場所から、10m程離れた位置でコチラを見ていた。

そして、ユックリと片手を前に突きだし、手のひらを上へ。

更に揃えられた四指を数度折る。
その動作の意味する所はただ1つ。

『かかってこい!!』

あまりにも見え透いた、あからさまな挑発。

けれど、既に頭に血が上っていたテレスティーナには、十分な効果を発揮した。

「上等だあああ!!!!」

建機ロボットの足元のタイヤが急回転し、猛スピードで少女へと迫る。

同時に振り下ろされた腕が、アスファルトを破壊し粉塵が上がる。

「ぶっ殺してやるよ!!クソガキがああああ!!!!」

視界の効かぬ粉塵の中、周囲へ次々と攻撃を放つテレスティーナの脳裏からは、

『抜けた車を追撃する』

という選択肢が既に消滅していた。

『イエロー7、8行動不能!!ダメです!!止められません!!』

テレスティーナに足止めを任せ、先に施設へと到着していた、MAR『イエローマール』

彼等は今、混乱の極致にあった。

施設に到着後、即座に実験を始めるべく、置き去り達の搬入を始めようとしたところ、テレスティーナが足止めしている筈の青い車が施設へとやって来たのだ。

勿論、この施設も違法な実験を行っているのだ。

侵入者対策は、普通の施設以上に施されている。

だが、それらの対策が車が確認されてから僅か30秒程で沈黙。

そして彼等は、何故学園都市で、超能力者が別格の扱いを受けているのかを、その身で思い知る事になった。

『イエロー5、9交信途絶!!』

次々と消えていく仲間の反応。

学園都市内に存在する複数の部隊。

その中でも、駆動鎧を駆る自分達は最強だと信じていただけに、今の現実には、彼等にとって、悪夢以外の何物でも無かった。

『超能力者は伊達じゃないと言うことか……』

少し離れた所で蒼白い光が走り、同時に仲間の反応がまた1つ消える。

もう認めるしか無かった。

彼女は……

学園都市第3位『御坂美琴』は、自分達より強い。

それも、段違いに。

その事に、彼の小さな自尊心は痛く傷ついたが、ソレを理由に任務を投げ出す程、彼は腐っていなかった。

『イエロー1よりイエロー11。準備はいいか？』

『イエロー11。準備OK。何時でもいけます！！』

『バチバチ！！』

紫雷が走り、また一体、駆動鎧が倒れる。

「たく……次から次へと……キリが無いわね……」

その向こう側。

置き去り達を乗せたトラックの前で、美琴は呆れたように溜め息を吐いた。

施設内に侵入。トラックを確保と、最初こそ派手な戦闘だったものの、今現在、美琴が行ってる戦闘……

そう言えるかも怪しいが……

は、残党狩りと言った状態になっていた。

正直に言って、美琴にとって、MARの駆動鎧は敵では無かった。対電措置が完璧でないのか、少々強めの電撃を放てば、行動不能に陥り、彼等の持っている装備は、美琴の電撃で迎撃可能な物ばかりだったのだ。

つまり、こちらがダメージを受けること無く、相手は一撃死。

置き去り達の運命がかかっていた戦闘だったのだが、すっかり、ただの弱いもの苛めになっている現状に、美琴はすっかり辟易していた。

『腕試し』こそ、好きな美琴だが、弱いもの苛めは決して好きでは

無いのだから。

だから……そんな、勝利がほぼ確定した、消化試合の様な状態だったから、美琴は油断していた。

それは、本来、戦場では決して、あってはならないこと。

優勢と勝利は全くの別物で、追い詰められた鼠は猫を噛むのだから。

ましてここは、テレスティーナの研究施設。

少し考えれば、『それ』を利用した罠がある可能性に、スグに気づけた筈なのだから。

キィィィン……………

『しまっ……………!!?』

その音が聞こえた瞬間、美琴は自分の慢心を悟る。

だが、結果は既に出た後だ。

その場に、蹲り脂汗を流す美琴。

そこに、一体、また一体と、駆動鎧が集い始めていた。

異変に気づいた木山が、施設内で拾った小銃で応戦しているが、数と装備が違う。

長くは持たないだろう。

腹立たしい事に、相手に油断は無いらしい。

決して散発的に仕掛けて来るのではなく、気づけば、完全に囲まれている。

『ここまでか…………?』

木山が半ば覚悟を決めた時

キイイイン……プツ

音が消えた。

「え？」

それは、当然、美琴に能力が戻った事を意味し、同時に、この戦場の力関係が、再びひっくり返った事を示している。
だが、何故音は止まったのか？
その場にいる者、全員の疑問。

『……………ッフフフ』

それは、代わりにスピーカーから聞こえてきた声が答えを出した。

『こんな事もあるのかと！こんな事もあるのかと！！こんな！事も
あろうかと！！』

「つて！この声！？初春さん！？？」

随分とテンションの高い、けれど、飴を転がすような甘い声は、間違いない、美琴の友人のもの。戸惑う美琴だったが、それ以上に混乱したのは、美琴を取り囲んでいた、MARの隊員達。

なにせ、あの音がしなくなったという事は、学園都市第3位の超能^{はげ}力者が復活した事を意味するのだから。

『イエロー11！！何が起きている！！』

『解りません……突然、全ての操作が効かなくなって……』

悲鳴に近い隊員達の声。

その疑問に答えたのは、余裕と喜びに満ちた謎の声……

『ご都合主義と言いたくば言え!! でも! どうですか!! この燃える展開!!』

「なるほど。この施設のシステムを落としたのか……」

では無く、この場で唯一冷静だった木山。

だが、MARの隊員達程で無くても、美琴もまた焦っていた。

「初春さんが壊れた……」

ベクトルは、全然、別方向だったが。

「なに……気にするほどの事じゃないさ。

科学に身を置くものなら、一度は言ってみたいセリフだからね。夢が叶って、興奮しているのだろう……」

「そういうもの?」

自身も科学に身を置くものだが、全くそんな事を考えた事の無い美琴は首を傾げ……木山の身体が震えているのに気がついた。

「私も生涯に一度は言ってみたいな……」

なんて呟きは聞こえなかった。

断じて聞こえなかったのである。

「ごほん！」

気を取り直す様に、咳払いをひとつ。

それによって、おかしくなっていた、木山も落ち着き、スピーカーから聞こえていた初春の声も止まった。

「取り敢えず……よ。せっかく隠れんぼしてた、隊員さん達が出てきてくれたんだもの……」

お相手しないのは失礼よね？」

ニツコリと……それはもう、そっちの気がある男なら……

いや、男であるなら、誰でも見惚れるであろう、天使の微笑みを、美琴は浮かべる

だが、悲しいかな。

今、美琴の前にいる男達にとって、それは、悪魔の……或いは死神の微笑み。

ジリジリと脂汗をかきながら、ゆっくりと距離をとり……

『うわああああ！！！！』

耐えきれなくなった誰かが、走り出した瞬間。

蒼白い光が、世界を染め上げた。

「ちっ……ちょこまかと！！！」

ハイウェイ上で行われている、テレスティーナは、ひとり毒づく。

「……っの！！菩薩拳！！」

金属音が鳴り響き、機体を軽い振動が襲う。

だが、モニターで確認できる主要部分へのダメージは皆無。

先程から、何度となく、このような交錯が行われていた。

テレスティーナの攻撃は相手を捉えれず、相手の攻撃は、こちらに、ダメージを与えない。

互いに決め手に欠く。

そういった状態だった。

「たく……どんな装甲よ………」

建機ロボットから、飛び降り距離をとった所で、佐天も同じように愚痴っていた。

スピードも遅く、各部品の動作から、次の動きが予測出来る機体は、彼女にとって脅威足り得なかったが、とにかく固い。

幾度か行った攻撃で、何処も破損していないというだから恐れ入る。

『どうしたものかしらね？』

視線は相手に固定したまま、脳裏で考える。

アレを破壊する術が無いのか？

そう問われれば、ある。

数度の接触で、それは既に確認している。

固いのは固いが、壊せない程ではない。

最初にアレは、美琴の超電磁砲を受けて見せていたが、アレは正確には、受けたのでは無く、両腕に着いている盾の様な物で、逸らしたのだ。

……である以上、超電磁砲並みの威力でなら、破壊可能。ならば、佐天にも破壊する手立てはある。

あるのだが、『人が乗っている』
その事が、佐天を邪魔する。

『さすがに殺しちゃ不味いよね……』

正直、佐天自身の本音としては、テレスティーナは、殺されても文句を言えない。

それだけの業を背負っているし、彼女自身、覚悟の上だろうと思っている。

だが、世間は……

学園都市のアンチスキルや、風紀委員は、そうは取らないだろう。なにより、佐天自身が、学園都市にいる間は、そういった真似はしたくない。

彼女達と自分では住む世界が違う。

それは、百も承知の上で、それでも、出来るだけ長く、一緒にいたいからだから。

「逆なら楽なのに……」

もう一度ぼやく。

結局、佐天には、アレは行動不能に。

そして、テレスティーナは殺さずに。

そういった、選択肢しか残されていないのだ。

そして……そうである以上、佐天が得意とする、徹す攻撃や、幻想
猛獣の時の様な大技は使えない。

けれど……

「まあ……やってみますか!!」

それでも、佐天は不敵に笑って見せるのだ。

「来るか……」

建機ロボットのコックピットの中、テレスティーナは呟いた。

戦闘経験はおろか、まともに格闘技すらしたこと無かったが、それでも、背中に流れた冷たい汗と悪寒が、相手から、与えられるものののだということくらいは解った。

『バカげてる』

それが、佐天に対するテレスティーナの評価だ。

彼女が、何の能力者なのか、厳密にはテレスティーナは知らない。

ただ、今まで見た印象から、勝手に、身体強化系の能力者だと思っていたのだが。

だが、それにしたって、駆動鎧を凹ませたり、あまつさえ、この建機ロボットの腕を蹴り返すなど、有り得なさすぎる。

そして、なによりもコレに喧嘩をうっている。

彼女とて、もう解っている筈だ。

コレに勝つには、半端な火力は通じない。

それこそ、勝とうと思うなら、学園都市最先端の戦車を持ってくるか、或いは、第一位か二位を連れてこなければならぬ。

それに、素手で喧嘩を売っているのだ。

正気の沙汰では無い。

だから、『バカげてる』

良くも悪くも、テレスティーナが佐天に下した判断はそれだった。

だが、それは、『学園都市』に染まりすぎた、テレスティーナの判断。

もし、この場に美琴が残っていて、テレスティーナの思考内容を聞いたのなら、こう言っただろう。

『佐天さんに、そんな常識通用する訳無いじゃない！』 っと。

『ダン！！』

アスファルトを蹴り、建機ロボットを目掛けて、佐天が跳ぶ。

叩き落とさんと、放たれた建機ロボットの腕を逆に、叩き落とす。

「いくよ！！流星拳！！！！」

カンカンカンカン！！！！

機体全体に衝撃が走り、次々に、金属音が響く。

けれど、ひとつとして、その鋼鉄の防壁を抜く事は出来ない。

「っからのっ！！百烈拳！！！！」

ガンガンガンガン!!!

鈍い音が立て続けに響く。

だが、やはり、装甲を抜くには至らない。

「バーカ!!! 無駄なんだよ!!! 素手で、この装甲を抜けるかよ!!! 子供でも解る理屈だろうが!!!」

そう。子供でも解る理屈。

いくら屈強な人間が、数百、数千の拳を放とうと、鋼鉄の壁は破れない。

「っうゝゝゝ……」

その前に、その者の拳の、肉は裂け、骨が碎けるのだから。

けれど!!! そんな理屈が解る人間なら!!!

そもそも、武術家になんて佐天はなっていない!!!!

「っからのゝゝ!!! 『千烈脚』!!!!」

ガガガガン!!!! ガシャ!!!!

「な! なんだ!?! なんの音だ!?!?」

聞き慣れない音。

その音に、初めてテレスティーナが狼狽する。

そして気づく。モニターが示す、数々の赤い表示を。

「バカな……そんなバカな事が……」

それは、装甲の限界。或いは、突破を示す物。
重火器や超能力ならともかく、素手相手に起きていい現象では無い。

「っらあああああ!!!!!!」

ガシャン!!!!

「!!!!!!」

一際、大きな破壊音と共に、テレスティーナがいる場所に、陽光が降り注ぐ。

「あ……ああ………」

破壊された天井。

その現実を受け止めきれない、テレスティーナが、驚愕の視線を、そこに向け……陽光を遮り、1人の少女が、テレスティーナを覗き込み、ニツコリと微笑んだ。

「悪いわね? チェックメイト王手よ?」

佐天VSテレスティーナ決着!!

佐天さんと事後処理

「ううゝ……痛いよゝ痛いよゝ……」

「当たり前です！！特殊装甲のロボットを素手で殴るなんて、なに考えてるんですか！！？」

翌日

お馴染みの、カエル顔の医者 of 病院に、両の手と、右足に包帯を巻いた、佐天の姿があった。

「だってさゝ……大技も徹しも使えないし、じゃあ、力技で壊すしかないかなゝ……って」

こう言うてはなんだが、これまた、お馴染みの風景。

ベツトの上でシュンとする佐天と、お説教をする初春は、看護師達の間では、既に名物行事と化しつつある。

「なんで、そうなるんですか！！」

御坂さんと、木山先生が先に行ってたんだから、佐天さんは、テレスティーナさんの、足止めだけしてればいいじゃないですか！！」

「そうなんだけどゝ……そうなんだけどゝ……
やっぱり心配だし、なるべく早く倒して、手伝いに行つてあげたいなつて……」

「ふゝん……あんな事、言つてたのに、佐天さんは、私の事、信用してくれて無かつたんだ……」

と、ここで、第3者の声が割り込む。

白井と一緒に見舞いにやって来た美琴だ。

ただし、その背中には、盛大な影を背負っており、今にも、地面に『の』の字を書き出しそうな勢いではあるが。

「えっ！？ いや！？ 違いますよ？ 御坂さんの事は信じていましたけど、その！なんて言うか……」

「いいんだ……いいんだ……どうせ、私なんか、初春さんの助けが無かったら、相手の罠に嵌まって負けてたんだし……」

……と言うか、既に書き出していた。

常盤台の生徒が見たなら、信じられない様な、いじけっぷりである。

「いや！あの！違うんですよ！？ 御坂さん！！今のは、そう言う意味じゃなくてですね！？」

落ち込む美琴と、慌てふためく佐天。

そして、それを生暖かく見守る二対の瞳。

ここで、白井が何も言わないのを不思議に思うかも知れないが、当たり前なのだ。

何故なら、美琴のいじけ様は、全て演技なのだから。

当然、付き合いの長い白井は、それに気づいているし、初春も、そんな白井の様子から、美琴の演技に気がついたのである。

とはいえ、血筋のなせる技か？

美琴の演技は中々の物である。

当然、事情を知らぬ第三者が見れば……

「えっと……大丈夫か？御坂？」

真剣に心配して声をかけるのだ。

「…………え？」

聞き慣れた声に振り替えば、病院着姿の、ツンツン頭の少年が、こちらを心配そうに見ていた。

かなり間近で。

『ぼん！』

そんな擬音が聞こえそうな勢いで、美琴の顔が朱に染まる。
と同時に、エク○シストもビックリな勢いで後ろに下がり、少年との距離をとる。

「な！な！なんで！アンタがここに！！！」

恥ずかしい姿を見られたのとか、息がかかるほど顔が近くにあったのとか、心配そうに、こっちを見ていた少年の顔がカッコよかったのとか、そんなのが、色々混ざって、美琴は大パニックだ。

『いちゃ悪いのかよ？』そんな前置きをしながらも、少年……上条当麻は、キツチリと質問に答える。

「俺も、ちょっと怪我しちゃってな？」

ここに、入院してるんだよ。

で、今日、カエル先生に、佐天さんも入院したってのを聞いて、お見舞いに……

つか、お前、顔赤いぞ？熱でもあんのか？」

まあ、鈍いのは相変わらずなのだが。

その言葉を聞いた御坂が、照れ隠しに放電しかけて、初春の『病院ですよ？』の一言で沈黙させられる。

「って、入院って、上条さん、また、なにか無茶したんですか？」

「否定は出来ないけど、佐天さんにだけは、言われたくないなあ……」

『入院』という単語に、上条をジト目で見る佐天だが、キツチリ同じ目で、見返された。

しばらく無言で睨み合っていた2人だったのだが……

「まあ……似た者同士と言う事ですわね……」

「「やめて下さいよ（くれよ）！！縁起でもない！！」」

白井のあまりに的確なツツコミに、見事なユニゾンで返した。そんな2人を、美琴が羨ましそうに、見ていたことは、初春しか気づかなかった様だが……

「ふむ……経過は順調……と言うか、順調過ぎるみたいだね？この分なら、明日には完治してるんだね？」

「「「は？？？」」」

少ししてからやって来た、カエル顔の医者への検診。

その内容に、佐天本人と、事情を知らぬ、上条を除いた、3人の声が見事にハモった。

「ねえ？黒子？私の気のせいじゃなかったら、佐天さんの怪我って……」

「両拳の骨折と裂傷。それと、右足の骨にヒビだった筈ですの……」

どう考えても、入院1日で完治していい怪我ではない。

事情を把握した上条も、喝いた笑みを浮かべる。

「回復力が尋常じゃ無いんだね？」

今の痛みも、多分、急激な回復によるもの……

相変わらず、達人という人種は、現代医学の常識を、軽く越えてくれるね？」

溜め息混じりの、カエル顔の医者への言葉。

佐天は、『私はまだ、達人ってレベルじゃないですよ！』等と言っているが、現代医学にとっての、悪夢という意味では一緒である。

そんな、相変わらずの佐天の非常識ぶりに、驚いたり、呆れたりしていた面々だが、初春の

「でも、まあ……佐天さんですから……」

という、なんの説明にもなって無いのに、妙に説得力のある言葉に、納得する事になるのだった。

「そうそう……木山君からの伝言だ。」

『君達のお陰で、あの子達を起こしてあげられそうだな。ありがとうだ、そうだよ』

「そっか……………」

診察を終え、退室間際のカエル顔の医者が残した、木山からの伝言。それに、佐天は随分と素っ気ない返事を返す。けれど、部屋にいる人間は全員気づいていた。その言葉を聞いた、佐天の顔が満足気に微笑んでいることに。そして、自身の顔も微笑んでいるであろう事に。

テレティーナを佐天が退け、美琴、木山の2人が、研究室を制圧してから、暫くの後、双方の元にアンチスキルがやって来た。

理由は、『謎の暴動に対する、捜査及び、鎮圧』

初春の出していた、アンチスキルへの出勤要請は、どこかからの圧力で、遅れさせられていたらしい。

結果、アンチスキルは、事件が起きて、初めて動く形になったのである。

文句のひとつも言いたいところであったが、所詮はお役所仕事。

現場に、熱意ある人間がいても、上の意向で動けないことがある事くらいは、全員が知っていた。

文句を溜め息に変え、大人しく、アンチスキルの命令に従ったのであった。

ところが、テレティーナの研究施設を調べていたアンチスキルが、大発見してくれた。

能力体結晶のプロトタイプ。

そのデータと、恐らくは実物。

この事により、『置き去り』達を、無理なく学園都市で起こす事が可能になったのだ。

今はまだ、それが本物か？

また、本当に問題が無いのか？

そういつた所を煮詰めている段階だが、遠くない内に、『置き去り』

なせ、あんなに立派な先生がっているのだから。

ちなみに、春上が、現在ここに来ていないのも、こちらに付き合っている為である。

寝たきりの『置き去り』達に異常が発生した時、即座に解ると言うことで木山が依頼。

春上が即座に了承したらしい。

「おっと！もうひとつ伝言があったんだね？」

これは、ウチの看護師長から。

『お話確定ね？』
「だそうだよ？」

途端に、佐天の微笑みが引き吊り、青ざめたかと思えば、凄まじい勢いで震えだす。

「……めだ！逃げなくちやダメだ！逃げなくちやダメだ！逃げなくちやダメだ！逃げなくちやダメだ！逃げなくちやダメだ！逃げなくちやダメだ！逃げなくちやダメだ！逃げなくちやダメだ！！！」

そう呪詛の様に呟いたかと思えば、ベツトから飛び出す。

その勢いは、上条曰く、『バッタの様だった』とか。

だが、悲しいかな……

今、佐天の病室にいるのは、全員が、佐天の友人なのである。

つまり……

佐天の行動パターンなど、既にお見通しなのである。

「どこに……」

「行くつもりですか？」

「え!?!」

ベットから、窓へ向かって跳んだ佐天。

その途中で、初春と白井に腰を掴まれ、ベットへと引き戻される。

「ダメだよ? 佐天さん? 怪我人は、大人しく寝てないと……」

強制的にベットに寝かされたところで、美琴の右手が、首筋に当てられた。

「ちよっ!?! 御坂さん!?!? 待っ………キャン!?!」

同時に、佐天の身体が小さく跳ね、グツタリと倒れ伏した。

「……………いくらなんでもやり過ぎなんじゃ……」

一部始終を黙って見ていた上条は、大きな漫画汗をかきながら、そうツッコむ。

けれど、佐天友人一同の反応は冷たい。

と言うか、視線が、『なに言ってるんだ? こいつ?』の勢いである。

「いいんですよ! 佐天さんは、これくらいしないと、大人しくなにかしてないんですから!」

「入院した翌日の朝に、凄まじい運動をしていた前科もありますし……」

「というか、象を気絶させる（これ）くらいの電撃じゃ、精々5分程度よ？」

佐天さんがおとなしく気絶するの」

あんまりにあんまりな、3人娘の主張。

それを聞いた上条は、難しい顔をしたまま黙り込み……

「それもそーだな！」

あっさりと納得した。

だって、佐天さんなんだから。

「皆……ひどい………」

ベットの上で、弱々しい佐天の声ひびいた。

佐天さんとビデオレター

「むう……………」

あれから数日。

無事？退院した佐天は、自室のテーブルの前で小さく唸っていた。

ちなみに、退院当日の佐天の様子は、『風が吹けば、飛んでいきそうなくらい、真っ白に燃え尽きていた』らしい。（同病院に入院していた、フラグブレイカー談）

まあ……看護師達によるお説教＋風紀委員（固法）のお説教＋アンチスキルの取り調べ＆お説教のスペシャルコンボを喰らったのだ。無理もない。

「入院してたのに、全然休めてない」

とは、その時の佐天の言葉である。

さて、そんな風に唸る佐天の前には、ひとつの機械と、その取扱説明書。

かれこれ、一時間近く、それらとの、にらめっこをしていた佐天だったが……

「あああ！わかんない！！！」

どうやら、ギブアップのようである。

手にしていた説明書を何処かへと放り投げると、携帯電話を手にと

った。

「あゝ？初春？ごめん。助けて……」

そうして、この手の物に、一番強そうな友人に応援を要請するのだった。

「はあ……ビデオカメラの使い方ですか……」

風紀委員をしている、初春の夏休みは忙しい。

学園都市は、その性質上、長期休みの時期に、学生同士のトラブルや、犯罪が多発しやすいのだ。

それでなくても、先日の乱雑解放事件。

その後始末（書類関係の提出等）が終わっていないのだ。

そんな中、友人のSOSに、時間を作って駆けつけてみれば、その内容は、家電製品の使い方。

溜め息のひとつも、吐きたくなる。

「でも、どうしたんですの？急にビデオカメラだなんて……」

質問したのは、もう一人の風紀委員。白井。

佐天が初春に電話をかけた時、初春は177支部にいた。

その為、同席していた、白井と美琴も着いてきて……

結局、いつものメンバーが、揃う形になっていたのだ。

「えーと……ですね……」

白井の言葉に、佐天はテーブルの上においてあったリモコンを手にとると、慣れない手つきで、それを操る。

プツン……と言う音とともに、部屋の隅に置かれたテレビが映像を映し出し、同時に聞こえた機械音が、DVDプレイヤーが動いていることを、知らせていた。

「こらー！！涙子！アンタ、日本に帰ってきてるなら、こっちにも顔出しなさいよね！！」

最初に映し出されたのは、勝ち気そうな少女の姿。ライトブラウンで、少しウェーブのかかった長い髪。その話し方から、おそらくは、佐天と同じ年くらいなのだろうが、写し出されてる身体は、服の上からでも、この場にいる誰よりも、良いプロポーションをしている事が、見てとれた。

「まあまあ……」

それを止めるのは、最初の少女とは反対に、大人しく清楚そうな少女。

少し紫かった、ストレートの黒髪が特徴だ。

そして、そのプロポーションは……

「でも、私も、久々に涙子ちゃんに会いたいな？」

夏休みの間に、時間が取れるんだったら会いに来てね？」

そんな風に進んでいく、ビデオレター。

呆気にとられた様に、それを見ていた面々だったが、最初に復帰した、白井が口を開く。

「誰ですの？このアイドル集団の様な方々は？」

それは、佐天を除いた、3人の素直な感想だった。

美琴、白井、初春……勿論、佐天も、間違い無く『美少女』と、評される部類の人間に属する。

……が、今、モニターに映し出されている面々は、少しレベルが違う。

主に、胸とか、胸とか、胸とか。

今、画面に映されている、金髪の少女とか、明らかにモノが違う。

「えーと……私が、小学校中学年くらいの時に、知り合った娘達です。

ウチの父親が、えーと……今、映った娘の家に道場破りに行って……」

「ストップ！！その辺の事情はいいわ！！」

とりあえず、この娘達は、佐天さんの昔の友達でいいのね？」

始まろうとしていた、佐天劇場。

それを、強制終了させて、必要な情報だけを聞き出す。

誰も、バイオレンスで、エキサイティングな、佐天の昔話は聞きたくないのだ。

主に、自分の常識を守る為に。

「えーと……はい……友達……なんでしょうか？」

だが、佐天の歯切れは悪い。

少し困ったように、曖昧な笑みを浮かべるだけだ。

「あれ？違うんですか？」

不思議に思った初春が、小首を傾げるが、佐天は曖昧な笑みを浮かべ続けるだけだ。

「ん〜とね？その頃の私って、『弱いから群れるのであって、強ければ友達なんて必要ない』みたいな、考え方の子だったんだよね。だから、『友だちになろう？』って言われても、『いらない！』って言っちゃって……」

「それは……なんと言うか……」

難しい顔をして言葉を選ぶ白井に、苦笑して見せる。

「我ながら、嫌な子どもだったと思いますよ？」

まあ……この娘達も、しつこいと言うか……諦めの悪い娘達だったんで、最終的には、それなりに仲良かったと思うんですけど……考えてみたら、『友達だ！』って、ハッキリ言ったことなかったな〜って……」

「……でも、それは友達だったのでは？」

「え……？」

そう言った白井の後を、美琴が引き継ぐ。

「だって、そうじゃなきゃ、また会いたいなんて言わないし……なにより、ビデオレターなんて送ってこないでしょ？」

その指摘に、佐天の心が揺れる。

「そう……ですかね？」

「そうですよ!!」

初春の力強い肯定に、佐天は小さく頷いた。

後悔が無い訳ではない。

けれど、美琴の言うように、自分と彼女達との間に絆があるのなら……

それは、とても嬉しい事だと思わずにいらなかったから。

「それで、佐天さんがビデオカメラを使おうとしてるのは、そのお返事を撮る為ですか？」

「えーっと……はい。まだ、当分、会いに行けそうに無いんで、こっちもビデオレターで返そうと思って……」

「意気込んで、カメラまで買ったけど、使い方が解らなかった……と」

「はい……」

言葉尻をとらえた白井の言葉に、シュンとなる。

テーブルの上には、真新しいカメラと、それが入っていた箱。

そして、読み込まれた説明書。

それだけ見れば、佐天がどれだけ意気込み、頑張って返事を撮ろうとしていたかが窺える。

「しょうがないですね？」

「ですわね……」

他の2人を促す初春。ヤレヤレといった様子の白井に、微笑んで頷く美琴。

そう。結局のところ、そんな様子を見て、このメンバーが協力しない訳が無いのだ。

「えーと……久しぶり。皆、元気かな？」

もう知ってるみたいだけど、私は今、『学園都市』にある、柵川中学校に通っています」

「固いですわね……」

「い……いいんですよ!!」

カメラを構えた白井の言葉に、顔を紅く染めた佐天が答えた。皆の協力で始まった撮影会。

けれど、いざ撮り始めると緊張してしまうものなのだ。

「えーと……それで、今日は、私の普段の様子とか、学園都市の中とかを少し紹介したいと思います……」

で! 今日、これを撮るのに協力してくれてるのが!!」

「ふえ!?! 佐天さん!!」

「ちょ！ちよつと！？」

そんな佐天の様子を、面白そうに見ていた、初春と美琴が、画面内に引き摺り込まれる。

突然の事に、2人とも慌てふためいてしまっている。

「私のクラスメイトで、『風紀委員』な初春と！」

「え！え！？あの！初春飾利です！！始めまして……」

「学園都市の能力者の頂点。超能力者（レベル5）！！その第3位！！御坂美琴お姉様！！」

「お姉様って……それに、外の人に解るの？その説明？……始めまして！御坂美琴です！！」

緊張して、顔を紅くしながら頭を下げる初春。

対称的に、美琴は自然な態度のまま、自己紹介を完結する。
この辺は、他人の視線に対する慣れの違いだろうか？

「そして……！風紀委員1の問題児！白井さくん！！」

「どんな紹介の仕方ですの！！」

おほん！白井黒子ですの！！」

佐天の手でカメラが奪い取られ、画面内に入った白井は、突っ込みを入れながらも、取り敢えずは、自己紹介。

この辺は、流石と言ったところか。

「えーと……どうしましょう？部屋の中だけ撮ってても……」

「それなら、この間、花火見た場所から学園都市全体を撮って……」

「街の方とかも撮った方がいいかもしれませんね？」

「後！学園都市名物の風車とか！！」

『宅急便でゝす！！』

「はゝい！！」

数日後。日本の何処か。

少し……いや。かなり大きなお屋敷で、届いた小包を開けた少女は、小さく微笑みを浮かべた。

中には、一枚のディスクと写真。

随分と会っていない『友人』と、同じ年頃の娘達が、楽しそうに写っている写真には、マジックでこう書かれていた。

『友達が出来ました』

「皆にも知らせてあげないとね？」

そう呟くと、携帯電話を手にとり、連絡をとり始める。

随分と久しぶりになってしまった、友人からの便り。

出来る事なら、彼女の事を知る友人、皆で見たいと思ったから。

佐天さんと『誰が見てる』？

「へえ……？ 錬金術師に、吸血殺し（ディープブラット）ねえ……」

「別に彼を巻き込むつもりは無かったんだが……インデックスが絡む事件だったからね？」

彼女を守る意味でも、全く話さないって訳にもいかなかったのさ。決して、それを狙っての事では無いよ？」

「どうだか？」

学園都市が見渡せる程のビル。

その屋上の、手摺に腰掛けた佐天は、強風に煽られる髪を手で押さえながら、目の前の黒衣の魔術師を睨みつけた。

「まあ……今回は、インデックスの件で終わりだと踏んでた、私も迂闊だった訳だし？」

踏みいった詮索はしないでおくわ……」

どこか諦めたように視線を外した佐天に、黒衣の魔術師……ステイルは安心したように、息を吐き、手にした煙草に火をつけた。

「けど……これっきりよ？」

貴方達と学園都市（この街）の上層部が、どんな密約を交わしてるのかは知らないけど、私の友達を、裏側（こっちの世界）に巻き込むなら……潰すわよ？ 貴方達でも」

そして、再度固まる事になった。
目の前の少女が、本気でそれを口に行っている事が理解出来たからである。

「解った。少なくとも、僕らの側から、彼らを巻き込む様な真似はしない」

「それでいいわ……」

流れ落ちる汗を感じながら、ようやく、それだけを口にして、自分の指先が震えていた事に気づく。
この年端もいかぬ少女に、歴戦の魔術師以上の恐怖を、感じていたのである。

『なるほど。異端者だ』
イレギュラー

この街の支配者。

そう言ってもいい人物が、彼女を評した言葉を思いだし納得する。
誰が、能力者でも、魔術師でも無く、それらと渡り合えるものが『学園都市』に現れるなど予想できよう。

無能力者『佐天涙子』は、学園都市における、最大の異端者として、
イレギュラー
認知され始めていた。

「あれ？白井さん？」

先程までとは違う、正に年頃の少女の声を出した佐天に釣られて、真向かいのビルの屋上に目をやると、1人の少女が『落下』していた。

「な!!?」

「あゝ……大丈夫。大丈夫」

慌てて、下を覗き込んだステイルに、佐天は気の抜けた声をかける。

「今の娘……白井さんは、大能力者（レベル4）の空間移動能力者だから……」

「なるほど……」

覗き込んだ先に、何の影の形も無いのを見て、ステイルは息を吐く。魔術による不可思議には慣れていても、能力によるものには免疫が未だ少ない。

戦闘中ならともかく、不意を突かれた形での、能力の発現に、度肝を抜かれる形になってしまっていた。

「けど、白井さん……あんなに急いでどこに？」

そう首を傾げたところで、佐天の携帯が小さく震え始めていた。

『バチバチバチバチ!!』

「ぎゃあああああ!!!!」

紫電が迸り、悲鳴が上がる。
学園都市の繁華街。

その中にある公園で、少し無茶のある『ナンパ』をしようとしていた男達は、いい感じに『チン』されて、煙を上げながら倒れる事になっていた。

「ふん！」

その中心。鼻で息を吐いた少女は、髪を掻き上げながら、その場を後にしようとして……

「おおおおお！！！！」

「へ？」

上がった歓声により、始めて、自分が注目を集めている事に気づいた。

周りを見渡せば、ちょっとした人垣まで出来てしまっている。

「なに……これ……」

「あの！ありがとうございます！！」

「あ……いや。そんな……別に……」

戸惑う美琴を他所に、瞳をキラキラと輝かせて、駆け寄ってくる少女に戸惑いながら、何とかその場を後にしようとして……

『ガチャリ！』

という音と共に感じた左手への違和感。

「へ？」

間拔けな声を上げながら、視線を向ければ、そこには、こちらをジト目で見つめる、良く見知った人物の姿があった。

「再三に渡る忠告無視。不特定多数への興味先導の現行犯で、個人的にお姉様を拘束します」

「はあ！？なに言って！？」

さらりと、とんでもないことを言っただけの同居人に文句と反論をしようとした所を、寄せられた顔で封じられる。

「これだけの野次馬にもみくちやにされたいんですの？」

小声で告げられた内容に黙り込み辺りを見回せば、興味津々で、こちらを伺う野次馬達。

ただ、あくまで様子を伺うだけで、近寄ってくる様子はない。

それは、同居人……白井が着けている、『風紀委員』の腕章の効果である事は明らかであった。

「ほら！道をあけて！！早くどきなさい！！」

そんな怒声と共に、野次馬の人垣が割れ、その向こうにアンチスキルの制服を着た2人の男性の姿が現れる。

「ほら！面倒な事になる前に早く！！」

「う……うん」

白井に手を引かれ、その場から離れ始める。

美琴にすれば、困っていた女の子を助けただけで、何も悪いことはしていないのだが、学園都市内において、能力を使って他者を攻撃するのは、それだけで御法度だ。

事情が事情なので、嚴重注意程度で済む筈だが、お嬢様学校に通っている美琴にすれば、それだけで、十分に面倒事である。

「!!?」

と突然、美琴が、白井の手を振り払う様にして振り返る。

「どうしましたの？お姉様？」

突然の行動に、不思議そうに尋ねる白井。

だが、美琴はそれに応えない。

応える余裕が無い。

人垣を見つめる美琴の瞳は……明らかに怯えていた。

「視線を感じた？」

先程の公園から少し離れた歩道上で、美琴の腕につけた手錠を外しながら、白井は尋ねる。

「うん……」

頷く美琴の表情は何処か冴えない。

「そりゃあ、あれだけ注目を浴びたんですもの」

それに白井が納得がいかない。

あれだけの行動をすれば……そうでなくても、現在の美琴は、他者の視線を集めやすいのだ。

「そういうんじゃないくて……それに、こういうの今回だけじゃなくて……」

言い澀む美琴。

だが、白井としては、言わずにはいられない。

「お姉様！ 幻想御手事件。それに、乱雑解放事件と、それを解決したお姉様は、いわば時の人」

「ちょ！ ちよつと！！ なんて、そんなことになってんのよ！！？」

そんな白井の発言に美琴が噛みつく。

乱雑解放事件は……まだいい。

よくは無いが、美琴も、その事件の中心にいたのだ。

自分一人で解決した様な言われ方は、少々疑問を感じるが、まだ許せる。

だが、幻想御手事件。

これを解決したのは誰か？ と問われれば、間違いなく、木山を止め、幻想猛獣を倒した、佐天の名前を上げるべきだろう。

間違いなく、自分では無い。

「両方とも、学園都市が揉み消しにかかってますからね。」

でも、さすがに噂話にまでは、手が回らなくて、そこでは、御坂さんが解決した事になってるみたいですよ？

最初の頃は、私がくつてのもあったみたいですけど、普通に考えれば、超能力者の御坂さんが解決したって方が自然ですしね？」

「そうなんだ〜……て！佐天さん！！？」

「いつの間に現れたんですの……」

帰ってきた言葉に、納得しかけたところで、いつの間にか、自然に自分の横にたっていた友人の姿に驚かされる。
いや。白井は呆れているが。

「え？初春に御坂さんを止める様に頼まれて。
白井さんが、御坂さんに手錠をかけるくらいからは、近くにいましたよ？」

話しかけるタイミングが掴めなくて、気配を消してましたけど……」

「次からは、タイミングをはからなくていいので、普通に声をかけて下さいな」

相変わらずな佐天の非常識さに呆れながら、白井が注意を促す。
けれど、佐天の話を聞いた美琴は、それ所では無いらしい。

「でも……そんなの……」

友人の手柄を横取りした様で、気分が悪い。

そんな美琴の気持ちを察した白井が、もうひとつの真相を口にする。

「確か、佐天さんが解決したという噂がスグに消えたのは、現場にお姉様がいたっていうのを、言いふらしてた人がいたからだと言憶していますか？」

「あはははは……」

そんな言葉に、佐天は乾いた笑みを浮かべ視線を逸らす。

「佐天さん？」

あからさまに様子のおかしい佐天に、美琴が追撃をかけると、佐天は即座に手を合わせ頭を下げた。

「ごめんなさい！下手に注目集めるのが嫌で、御坂さんが解決した様に仕向けてました！！」

「ちょっと！？佐天さん！！！？」

美琴に言わせれば、驚きの真相である。

実は、幻想御手事件や、乱雑解決当時、噂を聞いた柵川の生徒が、佐天の元に真相を尋ねにやって来たのである。

それに対し佐天は、

「さあ？でも事件の時、近くに御坂さんがいたみたいだよ？」

と、返したのである。

こう言うっておけば、聞いてきた人間は勝手に、戒口令がしかれていると勘違いし、同時に事件を解決したのは美琴だと思うのだ。

では何故、佐天は、そんなミスリードを誘うような真似をしたのか？

「これ以上、アンチスキルに目をつけられたくなくて……」

「そんなの！私だって嫌だよ！！」

そんな佐天の告白に、美琴が突っ込む。

実際問題、色んな揉め事に首を突っ込んでいる、佐天と美琴は、幻想御手事件や、乱雑解放の件を抜きにしても、アンチスキルに目をつけられやすいのだ。

まあ、一部アンチスキルは、双方の事件の真相を知っているのだが……

「まあ、そんな訳でお姉様は、『時の人』という訳ですわ」

ここで、ようやく脱線していた話を白井が元に戻す。

「納得いかない。凄く納得いかない」

美琴は、随分と不満そうではあるが。

「でも、それはいいのよ！

いや、良くは無いけど、そういう視線には馴れてるし、気にしない。でも……あれは……まるで、全身を電気が逆流するような、あの視線だけは……」

「御坂さん……」

「お姉様……」

憂い、何処か怯えた様な口調の美琴。

そんな美琴を、佐天と白井は、心配そうな瞳で見つめるのだった。

翌日

「調べてみたところ、御坂さんの言ってた事と似た話で『誰かが見てる』って、都市伝説がありました」

「誰かが見てる？」ですの？」

ここは学園都市内にある、とあるファミレス。

結局、美琴の言っている事が気になった2人は、それなら調べてみようと言うことになり、初春に頼み、少し調べて貰ったのだ。

「えーと……ですね。これなんですけど……」

そう言うとき初春は、操作していた、ノートパソコンをテーブルに置き、画面を佐天達の方へと向けた。

そこには、人の目をアップにした様な画像。

その上に、血をイメージした様な、赤い文字で『誰かが見てる』と書かれたサイトが表示されていた。

「悪趣味ですわね……」

そんな、あからさまに、閲覧者を怖がらせようという作りに、白井が眉をひそめた。

「まあ、それは同感ですけど……それで初春？これって、どんな話なの？」

そんな白井に同意しながらも、特に気にしない様子で佐天は先を促す。

悪趣味だとは思いますが、そこは、本題では無いのだ。

「簡単に纏めてしまうと、誰もいないのに視線を感じて、悪化していくと、視線が怖くて部屋から一步も出れなくなる……て話ですね」

「初めて聞く話だけど……よくあると言えば、よくある系統の話よね？」

本来は、そこそ長い話。

それを、かなりバツサリと省略して、要点だけを説明する。それを聞いた、佐天の感想は、的を得た物だった。

「そうですね。この手の都市伝説……と言うより、怪談ですね。は、本人には、どうにも出来なくて、その上で忍び寄ってくる恐怖と言うのが定番ですから」

「有名な所と言えば、『メリーさん』とか、『隙間女』とかですわね？」

初春の補足。それに、白井が定番の怪談話から、それに当てはまる、題名を出した。

「そうですね。特に、『隙間女』と『誰かが見てる』は、共通点が多いですから、学園都市で発生した、亜種かと思ってたんですけど……」

そこまで言うってから、初春は、再度ノートパソコンを手に取り、なにやらカチカチて操作した。

「これを見て貰っていいですか？」

「ん？」

「これは……」

そこに表示されているのは、いくつかのブログや、掲示板。共通しているのは、そこに書き込まれている内容が、『誰かが見ている』への恐怖を訴えているということだ。

「初春が言いたい事は解りますけど、これだけでは……」

白井の言いたいことは、初春も予測していたのであろう。全てを言い切る前に頷いていた。

「確かに、これだけだと『誰かが見ている』を盛り上げる為の演出かもしれません。ただ問題なのは、これを書いた人達が、実際に学校を休んでいるって事なんです」

「……それは、確かですの？」

再び頷いた初春に、今度こそ、白井は沈黙する。

勿論、それさえも演出の一部。

そういう考え方も出来なくは無い。

けれど、複数の生徒が、計画的に同じ理由で休む。

それならそれで、立派に事件だ。

なによりも……

「まあ……そこまで、結果が出てるのでしたら、風紀委員として、調べない訳にもいかないですわね。

都市伝説が実際に起きている事……という前例が無いわけではあり

ませんし……」

「そうですね……」

「？」

そこまで言って、チラリと佐天を見た白井。

相槌をうちながらも、初春も苦笑する。

一人、佐天だけが意味が解らず首を傾げていたが。

『疾走する少女の霊』と『幻想御手』

学園都市において、その手の噂話が、真実である場合があることを、2人は既に知っているのだから。

「では、初春は引き続き、『誰かが見てる』に対して有力な情報がないか捜査をお願いしますの。」

私は、リストに上がっていた方々に詳しいお話を伺ってみますわ」

「解りました」

それが事件。或いは、その可能性が高いモノとなれば、この2人の動きは早い。

自分達のやるべき事を確認して、動き始める。

「その間、『逸般人』の佐天さんは大人しく……してる訳がありませんわよね……」

「ハア……」

「あれ！？信用ゼロ！！？」

短い付き合いながら、深く濃い経験から、佐天の性格を熟知している白井が溜め息を吐くと、釣られるようにして初春も溜め息を吐いた。

「『大人しくする』って事に関して、佐天さんが信用出来るか、自分の胸に聞いてみてください！」

「酷っ！……否定出来ないけど……」

初春の厳しい言葉に反論の余地は無い。

そもそも、ここで大人しく出来るような性格であるなら、佐天はこの夏休み、数度に渡る入退院を繰り返したりはしていないのだ。

「でもまあ、今回は本当に無茶はしないから。」

少し心当たりを調べるのと、後は、御坂さんの周辺を見張ってるよ。御坂さんが感じてるのが、『誰かが見てる』なら、それでも、何か解るかも知れないし」

「……仕方ありませんわね。」

とにかく絶対に無理はしないこと。

何かあれば、必ず私か、初春に連絡する事が条件ですわよ？」

「解ってますって！」

力強く頷いた佐天に、白井は、もう一度、溜め息を吐いた。

こうは言っているても、結局、いざとなれば平気で無茶をするのだ。この娘は。

だからといって、参加を禁止したところで、どうせ勝手にやるのだ

から、それなら、こちらの指揮下にいてくれた方が、いくらか気が楽である。

「……ままなりませんわね」

もう一度、溜め息を吐いた白井は、普段、迷惑をかけている、先輩風紀委員の気苦労をホンの少しだけ理解するのであった。

佐天さんと『誰かが見てる』？

「可能か？と問われれば、可能です。……が」

「『魔術師』が、みことにそんな事するとは思えないんだよ？」

学園都市に存在する、学生以外の人達。

例えば、教師や用務員。

或いは、学園都市内にある各種店舗の従業員など。

そういった『一般人』

もしくは、大人と言いきりだろうか？

そういう人達向けのマンション。

その中でも、『高級』と銘打たれそうな住居の一室にて、その会話は行われていた。

部屋の中には、3人の女性の姿。

3人共に共通する点は、『美しい』ということ。

違う点は、1人だけ年m……大人の女性がいることだろうか？

「ん……やっぱり、そうだね……」

私も、魔術師が御坂さんを狙うのは、ナンセンスって言うか、理由が無いとは思うんだけど……」

「それでも、疑ってしまうと？」

予想通り……そういった言葉でありながら、腑に落ちない様子の佐天の様子から女性、神裂はその心情を察した。

「まあね。まあ……鍊金術師の例もあることだし、念の為ってところが強いんだけど……」

無言で先を促す神裂。

佐天は一度肩を竦めて見せてから続ける。

「正直なところ『能力者』が犯人だとすると、手掛かりが無さすぎなのよ。

全く犯人が絞りこめないほどにね？」

「なるほど……だから魔術師ですか……」

ようやく納得がいったらしい神裂。

確かにこの学園都市で、能力者が事件を起こしたなら、犯人像を全く絞り込めないというのは考えにくい。

だが、それに対して疑問を投げかけるのは、この場で最も見た目が若い少女……インデックス。

「でも、やっぱりソレは無いかも？魔術師が美琴を狙う理由が無いんだよ。

魔術師がわざわざ学園都市（科学の街）に来る理由があるとしたら狙いは、私なんだよ？」

「うん。だから、インデックスへの交渉材料（人質）かとも思ったんだけど……」

「それもあり得ませんね。彼女の強さは、この街に来て少し調べれば解りますから。

それなら、貴女を狙う選択肢の方が可能性が高い……少なくともそう見える筈です」

「だよねー……」

言いながらも、佐天の中でも答えは出ていたのだろう。

神裂の言葉を聞くなり頭を抱えて机へと突っ伏した。

何せ、白井、初春の風紀委員二人組の調査でも、犯人の影すら掴めないのだ。

念のためと魔術オカルトの線を調べてみたが、どう考えてもその線は薄そうである。

そもそも、この街に魔術師が来ていたとするなら、目の前の女性が知らないというのは、まずあり得ないのだから。

「……少し考え方を変えてみてはどうですか？」

今にも頭から煙を出しそうな佐天を見かね、神裂は、そんな言葉をかけた。

「って言われてもねー……魔術師オカルトの線が空振りだった地点で、私はお手上げよ？」

風紀委員でもトップクラスの二人が調べて、何にも出てこないんだもん……」

既に諦めかかっているのか、伏したままの格好で、出されたジュースのストローを口にした佐天を見下ろしながら、神裂は大きく溜息を吐き苦笑する。

「その調べた相手は能力者だけなのでしょう？」

「んー……？ 多分……」

いまいち要領をえない質問を首を傾げながら答える。

そう……学園都市で不可思議な事件が起これば、それは能力者の仕業。

それが、『学園都市に住む者』にとつての常識だ。

故にそれが思考の落とし穴になる。

だが、それは『学園都市の外』から来たものには通用しない。

「私としては、何故、皆が気付かないかの方が不思議なのですが……被害者が『能力者』ならば、『それを調べてる者』が犯人の可能性もあるのでは？」

私は、科学のことはよく解りませんが、そういう者たちなら『能力者』だけを攻撃する術も知っているのでは？」

「……あ……！」

意外すぎる……だが確かにあり得る答え。

そうだ……自分たちは、そう言う相手と戦ったばかりではないか。

何故、その可能性を考慮しなかったのか……

「もしもし！初春！？ちよつと調べて欲しい事があるんだけど……！」

携帯を片手に持ったまま、飛び出すように部屋を出ていく佐天を見送った二人は、僅かな間を開け……

顔を見合わせて笑った。

「相変わらず、慌ただしい人ですね……」

「しょうがないよ。ルイコは何時でも他人の為に一生懸命だもん」

そうやって困ったように笑いながら、それでもインデックスは嬉し

く思うのだった。

そう……ハチャメチャで慌ただしくて……そして、どこまでも優しい。

そうやって、どん底にいた自分を救ってくれた佐天を、インデックスは大好きなのだから。

『気にしすぎ……気にしすぎ……』

『気にしすぎ……気にしすぎ……』

『気に……気に……!!!!』

佐天たちと話してから数日。

美琴は、日に日に強くなる謎の視線に悩まされ続けていた。

ソレは、コンビニであり、ゲームセンターであり、更衣室であったりしたが……いくら気にすまいとしても、確かに感じるのだ。誰かの強烈な視線を。

そして、今もまた……

「っう!!!!?」

『ゾクリ』と……いや、そんな表現は生ぬるい。

身体中を電気が逆流するような……この数日、何度も感じ、それでも決して慣れることの無い視線。

冷たい汗を背中に感じながら、即座に振り替える。
そして、そこに居たのは……

「……ん？ よお！ ビリビリ！！」

平和な顔をした、上条当麻の姿だった。

一瞬の間。美琴はその姿を見た時、ホッとしていた。

この数日、精神をすり減らされるような、ストレスだらけの生活を
してきて、（美琴は絶対に認めないだろうが）一番会いたかった人
物がそこに居たのだから。

けれど、彼女がそんな事を認められる筈も無く……

「……アンタの……仕業かああ！！！！！」

とった行動は、八つ当たりだった。

「なあにいいいい！！！！」

凄まじい速さで美琴から打ち出された紫電。

完全な不意打ち。しかも、喰らえば確実に重症に至るソレを、上条
は見事に右手で受け、撃ち消した。

「なにしやがんだ！！！！！」

いくら、とっさの判断で対応できるほどに慣れているとは言え、さ
すがに今の攻撃に肝を冷やした上条は、理不尽の原因である美琴に
食って掛かる。

……が忘れてはいけない。この男……女運以外は、本当に神に嫌わ
れているのだ。

である以上、上条の身に降りかかるのは、更なる理不尽だと決まっ
ているのである。

「とぼけんな!! あんたでしょ?」

「あん?」

と言われても上条には何のことか解らない。

そもそも美琴と会うのが、佐天の病室以来なのだ。
解る訳がない。

「ここんところ、私の事ジロジロ見てたのは、アンタだったんでしょ!!?」

間。

ビシッ!! と言う擬音がつきそうな勢いで、上条を指さす美琴。
だが、上条としてはただただ困惑するだけである。

「……あの……一体何の話でしょう?」

取り敢えず、興奮している美琴を落ち着かせようと下手に出る上条
だが、美琴にあまり効果は無かった様だ。

「だから! アンタが!! 私を!!!!」

変わらずに美琴は声を荒げて、自分を追及しているのだから。

癖のある髪の毛をガシガシと掻きながら、大きく溜息をひとつ。

お決まりの口癖を何とか堪え反論に転ずる。

「あのな? なんで俺がお前の事を……」

「えーっと……上条さん?……愛の形は人それぞれだと思いますけど、さすがに中学生相手にストーリーカーは、色々問題あると思います

よ？」

だがそれが果たされる事は無かった。第三者が会話に乱入してきたからだ。

「佐天さん!?!」

突然、現れた少女の姿に二人の声がハモる。慣れてはいても驚くものは驚くのだ。

「って!! ちょっと待った!! 違うよ! 違う! 違います!!」

上条さんはストーカーなんかしてませんよ!?!? ビリビリが勘違いしてるだけで……」

慌てるのは上条だ。

なにせ、現在進行形で自分に^{ストーカー}変態と^{ロリコン}変態のレッテルが貼られようとしているのだから。

「あー……っと別にいいですよ? 上条さんが、どんな性癖の持ち主でも、私はそれで、上条さんの事、変な目で見たりはしませんから!!」

「だから!! 違うー!!!!」

佐天の優しい言葉。

しかも、恐らくは本気で言ってる……が逆に、上条の精神を傷つける。

で……そんな騒ぎの横で、赤くなってる美琴は何を考えているのだろうか?

「いや……だからね？ 本当に違うんですよ？？」

「えっと……解りました。解りましたから……」

結局、先ほどの騒動は、上条が半泣きになって弁明することで、何とか誤解を解く事に成功したらしい。

まあ……佐天の視線が微妙に生暖かいあたり、本当に解けたのかは、神のみぞ知るだが。

「なによ……私の事が好きだって思われるのがそんなに嫌なわけ？」

なんて呟きも聞こえるが、そりや変態ストーリーカーと変態ロリコンのレッテルは誰だって嫌だろう。

どっかの第1位なら平気かもしれないが。

「はあ……良かった……誤解が解けて本当に良かった」

そう安堵の息を吐く上条だが……甘い！！

ティラミスの上に、蜂蜜をかけて、砂糖を降って食べるくらい甘い。上条当麻の『不幸』のスキルが、この程度で終わる訳がないのである。

例えば……

「こっちか！！？ 変質者の出た公園は！！？」

「ええええええええええ！！！！！！」

そんな、アンチスキルの声が聞こえてくるくらいの事は、予想してしかるべきなのである。

けれど、美琴は、上条は気づかない。気づけない。

慌てている自分たちの横で、佐天が小さく……そして、わるくく嗤った事に。

その笑顔は、例えるのなら……

『計画通り!!!』

と言っていた。

佐天さんと『誰が見てる』？

やって来たアンチスキルは、男女の2人組。

「ふ……不幸だああ!!」

叫んで逃走をはかる上条。

そりゃそうである。

誰だって変態容疑で拘束なんかされたくないのだ。

例え無実であっても、その容疑者になったと言うだけで、世間は冷たい視線を向けるのだから。

「あ……はいはい。ちゃんと、弁護してあげますから、逃げないで下さい」

だが、それを佐天が許さない。

全力で駆け出そうとした、上条の襟首を掴み、緊急停止をかけたのである。

勢いよく、自分のシャツで首を絞められた上条の口から『ぐえ!!』という声が漏れたのは、気にしない事にしたらしい。

「あー……君、少しいいかな？」

佐天が、どうやって上条を止めたのかが見えていた、男性のアンチスキルが若干、気の毒そうに声をかける。

「はい……」

そして、逃走に失敗した上条は、恨めしそうな瞳で佐天を見ながら

頷くのだった。

「えー……っど？つまり、君がストーカーだというのは、彼女の勘違いで、最初に彼女が、大声でそれを叫んでいたから、騒ぎが大きくなってしまったと？」

「あー…はい。そんな感じですよ」

「まったく……」

結果から言ってしまうえば、佐天、美琴の助言もあり、上条は無罪放免となった。

まあ……事実、無罪なのだから当然と言えば当然なのだが……無罪でも、有罪になることが多いのも、事実なのである。

学園都市のアンチスキルは優秀だから、そんなことは無いのだと信じたいが。

「あー……こちらは、問題ありません。学生カップルの痴話喧嘩でした」

「カップルって……」

そうインカムに報告する、男性アンチスキル。

上条は、そのトンデモ勘違いに、呆れた様な顔をするだけなのだが……それでは済まない娘がいる。美琴だ。

幸い、上条はアンチスキルの方を向いていて気づいていないが、今の美琴は誰がどう見ても真っ赤だ。

しかも、顔だけではなく首まで。

……と、トコトコと佐天が近寄り、美琴になにやら耳打ちする。

途端に、美琴はPON！と響きの良い音をたて膝から崩れ落ちた。

どうやら、オーバーヒートしたらしい。口から『ギギギ』やら『ガガ』やら異音をたてているが、大丈夫なのだろうか？

「とにかく！もう少しで、完全下校時間だ。君たちも、そろそろ帰りなさい！！」

夏休みということで、学生によるいざこざが増え、少しカリカリしていた男性アンチスキル。

当たったという訳でもないが、わずかにキツくなってしまった口調で、学生たちに帰宅を促す。

「はー「あのー……質問があるんですけどー？？」

それに、素直に頷こうとした上条。

学園都市でアンチスキルに逆らって得することなど無いからだ。

素直に従うにせよ、実際には従わないにせよ、その場は素直に頷いておく。

それが、学生のスタンダードな対応である。

だが、それは被せるようにして発言した佐天の声によってかき消される。

「……なんだい？」

このタイミングでの学生の質問。

男性アンチスキルは、怪訝に思いながらも、その立場上断る訳にもいかず、優しく先を促した。

質問をした少女は、嬉しそうに……或いは、楽しそうに頷いて再度口を開いた。

「例えばの話なんですけど、さっきの話。実際に御坂さんが、狙わ

れたり、ストーカーされてたりしたら、アンチスキルの人は助けてくれるんですか？」

「当たり前だよ。それが、僕たちの仕事だからね」

当然のことである。アンチスキルは基本的に学生を守るために存在しているのだ。

そういうことがあったのなら、例え、その庇護対象が明らかに自分たちより強い能力を持つレベル5の少女であろうとも、全力で守る。それが、この仕事に誇りを持つ青年の答えであった。

その答えに満足そうに頷いた少女。

だが、続いた言葉に青年は息を飲むことになる。

「それは、例えば……それを行なってる人がアンチスキルの人でも??」

「……何を言ってるんだ？君は？」

真剣な瞳でこちらを見つめる少女の言葉が解らない。

……いや。言っていることは理解できるのだが、そんなことはありえない。

だが、青年は気づいていなかった。

少女が発言し始めてから、自身の後ろに立つ女性の顔色が悪くなっていることに。

そして、わずかにだが震えていることに。

「そうですね。世の中そんなに綺麗じゃないってことです。どんな立派な目標掲げる組織でも、100人もいれば、その中にひとりや2人必ず腐ったのが混じってます。

……だから、そういう覚悟もしておいた方がいいですよって事かな？

さて……白井さん？固法先輩？そろそろいいですか？」

「ええ。上出来ですわ」

「上着の内ポケットに何らかの機械と、手榴弾らしきものがあるから気をつけてね？」

「了解！！」

「な！！？」

目にも止まらぬ早業。

それを、そのまま形にしたような動きだった。

少女の誰かへの言葉。それを確かめるために、わずかに視線を外した次に瞬間、少女は自分の相方の女性を組み伏していたのだ。

アンチスキルをやってるものは必ず格闘経験がある……と言うよりは、その教育において、いくつかの格闘技を必ず学ぶのである。

アンチスキルが相手をするのは、基本的に悪事に手を染めた能力者。無手でそれに相對すること自体が無謀で無茶である。

故に、それは気休め程度のものなのだが……それでも、僅かなりとも経験があるからこそ、少女のそれがどれだけ見事な動きだったかが解った。

なにしろ、自分の相棒が学生に組み伏せられているのに、しばらく見惚れてしまっていたのだから。

「な……何をしているんだ！？君たちは！！？」

だが、彼もプロである。

見惚れたのは一瞬。即座に自分の職務を遂行するために行動に復帰

していた。

口頭で質疑を行いながら、左手で護身用の拳銃に手をかける。

「突然失礼しました。私は、風紀委員177支部所属の、固法美偉といいます」

それを阻むように、自身の前に立ったのは、先ほど突然現れた少女の内の一人。

そして、その腕には、確かに『風紀委員』であることを示す腕章が装着されていた。

「風紀委員？ 風紀委員が何故こんな真似を……」

風紀委員とアンチスキル。

所属や構成員、扱う事件の規模など様々な違いはあるものの、基本的に両者は学園都市の規律維持と安全確保のために動いており、互いに助け合う間柄である。

その風紀委員が、アンチスキルである、自分の相棒を拘束する意図が解らない。

「それは今から説明致しますわ」

戸惑う青年&少年（上条）。

それに答えたのは、風紀委員腕章を着けているもう一人の少女。白井だった。

「実は、そちらの女性……アンチスキル所属の、『城南朝来』には、私たちの追っていた、ある事件への容疑がかけられてましたの」

「事件？」

その言葉に青年は眉を顰める。
自分の相方を犯人扱いされているのだ。
気分のいい話では無い。

彼女が優秀なアンチスキルであり、真面目な女性であることは、アンチスキルとして共に行動している自分がよく知っていた。
だが……である。

仮にも風紀委員が、ここまでの行動をとったのだ。
それ相応の理由があるはずである。
まずは黙って先を促す事にする。

「ええ。実は最近、学園都市……いえ。常盤台の生徒が、突然、登校出来なくなるという事態が相次いでましたの」

「……………」

「……それは、常盤台の教育方法に何か問題があったのでは？」

困ったような声で、質問を投げかける上条。

だが、もっともな質問である。

同じ学校の生徒が次々と登校しなくなれば、最初に疑うべき事である。

「そうですわね。もちろん、それも調べましたわよ？」

けれど、なんの問題ありませんでしたわ。

なによりも問題なのは、登校できなくなった生徒たちは口を揃えてこう言ってるんですの。

『視線が怖い』と」

「視線？」

視線が怖い。

上条でなくとも、首を傾げる理由であろう。

1人か2人なら、ストーリーカー被害に合っているのであろう……或いは、自意識過剰による勘違いか。

ともあれ、そういった風に解釈する筈である。

けれど、白井の言い方からして、被害者の数は1人や2人では無い筈だ。

だとするなら……

「もしかして……能力者の仕業か？」

上条もまた……科学と魔術オカルトの境界線を、行き来しているが、基本的に学園都市（科学の街）の住人である。

こういった事件が起きれば、疑うのは、まずソコである。

「私たちも、当然それを疑いましたわ。けれど、そう考えてしまうこと自体が落とし穴ですの……」

「どういうことだ？」

白井の意外な反応に、上条は首を傾げる。

この言い方は、つまり犯人は能力者では無いということになる。

……となると、上条が次に疑うのは、魔術師だが……佐天が魔術関オカルト係に、白井達、科学の人間（一般人）を巻き込むとは思えない。だが、そうなる就上条にはいよいよ意味がわからなくなる。

「学園都市（この街）で不可解な事件が起これば、私たちは能力者を疑いがちだけど、今回の場合は逆なのよ」

応えたのは、二人の問答を黙って聞いていた固法。

「え〜と……つまり？ お馬鹿な上条さんにも解るように説明してもらえると助かります」

突然話に加わった、綺麗なお姉さん（固法）に、思わず頬を上気させながら尋ねる。

……上条の後ろで、何かがバチバチいつてるのは気づかない事にしよう。

「つまりね？ 今回は被害者が能力者なのよ……ある特定のね」

「今回の被害者の共通点。全員が常盤台の生徒であること。そして、皆『電撃使い（エレクトロマスター）』でしたの……そして、お姉様も……」

「ちょっと待て！！もしかして御坂が最初に言ってたストーカー云々で……！！」

上条の脳裏に過ぎるのは、この騒ぎの発端。

美琴が、いきなり攻撃してくるのはいい。

良くはないが、いつもの事だ。いちいち気にしたりはしない。

だが、そのとき美琴はなんと言っていた？

『ここんところ、私の事ジロジロ見てたのは、アンタだったんでしょ……！！？』

そう……確かこんな事を言っていたはずだ。
だとするなら……

「そう……お姉様もこの事件の被害者ですわ。もっとも、お姉様に話してしまうと、一人で事件を解決しようとしそうでしたので、このことは話していませんでしたけど」

「つて!!黒子!!?」

思わず口を挟んだのは、何時の間にか復活していた美琴だ。

一応、ちゃんと相棒と思っている後輩に、騙されて……は言い過ぎかもしれないが、隠し事をされていたもである。

しかも自分が関わることににおいてである。

美琴でなくても、少なからずショックを受けるだろう。

……とはいえ、白井たちが、自分に隠して捜査していた理由が解ってしまう辺りが、美琴の悲しいところである。

下手に、それが分かってしまうが為に、文句を言いたくても、『なにか?』といった感じの視線を向けられれば、黙ってしまうしかないのだ。

まあ……日頃の自分の行いがあるだけに、文句を言えないだけなのだが。

「さて……ここからが本題ですわ。被害者は、全員『電撃使い』だった。

……となると、能力者と同じくらいに疑わしい人種が出てきますよね?」

「……研究者か……」

そこまで言われれば、学園都市に住むものなら、おおよその予想はできる。

白井の問いに、アンチスキルの青年が搾り出すようにして答える。その声が、わずかに震えてしまうのは……苦々しい思いを感じてし

まうのは、自分の相棒の経歴を知っているからだろう。

「ですわね。……さて？ここで、ひとつ質問をしたいのですが……
元長点上機学園の能力開発担当の城南朝来さん^{じょうなんあさこ}」

白井の挑発的な口調に、佐天に組み伏されたアンチスキルの女性はあからさまに舌打ちした。

人間、中途半端に追い込まれば、逃走を図ったり、暴走したりするものだが……完膚なきまでに追い込まれば、逆に清々しいほどに開き直るものなのだ。

彼女……城南朝来も、既に開き直っていた。

仮にも『アンチスキル』である自分に、風紀委員がここまでしたのだ。

自分がいくら言い逃れしたところで、捕らえられるだけの証拠は既に握んでいるはずである。

もし、得てないとしても、その決定的証拠を、今、自分は持っていて、既に逃走は不可能。

いわゆる『詰み』と言うやつだ。

「……そこまで調べ上げてるなら、聞くことも無いだろうに。なんだい？風紀委員のお嬢ちゃん。

既に、これは余興の域だろ？なんだって答えてやるよ？」

「……でわ……遠慮なく……」

余裕の笑みを浮かべた……否。そう演じているだけだ。

実際のところ、白井や、固法といった、風紀委員組みには、城南が思うほど余裕は無かった。

彼女が事件を起こし始めた当初、風紀委員はその事実すら掴めて無く、白井達が気づいたのも、美琴という友人が狙われたことが理由

だ。

そして、研究者を疑ったのも、佐天の知り合いの指摘によるもの。

……つまり、極論的に言ってしまうえば、美琴が白井（風紀委員）の知り合いで無く……あるいは、佐天の知り合いとやらが、その可能性に気づかなければ……彼女の企みは、誰にも気づかれる事なく成功していたかも知れない……おそらく、成功していたのだろう。

彼女が作った装置。

それによって追い詰められた美琴の様子は、誰よりも彼女と同室の白井が一番よく知っている。

少なくとも、この数日の間……美琴は、白井が知る限り最も追い詰められていた。

何より、彼女は勘違いしているようだが、ほんの数刻前まで、白井達は決定的な証拠など持っていなかった。

城南朝来が犯人。

そういった、状況証拠こそあれど、物的な証拠は無かったのだ。

既に、消去したのか、初春によってハッキングした彼女のPCにさえ証拠となるものは無かった。

故に、この状況に持ち込んだのは、一種の賭け。

美琴の近くで、何らかの騒ぎを起こせば、近くにいるアンチスキルは駆けつけなければならない。

十中八九、城南は来る。

そして、おそらく持っているであろう決定的な証拠を押さえる。はつきり言って、かなり綱渡りな作戦だ。

白井達が、最初から出てこなかったのも、なにも出てこなかったとき、佐天だけならちよつとした注意だけで済む可能性が高いと踏ん

だからだ。

まあ……結果として賭けには勝ったわけだが……正直なところ、ギリギリだったのだ。

「何故こんなことを？貴方程の方なら、いくらでも再起の道はあったでしょうに……」

「はんっ！！」

白井の素直な疑問。

それを、城南は鼻で笑った。

この事件における、彼女の動機。

それは、単純に言ってしまうえば逆恨みである。

学園都市における研究者……彼らに求められるのは、ただ結果であり、成果である。

その意味において、彼女……城南朝来は、勝者であった。

学生時代から優秀な成果を上げ続け、憧れであった学園都市の研究者になり、それから、それなりに成果を上げ続けていた。

その実力を買われ、巡ってきた、名門『長点上機学園』の能力開発担当の仕事。

そこで、彼女は初の敗北を喫する事になる。

本来の意味で言うなら、彼女の仕事は失敗ではない。

むしろ、彼女が赴任してからの『長点上機学園』の能力開発は、元の値からすれば、わずかではあるが伸びていたのだ。

だが、時期が悪かった。

名門と言われる学校の中で唯一『超能力者』不在の、『長点上機学園』

そして、同時期に『常盤台』に現れた『超能力者』

どうしても、『超能力者』が欲しい長点上機学園は、自校に超能力者が現れない理由を、能力開発担当の城南に押しつけたのである。結果、彼女は仕事を追われることになった。

「覚えておくといいわ。風紀委員のお嬢ちゃん？」

この学園で生き抜いていくということは、勝ち続けることよ。

一度でも敗者の烙印を押されたものには、決して第一線の仕事は回ってこない。

そういう街なのよ。ここは……」

そう。

だからこそ……そうやって、自分の前から居なくなっていく同僚の姿を、何度も見てきていた城南だからこそ、自身が敗者になったのを知った瞬間、誰かを恨まずにはいられなかった。

誰もが、沈黙していた。

反論したいことはある。

白井が知る『学園都市』は、そんな殺伐としたものではないし、仮にそうだとっても、美琴を攻撃する理由になどなりはしないのだ。けれど……

「もういい？……だったら、いきましようか？」

そういつて疲れたように……

どこか、ホッとしたように両の腕を差し出す彼女に何を言えいいのか？

そう……

この瞬間を望んでいたのは、きっと誰よりも彼女自身なのだ。

「城南！！！！」

犯人が捕まり、無事解決。

けれど、どこか後味が悪いエンディング。

そう収まりかけた場面は、彼の一言で、まだ幕を降ろさない。

「……なに？……ああ。あなたは、随分と正義感が強いものね。そりゃ、文句のひとつも言いたいか。

いいわよ？一応、聞いておいてあげる」

そう言って、わずかに唇を歪める。

けれどそれは、笑っているというより……泣いているように見えた。

「城南……お前は、アンチスキルに仕事をいつもめんどくさがって、適当で、その癖、妙にプライドばかり高くて……」

「なに？最後に今までの文句？」

この後に及んで、そんな事を言い出す相棒が可笑しくて、城南はわずかに噴き出す。

……いや。違う。

少なくとも、城南は、今までそんな風に、この青年を見たことがないのだ。

そんな自分が、今更、相棒などと言うのは、烏滸がましいというものだろう。

「けどな！頭が回って、冷静に事件に対応できるお前を俺は尊敬してて！！大好きだ！！」

「……………」

時が止まった。

いや。全員が呆氣に取られたただけだ。

それはそうだ。どこの世界に、このタイミングで、告白する者がいるだろう？

普段、絶対に隙を見せない佐天まで硬直している辺りに、この言葉の威力が現れていると言えるだろう。

「な・な・何をいきなり言い出してるのよ！！！！あなたは！！！！？」

もっとも早く、現実に戻ってきたのは、突然すぎる告白をされた相手。城南だ。

まあ……戻ってきたといっても、随分とテンパっているようだが。

「いや。だって、今、言わないと、もう会えない気がして……」

あっさり。実にあっさり、そうやってのけた青年に、城南は頭を抱えて唸る。

「あ……あなたねえ……当たり前でしょ！！私は、犯罪者！！しかも、アンチスキルでありながら、事件を起こしたのよ！？」

そんな私が、アンチスキルのあなたと会えるわけ無いでしょ！！？」

「違う！！それは違うぞ！！城南！！アンチスキルは、人に罰を与えるために居るわけじゃない。

人に反省を促して、やり直して貰うためにいるんだ！！

だから、やり直し始めた人と会っちゃいけないなんてことは無い！！……だから、出てきたときに返事聞かしてくれよな？」

「あ……………」

その言葉は、乾ききっていた城南の心に、ずっと染み渡るように広がった。

彼は今こう言ったのだ。

『待ってる』と

研究者でありながら、複数の生徒に被害を与えた城南の罪は決して軽くはない。

幸い、死者や再起不能の者は出ていないが、それでも、2〜3年で済むものではない。

青年期のその時間は短いものではないはずだ。

それでも、彼は、『待っている』と言ってくれた。

それは、一時的な感情。

あるいは、同情なのかもしれない。

けれど……それでも良かった。

こんな最低なところまで堕ちてしまった自分を……嘘でも『好き』と言ってくれる。

『待ってる』と言ってくれる人がいた。

それは、彼女にとって間違いなく救いだったのだ。

「バカじゃないの……」

口をついて出るのは、そんな素直じゃない言葉。

けれど、瞳から次々と溢れる熱い雫は止めることが出来そうに無かった。

「いやあ……なんて言うか……最後の最後に、凄いものが見れまし

たねえ……」

帰り道

なんとも言えない空気に、誰もが口を閉ざす中、不意に佐天がそんなことを口にした。

「……ですわね。それなりに、長い間、風紀委員をやっていますけど……あんなドラマみたいな展開からの告白は、初めて見ましたわ」

応える、白井の瞳もわずかに輝いている。

性格に、一癖もふた癖も……十癖ぐらいある白井だが、それでも、年頃の乙女だ。

先程のシーンには、やはり、憧れるものもあるのだろう。

まあ……現在、白井が夢想している相手は、決して異性では無いのだろうが……

「なんか……あんなの見せられた後じゃ、文句も言う気にもなれなかったしねえ……」

苦笑気味に呟くのは美琴だ。

この場にいるメンバーでは、唯一の被害者だった美琴も、さすがにあの場面の後では、城南に喰ってかかることは出来なかったらしい。まあ……文句を言いながらも、晴れやかな顔をしているのは、胸に秘めていた悩み事が解決できたからだだろう。

「完全に二人の世界だったもんなあ……」

ぼやく様に上条が続ける。

鈍さには定評のある上条も、あれだけ真っ向勝負な告白はさすがに解ったらしい。

まあ……自分に向けられたものじゃ無かったからかもしれないが。

「まあ……正直ちょっと懂れちゃいますよね？
ああいう情熱的な告白は……」

「「「え！！？？」」」」

そんな佐天の言葉に、その場にいた全員が動きを止めた。
それもその筈。
だって、この場にいる面々は……

「「「佐天さんて恋愛に興味あったの！！？？」」」」

こう思っていたのだから。

「私の事なんだと思ってるんですか！！？」

たまらないのは佐天だ。

まあ……色々と常識の無い佐天だが、一応は年頃な乙女。

そりゃ、そういうものに懂れもあるのだ。

もつとも、まだまだ恋に恋している状態ではあるが。

思わず困ったような笑みを浮かべる固法。

誰とも言葉にして交わしたことはないが、ここにいる皆……いや。
佐天を知る者なら全員が全員こう思うはずなのだ。

「佐天さんはてっきり、強くなることに夢中で、そういうものに興味が無いと思ってましたもの」

力強く頷き、白井がこの場にいる全員の総意を述べる。

「私って……私って……」

その言葉に、ガックリと膝をつく佐天。

ともあれ、しょうがないことである。

皆が皆、勝手に佐天はそういう娘だと思い込んでいた為、美琴達は、一度も思春期の少女たちにありがちな……所謂、恋バナというヤツをしたことがないのである。

「まあまあ……でも、それなら佐天さんの好みのタイプってどんななんだ??」

女の子が落ち込んでいたらホッとおけないのが、上条（フラグ乱立男）の性質である。

どうにか、佐天を慰めながら、ふと胸中をよぎった疑問を口にした。瞬間、佐天を除いた女性陣の瞳が怪しく光る。

『佐天さんが好きになるのってどんな人!!?』

とまあ、こんなことを思っているわけである。

こういつてはなんだが、そういった話題からは、限りなく遠く感じてしまう佐天だけに、皆、興味深々なのである。

「え〜?と言われましてもね〜……正直、あまり好みなんてないですよ?見た目もあんまり気にしませんし……」

「そうは言っても、最低限の条件とかあるでしょ?」

佐天が口にした言葉は本音のものだ。

色恋沙汰に興味が無いわけでは無い。

けれど、だからといってクラスの皆が言うような、好みとかタイプがあるわけでもないのだ。

その意味から言えば、同年代の娘から見たとき、佐天はやはり少し遅れているわけなのだが……

とはいえ……である。

この手の『面白そうな話』を目の前にした、『女の子』がソレを許すはずも無く、気づけば、上条が若干退くほどの勢いで、女性陣が佐天の前に詰め寄っていた。

「ん〜？ 条件ですかあ〜？ ……あ！ 1個ありましたね！！」

「なんですの！！？」

固法に詰め寄られて、眉をへの字型にして考え込んでいた佐天がそう口になると、待ってましたとばかりに、白井が尋ねる。

……若干、目が血走っているのが気になるが。

そんな白井の様子にも気づかないのか、佐天は周りを全員の顔をゆつくりと見回し、人差し指を1本立て、満面の笑みを浮かべ

「私より強い人！！！」

「「「「……………」」」」

「…………てあれ？ やっぱ、こんなんじゃダメですか？？」

突然黙り込んでしまった皆の反応を、どう勘違いしたのか、佐天はそう言って困ったように笑う。

けれど、目の前の面々はそれどころではない。

だって……

『むりじゃん!!!!』

そう思っているのだから。

かくして、まだ見ぬ佐天の未来の恋人に、一同が同情の念を抱いたところで、美琴の身を脅かした『誰かが見てる』の事件は幕を閉じる。

けれど、この事件すら、この後に起きる事件に比べれば、ささやかなものだとは、まだ誰も気づかないのであった。

「…………お姉さま……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3835s/>

（仮題）格闘少女『佐天』

2011年10月21日00時41分発行